

【完結】 ドラえもののび  
太のDr. STONE

三柱 努

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『もしも、Dr. STONEの世界が、のび太が夏休みの観察日記用に作った別の地球だったら』

時系列では、ドラえもんは「映画ドラえもんのび太の創世日記」のその後の世界観。

Dr. STONEは原作単行本12巻の「機帆船ペルセウス」製作の1年間の時期の世界観となっています。

後半から原作の石化前の時代から6年経過した時系列で、千空が宇宙飛行士を目指す話に移ります。「宇宙兄弟」とのクロスオーバー展開となっています、ご了承ください。

・原作編（クロスオーバー・ドラえもん）

・レビュー編

・原作 I F・石化不発の現代編

・原作 I F・石化不発から6年後、宇宙飛行士編（クロスオーバー・宇宙兄弟）

・原作編（クロスオーバー・ドラえもん 2回目）

感覚的には「映画でドラえもんたちが救った世界の後日譚」みたいな感じですよ。

ドラえもんは中盤から登場しなくなりますが『ドラえもん達<sup>が</sup>いたからこそ千空<sup>が</sup>宇宙飛行士を目指す世界が生まれた』。そんなストーリーになります。

# 目次

ドラえもののび太のDr. STONE

石化光線の真実 | 1

あさぎりゲンは「帰ってきたドラえも

ん」を疑われる | 8

ついに明かされる人類救済の道

17

石化の歴史は修正される | 27

ひみつ道具レビュー

番外編 Dr. STONEにひみつ道

具を導入したらどうなるレビュー その

1 | 40

番外編 Dr. STONEにひみつ道

具を導入したらどうなるレビュー その

2 | 44

番外編 Dr. STONEにひみつ道

具を導入したらどうなるレビュー その

3 | 48

番外編 Dr. STONEにひみつ道

具を導入したらどうなるレビュー その

4 | 52

ドラえもののび太のDr. STONE

【続】

千空たちとの約束を果たしたドラえも

ん | 56

ドラえもののび太 抜きの 東南海大

	冒険 その1	71	司帝国 VS 石神村 その2	213
	ドラえもんのび太 抜きの 東南海大	136	司帝国 VS 石神村 その3	204
	冒険 その2	80	科学王国集結 マイナス2回目	194
	ドラえもんのび太 抜きの 東南海大	145	ドラえもんのび太抜きの 宇宙親子	183
	冒険 その3	91		173
	ドラえもんのび太 抜きの 東南海大	155		165
	冒険 その4	101		
	ドラえもんのび太 抜きの 東南海大			
	冒険 その5	111		
	もしドラ（もしも千空たちが映画ドラ			
	えもんに参加するなら）	121		
128	司帝国 VS 石神村 その1		JAXA編 その6	
			JAXA編 その5	
			JAXA編 その4	
			JAXA編 その3	
			JAXA編 その2	
			JAXA編 その1	

NASA	222	NASA	合同基礎訓練編	その1	278	NASA	宇宙飛行士編	その5
NASA	231	NASA	合同基礎訓練編	その2	287	番外編	ドラえもののび太と千空の夢	
NASA	240	NASA	合同基礎訓練編	その3	幻三剣士	—————		294
NASA	249	NASA	宇宙飛行士編	その1	千空宇宙滞在編	その1	—————	315
NASA	257	NASA	宇宙飛行士編	その2	千空宇宙滞在編	その2	—————	323
NASA	268	NASA	宇宙飛行士編	その3	千空宇宙滞在編	その3	—————	335
NASA		NASA	宇宙飛行士編	その4	千空宇宙滞在編	その4	—————	347
		NASA	宇宙飛行士編	その5	千空宇宙滞在編	その5	—————	355
			【最終回】	—————	—————	—————	—————	363
			ドラえもののび太と千空の銀河超特急					
			ドラえもののび太と千空の銀河超特急					

その1	375
銀河超特急その2	390
銀河超特急その3	402
銀河超特急その4	414
銀河超特急その5	426
銀河超特急その6	435
銀河超特急その7	443
銀河超特急その8	456
銀河超特急その9	464
銀河超特急【最終回】	476





# ドラえもん のび太の Dr. STONE 石化光線の真実

それはいつもの光景であった。

「ドラえもん~~~~~ん」

のび太の叫びが野比家にこだまする。

ヤレヤレと階段を下りるドラえもんの元に、指から血を流したのび太が「死ぬ〜」と元氣よく走ってきた。

「どうやら慣れないくせにオヤツの羊羹を包丁で切ろうとして失敗してしまったようだ。」

「そんなの舐めておけば治るよ……って、あらら意外とザツクリ」

思ったより深い切り傷であった。

1 針縫う必要があるかもしれない。弱虫小学5年生には酷な宣告である。

「指に針なんか刺されたら、死んじゃうよ！ そうだ、お医者さんカバンは？」

「お医者さんカバンは病氣しか治せないよ。なんでもキズバンなら怪我が治せるけど、悪いけど修理中なんだ。ん？ そうだ、イイものがある！」

そう言うとドラえもんは四次元ポケットをまさぐりだし、小さなアクセサリーと薬瓶のようなものを取り出した。

「石化治療光線リングと復元液」

ドラえもんがいつものように道具を紹介すると、のび太はいつものように「何いそれえ？」と首を傾げた。

「これはね、人を石にしてどんな怪我でも修復させる……って、説明するより実際に使ったほうが早い」

そう言うとドラえもんはアクセサリーに向かって「I m l s e c o n d」と言った。

するとアクセサリーは不気味な光を放ち、その光がのび太を捉えると、のび太の体は光が当たった側から石化し始めた。

『何、これ？』

のび太の意識は暗闇の中に閉じ込められてしまった。

意識だけはハッキリしているが、体は動かない。完全な石像と化してしまったのだ。

そんなのび太の石像にドラえもんは「それにしてもブサイクな石像だなあ」とつぶやきながら復元液を浴びせた。

すると、のび太の石像は光を放ちながら元の人間へと復元し、指の傷は完全に癒えていた。

「怖かったあ。でも、怪我が治ったから良かったあ」

「もう、気を付けてよね」

「それにしても何この道具？　今の光に当たったら石になっちゃうの？」

「そうだよ。一旦、人を石に変えて、この復元液で元に戻すと、その時に体の傷ついた細胞を一緒に直しちゃうんだ。だけど、この液をかけないと何年も何百年もずっと意識を残したまんま石になっちゃう」

口を3にして気楽に語るドラえもんであったが、その恐ろしさにのび太はゾゾと悪寒を覚えながら「怖い道具だね」とつぶやいた。

「使い方さえ間違わなきゃ大丈夫。さっ、オヤツ食べながらテレビでも見よっ！」

気楽なドラえもんは背中を押され、のび太は羊羹とリングを手に居間へと向かう。

今のテレビから流れるのは『1ミリオンメーカー』。のび太が授業で習うような低難易度の問題も出てくる、子供でも大人でも楽しめる内容の人気クイズ番組である。

「おっ？　面白そうなのがやっているなあ」

のび太のパパがたまたま通りがかり、のび太たちに話しかけた。

パパが興味を持ってくれたことに喜んだのび太は、番組名を教えてあげようと口を開いた。

と同時に、丁度その時に番組で出てきた問題が、学校で習ったばかりの内容であった

ため、つい思わず口に出てしまった。

「1『ビ』リオンメーター……1ミニッツ！」

「それを言うならミリオンとメーカーだ……よ!?!」

ドラえもんは喉の奥からネジが飛び出すくらいに驚き、パニックに陥った。

1ビリオンメートルとは10億m、つまり100万キロメートル。

地球の直径が1万2742キロメートルであることから、地球をまるつと覆う範囲に……1分後……人類を石化させる光が……照射されてしまう。

「バカバカバカバカ! のび太くん、キミはなんてことをやらかしたんだ!」

人類滅亡まで残り1分である。

「ええええええ! ドラえもん、何とかしないと!」

「何とかしないと何とかしないと!」

パニックになりながら、ドラえもんは四次元ポケットから秘密道具を出しまくった。

「ドラえもん落ち着いて」

「落ち着いてなんかいられるか! 人類が滅びるんだぞ!」

パニックになればなるほど、欲しいアイテムが出てこないのがドラえもんの引きの弱さ。

ヤカンに杖に変な銃にカーペット。意味の無い道具が次々と部屋を埋め尽くしてい

く。

そんな光景をパパは呑気に『何やってんだか』と横目に見ながらトイレに行ってしまった。

「ドラえもん、この中は？」

のび太はそういうとカーペットを広げて見せた。

「何言ってるの?! そんなの役に立つわけ・・・そうだ、それだ！」

それは『神様シート』という秘密道具。のび太が地球を作り出し、その観察日記を夏休みの宿題にした時に使った道具だ。

このシートの入り口を開けば、その先に別の次元の宇宙が広がっている。

「投げ入れろ！」

ドラえもんに急かされ、のび太はアクセサリーを投げ込んだ。その直後、ドラえもんは足元の杖につまずいて倒れながらも、どうにか這って神様シートのボタンを押し、入り口を塞いだ。

こうして、地球の危機は防がれた。

「はあっはあ、危なかった。のび太くん気を付けてよ、ってちゃんと道具をしまわなかったボクにも責任はあるけど」

頭からプスプスと煙を上げながら、息を押しつかせるドラえもん。

「ところでこのシートの地球って、あれからどうしたんだっけ？」

のび太の言葉にドラえもんはハツとなって目を丸くした。

「そのまんま……」

「しかもドラえもん、コントロールステッキ踏んでるよ」

ドラえもんが下を向くと、ステッキの早送りボタンが押されたままとっていた。

このステッキはシート内の地球の時間の流れを操る道具であり、ドラえもんが足を退かすまでに、シートの中の地球は3700年以上も経過していた。

「どうしよう。この地球の人間が全員石になっちゃったのかな？」

「ひとまず中を見てみよう」

ドラえもんが神様シートを開けると、そこから見える地球には暗闇の部分に一切の光が見当たらない。

「巻き戻しボタンを使ったら？」

「駄目だよ。この中の世界で起きる運命にある出来事は変わらないんだ。ステッキで時間を戻しても、リングを入れてしまった時点で石化光線を浴びせちゃう事実は変えられない」

ドラえもんは首を横に振り、シートとステッキ以外の創世セット、フワフワリングと神さま雲を取り出した。

「地球がどうなっちゃったのか確かめに行こう。もし人間が絶滅していたらボクらの責任だ」

「そ、そうだね。行こう！ ボクらの作った地球に」

のび太は拳を握りしめ、ドラえもんと共に神さま雲に乗り込んだ。

目指すはもう一つの地球の日本。

シートの入り口を越え、宇宙空間を抜け、2人はついに石の世界・ストーンワールドに足を踏み入れた。

あさぎりゲンは「帰ってきただラえもん」を疑われる

夏休みに神様シートで作り出し

そのまま忘れて放置して

そして今日、石化光線を全体に浴びせてしまい

人類を絶滅させてしまった地球に今

ドラえもんのび太が降り立った。

「ドラえもん……これが日本なの？」

そこは鬱蒼と生い茂ったジャングルであった。何処を見回しても、ビルや電線一つ無い森が続いている。

のび太たちの住む歴史と大差なく経過するこの地球で、現代から何年も経過した今、ここまで未開の地が続いているとは考えられない。

「人間の手が一切触れないまま何年も経つと、こうやって自然に還っていくんだよ」

ドラえもんは苔に覆われた石像を見つけてつぶやいた。

「やっぱりの地球は全部、石化光線に当たっちゃったんだ。この分だと百年、いや千年は経っちゃっている」



「さつき僕にかけてくれた復元液をかけたら、元に戻るんじゃないの？」

「多分だめだよ。体の一部が欠けちゃっている。こうなっちゃうと怪我を治すどころか、死んでしまうんだ」

石像の壊れた顔の部分に触りながら項垂れるドラえもん。

のび太は他に無事な石像は無いかと、森の中を探し始めた。

「ドド、ドラえもんくん！ これ！」

「どうした!?! むっ、なんだこれは！」

のび太の叫び声に駆け付けたドラえもんが目にしたものは、開けた森の中に延びる黒い石畳。多少の凹凸はあるものの、立派に舗装された道路であった。

「これって、僕らの町の道にそっくりじゃない？」

「アスファルトだよ。でも、それこそ人間が手入れしないと十年もたないのに……」

アスファルトの道路は川の方角と森の奥へと続いていた。

「この先に行ってみよう！」

ドラえもんと のび太は道路の先に何かがあるか調べるために、タケコプターで道を下り始めた。

しばらく飛んでいると、道は川の近くで途切れていた。ここまでずっと一本道であり、ここが終着点である。

「あれは、船？」

タケコプターを外したのび太が指さした先にあったのは小さな帆船であった。綺麗な帆に磨かれた船体。何年も放置された物ではないことは確かだ。

「つてことは」「人がいるんだ！」

ドラえもんとおび太は手を取り合つて喜んだ。

だがその次の瞬間、何者かが2人の背に飛び掛かった。

「何者だ！」

金と銀の槍が2人に突き立てられる。

「ひいひい」

「ぼ、ボクたち決して怪しいものではない！」

2人が両手を挙げて降参を示すと、槍の主たちが姿を現した。

一人は黒髪 of 眼鏡の青年。もう一人は金髪 of 少年である。

「つて金狼、子供だよ。子供と……青い……大狸？」

「油断するな銀狼。石神村にこんな子供はいない。復活者の子供は未来だけだと聞いてる」

「つてことは、大昔に罪を犯して村を追放された奴の子供つてこと？」

金狼、銀狼と呼び合う2人は警戒を緩めることなく、ドラえもんとおび太を縄で縛り

あげた。

すると船の方から立派な髭をたくわえた強面のオジサンが姿を現した。どうやら2人のリーダーのような存在であろう。

オジサンはジロジロとのび太の服や顔を睨んだ。

「うーむ、杠の作った服に金狼と同じ眼鏡。千空たちの科学でなければ作れぬものばかり。盗んできたというのか？」

首をかしげるオジサンに、のび太とドラえもんは「盗んでなんかいません!」「ボクたち、泥棒なんかじゃありません!」と必死に弁明した。

「盗まれたものがあるなら、向こうで騒ぎがあるはずだ。ゲンならば何か聞いておるかもしれない。もうすぐ戻ってくるだろう」

ただでさえ金と銀のおっかない槍に挟まれ、怖い3人に囲まれたドラえもんのび太は、ゲンという厳しそうな名前の人までやってくるのだと、戦々恐々としていた。

すると森の奥からブロロ口と大きな音が近づいてくるのが分かった。

「ゲンが来たか」

そのどこかで聞き慣れたような轟音に顔を上げるドラえもんのび太。すると音の主である大きなゴリラの顔が道路の奥から現れた。

「これってまさか・・・」「車!？」

地球創世の歴史を1から見てきたことのあるのび太でも、その異様な存在は理解できなかった。

アスファルトの道路を無視して考えて、この世界の人間の文明レベルは、槍や船を見てもたかが知れている。

そんな隣で走る車は、明らかに文明発展の程度がアンバランスなのだ。

「いや〜コクヨウちゃんおまた〜。今日も鉄鉱石がゴイス〜に採れたよ〜」

車を運転しているのは、少しヒョロつとした軽薄そうな若い男ただ1人。厳しそうな雰囲気は無く、ドラえもんとのび太は安心して息を吐いた。

「ん〜？ 何なに？ いつもより人が多い・・・じゃ・・・ん？」

縄に縛られた見慣れぬ子どもと青い物体を目にしたゲンは、言葉を忘れ目が飛び出るほどに驚いていた。

「どうしたゲン？」

「バイヤ〜。千空ちゃん、ジーマーで『ドラえもん』でも作っちゃった？」

小さく独り言をつぶやいたゲンは、「いやいやそんなわけないでしょ」と目を擦ってドラえもんを二度見した。

「いや〜リアルな話、デザインが同じなだけでしょ。あれかな？ 未来ちゃんへのサブ

ライズバースデープレゼント的な？」

車から降りたゲンはドラえもんの頭をポンポンと叩く。

「あの一」

「うわつ、声までクリソツじゃん。のび太くんまで揃えちゃって。似てるよ」

ゲンがニコニコと2人を褒めると、当の本人であるのび太は「僕の事、知ってるの？」とつぶやき、「どういうことだろうね？」とドラえもんと顔を合わせた。

「ジーマーで!？」

ゲンは目玉を飛び出させ、鼻水を垂らし、ひっくり返るほどに白目をむいた。

「何!? どうしちゃったのゲンってば」

「これほど動揺するゲンを見るのは初めてだ」

「そもそもお主はこやつらの事を知っておるのか?」

ゲンのパニックぶりに驚く金狼たち3人。

「いやいやいやいや。知ってるも何も知らないも何も。まずは縄を解いてあげて!」

あたふたとするゲンは震える手でドラえもんたちの縄に手をかけ、それを見ていた金狼が槍の先で縄を切って2人を解放した。

「何だか分からないけど、助かったあ」

「ゲンさん、ですか? どうもありがとうございます」

ペコツと頭を下げるドラえもんに、ゲンは「こちらこそ」とペコペコと頭を下げた。

「あらためまして、ぼくドラえもんです」「野比のび太です」

2人が自己紹介すると、ゲンは「存じておりますう。あさぎりゲンです」とひれ伏し、それを横目に3人が「金狼だ」「銀狼だよ」「コクヨウ。石神村の前の長だ」と続いた。

「つて、こんなことしてる場合じゃない！早く、千空ちゃんたちに伝えないと！」

土下座から飛び上がったゲンは、足早に船の方に向かって走り出した。

「ゲンさんはどうしたんですか？」

のび太が問うと、コクヨウは「分からん」と首を傾げた。

「だが船に行つたとするなら、おそらく電話をかけたのだらう」

「電話?!」

そう言つて目を丸くするドラえもんと、のび太。

『まさか車だけじゃなくて、そんな近代技術が存在するなんて。それにあんなに急いで連絡する“千空”って一体?』

するとゲンが船から戻ってくるや、ドラえもんと、のび太の手を掴んで「来てちようだいよ!」と船へ向かつて走り出した。

船に乗り込みスピーカーの前に座らされるのび太とドラえもん。

「これが電話?」

「発明されたばかりの頃みたいだね」

「そんなことより！ 早く何か言っておいて！ さっきみたいに、自己紹介！」

ゲンに急かされ、2人は「ぼくドラえもんです」「野比のび太です」とスピーカーに向かつて話しかけた。

すると、向こうからクッククックという笑い声が返ってきた。

「あゝ。んなら「ウソ800」でも見つけてから、また連絡くれ」

返ってきた気怠そうな声に、ゲンは「信じてくれない」と頭を抱えた。

「ゲンからか？ どうしたのだ」

「疲れすぎて頭イカれたんだろ。エイプリルフルならまだ笑えんだけだな」

そう言ってお電話の相手は交信を切ってしまった。

「えっと、これはどうすれば？」

のび太が困惑していると、ゲンは「これは千空ちゃんにサプライズのチャンスだね」と、フルフル震えながら笑い始めた。

「お二人さくん、この後お暇があったら俺らと一緒に来てほしいんだけど。ご馳走たっぷり歓迎しちゃうよ」

ゲンのただならぬ雰囲気にも一抹の不安を覚えながらも、ドラえもんのび太は「せつかくだから、お邪魔させてもらおうかな」と返答した。

「その二人を科学王国へ連れて行くのか？」

「ゲンが世話するのならばいいだろう」

いぶかし気な金狼に、コクヨウが許可を出す。

のび太とドラえもんは「科学王国う？」と、いつもの大冒険を前にするようなワクワクとドキドキを込めた反応を見せた。

「そうだよ。すごいんだよ僕らの科学王国つてばさ〜」

銀狼が鼻高々に胸を張ると、金狼に「お前の手柄のように言うな」と釘を刺された。

「いやいや。2人が驚くような科学なんて無いよ。ジーマーで」

腰の低いゲンが予防線を張りながら、5人を乗せた船は一路、石神村へと向かっていくのだった。



## ついに明かされる人類救済の道

石化光線から逃れた宇宙飛行士の子孫の住む石神村。

科学王国として生まれ変わり、この2年ほどで原始生活から爆発的に発展したこの村には、石化から復活した者たちも在籍していた。

元・自衛官で潜水艦のソナーマン、西園寺羽京もその一人。

彼は今、勉強を知らない石神村の子供たち（一部例外を含む）に向けて『科学学園』と称した青空教室を開催していた。

「はい、じゃあ今日の授業はここまで」

帰りの会も終わり、子供たちは「船造り」の手伝いのために散らばっていった。

この村、この科学王国では大人も子供も年寄りも、誰もが自分にできる役割を精一杯に果たして、石化した人類の救済のために立派に働いている。

羽京も授業を終えれば、次なる仕事が待っている。その準備をしていると生徒の一人、村の子供のスイカがパタパタと走ってきた。

「羽京く。もうすぐゲンが帰ってくるんだよ」

「えっ？ ゲンが？ まだ鉄運搬の仕事があるはずだよ？」

何かの間違いじゃないかと頭を傾げる羽京だが、ゲンからの電話を受けた村人たちは船着き場の近くに並んで、何やら歓迎ムードを漂わせていた。

「みんなして仕事の手を止めて、何を待っているの?」

「知らないんだよ」

スイカの言う通り、村人たちは理由も分からず、とりあえず待っているだけであつた。ゲンいわく、アツと驚く特別サプライズが待っているらしい。

「アツと驚くねえ」

羽京が怪訝な目で見つめる先、村に続く水路に一隻の舟が現れた。

乗船しているのは鉄鉱山で採掘された鉄の積み荷。村人3人。運搬の陸路担当であり、今その船に乗っているのはおかしいゲン。そして見慣れぬ子どもと青い塊。

「誰だろ? 何だろうアレ?」「青い狸?」「あの子、金狼みたいな眼鏡してるよ」

視力の良い原始人の村人たちは、現代人の羽京よりも早くその新参加者の姿をとらえて、ヒソヒソと相談を始めていた。

「青い狸に眼鏡の子供? ハハッ、まるでドラえもんとのび太くんみたいな話・・・」

その2つの姿をようやく視界にとらえた羽京は、アツと驚いた。

「せせせ、千空う! 早く、早く来てくれ!」

科学王国の鉄工所は今、船に取り付ける巨大エンジン製造のためフル稼働していた、

3 mの炉に鉄鉱石をぶち込んで炭を燃やし、酸素を奪って溜まった鉄を回る炉に流して酸素ガスを吹き込み、不純物を取り除いて鋼鉄を作っていたのだ。大量に。

という面倒で大変な作業に、数名の村人と国の長である石神千空が従事していた。

そんなところに比較的クールなキャラである羽京が血相変えて飛び込んできた異常事態に、千空をはじめ全員が手を止めた。

だがその様子に、危険が迫っているような感じは無い。敵の襲来や危険生物の出現であれば、他の足の速い村人の方が先にコチラにくるはずなのだ。

「どうした？ ゴジラでも出てきたつつうなら、ちったあ喰るから顔を出してやつてもいいがな」

「ゴジラ？ ゴリラの親戚か何かか？」

千空の呆れたような様子に逆に安心感を覚えた村娘のコハクは話を合わせた。

「そんなんじゃない。それこそ100億倍すごい物、人？ 物？ とにかく来てくれ！絶対に後悔しないから」

羽京の必死の説得に、千空はやれやれと重い腰を上げ村へ向かうことにした。

「はあああああああ!?!」

ドラえもんとのび太。2人の姿を見た途端、千空は髪の毛を逆立て白目をむいて涙を

流しはじめた。

村人も誰も、ここまで取り乱した千空を見たことはない。

かと思えば、今度はハツとなって頭を抱えて悩み始めた。

「どうしたのだ千空？」

「情緒不安定すぎるんだよ」

コハクとスイカが心配する中、千空は指を立てて静かに口を開いた。

「神様シートだな？」

千空の問いに、その場に居合わせたゲンと羽京は顔を見合わせ、ドラえもんのび太は「神様シートのことまで知ってる」と驚いた。

「いやいや千空ちゃん、俺らを置いてけぼりにしないでよ。それに先に言うことあるでしょ？」

つい先ごろに嘘つき呼ばわりされたゲンが「ほら言った通りでしょ？」とニヤニヤとしていると、千空は当然のようにそれを無視してドラえもんに問いかけた。

「つまりこの地球はのび太の夏休みの宿題の産物つつうことだ」

「話の理解が早くて助かります」

ドラえもんが目を丸くしていると、千空はのび太の頭上のフワフワリングを指さして「こいつが俺たちの世界を作った神さまだ」と村人たちに紹介した。

「神さま?」「創始者様みたいなものか?」と多くの村人はキョトンとした顔であったが、ゲンと羽京は「ジーマー?」「嘘……」と、いつもの千空トンデモ提案の100億倍は驚いた。

「創世日記の、あの話の?」

「そうだ。それがこの世界の真実つつうことだ」

「そうなんです。それとさつき石にする道具をこの地球に落としちゃって」

のび太の口から語られた衝撃の真実に、さすがの千空も喉の奥から心臓が飛び出すくらいに驚いた。

「……あ……うあ……」

過去にいくつもの窮地にも堂々とした態度だけは崩すことの無かった千空が、これには声も出せなかった。

それはゲンも羽京も同様であった。

「3人が凍りついてしまつては話が進まんが、ひとまず千空たちの知り合いなのだろうか? 復活液も無しに復活したこの子たちを、まずはもてなしてはどうだろうか?」

動けなくなった復活組知識人3人を放置したコハクの提案に、村人たちは「とりあえずそうしようか」と賛同した。

「ドラえもんとお前たちを歓迎しよう。腹は減つておらんか?」

コクヨウに尋ねられると、2人のお腹がグーと鳴った。

「そういえば羊羹、食べ損ねてたね」

「では、お言葉に甘えて」

ドラえもんとのび太はペロと舌を出して、村人に招かれ『レストランフランソワ』に入っていた。

「そうだ。フランソワは今、元・司帝国の麦畑に行っちゃってるんだった」

シレットとご馳走のおこぼれにあずかろうと潜入していた銀狼が残念がると、その背後から「問題ありません」という声とツカツカという足音が響いた。

誰であろう科学王国のシェフ、用意が早いことでおなじみのフランソワである。

「ゲン様からのご依頼で道すがら、簡単なものをご用意させていただきました」

そう言つてフランソワは銀メッキのお盆からフルコースの料理を取り出した。

「いやいつの間に!？」

飛び上がつて驚く村人たち。その傍らから顔を出すのは、フランソワと共にモーターボートで帰ってきた龍水、大樹、杠、ニツキーであつた。

「はっはっ! ゲンから大至急の招集を受けてきてみれば、何やら騒がしいではないか。何だ? 人類石化の秘密でも見つけた祝杯か?」

そう言つて高らかに笑う龍水に、大樹は「そうなのか!」と同調し、杠とニツキーは

「いやいや」と冷静に手を横に振ってなだめた。

が、その4人もドラえもんとのび太の存在に気付くと、人生最大級の白目と驚愕にぶっ倒れるくらいに仰け反った。

一方その頃、時間差でようやく正気を取り戻した千空、ゲン、羽京。

「いや、まだ夢みてる感じだけど・・・これって現実なの？」

「ガキン頃から腐るほど読んできた漫画だ。俺でも幻覚かと思うが、100億%現実だ」  
「でもどうして漫画の登場人物が俺らの前にジーマーに存在すんのよ？」

ゲンの当然の疑問に、千空も自信なさげに無理やりな考察を始めた。

「まあ偶然、のび太が作った世界に藤子不二雄が存在しちまって、神さまと全く同じ存在の物語を作っちゃった・・・つうことだろうな」

確証の無い推理ではあるが、ひとまずは納得するしかない羽京とゲン。

「でも、のび太くんが人類石化の原因となると、僕らは彼とどう接すればいいんだろう」  
「責任論なんてモンには興味ねーよ。つつかアホほど地球救ってんだ。今さらチャラだろ」

「でもさ、それってドラえもん世界の話だから、俺らのこの地球の話と一緒に考えるのはリームーな理論じゃないの？」

「それこそ俺らのベースが昆虫人類から逃れられたつつか話だ。過ぎちまったもんを語

るより、実物が来てくれたんだ。もつと唆る話があんだろ？」

千空のニタツとした企み顔に、常識人の羽京は苦笑いし、同類のゲンはニヤアと笑みを零した。

「ここからは忙しいぜ。なんてつたつて全世界の科学オタクの憧れ、22世紀の未来道具が使いたい放題だ」

「まあ今は58世紀だけだ」

羽京の冷静なツッコミにも、千空とゲンのニヤツキは止まらない。

「だがまあ、人類復活も復興もやりたい放題つうワケにはいかねえ。手順間違えっと、司が危惧したみたく人類総権利主張でグダグダのまま今度こそ人類が絶滅しちまう」

「それ以前に、そんなに長期間もドラえもんたちに居続けてもらうわけにいかないよ。のび太くんには義務教育だつてあるんだし」

「大丈夫よ羽京ちゃん。俺らの欲しい未来道具だけ置いて帰ってもらうだけでOKよ」  
羽京の心配は千空とゲンが易々と完封していく。

「でも、そんな簡単に貸してくれるのかな？」

「そこは断れねえように強請r・・・じゃねえ誘導すりゃいいだろ？　なあ、ゲン？」

千空のオーダーに、ゲンは演技染みたお辞儀で応えた。

「勿論よ。既に懐柔策の根回しはしといたよ」



そう言つてゲンが指さした先、村の外れのレストランフアンソワに集まる人々の中に、豪華料理に舌鼓を打つドラえもんとおび太の姿があつた。

「フアンソワちゃんには、金に糸目はつけないで」つて電話しといたから。ドラえもんちゃんたちが何ドラゴ持つてるか分からないけど、代金が払えなかつたら・・・ね」

ゲンの謀略に、羽京は「それつて逮捕される案件だよ」と指摘するが、千空は「日本国憲法も刑法も消えた世界じゃ無効だろ」と後押しした。

「やべえ、唆りすぎんだろ。最高最善の最強効率で道具を使つて、風化した人類も漏れなく救つてやるよ」

卑しい企みさえ無視すればこれ以上に無く頼もしいリーダーに賛同せざるをえない羽京。

ゲンはメンタリスト人生最大の勝負所に胸を高鳴らせ。

千空もまた幼い頃からの夢を現実に、人類の存亡をかけた大プロジェクトを前に興奮を抑えられずにいた。

「千空く！ すごくいで、ドラえもんだ！ 助かるぞ、俺たちの地球！」

そして、そんな3人の元到大樹が大手を振つて走つてきた。

「ああデカブツ。明日から“3629年前”の道具使つて、人類まるつと効率よく救つて・・・」

「タイムマシンで石化道具を使う前に戻って、全部無かったことにしてくれるぞ！」  
こうして、100億%最強効率の人類救済方法は発見され、千空とゲンの野望は打ち  
砕かれてはいないが、絶妙にチリと化した。

## 石化の歴史は修正される

人類石化の原因となったドラえもんとのび太の謝罪を受け入れた石神村と千空たち一行。

「まさか羊羹一つを隠すだけで人類石化が防がれちゃうなんて、本当にワオだよこれ」「約束だよ！ タイムマシンで全部無かったことにするつて！」

ニツキーに念を押しされ恐縮しながらも、ドラえもんとのび太は首が取れるんじゃないかってくらいにブンブンとうなずいた。

「うむ、私たちにはよく分からんが、千空たちの時代に起きた人類石化が全て無くなつて、全部無事に解決ということでもいいのか？」

過去にタイムスリップして歴史を改変するという概念が存在しないコハクたちはイマイチぴんと来ない話ではあったが、千空が「まあそういうことだ」と言うならばそれで良しと納得した。

「でもさ、全部無かったことになるつてことは、僕らがここで過ごしてきた日々も、無かったことになっちゃうつてこと？」

羽京の言葉にハツとなった杠。その様子を横目に、千空は表情を曇らせた。

「石神村の人たち、石化した後に生まれた人たちは、どうなっちゃうの?」

「それは・・・どうなっちゃうの、ドラえもん?」

「歴史が変わっちゃうから、石化した後の出来事も、その後で生まれた人も、最初から居なかつたことになっちゃう」

ドラえもんの告げた残酷な現実には、その場にいた全員が表情を暗くした。

「そ、そんな。みんなとお別れしちゃうのは悲しいんだよ」

スイカの切実な不安は誰もが同じ想いであつた。

長い沈黙が流れる。

皆、自分の命が惜しいのもあるが、それ以上に今まで積み重ねてきたモノが失われることにショックを受けていた。

そして何より、千空が来てから、科学が紡いできた繋がりが失われてしまうことが悲しかった。

そんな中、沈黙を破つたのはコハクだつた。

「ハン、私たちが最初から居なくなる? そんなことはあるまい」

一瞬、的外れな強がりにも聞こえるコハクの言葉に、皆が顔を上げる。

「私たちは元は創始者6人の末裔。つまり千空の父上たちの子孫だ。たとえ時代が戻つてしまつても、そこが変わらないのであれば・・・私たちはいつでも一緒だ」

強引すぎる強がりなのは誰もが分かっていた。

だが、今ここで自分たちが我慢すれば、世界中の人々の不幸が綺麗に消滅してくれる。石化している間もハッキリとした意識が残っているという現実こそ、自分たちよりも苦しく悲しいことではないか。

それに一人で消えるなら怖いが、みんな一緒なら怖さも半減以下。そう考えれば、勇気を振り絞ることができる。

「それに、これからは千空の父上の中で、毎日嫌というほど千空と顔を合わせることになるんだ。皆で一緒にな」

「まあ、百夜は宇宙飛行士やってっから、再会するのは何か月も先になるがな」

耳に指を突っ込んで、いつものように悪態をつきながら笑う千空。そのいつもの様子は、彼を慕う村人たちに安心感を与えた。

そんな様子を見たゲンは、皆の安心をもう一押しする手を発動させることにした。

「ところでドラちゃん。のびちゃんと一緒に美味しいものたくさん食べたよね。でもね、この豪華な料理ってみんなが毎日食べられるようなもんじゃないわけよ。だから、グルメテーブルかけでも・・・ちよつと使ってあげてもバチは当たらないと思うのよ」

ゲンの言葉に、ドラえもんは「それもそうですね。では皆さん、メニューをお伺いします」と言つて、現代食のメニュー表を取り出して、レストランのウェイターのように

アンケートを取り始めた。

「では千空さんたちも」

のび太がメニュー表の料理がそれぞれどんな食べ物なのかを村人たちに説明している間、ドラえもんは復活者組にも希望を聞きに回った。

「はっはー、俺はいい。何故ならフランソワの料理を毎日食っているからな。そもそも石化前の世界に戻れば、もつと美味しい素材でもつと美味しい料理にありつける。無意味だ！」

ゲンが意図的にドラえもんに当たらせたのは龍水。そして彼は当たり前のように高らかな笑い声と共に、ゲンの想定通りにドラえもんの提案を断った。

「そっだよね。現代人は元の世界に戻るわけだし。つてことは別の形でお詫びをしてほしいのよ。石化させちゃった分のね」

人類石化の責任をキツチリと清算させる流れを作るゲンのしたたかさに、ドラえもんは全く気付くことなく「それもそうですね。でも何をしたら？」と首を傾げた。

「そうね。例えば、例えばだよ。元の世界に戻った俺らに秘密道具を一つ、何かプレゼントしてくれるってのはどう？俺は、そうね『ソノウソホント』くらいでいいかな」

シレッととんでもない提案をぶち込んでくるものだ。と、現代組の誰もが思った。

「てめえに使わせたら人類終了のクソチート秘密道具じゃねえか」

「うくん、それはちよつと・・・スピアがある道具ならいいけど・・・」

ケラケラ笑う千空に、ドラえもんは困った表情を見せた。だがその反応に、ゲンはわずかにしてやったりの様子を見せ、そこからケロッと表情を変え、ニコツと笑って見せた。

「なら、できたらいいな♪なこと、叶えてくれちやったりしてくれない？ 今の内に俺らからリクエスト取つといて、元の世界に戻ったら俺らを探してシレッと願いを叶えておいてくれるとか」

「そのくらいだったら、いいですよ。僕に叶えられる範囲なら」

そう言つて胸をドンと叩くドラえもん。そもそも彼に叶えられない願いの方が少ないことを、現代人の誰もが知っている。

そもそもドラえもんなら人類絶滅の責任をチャラにできるといふ認識をゲンも持っているはずなのに、ここにきて願い事を実現させるという夢の体験まで誘導したのは、ゲンの巧みな交渉術の成果であった。

「まあ復活組100人全員の、つてのはさすがにリームーだから、功績的なものを考慮して、この場の俺らの願いだけでも叶えてもらいたいわけよ」

「まあ、妥当だね」

ということ、各自が自分の叶えて欲しい願いを発表していくことに。

## ・七海龍水の場合

「つて、龍水がフリーズしたあ!？」

「世界一の欲しがりも、実現の範囲が青天井でキャパ超えたんだろ」

「こりや回復するのを待つしかねえな」

## ・フランソワの場合

「執事の望みは主の幸せです。龍水様の願いをお叶えください」

「その主様がフリーズ中に、執事も思考フリーズしてんじゃねえよ」

「ブレないね、この人は」

## ・西園寺羽京の場合

「うくん、龍水のことを言っておいてアレだけど、僕も思い浮かばないなあ。欲しい秘密道具は何? つて聞かれたら、どこでもドアって即答できるんだけどね」

「自衛官つて、あんまり自由が無さそうですね」

「だからちよつとタンマにしてほしいな」

## ・石神千空の場合

「タケコプター」

「一択!？」

「現代科学を超越した科学だぜ? 唆るじゃねえか。どの時代の俺でも絶対に分解して



構造調べるね」

・花田仁姫（ニッキー）の場合

「私の願い事が、叶うならば・・・リ、リリアン・ワインバーグに会いたい！」

「んなもん、百夜に言やあコネでアホほど会わせてもらえんだろ」

「なっ!?! なら、千空と知り合いにしてくれ! だって、元の世界に戻ったら皆、他人になっちゃうんだろ?」

「このニッキーの言葉に、他のメンバーもハツとなった。

「そうだ。千空の連絡先だ! 俺はそれを所望するぞ!」

「私も、千空様とのコネクションは、欲しい!」

「迂闊だったよ。そうさ僕も、この繋がりが手に入るなら」

モテモテハーレム状態にドン引きする千空であったが、大樹と杠の後押しもあり渋々了承した。

「つつても、元の俺が拒否れば終わりだかな」

・大木大樹の場合

「俺と杠は、もともと千空と友達なわけだから、連絡先なんて今さら要らん!」

「んなこた馬鹿でも知ってんよ」

「だが、1つ気がかりがある。元の世界に戻ったら、この世界で目を覚ました・・・司の

妹の未来ちゃんがまた植物状態になってしまいうんじやないか？ 俺は、彼女を救ってほしいー！」

大樹の宣言に、自分の願えばかりを追い悩んでいた他のメンバーは、顔を真っ赤にして頭を下げた。

・小川杠の場合

「なら私も。大樹くんの願いをサポートしたいんだ。司くん、前に言ってたんだ。『もしも3700年前に千空くんと出会っていたら、初めての友達になれたのかもしれない』って。だから、司くんが千空くんと友達になれるようにしてほしいの」

「・・・だな。まあ霊長類最強が一高校生の連絡先、急に手元に手に入れたからって連絡するとも限んねえけどな」

「だ、大丈夫だよ。2人なら！」

・浅霧幻（ゲン）の場合

「ま、この流れで俺だけ私利私欲ってのもドイヒーだよな」

「じゃあゲンも千空の連絡先な」

「でもさあ、確か千空ちゃんて俺のこと最初『ゴミみたいな本書いてたマジシャン』とか言ってたかった？ そんな胡散臭い相手から急に連絡来て、出る？」

「100億%出ねえ」

「だよね〜」

「だが、先に龍水やら司から連絡来りや、そつから推理して、少なくとも着信拒否はしねえだろうな」

こうして、8人の願いが揃った。

あとはドラえもんとのび太が元の世界からタイムマシンに乗って過去を修正し、その後で神さまシートに入り、千空たちの世界に降り立って、聞いておいた住所・情報を基に全員の願いを叶えて回ればいいだけである。

の前に、麦畑や鉱山、油田で働いている元・司帝国のメンバーにも「どこでもドア」でご馳走が届けられ、しばし宴会に興じてから、ドラえもんとのび太は元の世界へと帰っていった。

残された千空たちは、夜空へと消えていく神さま雲を見送り、夢見心地な時間に想いを馳せていた。

「いや〜、夢じゃないんだよな。人類が助かるんだよな?」

「そういうえば、いつ頃その時間の修正って始まるのかな?」

杠の素朴な疑問に、千空の頭の中で複雑な計算が始まっていた。

のび太が神さまシートに石化リングを投げ入れた時間を仮定し、そこからのび太の運動神経からリングの移動速度、宇宙空間で発動したリングの光が地球を覆いつつISS

にだけは届かずに済む距離と石化光線照射時のISSの位置、そこから割り出される神さまシートから地球までの距離と、今日2人が地球に降り立った位置関係から、今2人がシートに戻る道のり。そして雲の大気圏内と宇宙空間での移動速度。さらには戻ってからタイムマシンに2人が乗り込んで元の時代をダイレクトに発見して対処を間に合わせることを計算すると・・・

「・・・ククク、さすが22世紀様だ。前半、物理法則ガン無視しねえと計算合わねえが、まあ朝になりや終わってんだろ。俺らは寝て待つだけだ」

「そうか、では私たちは寝て起きた頃には千空の父上たちの中にいるということだな」  
「それで僕らも合流して、もし宇宙飛行士の人たちに会うことができたら」

「科学王国のみんながまた集まれるんだよ！」

「しかもNASAでな。いや、俺が七海財閥を率いて宇宙産業に手を出せば、あるいは全員がまた顔を合わせ、共に宇宙を目指すことになるやもしれんぞー！」

龍水のぶっ飛んだ発想ではあるが、そんな進路も見てみたいと思う気持ちを誰もが心に抱いた。

こうして、科学王国の夜は更けていき、それぞれが複雑な気持ちを抱えたまま・・・朝を迎えた。

「ううーん、もう朝だ。またゴイスーにドイヒーな作業が待ってるよー」

寝ぼけ眼のゲンが寢床から抜け出し、朝日を浴びて大あくびしていた。

「……ってあれ〜?」

目の前に広がるのは見慣れたストーンワールド。

「……ジーマーで? 俺ってば、この歳になってドラえもんの夢見ちゃった?」

全ては夢オチ。そんな現実には項垂れて朝からテンションだだ下がりのゲン。

すると同じようにテンション下げ下げの羽京が顔を洗いに歩いているのが見えた。

「ああ、おはようゲン」

「もしかして羽京ちゃんもドラえもんの夢とか見ちゃったりとか系?」

ゲンの言葉に目をカッと見開く羽京。

「まさか……あれって現実だったの!? でも、だとしたらどうして歴史は変わらなかったんだろう?」

狼狽える2人に、朝からいつものテンションで頭をボリボリと掻く千空がヌツと現れた。

「まあ、考えられる可能性は3つだな。まず1つ、あいつらが失敗したか忘れた説。2つ目は並行世界説、歴史を変えたことで俺らの今いる世界だけ独立しちゃって、歴史を改変する影響が無いっつう話……でもって3つ目」

そう言うのと千空は空を指さして言い放った。

「ドラえもんの秘密道具と、俺らを襲った人類石化現象は別物つつう説だ」

千空はその可能性を一番に疑っていた。

正直、タイムパラドックス等のSFな話は科学で証明できない分、千空にとつては意味の無い議論であった。

それよりも興味があつたのは、昨夜、千空が計算したドラえもんたちの神さまシートまでの距離がどうしても計算が合わなかつたという事実であつた。

数式は絶対に嘘をつかない。勿論、千空が見落とした要素が計算を狂わせていた可能性もあるが……

「つてことは例のホワイマンが。石化の真犯人がまだいるつてこと？」

「まあ原因がドラえもんだろうがホワイマンだろうが、科学王国としてやることは変わらねえよ。むしろ科学王国としちゃあ、ドラえもんの影響無視して、ホワイマン対策一本に絞れんだ。ありがてえ話じゃねえか」

希望がチリと消えたことに落胆の色を一切見せない千空。

『『ドラえもんの力で全部解決楽ちんコース』が消えちやつても、嘆く時間なんて非効率だつて一蹴してんのよね千空ちゃんつてば』

「そういう心の強さは、僕らも見習わないとね」

そう感心するゲンと羽京であつたが、千空の手にタケコプターみたいな竹とんぼがチ

ラリと見つかり、『あつ……これ、意外と引きずってるな』と、千空の心の傷を察したのだった。

こうして、科学王国は人類石化のヒントに迫ったようである。実は一歩も前には進まず、結局はこれからも今まで通りに科学と共に皆で歩んでいくこととなった。

1つ、良いことがあつたとすれば、中華料理やイタリアン、日本食やドイツ料理といった美味しい現代食を味わったことで、石神村の人々も現代人組も、人類復活の（美味しい食事でありつきたいという）モチベーションをさらに高めることができたことである。

## ひみつ道具レビュー

番外編 Dr. STONEにひみつ道具を導入したらどうなるレビュー その1

・タケコプター：☆☆☆☆

「えっ？ 千空が昔から一番欲がっていた道具なのに、評価低くないか？」

「んなもんは科学技術の興味だけの話だ。空を自由に飛ぶだけなら気球でこと足りんだろ」

「千空ちゃんらしいっちゃらしいご意見ね」

「第一、慣れんうちに落下したらオダブツだったの」

・どこでもドア：☆☆☆☆☆

「瞬間移動で運搬は楽になるが、ドアフレームのサイズがなあ・・・」

「それを差し引いても、やっぱり便利だよな。地球の裏にも行けちゃうし」

「まあ、知らねえ場所の地形が今どうなってるかが大問題だな」



・ビッグライト：☆☆☆☆

「デカくして得することがイマイチねえんだよな」

「人間をデカくしなくても、コハクたちのゴリラパワーで十分解決できるもんな」

ガンツガンツ

「探索とかでも、小回りが利いたほうが便利なきっかけが多いもんな」

・スモールライト：☆☆☆☆★

「運搬効率最強すぎんだろ。まあ勝手に元のサイズに戻るのに時間がかかるのが面倒だが」

「ピーン！ これで船造りも楽になるんじゃないか!? 部品だけ用意して、龍水に組み立ててもらったら、自動的に完成じゃないか!」

「復元した時の位置調整をどうやんだよ」

・もしもボックス：★★★★★

「定番のクソチートアイテム人気No.1だが、結局は並行世界を作るだけだろ。こんなもん使う奴は、人類まるっと助け出す科学王国の一員とは言えねえな」

「・・・もちろんだよ。千空ちゃん」

・タイムテレビ：☆☆☆☆★

「根気さえあれば、石化発生の秘密を探れるな」

「アタマ雑すぎんだろ。3700年分観察すんのか？ それよか、これから起きる問題の原因追及できるのがいいだろ」

「ねえこれってもしかしてだけど。場所とかも指定できちゃうの？ 女の子が水浴びしてる時間と場所がわかったら。あついや別に深い意味はないんだけど、ちよつとだけ興味があつて」

・タイムふろしき：☆☆☆☆★

「リセットしまくり、時間かかる作業ぶつ飛ばしできるチートアイテムはありがてえな」  
「ワシとか若返らせちゃつたら、なんか凄いいことできちゃうよ！」

「石化した人も元通りにできるんだよ！」

「いやそれは・・・いや、化石になった恐竜の卵も復活するくらいだもんな・・・」

「風化しちゃった石化の人たちも助けられるね。ただ手間がウウエーイだね」

・四次元ポケット：☆☆☆☆★

「中身入りの話とかじゃないんだよね？」

「究極すぎる運搬方法だが、実際今の科学王国程度の物量じゃ、フル活用できるほどの需要がねえ」

「今の科学王国程度？ ヤバすぎるだろ22世紀の発明」

・グルメテーブルかけ：☆☆☆☆★

「食糧問題が解決すんのはいいが、量が追いつかねえから意味ねえ」

「シエフを復活させようってモチベーションが落ちるのも問題だよ」

「はっはー！ 庶民の味程度で落ちるモチベーションなんて、世界を救うスケールを前には小さい問題すぎるぞー」

「龍水にとって、かさ張らないお弁当箱感覚とか。私らと感覚違いすぎでしょ」

番外編 Dr. STONEにひみつ道具を導入したらどうなるレビュー その2

・○×うらない：☆☆☆☆★

「科学王国のクソ地道作業トライ&エラーをすつ飛ばしていけるのがありがてえ」

「でもさ、ドイヒーな作業は残るわけだよね？」

「そこはマンパワーの仕事だろ。過去だろうが未来だろうがそこは変わらねえ」

「もし手に入ったら、最初にマンパワーの解決方法を占いたいね。でもそうしたら大樹くんの出番が減っちゃうかな？」

・フェール銀行：★★★★★

「ザ・無意味すぎるアイテムだろ」

「そもそも通貨偽造罪だもんね」

「ジーマーな事言っちゃうと、新人類最初の通貨が、流通前から為替相場で大暴落しちゃうのって大問題よね。あつ、俺が千空ちゃんとやってたわソレ」

・きこりの泉：☆☆★★★

「質の良いもんを手に入れるにも、そもそも元が無きや意味ねえからな。第一、んなもん貰う暇があつたら自分らで作りやいい」

「でもさ、綺麗な氷月ちゃんとかいたら、ジーマーで最高じゃない？」

「いや、それはそれでキメえだろ」

・お医者さんカバン：☆☆☆☆★

「こんな便利なものがあつたらルリ姉もすぐに助けられた。素晴らしい発明じゃないか」

「まあ、俺らが千空と苦労したサルファ剤が無駄になっちゃうのは残念だが・・・」

「そもそもゴリラだらけの科学王国に病気とかレアすぎて、ほとんど無用の長物じゃねえか」

・とりよせバッグ：☆☆☆☆☆

「最強すぎんアイテムだな。クロムの探索能力がカスになるわこりや」

「そそそ、そんな。いいや！俺には探索のプロとして培われた肌感覚とか。ほら、科学じゃ表せない大事なもんが」

「冗談だ。必死すぎんだろ」

・アンキパン：☆☆★★★

「これ、ジーマーの普通の食糧としての話してない？」

「いや、どんだけ細けえ指示しても忘れねえつてのは、ゴリラ王国でクソ重宝すんぞ」  
「便になって排出までの話だが、戦略的価値は高いな！ 俺はいらんがな！」

・ほんやくコンニャク：☆☆☆☆★

「要る？ 外人さんを復活させるときだって、結局は通訳さんを見つければいいだけだし」

「いや。コイツのすげえところは動物もコンピューターにも通用するってことだ。ホワイマンにも通用させられれば、強えぞ」

「それって、そもそもホワイマンが日本人だったら無意味だよな」

・通り抜けフープ：☆☆☆☆★

「怖いのは、うっかりフラフープに使っちゃう子が出てくることだよな」

「それって・・・どうなっちゃうんだ？」

「まあ、地面に落とした瞬間に地面の中に埋もれて死ぬだろうな」

・ヒラリマント：☆★★★☆☆

「暴力に頼らないんだよね？ 大樹くんに合いそうだよ」

「まあ、んなバトルを避けるのがベストだがな。そもそもんなチート防御力が必要になるほどの運動エネルギーがこのストーンワールドに存在しねえ」

番外編 Dr. STONEにひみつ道具を導入したらどうなるレビュー その3

・テキオー灯：☆☆☆☆★

「環境適応能力つつうレベルじゃねえだろ。水圧、気圧、真空すらガン無視つつうなら、毒ガスも行けるわな」

「リユースさん取り放題ってこと？ それ凄いな」

「いや。エラー＝死の化学反応を俺抜きで試せんだよ」

「そういうバイヤーな調査。よくまあ小屋なんかでやってたのね」

・タンマウオツチ：☆☆★★★

「時間止めたところで、人間様が動けたって意味ねえよ。科学王国は物質至上主義だ」

「人権へ科学ってこと？ 千空くんらしいね」

「あんたら、よく友達やってたね。いや今も付き合えてるのが凄いな」

「本来の使い方、時間止めるって能力漫画の最強能力だからね」



・どくさいスイッチ：☆☆★★★

「絶体絶命の最終手段ならまだしも、普段はマンパワー削るだけのクソアイテムじゃねえか」

「これは反省を促すアイテムじゃないのか？ 俺はそう聞いているぞ」  
「なら余計に時間の無駄だ」

・ムードもりあげ楽団：☆☆☆☆★

「んなもん要るか？」

「いやいや、科学王国は地道でドイヒー作業だらけよ？ そんな時に欲しいじゃないのよ」

「私も、これは欲しいな。リアンのレコードだって、摩耗しちゃうの嫌だし」

・マジックハンド：☆☆☆☆☆

「これね、どんなややこしい作業も捗っちゃうんじゃない？」

「職人カセキだけじゃねえぞ。ゴリラチームに持たせりゃ無双だ」

「船でも気球でも、活躍できん場所が知りたいくらいだな！」

「弱点、ドイヒー作業に使えないくらいじゃない？」

・地底探検車：☆☆☆☆☆

「何一つ困らねえな。つつうか、こんなんどうやってポケットにしまったんだ？」

「海と空と陸は制覇したが、地底の制覇までは俺にも想定外。素晴らしいぞ！」

「それで、誰が運転できるのかな？」

・たずねびとステッキ：☆☆☆☆☆

「もしも千空以外に自力復活者がいるのか調べられるじやないか！」

「これがあると、ソナー見る必要が無くなっちゃうかもね」

「迷子になった子がいたりしても便利だよね」

「まあ、それが全部不要な事態が理想だけだな」

・糸なし糸電話：★★★★★

「すでに携帯電話があるからな」

「糸なし糸電話ということは、糸あり糸電話もあるのか？」

「ピンと張った音の振動を伝えるつつう・・・まあ実際見たほうが早えな」

ガサゴソ

「すげえぞ科学！ 離れていても大樹の声が聞こえる！」

「元が馬鹿でさえただけだ」

・ドラえもんバトルドーム・ドンジャラ：★★★★★

「懐すぎんだろ」

「バトルドーム？ 闘いの間か？ 俺の家にもあつたぞバトルドーム」

「ワオ。それ絶対に玩具じゃないね。ちゃんと人権大丈夫のタイプかな？」

# 番外編 Dr. STONEにひみつ道具を導入したらどうなるレビュー その4

・SOS発信機：☆☆☆☆☆

「どこに向かって発信すんだつつう話だ。分解して回路やら希少金属を有難く頂戴するくらいしかねえぞ」

「そもそもSOSとは何なのだ？」

「遭難を伝えるモールス信号よ。ほら、俺や千空ちゃん、龍水ちゃんが使うやつ」

「第一、こいつはドラえもんですら居場所の特定に10年かかる代物だぞ。俺らのGPSのほうが有用性高いって、どんだけだよ」

・さすと雨が降る傘：☆☆☆☆☆

「はっはー！ 日本列島は水資源大国だぞ！ 今や工業排ガスも無く雨水が真水ほどとはいえ、水に困ることは無い」

「まー、科学に純水が必要な時もあるが、今の科学王国じゃそこまでの純度を求めてねえからな。要るときや作る。少し手間が省けるくらいだな」

「これジーマーで子供のころから不思議なんだけど、何を目的に開発されちゃったわけよこの傘」

・もぐら手袋：☆☆☆☆

「掘削アイテムはあつて困ることはねえ」

「穴掘りが楽になるなら、子供チームでも力になれるんだよ」

「それは落盤事故が怖いから駄目だよ」

「ところがだ。22世紀様の科学なら、のび太くんですら洞窟掘れちゃうんだよ」

・星型ランプ：☆☆☆☆

「早い話、電球だよな？ 俺らが作った」

「まあ、永久機関で節電できんのはありがてえな。クロム様の探検の荷物にかさ張らねえだろ？」

「そうか！」

「まあ、他の道具断つてまで、このランプを欲するか？ つて聞かれりや、100億%無しだな」

・名刀「電光丸」：☆☆★★★

「出たぜ。ドラえもん史上最強近接武器」

「ただの刀であろう?」

「ところがだ。前にコハクが例えたみたく、テメエの戦闘力を100として、司や氷月が300だろ。そこに電光丸を握った俺が並べば・・・」

「100億?」

「いいやせいぜい2000くらいだな」

・おもちゃの兵隊：☆☆★★★

「それ突撃ってか?」

「何だそれ、千空?」

「ジェネレーションギャップだね。ドラえもんの歌聞いて育ってきた世代か」

「冗談はさておき、標的黒焦げにする火力はやべえぞ」

「それにしても評価が低いんだね?」

「まあな。こいつら状況判断能力が低すぎんだよ。敵認識の基準がザルすぎる。事故率ハンパねえからな」

・無生物さいみんメガフォン：☆☆☆☆☆☆

「石の世界なら最強アイテムのご登場だ」

「そうだよね。千空ちゃんなら無生物の特性とか完璧把握でしょ？」

「そういえば千空くんって、植物とかも詳しいよね。詳しくないジャンルとかあるの？」

「恋愛の駆け引きとか、弱そうだよね。デートとかドイヒーになるのが目に見える」

「だろうな」

ドラえもんのび太のDr. STONE【続】

千空たちとの約束を果たしたドラえもん

「この病室だね」

生命維持装置の単調な機械音が無機質に鳴る病室に、ドラえもんのび太の姿はあった。

2人はストーンワールドを救うため、石化装置を暴発させる前の時間に戻り、オヤツの羊羹を隠してから「神さまシート」を取り出し、その中の人類が石化する前の世界へと降り立っていた。

そして今、大樹の願いであった獅子王未来の植物状態からの回復を叶える番である。

目の前のベッドに眠るのは、6年間眠りから目覚めていない12歳の少女。

「のび太くん、危ないから下がって」

ドラえもんはとりよせバッグで石化装置を取り寄せ、「1 m 1 second」とつぶやくと、手にした捻じれたアクセサリーから淡い光が溢れ出していく。

その光に触れた側から未来の体が石化していき、全身が石になったことを確認すると、ドラえもんは石化解除液をふりかけた。



すると未来の体は光を放ち、端から元の人間へと戻っていく。

「(´▽｀)・・・どこ？ 私・・・」

「やったあ！ 成功だあ！」

目を覚ました未来のうつろな眼に、ドラえもんと野太の姿が映る。

「これで大樹さんのお願いも叶ったね。あとは杠さんだけだ」

「はあく長かったあ」

のび太の安堵の声にドラえもんもウンウンとうなずく。

千空たちの願いを叶えるために奮闘した2人は、特にこの未来のいる病院探しに苦戦していた。

何故ならストーンワールドでこの病院の住所を知っているのは司だけ。その司が冷凍保存されているため、病院の場所は経度緯度の座標で調べるしかなかったのだ。

そんな事情も知らない未来は、目の前で喜ぶ眼鏡の男の子と青いダルマの姿を不思議そうに眺めるしかない。

その「どこかで見ることがあるような、絶対にいるはずのない存在」を。

「あつ、そうだそうだ。放っておいてごめんね。改めまして、ぼくドラえもんです」

「野比のび太です」

「獅子王・・・未来です。はあ、ドラえもんって本当にいるんだあ」

未来は『まだ夢を見ている』と思っていた。

「じゃあ最後に、未来ちゃんにお願いがあります。この連絡先をお兄さんに渡してあげてね」

「千空さんって人の連絡先だよ。お兄さんに、この人とお友達になつてあげるようお願いしてね」

事前情報抜きに、この滅茶苦茶な依頼を理解できるわけがない。だが、すでに疲労困憊の2人にとっては、一秒でも早く任務を終わらせて元の地球に帰りたいたいで一杯なのだ。

こうして、呆気にとられる未来を残し、ドラえもんとのび太は元の世界へと帰っていった。

それから1時間後・・・

千空は自宅のマンションへと帰っていた。

「おい新婚夫婦。イチヤイチヤすんなら、とつとと愛の巣に帰巢しろつての」

「なんだ千空、連れないじゃないか！ そんな邪見にするなよ！」

この日、5年越しの恋を確認し合うことに成功した大樹と杠が、千空の部屋に居座っている。

カップル誕生の甘美な時間を過ごすには、2人はウブすぎた。

普段と違う過ごし方をすると落ち着かないのだ。

「ところで千空くんは、さつきから何をしているの？」

「ああ。さつき来た郵便を量子分解すんだよ」

物騒なことを言いながら、千空はガラス張りの容器の中に小さな箱を放り込んだ。

「つつても、んな高度科学を学生が再現できるわけがねえ。せいぜい消し炭だ」

「それで、何を燃やすんだ？」

「タケコプター」

サラツとんでもないことを言つてのける千空に、大樹と杠は目を丸くする。

「百夜のつまらねえ冗談に付き合うな。宇宙に行く前にサプライズ、ちったあ息子の喜ぶもんを寄越せつつう話だ」

そう言う千空はつまらなさそうにスイッチを入れ、閃光と共に、その小箱を黒い箱に変貌させた。

「お父さんのドッキリに付き合つてあげてもいいんじゃないかな？」

「んなもん、世間様の面白ニュースのほうが100億倍面白いの。『霊長類最強の高校生様が試合放棄』だよ。下痢でもしたのか？」

これでもかと意地悪くイジる千空の口に、大樹と杠はお手上げ状態であった。

## ピンポン

その時、訪問客を知らせるチャイムが鳴り、千空は気怠そうに玄関へ向かった。

この家に用事がある人間として考えられるのは、友人の大樹と杠。それ以外は新聞やなにかの勧誘しか無いからだ。

「あのお・・・こちら石神千空さんのお宅でしょうか？」

「ああ、オタクは？」

目の前にいたのは筋肉質な女性だった。仏頂面の千空を見て、何か期待していたものと違ふと残念がった顔をしている。

「あの。私、花田仁姫っていうんだけど。後輩からはニツキーって呼ばれてて。あのさ、変なこと言うけど・・・アンタに会いに来た」

ニツキーの言葉に、これでもかかってくらい興味薄な目を向ける千空。

その空気を察したニツキーは顔を真っ赤にするが、負けじとポケットから紙を取り出した。

「今日、部屋にこの紙があったんだ。私の字に間違いないけど、書いた覚えは全くない」  
そこには『石神千空に会いに行くこと。迷わず、すぐに！』というメッセージと共に、千空の連絡先が書かれていた。

ニツキー自身、自分でも言っていて違和感だらけのエピソードであり、ドン引かれ覚

悟で話していた。だが、その目の前の千空の表情は今までとは異なり目に輝きを宿している。

「唆るじゃねえか」

意外な返事と共に、千空は「入りな」とニツキーを部屋に招き入れた。

杠と大樹が同席し4人で机を囲むと、ニツキーは壁に掛けられた写真に釘付けになった。

「あのさ、間違いだったらゴメンだけど。この写真の男の人って・・・宇宙飛行士の？」

「ああ、千空のお父さんだ」

大樹の答えにニツキーは飛び上がった。

「ままま、まさか石神百夜!?! 今、ISSに行ってる!?!」

「詳しいんですね」

とてもではないがインテリよりもファイターが似合うニツキーから出た言葉に驚く3人。

「だって私、この人と一緒に行ってるリリアン・ワインバーグの大ツファンなんだ! えええ、そんな人の息子さんのウチに来ちゃってんの!?!」

興奮して立ち上がるニツキー。その様子を察しそうだと感じる大樹と杠であったが、千空は何かを察したように白けた目を向けた。

「親父の企画、壮大すぎんだろ」

「どうやらニツキーのことを、百夜が用意したサプライズの仕掛け人の1人だと思っ  
ているようだ。」

ピンポン

その時、チャイムが再び鳴り響いた。

「ただけ用意してんだ？ あいつは」

そう呟きながら玄関に出る千空。

「……ああん？」

千空の妙な返事に、大樹たちも「誰が来たんだ？」と玄関に集まり、一同に『はあ？』  
と目を丸くした。

「試合放棄した霊長類最強様が、俺に何の用だ？」

訪問客は獅子王司であった。

「突然の訪問ですまないが、俺も色々混乱している最中だ。だが、どうか不気味がら  
ずに聞いてほしい話がある」

力づくで捻じ伏せればどんな相手にも話を聞かせることができそうな司が、こうも低  
姿勢で話しかけてくる現状に困惑する3人。

千空だけは「まゝたあの親父のクソ企画に付き合わされた犠牲者が来やがった」と白

けた様子である。

「キミの父親は関係ない。俺は俺の意思でここに来た……いや、ここに呼ばれたと言っているか」

「あん？ 呼ばれてんならテメーの意思100%じゃねえぞ。大体、どこのどいつが科学部部長に格闘野郎を付け合わせて得すんだよ」

獅子王司相手に少しくらい物怖じくらしいしろと、千空の相変わらずの口の悪さに戦々恐々する大樹と杠。

すると司は白い顔を少し赤らめて、言いにくそうに口を開いた。

「妹……いや、ドラえもんだ」

「……ドラミの間違いじゃねえのか？」

玄関で立ち話もなんだと、とりあえず5人は部屋に入り話をつづけた。

「さっき言っていた試合放棄の件だが、その妹が関係している。妹は6年間意識不明だったんだが、今日突然目を覚ました。その知らせを受けていても経つてもいられず、俺は会場を飛び出した」

「そんな事情があったのか！ 良かったな、妹さんが治って！ だが、それならなおさら妹さんの傍にいてあげるべきじゃないのか？」

「ありがとう。精密検査こそ受けているが、妹は元気だよ」

大樹の熱気に司が礼を述べると、千空はピクツと眉をひそめる。

「ああん？　6年寝たきりが元氣満々つつうのは矛盾してんぞ。もうちよい凝った設定持ってたきゃがれ」

「いいや事実だ。俺も目を疑ったが。そんな妹が俺と再会してすぐに言ったんだ。『ドラえもんに治してもらった。石神千空と会ってくれ』とな」

話の脈絡が無さすぎる、と千空以外も頭を捻り始める。

すると司は同席していたニツキーに初めて気づいた。

「キミはたしか、柔道の花田選手？」

その指摘に杠は「そういえば、見たことある気がしてたけど」と驚く。

「そういえば自己紹介もまだだったな。俺は大木大樹。こっちが石神千空で、こっちが・・・俺の・・・」

「今日、彼女になりました。小川杠です」

顔を真っ赤にした大樹に代わり、杠も顔を真っ赤にして名乗ると、司は眉をピクと動かした。

「そうなんだ、おめでとうだね。私は花田仁姫、柔道をやってて。今日初めてこの家に押しかけちゃったところ・・・って、その理由が自分でもよくわかんないんだけどね」

ニツキーの名乗りは司の耳には届いていなかった。司は身を乗り出し、大樹と杠に顔



を向ける。

「お二人の名前……大樹さんと杠さん、だったか？」

「ああそうだが、それが何か？」

「同じなんだ。妹がドラえもんから聞いたという名前。彼いわく俺の妹の治療を願ったのは『大樹さん』だと」

偶然にしては奇妙すぎる一致に、司は自分の顔に手を当て困惑する。その様子は嘘とか作り話のリアクションではないことは誰の目から見ても明らかだ。

「で、杠の名前はどこから出やがった？」

「……杠さんの願いは、『俺に石神千空と友達になってくれ』というものだったそうだし、またまた飛び出した突拍子もない展開に3人は混乱を極めるが、千空だけはニヤツと笑みをこぼす。

「人生一、クソくだらねえ仮説が出来ちまったじゃねえか。映画ドラえもんに、俺らが出木杉君を出し抜いちまったってことか？」

さつきまで話を馬鹿にしていた千空が一番に乗り気になったことに驚く4人。

「どういうことだ千空？」

「俺でも引くが、引くなよ。簡単に言やあ『ドラえもんのび太の科学大冒険』だ。ここにいる5人で世界救って、歴史がまた元に戻ったんだ」

司の話を馬鹿にしていればレベルじゃないトンデモ話に、司以外の3人は「どこをどう繋げたらそうなる?」と、やや引いていた。

「つまり俺の妹の治癒はその功績からの謝礼だということか?」

「ああ。妹もそこで目え覚まして。司、てめえは死んでるよ。だからこのお人良し夫婦は代わりに司ブラザーズの願いをリクエストして、柔道女は俺の父親経由でリリアンと会いたかった。で、俺は……!!?」

そう言うとき空は急に顔を青ざめさせ飛び上がり、自室に駆け込んでいった。

そして、この世のものとは思えない悲鳴を上げて卒倒したのだった。

「ま……まあ気を落とすな千空……」

人生最大の失敗の成れの果てを手にどんよりする千空を必死で励ます大樹。

その様子をご愁傷様としか言えない3人。

「だがその理論だと、おそらくは千空くん。キミが俺たちのリーダーということになるな」

いかにもリーダーポジションキャラの司の言葉に杠は「どゆこと?」と首をかしげる。「俺のリクエストの矢印を考えれば、大樹さんと杠さんではなくキミに向かっているのは不思議だろう。そして花田さんもリリアンに直接ではなく千空くんを経由している。つまり、俺たちには他の願いを差し置いても繋げたい絆があったと推理できる」

耳が恥ずかしくなるほどの司のくさい台詞に、ニツキーも杠も少し頬を赤らめる。

大樹は想像に難くないほど、この言葉にテンションを上げていた。

「ああ・・・まあそんなところだな。で、ついでに言やあ、今がちょうどいいタイミングだ」

そう呟くと千空はくたびれた体を無理やり起こして、部屋から持ち出したパソコンを開いた。

「ISSじゃ、週15分だけ家族との交信が許可されてんだ。俺は利用する気なんてサラサラねえけどな」

カタカタとキーボードを打ち、交信依頼のメールを打ち込む千空。

すると数分してパソコンの画面から髭面の男性の顔がドアップで飛び出してきた。

「千空!!! 俺は・・・俺は・・・俺は、千空!!!」

部屋中に鳴り響く父親の慟哭に、当の千空は耳をほじって「お前は百夜だ」と冷静にツツコミを入れた。

「お前が家族通信なんて利用するとはな。彼女でもできた報告か? (杠ちゃんは大樹くん派。となればその少しゴツイ娘か・・・) やるな!」

画面越しの百夜の目が、千空の近くに並ぶ4人に移っていったのが分かる。当然、千空は「アホか」と冷静に否定した。

「まあ時間が惜しい。てめえの勘違いした女のリクエストだ。リリアン・ワインバーグを出してくれ。ファンなんだと」

「そうか！ 分かった！」

『いやいや、世界トップの無茶ぶりをそんな軽く流すな』と驚く4人。

だが意外にもISSのノリは世界トップクラスに軽く、モニターの前に宇宙飛行士5人と歌姫が「何だ何だ？」と揃い踏みしていた。

「Uhhhhhh!! リリアン！ 本物！」

卒倒して涙と鼻水を垂れ流すニツキー。

主役が倒れてどうする？ と、起こそうとしてギブアップした千空に代わって、大樹と司が起こす。

「へく、これが百夜の息子くん。似てないね〜」

フフと笑うリリアンの親しみやすい笑顔に、大樹や杠はホツと心を和ませた。

だが、そのリリアンの目からは涙がこぼれ始めていた。

「あれ？ どうしちやっただらう私・・・千空くんの顔を見たら・・・」

その異変はリリアンだけではなく、残る5人の宇宙飛行士にも起こり始めていた。

「私もだけど、シャミールまで。どうして？」

ダリヤが泣き顔を誤魔化すようにシャミールの肩をバンバン叩く。

「オツホーツ。なんだろ、ワシまで。悲しいとかじゃなく、嬉しい感じ」

ヤコフが怖そうな髭顔をくちやくちやにして涙している。

「分からないけど、揃ったって感じなんだよ」

「コニーもまた美人が台無しになるほどクチャクチャ顔で喜んでいた。

この光景に、英語がほとんど理解できなかった大樹や、なんとなく理解できた杠、ニツキーも涙し、千空は顔をうつむかせて表情を隠していたが、パソコンのキーボードには数滴の水が落ちていた。

「千空、俺はなぜか今お前に無性に会いたい気分だ。帰還したら、そこのお友達も誘って来てくれないか？」

そういう感動の親子の再会に千空が興味ゼロなことは百も承知の百夜であったが、千空は意外にも「ああ」と力強く答えた。

「そういうえば、アンタも宇宙飛行士になるんだってね？　大歓迎するから絶対になりなよ！」

「ダリヤの命令に似た懇願に、司は「いや、彼だと体力が心許ないね」と冷静な分析を加える。

「だけど大丈夫だ。惑星探査に耐えられるよう、彼の体は俺が鍛えると約束する」

ドンと胸を張る司に「俺も協力は惜しまんぞ！」と大樹も胸を張りニツキーも名乗り

を上げるが、その絶望的な脳筋提案に千空は動揺を隠せないでいた。

かくして、再会を果たした科学王国。

その夜、七海財閥からの連絡が入り、数日後には自衛隊からも。

そして、数週間後によくやくドツキリの疑いを外したメンタリストからの連絡が入る  
のは、また別のお話

## ドラえもののび太 抜きの 東南海大冒険 その1

「すげえぞ地球！ 何処見ても海しかねえ！」

大樹の叫びが大海原にこだました。

「反射物もねえ海上で、どんだけアホみてえな大声出したらこだますんだよ。しかもそりやそうだ。地表の7割支配してる大海原様を舐めんなよ」

隣に立つ千空は耳を押さえながら冷静に指摘し罵倒し、杠がいつものように「あはは」と笑う。

彼らが立つのは小型帆船の上。伊豆諸島クルーズを航行中である。

ことの経緯はドラえもん騒動の夜、追加戦士からの連絡であった。

七海財閥。七海学園。七海龍水。執事。フランソワ。

聞き慣れぬワードの連呼にも、千空は冷静に「南海大冒険だったか？」と分析していた。

その後、話の早い男・龍水に繋がり。

現在に至る。

現在に至るまでに説明を付け加えるなら……

千空たちはこの世界軸でも友好を深めるために、龍水の「個人」所有する「小型」帆船のクルーズに招待されていた。

「はっはー。さすがじゃないかドラえもん。俺の自室のセキュリティを難なく突破するとは」

「そうではなくては説明がつかぬ失態。助かりました」

操舵輪を握る龍水に、フランソワは手を軽く腰に当てて同意する。

「すごいね兄さん。こんな大きなお船に乗れるなんて」

「ああ。俺も初めての体験だ」

水面を飛ぶカモメたちを眺め喜ぶのは獅子王未来とその兄・司。2人もまたクルーズに招待されていた。

「だが残念だな。聞いていた美女の数が1人足りん」

「ニツキーさんも災難だったな。注意した立ち小便男が警官で、取っ組み合いの喧嘩になるなんてな」

「そのようなことが・・・花田様は御無事でしょうか?」

「ニツキーさん、柔道の選手だからね。ケガさせちゃって、下手したら裁判になるかもしれないって・・・」

「目撃者いんのに公務執行妨害とか冗談だろ。まあ俺らと遊んで心証悪くすんのも最悪



だから、今日は欠席だとよ」

千空たちとのクルーズを楽しみにしていたニツキーであったが、裁判が長期化してリアンの地球帰還イベントに間に合わなくなることを危惧し、苦渋の決断をしていたのだ。

「ならば七海財閥の顧問弁護士を紹介してやろう」

龍水が胸をドンと叩くと、千空たちは「弁護士費用で旅費が飛ぶわ!」とツツコミを入れた。

「そういえば足りないと言え、この船の人員だが。俺たちを除けばキミら二人しかないじゃないか」

司から出た当然の疑問に、龍水はフンと鼻を鳴らす。まるで「こんな小さな船なら俺一人で動かせるなんて当たり前だ」とでも言いたげである。

「まあ、考えて見りやゴーイングメリー号だって、その気になりやナミ一人で動かせん。素人でもパワー馬鹿2人いりや十分だってことだろ?」

「その通りだ。とはいえ諸君らはそもそもゲスト。労働人員数には入っておらん」  
妙に自信満々な嫌味さが鼻につく。司はあまり龍水のことを好きになれなかった。

そもそも財閥の御曹司という時点で既得権益の申し子。幼き頃の苦い思い出を抱く司にとっては関わり合いになりたい人種ではない。

それでも彼がこのクルーズに参加したのは、妹の未来に注げなかった6年間の愛情のため。彼女に色々な景色を見せてあげたい想いからであった。(あとは千空のトレーニングのため。不安定な海上では自然と体幹の筋力が鍛えられやすく、トレーニング効率が良いのだ)

と、司の事情はさておき。彼よりもこの場に似つかわしくない人間がいる。

効率厨の科学オタク、千空だ。

たまの休みにわざわざ海洋でバカンスというタイプでもなければ、大樹や杠が楽しむ姿を見て悦に浸るタイプでもない。

ドラえもんに導かれた仲間として龍水やフランソワと交流を深めるなら、自宅に案内しておしゃべりでもすれば十分というタイプ。

よほどの理由がない限り、彼が伊豆諸島の海上に赴こうなんていう事態は不自然だ。では自然な理由とは何か。それは彼が今手にしている物である。

「千空・・・その物体は何なんだい？」

「ソユーズ。1/2スケールのな」

メカメカしい寸胴状の物体を千空が平然と手で叩きながら言うと、耳慣れないが耳にしたことのあるワードに司は目を丸くした。

「本物のソユーズは地上からの管制ありきが大前提だ。もしも支援無しに転倒姿勢で海

にでも落ちたら最後、ハッチが開かずに自力脱出できずに9時間で酸欠のオダブツ。自己完結してねえんだよ。そこでコイツには勝手にハッチ上向きで航行できるように、船代わりの機能を持たせた。勿論、本物と同じ比重を再現してな。ちなみに、3人くらいだったら入れっぞ」

千空の口からペラペラと語られる説明に、辛うじてついて行く司。隣で聞いていた未来や大樹は早々に諦めて耳の機能を停止させていた。

「理解できたのは、このソユーズの機能実験のために、キミはクルーズに参加したということだけだな」

「だけで十分だ。あとは司先生、大樹先生の馬鹿力で放り投げてもらえばいい」

「一生懸命作ったものを、そんなぞんざいに扱っていいのかい？」

「ほぼ出来合いの箱モノをちよつと弄っただけだ」

「その箱代は俺が出資しておいた。気にするな！」

ならば遠慮なくと2人が1/2ソユーズを大海へと投げ込むと、その物体は荒波の中でも安定してハッチ部の扉部を上に向けたままドンブラコした。

「綺麗な放物線だったね」

「おお！ 成功だな千空！」

「つたりめえだ。そうなるように作ってんだ」

己が成果の達成にニヤツと笑う千空。

だが、そのソユーズに繋がっているはずの紐の端を、大樹が「これだと投げ辛いな」と解いていたことに時間差で気付くと、一気に青ざめさせた。

「大丈夫だ千空！ 俺が泳いでとっ捕まえてくる！」

「いや待て！」

上着を脱ぎ捨てた大樹を、龍水が慌てながら止めに入った。

「ブツが流されるのが早すぎるぞ。波が強すぎるんだ」

龍水が空を見上げると、遠くに巨大な積乱雲が現れた。

「ここまでの急変は久々だな。この俺が読めんとは」

「こいつは、ヤベえんじやねえか？」

遠くから見ても分かる稲光の巨大さは、都会の空ではお目にかかれぬ大自然の猛威をマジマジと知らせていた。

急いで帆をたたみ、救命胴衣を身にまとう面々。

「未来、早く船室に！」

「止めといたほうがいい。この嵐は・・・デカすぎる。下手すりや沈むぞ」

龍水の予言の通り、大きくうねる高潮が船上を洗い、柱に掴まっていないと流されてしまうほどに帆船は荒らされていった。

適切に沈没を防ぐ行動をとるには、経験のある人員が足りない。

大樹は杠を、司は未来を支えるので必死。フランソワは執事であつて肉体労働の船員ではない。

「くっ。皆、耐えてくれ！」

龍水の懇願の目に移つたのは、男子高校生の平均体力で計算していた龍水にとつての計算外。見事に耐えられずに海へと吹っ飛ぶ千空の姿であつた。

「せ」「千空う！」

杠と大樹が手を伸ばし、千空を追つて海へと飛び出す。

千空の運動神経では、いくら救命胴衣を着けていたとしても生き延びることができないと考へたのだ。

だからといつて3人でも生き延びることができるとは思えない。

「兄さん！」

未来の指さした先、荒波に浮かぶソユーズを発見した司は決断した。

「未来、俺を信じて掴まってくれ」

未来の手にギュツと力が込められたのを確認し、司は荒波の中を泳ぎソユーズにたどり着いた。

そして千空、大樹、杠の元へ届け、弱者3人をソユーズの中に放りこむ。

「た、助かったあ」「大樹くん！ 司くん！」「兄さん！」

2人の心配はアホほど無意味であった。救命浮き輪よりも遥かに頼りになるソユーズに掴まり、波の中を漂うだけなら一日中でも続けられる2人だ。

「大樹、大丈夫か？」「俺なら大丈夫。それより船は？」

ソユーズよりも安全な場所にいるかと思われた龍水とフランソワであったが、すでに大きく傾いた船からの脱出を試みていた。

荒波に飛び込む2人であったが、沈む船の渦に巻き込まれつつあった。

「うおおおお!! 待ってろ！」

待つ暇もなく差し伸べられていた大樹の手が2人を掴むと、一気に海面へと持ち上げていた。

「助かりました大樹様」

「この俺もさすがに死を覚悟したが・今はフランソワをソユーズに乗せろ！」

体力の残量をすぐに判断した龍水が有無を言わずフランソワを安全地帯に送り込む。

その龍水の両脇を司と大樹が支え、7人は嵐の中を揺られ続け・・・4時間

「はあっはあ、どうにか」「助かったあ」「助かったのかどうかは、分からねえけどな」

海岸にソユーズを漂着させ、7人はへたり込んでいた。

体力馬鹿の大樹以外、千空は言わずもがな、龍水、フランソワ、杠、未来、霊長類最強の高校生・司ですら疲弊しきっていた。

嵐を乗り越きり、晴れ間の広がる空の下でようやく安息を得たものの、事態はそうも安心してられない。

ここは周囲に有人島の無い絶海の孤島。名もなき無人島。  
彼ら7人の遭難生活が、今ようやく始まったばかりなのだ。

## ドラえもん のび太 抜きの 東南海大冒険 その2

帆船クルージングから一転、嵐の漂流を経て、何処とも分からぬ島に漂着した千空たち7人。

一番の問題は、ここが無人島であるかどうか・・・だが。

「みんな見てくれ。あれはボートじゃないか?」

司の発見したものは木製のボートであった。とてもではないが、乗って本土に帰ってこられる代物ではない。

「金具の錆つきに木の劣化具合。最後に使われてからそう時間は経つちやいねえ。島に人がいる可能性はあるな」

千空の推理に喜ぶ6人。

だが、そこに水を差す怒声が、森の中から響いた。

「誰だ、お前らは!」

森の中から姿を現したのは海パン姿の老人であった。髪は伸び放題、焼けた肌に険しい表情。

この島に一人で住む、世捨て人といった様子である。



「ここは俺の島だ。余所者は出ていけ」

怒り心頭の老人は木の棒を振り回し7人を威嚇している。とてもではないが遭難者の救助をするような雰囲気ではない。

「すまないが俺たちは乗っていた船が沈没した。出ていくも何も、その手段がない」

「あ？ ああ・・・嵐に巻き込まれたのか。自然の怒りに触れたな。最近の若いヤツは自然を知らないからこうなるんだ。天罰だ天罰」

好き勝手言いまくる老人を睨む司の目は、未来や友人がそばに居なければ何をしでかさか分からないほどの殺気を帯びていた。

「御老人、失礼ではありませんが、貴方はこの島の所有者で？」

どう見ても島を購入できる資産に恵まれた人生を送っているとは思えない老人に、喧嘩腰に問いかける司。

その意図を察した老人は逆切れするように、司の足元に木の棒を投げつけた。

「消えろ！ 俺の目の届かんところに！ 貴様らのような馬鹿どもは、大自然の偉大さに謝りながら野垂れ死ねばいい！」

老人は海岸に足で線を引き、この線からは進入禁止だと命令して森の中へと消えていった。

「司、怒らせたら駄目だろ。あの人が電話でも持っていたら、救助呼ばせてもらえるだろ

「？」

大樹の指摘に、司は未来に目を向けて「・・・すまない」とつぶやき反省した。プライドが邪魔をして守るべきものを守れないのであれば本末転倒である。

「まあ、かのような者が俗世との関わるための手段を持っているとは思えん。そもそも心配するな。俺からの連絡が無ければ財閥も遭難を察する。1週間もすれば捜索隊が編成される。気長にドンと胸を張って待ってれば良いのだ」

気楽なことをいう龍水であったが、それはつまり未来の幼い精神を心配させるような気弱な雰囲気を見せるなという励ましでもあった。

「で、無人島生活のスタートか？」

「その通りだが心配するな。俺にサバイバルの心得くらいある。まず必要なのは」

「流れを無視した千空が耳の穴をほじりながら尋ねると、龍水は指をパチンと鳴らし堂々と宣言した。

「火だ」

お水じゃないの？ と尋ねる未来に、フランソワが寄り添う。

「たしかに、海水にまみれた私たちは数時間もせず脱水症状に倒れてしまうでしょう。ですが低体温症はもつと恐ろしいものです」

その断言を聞いた大樹と司は木々を手に、うおおおギョルルルと秒で火を灯して見せ

た。

「こんな原始式のキリモミ式で火をつけるとは・・・」

「嵐直後の多湿の木で秒とか。化け物すぎんだろ」

パワーぶっぱの燃焼で得た火にあたりながら、7人は服の代わりに草で体を隠し、それぞれ服を乾かした。

「千空たちは火を手に入れた」

「今度こそ水だな」

「ああ。飲用に耐えうる水を手に入れる方法と言えば・・・蒸留だ」

千空の案に龍水は「濾過ではないのか？」と首をかしげる。

「たしかに濾過は一発で大量に水をゲットできるが、煮沸とフィルターの交換が必要だ。手間がかかってやや効率が悪い。水蒸気の安全性と、副産物を考えたらコッチに軍配が上がる」

千空の解説にほおくと感心する龍水。

「だがまあ足りねえもんがある。器だ」

そう言う千空は手でお皿のようなものを作って見せた。

「器か・・・木を彫ったり土器を作るのか？」

「なんちゃってソユーズをバラすぞ。使えるモンは何でも使えばいい」

「俺らの命を救ってくれた箱が、こんな形で役に立つとはな」

大樹と司は感心しながら、ソユーズの扉やら外壁をメリメリと剥がしていく。工具が無い今、この手段しかないとはいえ、フライパンを曲げるどころの騒ぎではない腕力だ。「ところで蒸留ってどうやるの?」

「2つの鍋に海水を満たし、上段下段に並べておく。下の鍋を沸かせば、発生した水蒸気が上の鍋の底に付着し、それが冷やされれば底をつたつて水滴が集まる。そいつが垂れたところにコップを置けば完成だ」

缸の問いに龍水が答えると、「つつのがサバイバルの本に載ってる方法だ」と千空が口を挟んだ。

「上の鍋の代わりに漏斗とチューブを使えばいいだろ。見た目まんま蛇口になる」

千空の指示通りに司と大樹が鉄板を曲げていき、出来上がった装置の鍋に火をつける。と、チューブの先からポタポタと水滴が垂れはじめた。

「おばあちゃん知恵袋みたい」と未来が呟くと、千空は「どんなマツチョコバアだよ」と苦笑いした。

「蒸留装置を手に入れた」

火と水を手に入れ、ひとまずの生命維持手段を確保した千空たち。

これでようやく食料、生活基盤の確保に着手することができる。

「の前に、まずは道具だ。原始人200万年のリースルウエポン、石器を作る」

そう仰々しく言わずとも、ほぼ全員が「だろうな」と思っていたことであった。

「だが、どの石がいいかのノウハウが分からんな」

「チャートつつう、割った時の断面がカラフルなやつが理想だ。トライ&エラーで砕きまくれ」

千空の号令に「よしっ」と拳を握った大樹が石を海岸の岩に投げつけ粉々に砕いた。カラフルな石の粒が飛び散る。

「砕きまくんなデカブツ。加減つてもん知らねえのか。てめえは石器の持ち手にする木の枝でも拾ってこい」

こうして見つくろった石器に適した硬い石を岩に擦りつけて研ぎ、石のナイフを作り出した。

「あとはナイフで草の蔓を裂いて紐を作って、木に結べば。マンモスを絶滅させた人類最初の武器の完成だ」

「石器を手に入れた」

道具さえ手に入れば、あとは手分けして次の作業に入ることができる。

「狩猟は俺に任せてくれ。絶対に獲物には不自由させない」

司は石槍を手へ海へと入っていった。勿論、海水パンツなんて気の利いた衣服もない

ため真つ裸。女性陣は海岸への立ち入りを禁止されることに。

「なら俺は木で家を建てよう！ 目指せログハウス」

石斧を手に木に立ち向かう大樹。ザグツと一振りですぐ木をなぎ倒した。

「効果音。普通、回数振ってトンテンカンだろ普通」

「この調子なら本当にログハウスできそうだよね」

「いや、家なら木の上に作るべきだ。ネズミに寄られては落ち着いて眠れん」

杓は更なる道具作り。

蔓の紐で籠を編むくらい、手芸部の彼女には朝飯前。ズバババと、あつという間に背負い籠が完成する。

それを未来に託して司の元に持って行かせる。

「じゃあ、あとはカーテンとお布団だ」

意気込んで腕まくりする杓。そこに千空が「とあるリクエスト」をしていったのは、また別のお話。

その頃、フランソワと龍水は森の中へと入っていった。

食べられる野草やキノコ類を判別して、籠の中に突っ込んでいく。

その中で最も大事なアイテムが「ハーブ」である。

「未開の地で虫除けは必須です。感染症に罹ったらお仕舞いですので」

「その通りだ。この島で美女たちが倒れる事態は許させんからな」

残る千空は、紐を利用したトラップを使いウサギを狩っていた。

「餌が豊富な島で助かるな。締まった肉も、ブクブクの脂肪も、丸つと利用させてもらうぜ」

そうニヤついた千空は司の元に向かい、海藻と貝殻の採取も依頼した。

「こんなものどうするんだ？ 食べるのか？ 海藻はわかるが、貝殻？ 中身はいいのか？」

「クソほど重要だぜ。司、力を貸してくれ」

千空の指示を受け、司は貝殻を粉々に砕いた。

「貝殻は炭酸カルシウムの塊だ。焼けば酸化カルシウムに変化して、そこに水をぶっかければ水酸化カルシウムになる。それとは別に海藻を焼いて炭酸ナトリウムを作ったら、2つ合わせて水酸化ナトリウムの出来上がりだ。おっと未来、離れてろ」

千空は未来を手で制しながらクククと笑う。

「危ない液体なのか？」

「ウルトラやベエぞ。ヤクザが死体溶かすのに使うくらいだからな」

この解説にゾゾゾと背筋を凍り付かせる未来。

「あとは水酸化ナトリウムと、ウサギから頂いた脂肪を合わせれば、ばい菌浄化する医者

代わりの命の石、石鹼の完成だ」

市販の真つ白な石鹼とは違って凸凹の激しくブサイクな見た目ではあるが、少し擦っただけで泡泡とシャボンが発生した。

「!? キミは素晴らしいな千空。悪いが正直、キミの体力ではこの自然の中で生きていくには心もとないと思っていた。ところがどうだ？ 科学で自然を凌駕している」

手放しで褒める司に、千空は「いやホモはキメエぞ」とドン引きする。

「いやこれは純粹な尊敬であつて」

「冗談通じろよ。まあ一つ勘違いしてつことがあるけどな。あのジジイもテメエも」

千空の言葉に司はムツと顔を曇らせる。

「そもそも科学つつうのは人類が自然を理解するために発展した知恵の塊だ。科学を前に、自然は敵でも下にするもんでもねえ。俺は、自然を味方につけるぜ」

ニヤツと笑い石鹼を袋詰めにする千空。その姿に司は「やはり、俺たちのリーダーなんだな千空キミは」と笑った。

「じゃ〜早速、司先生の魚どもを煙のアルデヒドで燻して、微生物ブチ殺しまくるか」

意気揚々と燻製を始める千空に、司は「自然を味方に・だよな？」と目を丸くした。

こうして「食」を揃えた千空たちが大樹・杠の秘密基地製作チームに合流すると、そこには驚きの光景が。



「少年様の夢、ツリーハウスが2棟・・・だど!?」

木々に並ぶ2棟の木の家。とはいえ支柱と屋根だけの小屋ではあるが、あとは杠が編み込んでいるカーテンを取り付ければ、〃住〃が完成である。

「おお千空、司! 力を貸してくれ! この支柱の具合が少し悪いんだ!」  
力仕事を頼む相手が約1名間違っているが、バランス調整の意見を求めるには適した人材である。

杠と未来が草のカーテンを運ぶ中、龍水とフランソワは丸太で作られた食卓を前にしていた。

「ちよつと待ってくれ。御曹司、キミは一体何をしている?」

司と千空が作った魚の燻製と、野草とキノコのサラダを前に箸を手にした龍水を、司はギロリと睨んだ。

「何を、とは?」

「皆が働いている最中に、自分は特権階級の人間だとも言いたいのか?」

一触即発の雰囲気。既得権益を嫌悪する司の苛立ちが声に現れていた。

「信頼を作っている、と言えば納得か?」

「信頼だど?」

司が眉をピクと動かすと、龍水は「はっはー」と笑って話をつづけた。

「食の安全が保障された国で生活する俺たちは日頃一ミリも気にしておらんだろうが、食事というものはそれを生産した者たちへの信賴があつてこそ。ではこの無人島で採れたこれらの安全はどうだ？ 皆で卓を囲み、一斉に腹を下すわけにはいかんだろう」

その言葉に司は目をカツと開いて「毒味・・ということか？」とつぶやいた。

「その通りだ。役割を考えれば、お前たちの腕、杠の衣と居を支える力、フランソワの食、千空の科学が全員生還の必須キー。となれば優先度を考えれば、俺が適任であろう」

龍水はただの道楽金持ちではない。その覚悟はまさしく船長の器であろう。

「とはいえ、食つて腹を下すようなモノには見えん。つまりは誰の手も入っていない綺麗な状態に箸をつける特権を独り占めしている事実は否定しないぞ」

そう言うのと龍水は指をパチンと鳴らし、魚の燻製を口に運んだ。

そして、ジャリつという音を立て、その不味さに倒れた。

「生活基盤を手に入れた」

こうして7人の遭難生活1日目は、生活基盤の確保に費やされ、あつという間に過ぎていった。

都会からは決して覗くことのできない満天の星空に胸を躍らせ、仲間と過ごす床の中で、明日の行方も知れぬ夜が更けていく。

そんな中、千空の目はすでに、胸躍る次の段階に向けられていた。

## ドラえもののび太 抜きの 東南海大冒険 その3

「ううん。朝やあ」

獅子王未来は草の布団の中で目を覚ました。

目を覚ますというのは、彼女にとつてはいつ体験しても気持ちのいいものであった。

6年間の意識不明から回復して、十数日も経過していない体は、目を覚ますという当たり前の行為のありがたみをしっかりと覚えていた。

目を覚ませば、隣には兄の司が・・・いない。すでに起きて生活の準備を始めているのだ。

そう、ここは町中の病院でもなければ彼女の家でもない。

伊豆諸島のどこかの島。ざっくり距離感で言えば、九十九里浜から数100kmも南の孤島である。

兄の司とその友人、7人での遭難生活。その最初の朝を迎えた。

助けが来る日を信じて・・・

「SOS発信機を作る」

朝食を皆で囲む中、今日は何をしようかと話し合っている時に千空の口から出たトン

デモ発言に、6人は口からポロリと食べ物をごぼした。

何言っちゃってんの、この人？ と絶対に言いたげな顔を向けられた千空であったが、そのキョトン顔はむしろ『当たり前だろ』とでも言いたげであった。

「俺らを運んだ命の舟、なんちやつてソユーズ」。あたりまえだが、本物じゃなくただの箱モノ。だと俺も今朝まで思ってたんだが、そこは開けてビックリ玉手箱ってな具合だ」

千空がニヤリと笑いかけた相手。正常位置ソユーズ装置の出資者であり、なんちやつてソユーズを用意した龍水は指をパチンと鳴らした。

「はっはー、どうせなら本物に近づけなければ意味がない。使用済みの宇宙ポッドを競り落としたぞ」

「まあ精密機器のトップシークレッツの類は全部外されちまつてたが、市販レベルの近代部品が残ってたんだよ、あの宇宙船にはな」

まるで、楽しみにしていたゲームをプレイできるワクワク少年のようなウキウキ感を醸し出す千空。だが、その高度な技術クラフトについて行けない者には、どこにウキウキできるのか理解できなかつた。

「部品？ まさか千空くん、それを組み立てて発信機を作れるの？」

「じやなきや言い出さねえだろ」

千空がニヤリと笑うと、5人は歓声をあげた。

「これで助けを呼べるのか！ 凄いぞ！」

「と、都合よく行けば人生楽なんだが・・重大な欠陥があんだよ」

そう言うのと千空は人差し指を立てて神妙な顔つきになった。

「電気がねえ」

比較的想定範囲内の問題であった。

「つつうわけで、SOS発信機は作るが、使えるとは言つてねえ」

「意味のないモノを作られるおつもりなのですか？」

「まあ、山掘つて天然の磁石でも見つけるか、鉄の棒に銅線巻き付けて雷に打たせて作るかすれば、手回し発電機が作れるからな。それか別の策もあるが、とりあえずはそのために作っておきたいもんがある」

そう言つて千空は木の家の壁を指さした。

「モルタルだ」

もる？ たる？ と、聞き慣れない言葉であるがどこかで聞いたことのある言葉に首を若干かしげる6人。

「砂の接着剤みたいなもんだ。三匹の子豚でレンガの家のつなぎに塗つてるヤツをイメージすりゃいいだろ。今の俺らの長男次男の家じゃ、狼の息みたく雨風にも耐えられ

やしねえ。壁に囲まれた安定した空間が必要なんだよ。生活衛生的にな」

大樹がなるほど手を叩く。

「それで千空。そのモルタルはどうやって作るんだ？」

千空の提案に感心した司が尋ねると、千空は未来の首に巻かれた貝殻のネックレスを指さした。

「モルタルは昨日みたく貝殻を粉碎した炭酸カルシウムを、焼いて砂と混ぜればできあがる。大量に必要ながな」

「なるほど、体力仕事なら俺に任せろ！」

大樹以外に任せられる仕事ではないのは最初から皆分かっていた。

こうして遭難2日目。千空たちは更なる生活基盤の安定化を目指し活動を始めた。

そんな中、食料調達班の龍水とフランソワは森へ入っていた。

「フランソワ、俺は今まで電気が『欲しい』と思ったことはない。そこにあつて当たり前のもだからな」

「執事の仕事は主が望まれるものをご用意することです。電力の当ても既に」

「ならば、必要なものは・・・キツチンだな。違うか？」

龍水が指をパチンと鳴らすと、フランソワは「その通りであります」と頭を下げた。

それから時間は経ち、昼休憩の時間となり拠点に集まる7人。

「とりあえずしばらくの食糧調達には困らない量を探ってきたぞ」

「貝殻も、こんなもんでどうだ？」

海チームの司・大樹の成果に、「この辺りの生態系ブチ壊しじゃねえか？」とニヤツと笑う千空。籠いっぱいの貝殻は、誰の目から見てもモルタルにするには十分な量が詰め込まれていた。

「ちなみにだが千空・・・あれは何だ？」

司が目を白くさせて指さす先にあったものは、とぐろを巻いた土の塊。

言葉を誤魔化さずに言うならば、どう見ても教育上よろしくない巻きグソ型の土器である。

「輪っか繋げて円柱型の樽土器にしようとした成れの果てだ。焼く前に乾燥させんの忘れたから、巻いたもんが縮まってウンコ型になっちゃった」

千空が苦笑いして答えると、杠が「失敗は誰にでもあるよお」とフォローにまわった。

だが、よく見れば隣には立派な樽土器もあり、それは、焼成前の乾燥を省きながらも見事に形作られた杠の作品であった。

「小さい樽は未来が作ったものかな？ 上手いじゃないか」

「台所のコンロにするの。フランソワさんに頼まれてたんだ」

得意気に微笑む未来の頭を、司が優しく撫でる。

で、その当のオーダー主であるフランソワはと言うと、何やら大量の食材を抱えてキッチンスペースに陣取っていた。

「焼き魚に焼き魚のサラダ、焼き魚のスープに焼き魚のデザート。こんな無粋な食事では何日ももたん！ よってこれより、ビストロ・フランソワの営業を開始する！」

龍水が指をパチンと鳴らすと、フランソワは石の包丁をグルグルと回して木のまな板の上に掲げた。

「食は人間の三大欲求の1つ。満たすことは心の余裕を生み出し、我々の生存確率を引き上げることでしょう」

現状のマンパワーと化学力さえあれば、生存確率の心配をしなくてもいいのでは？と思う一同。

だが、料理の質が上がるとなれば、そこに興味が生まれてくるのは必然である。

「1品目は、「豆腐ステーキ」

「と・・・」とうつぶす

「大豆は自然に自生しているツルマメから採ることができます。洗って水に漬けて膨らませたら、潰して煮詰めて、布で絞ります。すると豆乳ができあがるのです」

フランソワの説明に「おお！」と感心する大樹。



だが、この説明の「水に漬ける」工程は9時間ほど必要なもの。

「なので、あらかじめ作っておいたものがコチラになります」

そう言ってフランソワが昨日のうちに用意しておいた豆乳を取り出すと、大樹はズコーッとコテコテの転び方をした。

「豆乳に火をかけながらゆっくり混ぜ、にがりを加えます」

「ちなみににがりは、昨日の蒸留水作ってる時の副産物な」

「あとは成型してアクを抜き、完成です」

こうして出来上がった白く美しい固形物に、6人から歓声上がる。

「では次の料理を」

「豆腐一品だけでも、サバイバル生活では驚きの一品であるにもかかわらず、フランソワはすぐさま次の料理に迷いなく取り掛かっていた。

「次はコチラを使います」

そう言ってフランソワが取り出したモノを見て、司と杠は目を丸くした。

「小麦か!？」

「ねこじやらしだろ」

大樹の無知を千空が指摘した通り、それはネコ遊び好きの常識的アイテム・エノコログサであった。

「それを俺たちは食べさせられるのか？」

「でもフランソワさんが言うんだから、きつと外国の料理では使うんだよ・・・エスカルゴとかみたいに」

未来が「えすかるご？」と首をかしげると、杠は「カタツムリだよ」と苦笑いして教えた。

「ようは粟の原種だ。縄文時代から日本人にや信頼と安心の食用ブランド・・・つつても、俺も食ったことはねえけどな」

興味ありげにエノコログサを眺める千空。

「まずはこちらを脱穀して実を取り出し、石で挽いて粉にします。そこに野鳥の卵とにがりを合わせて生地を・・・作った物がコチラになります」

そう言ってフランソワが取り出したのは、製麺された緑色の美味しそうな麺であった。

「おおお！ 美味そう！」

「あとは森で見つけたシヨウガやラッキョウ、ネギ類で味をつけて完成です・・・が」

ふわあと漂う香しいスープ、浮かぶ翡翠色の麺が食欲をそそる。

「ラーメン!? ワオだね、こんな無人島で」

「実はまだ味見をしていないのです。毒味もですが」

「ということ、俺の出番だ」

そうやって龍水がズルズルと麵をすすする。

バタンと倒れた。「龍水様！」とフランソワが駆け寄る。

「とてもではないが、食糧として耐えられたものではない」

ようは不味いということだ。毒の心配はないようだ。

「そうか？ まあ意外とイケるぞ」

続く大樹がズルズルと麵を口に運んでいく。

「うどんとそうめんの間ってところか。ショウガとかで臭み消しが効いてつから、まだ食えなくはねえな」

「美味しいよ」

未来の場合はおそらくは空腹が調味料として作用しているのだろう。

だが、この味は龍水の「手に入れたいもの」に到達できるレベルではない。

「腹を満たしたら研鑽だフランソワ！」

顔を上げた龍水が拳を突き上げると、「かしこまりました」とフランソワは頭を下げる。

「龍水の向上心は凄いな。こんな状況でも向上心を忘れないとは」

「ただ欲しがりなだけだろ」

効率重視主義の千空が面倒くさそうに麵をすすすが、そんな千空に対して龍水は食つてかかった。

「はっはー、お前は自分が欲しいモノを忘れたのか？ このラーメンと豆腐料理は〃懐柔策〃に使うものだぞ！」

龍水の笑い声にピンと何かを察する千空は「なるほどな」とつぶやいた。

「ああ。この島の先住民、あの御老人を籠絡し、俺たちは電気を手に入れる！」

## ドラえもののび太 抜きの 東南海大冒険 その4

龍水とフランソワの言いたいことは単純であった。

ラーメンで電気を手に入れる。

「……意味が分からない」

司の言う事はもつともである。大樹や未来はともかく、杠もちんぷんかんぷんである。

千空だけは理解が追い付いているようだが怪訝な顔を見せる。

「理屈は分かるが、てめえらの現代人舌唸らす食材がねえだろ」

「欲しいを追求するため、あらゆる手段を駆使するのが私たちの役目です」

美味しい料理を作るのが問題だと提起する千空に対して、フランソワが胸を張るが、そもそも『美味しい⇒電気』の構図から理解できていない4人を置いてけぼりにしているのが大問題である。

「貴様らも見たであろう？ 海岸のボートを。摩耗具合からみて、あのボートは最低でもそう何十年も前に使われたものではない。ごく最近、数年前だ。使用者は十中八九あの老人とみた」

龍水が指折りしながら解説していく。

「年齢と体力を考え、この孤島に人力でたどり着いたとは考えにくい。つまり、電動のモーター装備が存在するのだ。この島にはな」

龍水が指をパチンと鳴らすと、大樹と杠と未来が歓声を上げた。

「つまりだ。旨い飯食わせて籠絡して、その電源をまるっと頂こうつつうことだろ」

「ろっらく?」

難しい言葉の出現に首をかしげる未来に、フランソワはやさしく「美味しいご飯を食べて仲良くなりましょう、ということですよ」と教えた。

「策は理解した。キミらが味の向上を目指すのであれば、俺たちに手伝えることはあるのか?」

「食材集めだ。万一、毒があったり食えるかどうか分からん物があっても、俺とフランソワが仕分けしてやる。遠慮なく根こそぎ取ってこい」

「生態系は大事にしようよ」

高校生程度の収穫能力で崩れるほど自然界はヤワではないが、杠は一応心配する。

「言葉のあやだろ。まあデカブツならリアルにやらかしかねんが」

大樹以外の5人が容易くその様を想像すると、千空はクックツツと笑った。

その後、各班が森や草むらへと分け入り、キッチンに籠って美味しい飯探求を開始した。

「兄さん、この葉っぱ見たことあるよ。お芋が掘れるんだよね？」

森へ入っていった未来が見つけたのは、特徴的な葉っぱであった。

「そうだね。だが、少し大きすぎる気もするが」

「いいじゃねえか。タロイモか里芋つてところだな。时期的に収穫には少し早いだろうが、米に並ぶ世界的主食様だ。やるじゃねえか」

千空が称賛すると、未来はニペアと明るく笑った。

司が「なら早速掘ろうk・・・」と蔓を引っぱると、千空が「おっと、待ちな」と制した。

「お兄様が手柄を横取りするもんじゃねえな」

「むっ、そうか。だが土を掘るのはなかなかの重労働だぞ」

大事な妹の手を土で汚したくはない、石や砂利で怪我をさせたくない司は口をムツと尖らせる。

「ケケケ。まくさか、こんなところで出番とは思わなかったぜ。刮目しな」

そう言うのと千空は小脇に抱えた籠から、仰々しくあるモノを取り出した。

「テツテレ〜、モグラてぶくろ〜！」

精一杯の濁声で千空が楽しげに取り出したのは、中世の騎士が着けていそうな鉄の手甲であった。

千空のワクワク感を見て、司は『ドラえもんの道具を再現したのか』と推測した。正解。

「モグラてぶくろ?」

「なんちやつて、だがな。掘削用とまではいかねえが、土を掘る分にや十分に負担軽減できるはずだ」

そう言つて未来に鉄の手袋を着せる千空。

グーパーと握り離しはスムーズに行える。

「サイズ、ピッタリやあ」

「この手袋、未来のために作ってくれたのか?」

「いいや、単純に作つててミスっただけだ」

おそらく自分用に用意していたのであろう千空は、名残惜しそうに自身の手を眺めた。

それからしばらくして日が落ち始めた頃、島に何とも聞き慣れた音楽が流れはじめた。

「む?」この音は?」

この島を終の棲家にと考えている世捨て人である老人は、この郷愁を誘う音楽の出所



を探し周囲を見回した。

「まさか」

音に導かれるままに走ると、そこは昨日、新参者たちを追い出した海岸線であった。

前日に引いた境界線の近くに建てられた木のフレームには見覚えがある。

「これは・・・ラーメン屋台？」

老人のつぶやきに呼応するように、屋台から人影がヌツと現れた。

「いらつしやいませ、七海拉麺です！」

杠が目いっぱい可愛らしく挨拶すると、未来が竹の笛をチャルメラ風に吹きながら現れた。

老人は前日、若い男3人の漂流は確認していたため、感情を存分にぶつけるつもりでいたが、想定外の少女たちの出現に呆気にとられ言葉を失った。

「よお、ご注文は？ つつても拉麺くらいしか出せねえけどな」

ニヤニヤと現れたのは千空。同じく昨日には見なかった顔である。今度は男だからと、老人は顔を強張らせた。

「お主は、ここを何をしておる？」

「あんたの領地にや足を入れちゃいねえぜ？ 匂いだけは領空侵犯しちまうかもしれ

ねえけどな」

そう言うと千空は樽の中を木の棒でグルグルとかき回し始めた。周囲に何とも懐かしさを覚える匂いがたちこめる。

「ぬう……」

老人はその香りに腹の虫を鳴らす。だが、若い者の誘惑に屈したくはないというプライドが境界線を越える一步を思いとどまらせた。

「おじいちゃん、一緒にラーメン食べへん？」

未来がそつと背中を押すと、老人は渋々といった表情で、その一步を比較的軽く踏み出した。

「少々お待ちください」

何処からともなく現れたフランソワが手際よく麵を茹で、スープを注ぎ、具を盛り付けていく。

その豪華な食事が目の前に現れると、老人はふと疑問を投げかけた。

「お主ら……本当に遭難したのか？ 昨日の今日でこれだけの料理を用意できるはずがないじゃろう」

老人は、自分が何か騙されているのではないかと疑い、一度手にした竹の箸を手放した。

「いいや。こいつは俺らの創意工夫の成果だ」

「創意工夫？」

「はい。こちらは『ねこじやらし』を粉にした拉麺でございます。試作段階ではボソボソでニチャットとした、とても客人に提供できる代物ではありませんでした」

フランソワの謙遜に、未来は「最初のも美味しかったよ」とフォローする。

「試作2号には、つなぎに里芋を混ぜてみました。すると幾ばくか食べやすく、ツルツとした触感を楽しむことのできる麺に仕上がりました」

「ほほう」

老人は感心したように、再び箸を手にした。

「そして完成形が、只今提供いたしました最終麺でございます」

フランソワにすすめられ、老人は麺をツルンと啜り上げた。

「ん!? 美味しい。美味しいぞー!」

ストッパーが外れたように、一心不乱に麺をかきこむ老人。スープもゴクゴクと飲んでいき、あつという間に空の皿が残った。

「ふうく、なんじやこの麺は。本当にねこじやらしと里芋だけで作ったのか？」

「いや、普通の麺みたく、粉に卵とにがりも加えてある」

「そして、この麺には豆腐をブレンドしてあります。配合比率は企業秘密ですが」

フフと笑う千空とフランソワ。ニコニコと笑う未来と杠。

老人は幸せを感じた。久しく味わっていない「もてなし」に、感動を覚えていた。

そのため、頃合いを見て現れた先日の男衆3人が現れても、その表情が曇ることは無かった。

「若さとは素晴らしいな。何でもできる」

「いや、俺なんかは何もできんぞ。何をしたらいいか千空や皆が教えてくれないとな」

「それは俺も同じだが、千空も同じじゃないか？ パワーが無ければ作れなかったもの多い」

「誰が欠けても今は存在しない。人間社会とはそういうものだ」

3人の明るく力強い仲間意識に、老人はふと顔に影を落とした。

「誰かの役に立てる人間に、お主たちならなれるぞ。誰の役にも立てんワシと違ってな・・・」

そう言うとき老人は語り始めた。

「ワシは何の技術も無ければ、誇れる経験も無い。何の役にも立たんから、人と関わるのが怖くなった。だからこの島に逃げてきた・・・そうなんじやろうな」

老人が胸の内を明かすと、千空は興味無さげに「ああん？」と首をひねった。

「役に立たねえ人間？ その考え方が非合理的すぎんだろ」

千空の言葉を皮肉と思ったのか、老人はムツと顔をしかめた。

「何かで役に立たなかつたら、別のところで役に立てばいい。役に立つ分野が全くのゼロつつうこと自体、100億分の1の確率つつうレベルのクソほどレアケースだ」

「言うは易いが、ワシは自分に自信が無い」

「無人島で1人で年レベル生活経験。俺だったら無理だろうな」

「たしかに。千空、キミでは生活基盤の確立だけで疲労で倒れるだろうな」

7人のブレーンである千空の謙遜ではない断言に、老人は胸を打たれた。

「・・・そうじゃの。来い、イイモンをやろう」

そう言う老人は千空たちを手招きして、境界線の向こう側へと誘った。

老人が1人で何年も生き延びた秘訣を紹介しようというのだろう。

これはシメシメ、狙い通りの展開だと、見えない所で千空と龍水はほくそ笑んだ。

「嫌いな、食べられないモンはあるか？」

老人が案内した先に広がるのは野菜畑であった。目の前に鮮やかな赤・黄・緑。

千空と龍水は「こっちの展開かい！」とド Teen とひっくり返る。

「みんな、好き嫌いは？」「無い!」「無いよ」「偉いぞ未来」「好みに関わらず美味しく召し上がっていただけれるものを作るのが私の仕事です」

今までキノコか食べられる野草ばかりであった7人にとっては、安心と信頼の緑黄色野菜の登場が何よりも嬉しい知らせであった。

「これ全部、おじいさんがお一人で？」

「試行錯誤の連続じゃった。瘦せた土地を拓いて、3年かかったわい」

畑仕事の経験のない7人であつたが、老人の顔つきを見れば、そこに流れた汗と涙の量が想像できた。

「偏りがちな栄養を補えるのはとてもありがたいお話です。御隠居、さすがです」

「ハハハ。ワシでも役に立てるものがある。それを気付かせてくれた礼じゃ」

老人が快活に笑う中、せつかちな千空は口を開いた。

「バッテリーは無いのか？」

「単刀直入！」

杠のツツコミが入ると、老人はキョトンとした顔で小屋を指さした。

「バッテリー？ 不要な粗大ゴミはあそこに集めてあるが」

「あるんですね！ うおおお あつたぞお！」

大樹が小屋へと疾走し、箱を抱えて飛び出してきた。

「これで発信機が動く！」と喜ぶ龍水であつたが、司が「粗大ゴミと言わなかつたか？」と冷静に指摘すると、老人が口を開いた。

「そうじゃ。とつくに電力切れしとるぞ」

その一言に、大樹は豪快にズザアとすつ転んだのだつた。

## ドラえもののび太 抜きの 東南海大冒険 その5

無人島に遭難した千空たちはSOS発信機を作り、先住民の老人をラーメンで懐柔しバッテリーを手に入れた。

だが、電力は残っていないかった。

「まあ、本体さえありや問題ねえけどな」

バッテリーの切れた機械類を前に、千空はケロツとした顔で耳をほじった。

それは木製ボートに取り付けてあったモーターである。

「修理できるのか!？」

「リサイクルだな、今回の場合」

舌なめずりしてバッテリーのカバーを剥がす千空に、司は「できるのか?」と尋ねた。

「できるからやってんだよ。モーターやなんか錆びたりしてなきや・・・おつ、こりやおありがてえ」

機械を分解している千空は、前日にこのクルーズに出航するとき皆がテンション上げていた時に一人冷静だった彼と同一人物とは思えないほどに目がキラキラしていた。

「モーターとバッテリーの仕組みはわかるよな? 電気エネルギーを運動エネルギーに

変えて、電気でこのプロペラを動かすんだ」

学校で聞いたことのある知識に、司や杠はホオとうなずき、龍水とフランソワは何かを察し、大樹と未来、老人は頭にハテナを浮かべた。

「つつうことは、逆に運動エネルギーを電気エネルギーに変換してやりやあどうだ？」

「手回し発電だな。災害用ラジオなら市販でもお馴染みの」

「正解。100億点だ」

そう言っている間に、千空はバッテリー内の液体を移し替え、金属の板を差し替え、銅線を繋ぎ合わせ、プロペラに持ち手を作り……

「できたぜ、手回し充電器。あとはコイツをSOS発信機に取り付けりゃ」

「助けを呼べるんだな！」

大樹が食い気味に迫ると、千空は口をすぼめて「ブツブツ」と不正解を示した。

「……座標か？」

司の指摘に千空は「大正解」とニヤリと笑った。

「電力ゲットしたからって、出力は微々たるもんだ。SOSしたところで、この島を見つけてもらうってのは厳しい話だ」

「そんなあ。じゃあ私たち、ずつと帰れんの？」

「大丈夫よ未来ちゃん。だって千空くんだもの」



杠の信頼する声に、千空は懐からガサゴソと何かを取り出した。

「六分儀〜!」

その濁声に大樹と杠が「ドラえもん!」と反応すると、千空は気分よく「ああ」と答えた。

そして龍水は指をパチンと鳴らす。

「天測航法か!」

「正解だ。星と太陽で経度緯度を割り出す。つつても精度は保証できねえぞ。ただでさえアナログじゃあ最低でも誤差5kmは出るからな」

「問題あるまい。水平線も5kmの視野だ。救助信号さえ届けば、モールスで座標を伝えることができる」

流石は海を制する男、龍水。千空とタツグを組めば何処に遭難したとしても安心であろう。

「とまあ、ここまで俺のリサイクルが成功する前提で話進めてるんだが当然、ちゃんと電気が復活してるのか確かめなきゃなんねえ。SOS信号は目に見えねえからな」

「なるほど。どうやるんだ?」

大樹のストレートな質問に、千空は暗くなりつつある空を見上げた。

「竹を裂いて繊維にして、そいつを蒸し焼きにしておいてくれ」

「おう分かった」

大樹は千空の依頼に理由を問わない。とりあえず頼まれたら即行動、それでこの2人の間は良いのだった。

とまあ、理由を聞いて説明を理解するまでに完結するような依頼であつたためでもあるが。

とりあえず大樹は素早く竹を採ってきて、筆つて裂いて、それを蒸し焼きにした。

日が沈み切るまでの短時間でやってのけた。

「あとはこの繊維に、デカブツのクツキングタイム中に司が回して充電してくれたバッテリーの銅線をつなげる」

夕闇が徐々に広がり、森を不気味な闇が包み始めた頃、千空は蒸した竹に電気を流した。

それは、ほんの1秒の出来事であつた。

白く眩い科学の灯が、その闇を照らしたのだ。

「電球か・・・」

「エジソンだな」

「明るいなあ」

ほんの2日ぶり程度の文明的な照明の光であつたが、寂しさと温かさを胸に思い出さ

せるには十分な光量であった。

「呼べるぜ。明日には助けをよお！」

千空の言葉に7人は歓喜した。

その夜は、誰もが興奮でなかなか寝付けなかった。

「助けが来るといふ実感。原始的ではあるが欲しいを達成した高揚感。発明がトントン拍子に上手く行く達成感。3年かけて建てた家よりも近代的なモルタルの家を目にした驚き。」

様々な想いが渦巻きながらも、夜の闇と風のさえずりが8人をまどろみへ導き。

翌朝。

「SOS完了だぜ。半日もすりゃあ日本の優秀なレスキュー様がご登場だ」

本日最後のお寝坊さんの杠がカーテンを開けた時、千空の嬉しそうな声が聞こえてきた。

いや、お寝坊さんとはいえ8人中2人を除いて誤差5分程度の起床である。

千空と龍水だけが早起きして2人でサッサとSOSを発信していたのだ。

「いろいろ早っ！」

「助かる話だが。遭難している実感というものが無いな」

「んな非合理的な御感想は本土に帰ってから語ってくれ」

まだ寝ぼけ眼の面々を前に、目の下にクマを作った千空はおかしなテンションでテンポよく追信のモールスを叩いていく。

「ならどうじゃ？ 無人島に漂着したという実感でも見に行かんか？」

モルタル小屋に泊まりにきていた老人が7人を誘った。

「見に、行くとは？」

「船で軽く30分くらいじゃが、絶景というものを見てみんか？」

朝食を終え、7人は老人に導かれるままボートのある海岸へと向かった。

ボートの定員もあり、全滅を避けるために3人・4人と分けて搭乗することにした。

第1陣の千空、大樹、杠はボートに揺られ、岩礁の間から島の横穴へと案内された。

「うおおおおお!! なんだココは!」

「ワオ! 青くキラキラ光ってるね!」

そこはサファイア色の洞窟であった。

海からしか侵入できず、岩礁ゆえに小型のボートでしか進むことのできない先。

「波がエグった海触洞だ。自然様の数万年の結晶だぞコイツは」

青の洞窟として有名であるこの類の洞窟も、千空もまた生では初めて見る光景であり、感動を覚えずにはいられなかった。

「今日には助けが来ると言うなら、今のうちに見ておかねば損じゃろ?」

3人の興奮を前に、『ここまで連れてきた甲斐があった』と満足する老人。

「爺さん。アンタが見つけなきや、こういう景色は千年レベルで誰の目にも触れねえで、下手すりや崩落してる。勿体ねえ話じゃねえか」

「こんなジジイを褒めても何も出んぞ？」

そう言う老人であったが、その表情には深い彫りの中に笑い皺がクツキリと映っていた。

その後、日が真上に昇り、島に真夏の日差しが照り付けた頃。

「みんな〜！ ついに来たぞ〜！」

大樹の叫びが島中に轟き、森から鳥がバサバサと飛び立った。

「どこの爆音兵器だ。悪の帝国でも攻めて来たのか？」

「だったら俺が戦うから安心してくれ」

救助が来ない最悪の事態を前提に、モルタルを増産していた司と千空が手を止める。

2人の明るくない笑顔を見れば冗談であることは明らかだが、本当に明らかであったほしいと、隣で編み物をしていた杠は小さく願った。

大樹の声に導かれるまま海岸へと向かう一行。

するとそこには、見慣れぬ大きなゴムボートが。テレビでも見たことのある、洪水で

浸水した町で活躍する災害救助のソレである。

「これで全員ですか？」

「はい！ この島にいるのは俺たち8人です」

大樹が隣に立つ自衛隊の隊員に敬礼して報告している。

「やつと帰れるんやー！」

「お爺さんも一緒に行かれるんですよね？」

「ああ。もう一度人生をやり直してみようよ」

いかにも遭難したてのちよつと汚れた程度の服装の未来と杠の隣に立つ、もう何年も遭難生活を潜り抜けていないと到達できないボロボロな服装の老人の取り合わせに、どうなっているんだ？と自衛隊員は首を傾げた。

「はっはー、俺の座標の計算が正確だったということだなー！」

「千空様の発信機の功績と比率を考えれば、龍水様の貢献度は2割ほどでしょうか」

この場に似つかわしくない金持ち感の龍水とフランソワの組み合わせにも、ますます違和感しかない。

が、隊員は「ん？ 千空？」とフランソワの言葉に眉を上げた。

そして、残る千空が現れると隊員はその顔をジッと見た。その視線に気づいた千空が「ああ？」と声を上げると、大樹は「これは千空の癖だ。不良のガンくれじゃないぞ！」

とフォローした。

「いや、その声。やはりキミだったのか千空」

ニコツと笑う隊員が手を差し出すと、千空は「なくなるほど」と握手に応じた。

「ん？ 千空、知り合いか？」

「いんや、初対面」

千空の言葉にうなづく隊員。

「だね。あらためまして、僕は西園寺羽京」

「石神千空だ。これでドラえもん軍団の最後の仲間が揃ったってか？」

千空の言葉にニコツと笑いハイタッチする羽京。

「それにしてもつい3日前だよ、キミに電話したの。まさかこんなところでキミらと出会うなんてね」

「いかにも映画つつう感じだな」

羽京とハイタッチしてボートに乗り込む6人と老人。

こうして、千空たちの無人島生活は終わりを告げた。

だが彼らは知らなかった。

この島に数千年後、自分たちで作った大型帆船で乗り込むかもしれないことを。そして、そのメンバーに決定的に足りない1人のメンタリストは、千空への連絡先のメモを自宅の冷蔵庫にとりあえず貼ったまま、すっかり存在を忘れていて合流できていないということ。

【完】



もしドラ（もしも千空たちが映画ドラえもんに参戦する  
なら）

「ご搭乗ありがとうございます。当便は東京発カザフスタン行き・・・」

単調な機内アナウンスが眠気を誘う、そんな飛行機に千空は乗っていた。

目的地はカザフスタンのバイコヌールにある宇宙基地。

その付近の大平原に、ISSからソユーズが着地予定なのだ。誰であろうリリアン・ワインバーグらの地球帰還に立ち会うため。

「それにしても、アンタらのスケジュール鬼すぎない？ 詰め込みすぎでしょ」

ニツキーの指摘に「違いねえ」と、疲労の色を隠せない千空が答えた。

無人島から救助されたその足で空港に向かい、ニツキーと合流して現在に至る。

とはいえフルメンバーではない。

世界的歌手・リリアンの地球帰還イベント立ち合いは世界中でもごく限られたレア中のレアチケット。

そこをリリアンがマネージャーに無理を言っつて、千空たちのために3枚だけチケットを確保してくれたのだ。

となると、問題は「誰と誰と誰が」行くかということになる。

リリアンの大ファンであるニッキーを外すことは道義的にありえないためメンバー確定。

千空もまた、リリアンや宇宙飛行士たちの熱望もあるためメンバー確定。

残り1枠。

大樹と杠はどうせなら一緒に会いたいということで2人して辞退していた。

残るは獅子王兄妹。

「兄さん、千空さんと一緒に行ってきて。せっかく友達になれたんやし、私のことを気にしないで楽しんできてほしいわ」

未来にそう言われて、司は感動を覚えながら承諾していた。

ということとで今、千空は霊長類最強の高校生と、今のテンションなら霊長類最強の女性にも勝てそうなくらいテンションのあがったニッキーという地上最強コンビに挟まれ、ユーラシア大陸の空を飛んでいる。

「それにしても、本当に俺で良かったんだろうか?」

「上空10,000mに来るといって今さらかよ」

「俺じゃなくて、もつと適任がいるような気がするんだ。弱気になるとか遠慮とかそういうんじゃない、予感としてね」

司の直感的に感じている不安を、非合理的だと一蹴したい千空であったが、その理論を積み上げていくほどの体力は残っていなかった。

だが、司の指摘する「リリアンたちと出会うべき、もつと適した人間」、科学王国に不可欠な要員であるメンタリストは今この時、自身がイメージキャラクターとして宣伝する新しいテレビゲームのプロモーションの打ち合わせに奔走しているのだった。

「それよか集中力分散したら、こっから参加する世界的イベントに失礼だろ」

そう言つて千空が指さした先では、ニツキーがヘッドホンを付けてリリアンの曲を聴きまくっていた。すぐく集中しながらリラックスして緊張している。とてもではないが話しかけていい気配ではない。

「こういう時や、無意味な話でもしてグータラ過ぎそうぜ」

「そうだね、千空の言う通りだ」

そう言うとき司は座席に浅く座りこみ、背もたれに最強の体を預けた。

「そういえば、ずっと考えていたんだ。ドラえもんって、本当に存在したんだろうか？」

「無意味な話かソレ？」

前を向いたまま司が口にする時、千空もまた同じく前を見てつぶやくように答えた。

「2人の姿は、未来しか目撃していないじゃないか」

「せん妄。寝ぼけて夢と現実の区別がつかねえつつうヤツだな。可能性あるが、逆に存

在しねえほうが道理に合わねえだろ」

千空は空に矢印やら円を描きながら語る。

「俺も想像してみたんだが、俺たちがドラえもんと冒険をしたという流れが読めない」

「ククク、たしかに。最強格闘家と柔道選手、財閥御曹司に普通の高校生。この組み合わせがどういう流れで出会うつつうんだろうな」

「そこに漫画のキャラクターが現れる。もしくは俺たちが向こうの世界に行ってしまう」

「ありえねえ方はともかく。そういうやああの冒険のほとんど、秘密道具頼みのゴリ押しバトルで解決だ。俺が活躍する余地がねえし。そもそも司、テメエだけが死ぬパターンが想像できねえな」

高度なのか低度なのか、よくわからない次元の話だが、これは2人にとっては十分に楽しめる雑談であった。

「ところでどんな冒険だったと思う？」

「悪い、文系仕事は得意じゃねえ。ゼロから想像すんのは・・・」

「そうか、俺もだ。なら、今まで千空が見たドラえもんの話ならどうだい？」

司の問いに興味ありげな顔つきになった千空は人差し指を立ててしばらく黙りこみ、不意に口を開いた。

「ブリキの迷宮」

「・・・未履修だ。どんな話なんだい？」

「簡単に言やあ、ロボットの反乱の鎮圧だ。のび太のパパがテレビ越しに他の星のヤツと交信するところから始まるから、俺らみたく関連性の無え奴らが集められたとしても不思議じゃねえ」

「なるほど敵の戦力は？」

心なしかワクワクした千空の声に、司は優しく微笑み話をつづけさせた。

「自律型ロボット作る科学力のある星を乗つとれるロボット軍団。物量からしてアホほどヤベエ」

「だけどドラえもんは勝った。それにキミにも勝算があるんだろ？」

「ああ。攻略ルートは2つ」

千空は指を2本立ててニヤリと笑った。

本当に楽しそうな顔だと、司も満足する。

「1つはブリキ攻略」

「ブリキ？」

「敵のロボットの主材料。鉄をスズで表面加工したもんだ。腐食に強えし、重えが耐久性も抜群の便利素材様だ・・・云々云々」

ブリキ攻略についての科学的攻略法を延々と語り始める千空。

さすがにこれはついていけないと、司は遠い目で前の座席を見つめて右耳から左耳に話を聞き流す。

「で、もう1つのルートは？」

「正攻法の原作ルートだ。タイトルの通り、迷宮を攻略する」

「実に千空向きだね。その先に武器でもあるのかい？」

「コンピュータウイルス入りフロップディスク。時代感が不釣り合いだが、まあそこはご愛嬌だろ。これ1枚で敵全滅つうご都合主義すぎんアイテムだ」

クククと笑う千空に司も合わせて笑う。なるほど、それならますます千空の独壇場だ。

「そんな重要な物なら、そこにたどり着くのが大変そうだ。なるほど、俺はその途中で命を落としたのか」

「いいや。迷宮はスタート地点。味方の基地の入り口にあっからな。のび太も映画始まってすぐに見つけたくらいだ」

「なるほど」

「ただな、問題があるとすりゃあ全長が184kmあるつうところだ」

東京から軽井沢ほどの道のり。司や大樹であればそこまで絶望的ではない数値であ

るが、千空であれば何ヶ月かかることやら。

「でもドラえもんがいるなら、そういえば千空、キミは不要じゃないか？」

「ところがどっこい。今作は初っ端からドラえもんが不在だ。のび太のおかげで途中復活すんがな」

「ハハ、たしかにその世界なら、俺たちが行って活躍して知り合う。そんな流れもありうる話か」

話が弾んできた頃、ちょうど機内アナウンスが流れ始めた。

まもなく、目的の空港に到着する。

雑談もそろそろ切り上げよう、というところで千空が最後に付け加えた。

「まあ、この映画に俺らが参戦するとして、問題があるとすりゃ1個」

「なんだい？」

「最初に言ったように、物語の最初はのび太のパパが寝ぼけてテレビ交信に応じるところから始まる。ところがだ、俺はそういう怪しいもんを信用しねえ。100億%、最初っから始まる心配がねえんだよ」

無意味すぎる時間であった。

だが、寝る間を惜しんでまで無意味な時間を過ごすというものは、友情を育む時間という意味では、全くの無意味ではないのだ。

## 司帝国 VS 石神村 その1

「今日のゲストは、花田仁姫ちゃんこと、ニッキーちゃんでした〜！ ありがとね〜」

あさぎりゲンのアスリートメンタル。毎回、ゲストのアスリートとのフリートークやゲームコーナーを通じて、相手の隠れた魅力を暴いていく人気番組。

この日のゲストは日本の女子柔道期待の星、今話題のニッキー。

収録のわずか1週間ほど前、立小便をしていた警察官と口論し逮捕されるもすぐに釈放。

その後正式に警視庁から謝罪を受けたものの、国家権力に真つ向から立ち向かった姿から、頼れる国民的兄貴姉御『アニッキー』と世間で呼ばれはじめていた。

そんな彼女の本性もまた、意外や意外、とても乙女。純情すぎてゲンは自分の心の軽薄さを実感してしまうほどに乙女であった。

「では、お友達紹介のコーナー、よろしくね〜」

「はい。えっとお、最近知り合つて仲良くなつたばつかなんだけど・・・ですけど。獅子王司・・・くんを紹介したいと思います」

ニッキーから出た衝撃のビッグネームに、ゲンは「ジーマーで？」と口をパクパクさ



せることしかできなかった。

獅子王司。霊長類最強の高校生。

10日ほど前の突然の試合放棄騒動。そして次の週には帆船で遭難。からの海外旅行。から帰国直後の再戦。からの1ラウンド3秒KO。

伝説が伝説を作りすぎて渋滞している、今話題の超級アスリートである。

ゲンは特番で一緒に出演したことはあるが、自分の番組にはとてもではないが呼べないほどの世界レベルの存在だ。

「何処で司ちゃんを知り合っちゃったのよ？ 打ち合わせの時には1ミリも出て来なかったよ？」

撮影終了後にゲンが「オフレコだから教えて」と頼みこむと、ニツキーは少し照れながら「共通の友達がいてね」と答えた。

「もしかしてだけど、コレ？」

そうゲンが小指を立てて耳打ちすると、「そ、そんなわけないじゃん！」とニツキーは頬を赤らめながらゲンの背中をバンツと叩いた。

こうして、ゲンはパイプ椅子にダイブした痛みと引き換えに、世界レベルのトップアスリートを自身の番組に呼ぶことができた。

いや、正直に言えば半信半疑。実際に本人にアポを取れなければ意味が無い。

「うん。いいよ」

即答であった。司はアツサリとOKを出してくれたのだ。

ただし、忙しさを理由に撮影はスタジオではなく、司の指定した場所に番組の方から足を運ぶことが条件。

高校生が大人たちを呼びつけるというのは少し傲慢ではあるが、それを差し引いても手に入るカードが強い。ゲンに断る理由は無かった。

そして撮影日。

ゲンが呼ばれたのは都内にある広末高等学校。

の科学実験室。

科学部部室である。

「どゆハハハ」

聞けば司は最近この学校に転校したそうだ。所属は運動部ではなく、まさかの科学部。

「どゆハハハ」

いざ科学部に乗り込んだゲンの目の前にいたのは、たしかに獅子王司。

頭にヘッドギアと、何かよくわからないアンテナを付けている。

ボクシングパンツとボクシンググローブ、心電図のような変な装置を体に付けてい

る。

「どゆいんか？」

ゲンが目を丸くしていると、司は「やあ、ようこそ科学部へ」と爽やかに迎えた。

獅子王司は以前会った時と印象が大きく異なっていた。

一言でいえば、軟らかくなった。以前のキラキラとした闘志が和らぎ、良い意味で余裕が生まれている。

「えつと〜、それじゃあヨロシクね〜」

対談開始。

和らいだとはいえ、いざ相対すると司の威圧感は健在であった。

ちよつとした話題や格闘家としてのビジョン、心意気についてはお手本のようでも無難な回答ばかり。

しかしプライベートに関する話となると、そう易々と懐に入れさせてくれない。

例えるならば子を守る獅子。家族や友人が下手にマスコミに弄られないように警戒感MAXといった様子なのだ。

そんな調子で対談は面白くも無い時間が流れ、次はゲームコーナー。

今回はゲンがプロモーションしている発売前のテレビゲームと一緒に遊ぼうという企画である。

「このゲームは2人プレイよりも3人以上が面白いのよ。部員の誰かも一緒にどう?」  
そう言つてゲンがコントローラーを向けると、さすがに司と並んでテレビカメラの前に座るのは勇気がいると、誰も前に出ようとしない。

「千空、一緒に遊んでくれないかい?」

司から指名があつたのは科学部部长であり、ゲンたちが部室に入った時に司の機械に繋がったPCモニターを睨んでいた生徒。インタビュウ中ずつと番組に興味無さそうに部室の端で何やら大きな機械をガンガン動かしていた彼であつた。

「あ? いいぜ」

気怠そうにしながらも、どこかワクワクしたようなオーラを漂わせた千空は、司の隣の椅子に遠慮なくドカッと座り込んだ。

テレビカメラどころか獅子王司にすら物怖じしない態度。これは凄い大物か。それとも司の親友か? おそらくは前者だとゲンは思った。

「じゃあ司ちゃん、千空ちゃん。簡単にゲームの説明をしちゃうね」

ゲンはTVモニターを3つ用意し、それぞれ画面が見えないように席を配置して3人でゲームを起動させた。

「これはガチャ要素のあるリアルタイムストラテジーゲームだよ。簡単に言っちゃえば運勝負で出てきた駒を動かし放題の広〜い将棋かな。150種類のキャラやアイテ

ムをガチャで引いて自軍を強化して、他のチームをやつつけちゃうの。リーダーが倒されちゃったらゲームオーバーね」

「ガチャ？」

「そうよ。戦闘キャラかサポートキャラ、サポートアイテムを出せちゃう。一度引いたら時間経たないと次を引けない。バトルはサポートより、次のガチャまで時間がかかる。だからバトル10揃えるか、バトル1にサポート50みたいにするか。プレイヤーの采配次第ってこと。こういうのって、遊ぶ子の人間性とか出てくるんだよね」

そう言つてゲンは、最初の画面に出てきたガチャのボタンを押し、『ライオン』を手に入れた。

「ちなみに戦闘キャラは最初の1キャラは自動的に仲間になるけど、次のキャラは倒さないと仲間にならないから。ライオンちゃんは強キャラだよ。俺ってば意外と運がいいね」

ゲンが上つ面だけ喜んでいると、千空は退屈そうにガチャを回した。

出てきたのは『ゴリラ』であった。

「ゴリラ〜。千空ちゃんもラツキーだねえ。まあ実は、最初のガチャだけはある程度の強さ以上のキャラしか出ないのよ〜。ゴリラもライオンも、その下限レアリティのSRなのよね〜」

ヘラヘラと笑うゲンに、千空は驚いたりシヨックを受けたような様子もなく「だろうな」と流した。

「じゃあ次は俺の番か」

そう言つてガチャを回す司。その画面のエフェクトはキラキラと光っており、明らかに千空やゲンの時と様子が違う。

「ゲン、これはどういうキャラなんだい?」

「デーンと登場したのは猛獣ではなく、仰々しい衣装を着た人間キャラであつた。

司のモニターを覗き込んでそれを見た途端、ゲンは目を丸くする。

「ジ〜マ〜? 『勇者王』だよ〜それ」

それは、近接キャラ最強のバトルキャラであつた。レアリティはUR。

通常であればガチャで召喚しても倒すのに苦労するため仲間にできるのは軍勢が整つてから。それが開始1秒で出てくるのだからゲームバランスが崩壊する話である。

「最強キャラ?」

「えつとお、どのくらい強い子なのかは、俺のをちよつと見ててね〜」

そう言つてゲンはライオンを操作して勇者王の前に移動させる。

司が攻撃ボタンを押すと、勇者王はライオンを一撃で吹き飛ばしてしまった。

体力ゲージが、まるでレベル100のピカチュウの10万ボルトを喰らつたレベル2

0のギャラドスのように、グリーンと一気に減っていき、ライオンは秒で倒れてしまった。絶対の越えられない強さの壁が、そこにはあった。

「クソゲーじゃねえか」

「あはは、いやいやゴイスーな運だね」

ゲンは冷汗を流した。圧倒的な力の差が存在してしまうと、もう駆け引きも性格もクソもなく、ボタン連打だけで司は簡単に勝ってしまう。

「これではゲームのPRの画にはならない。」

「どうだ千空？ これでは勝負にならないように見えるが」

司は言葉では煽っているようであったが、その声には千空への信頼がこもっていた。

「リーダー倒しや勝ちなんだろ？ なら、攻略法はあるんじゃないやねえか？ 唆るじゃねえか」

千空は諦めていなかった。未知のゲームであるが、攻略の糸口を探る余地を探すことに興味を覚えているのだ。

「じゃ、じゃあゲームスタートするよ。分からないことがあつたら俺に聞いてちょうだいね」

こうして、武力の司 VS 無力の千空 のストーンウォーが始まるのだった。

# 司帝国 VS 石神村 その2

西暦5740年から、さかのぼること3721年の、現代2019年。

科学部室において、司VS千空（VSゲン）の戦いが始まった。

舞台はここ、ゲンが宣伝している新しいTVゲーム。

ゲン、千空、司。各自のモニターに表示されているのは自軍チームリーダーと、最初に各自が召喚した戦闘ユニット。のうち、ゲンのユニットだけは既に司の出した『勇者王』によって倒されていた。

「言っても、今回俺は司会進行がメインだから、2人で遊んでもらうんだけど、このままじゃ2人とも相手の居場所が分かっちゃうよね？ だから『かくれんぼ』機能を使っちゃうよ〜」

そう言うどゲンはオプション機能を操作した。途端に各自のモニターには、先ほどまで表示されていた自軍以外のキャラの居場所が真っ黒に塗りつぶされた。

「うん。なるほど。あのままだと俺が圧倒的有利だけど、これでイーブンだね」

「さっきも説明した通り、いくらガチャで出した子が生き残っていても、リーダーがやられちゃったらゲームオーバーね」



「つつうことは、だ。司の最強キャラ様はリーダーの隣で大人しくさせとくしかねえなこりゃ」

千空は分析していた。この戦力差はそのままイコールで千空圧倒的不利とはならないことを。

戦力が拮抗している場合、開幕早々に互いの戦闘キャラを使った『どちらが先に敵リーダーを確保するか競争』となる。

だが、戦力が揃うまで司『勇者王』が前線に出ないのであれば、長期戦となり千空にも逆転のチャンスが出てくるのだ。

「とは言っても、まずは不利すぎ千空ちゃんにアドバイスでもしに行こうかな」

ゲンはチームリーダーを操作して千空の陣地に向かっていった。

おおまかな方を予想して走らせること2分。

ようやく発見された千空はサポートキャラのガチャを回している所であった。

「何か出たぞ」

千空のチームリーダーの目の前に光の柱が現れ、その中からヘッドライトを付けた少年キャラが姿を現した。

「おつ、その子は『探検家』ちゃんだね。探検に行かせると素材をゲットして帰ってきてくれるよ」

「ほお、そいつはおおありがてえ」

千空は『探検家』を操作し、探検に向かわせる。このキャラは戦闘キャラと異なり自律行動をとるため、その間に千空は他の仕事ができるのだ。

そこから待つこと5秒。ガチャ権が復活する。次に引くのもサポートキャラ。

光の柱から、今度は小学1年生くらいの等身のキャラクターが現れる。

「次の子は、『名探偵』ちゃんだね。ゲームで使用できるアイテムやキャラをいつでもぞけるよ」

「じゃあ、もうテメエのアドバイスは要らねえつつうことだな？」

ゲンは「ドイヒーだけど正論だね」とヘラヘラ笑いながら、今度は司の陣営を確認しようとリーダーを操作する。

するとその時。

ガンツ!!!

ゲンが到着する直前に、千空がガチャで出していた『溶岩魔人』がリーダーを殴り飛ばしてしまった。

「何してんだ?」

「ああ・・・忘れてた。溶岩魔人って、敵を見つけたら容赦なく、全ターンで先制攻撃しちゃう子だった」

あらかじめサポートアイテムの『草のよろい』を装備していたゲンのキャラは辛うじて生き残っていたものの、HPのゲージはほとんど黒になっていた。

「主催者がゲーム終了させんじゃねえよ」

そう言うのと千空はサポートアイテムガチャを回し、3回ほどトライし『薬草』を出してゲンに与えた。

3分後。HP満タンのゲンの姿は司陣営にあった。

各キャラには近寄らず、距離をとって進み司のリーダーの姿を発見する。

「来たのかいゲン」

「司ちゃんもガチャ中だねく．．．って、えええ!?」

司の出した光の柱は虹色に輝いていた。一定のレアリティ以上がないと出てこない演出である。

「出たね。また人間キャラだ」

「UR．．．『長槍使い』だね」

司の出したキャラに目を丸くするゲン。

だが、一見するとヒョロツとしてレア度の割に豪華さはない。

司は「長槍？ 素手じゃないか」とステータス画面を確認して首をかしげる。

「この子ね。何も装備してないとライオンやゴリラにも簡単に負けちゃうんだけど、サ

ポートアイテムで『長槍』を出して装備させちゃうと、勇者王と同じくらい強くなっちゃう隠れ最強キャラなの。リーチはこの子の方が上」

司の強運具合に度肝抜かされるゲン。

だが、それだけで済むならまだマシな話で・・・

「長槍というのは、これかい？」

直後にサポートアイテムガチャを回していた司は、長い槍の武器を出して言った。

「ゴイスー!!!」

開始10分弱でこのゲーム最強キャラ2人を揃えてしまった司。

もう、勝負は完全に見えていた。

「これは流石に。俺が千空ちゃん側について2人がかりじゃなきゃ、無理ゲーかなあ」

ゲンはそう決断すると、再び千空の陣営に移動を始めた。

その様子を、司はジッと眺め「うん」とつぶやき、何かを決断する。

「どうかな〜千空ちゃんのほうは？」

ゲンが千空の陣営を覗くと、こちらでも着実にメンバーが揃いつつあった。

・服と言えない恰好の『ややこしい職人』

・金の槍というアイテム以外の魅了系の特殊効果は無効化する『眼鏡仮面』

・ガチャで召喚したそばから逃亡した『GGR』

・古い世代っぽい見た目の『仙台長』

など、戦力としては心許ない軍団であるが、ざっと40のガチャ成果が揃っていた。

「司の方は武力が武器だろうが、俺の方は武器を武器にしてやるよ」

大事な事だから2回言った？と、ゲンが首をかしげると、千空は素材アイテムを組み合わせて作った『鉄の刀』を取り出してみせた。

「探検家が探した『鉄鉱石』を『職人』に加工させて作った。他のキャラも動員して工房作らせておいてな。下手にサポートアイテムで出てくんのを待つよりか、こっちのほうが効率が良い」

ヘビーユーザーが語るような効率論であるが、たしかにこの方法のほうが強い武器アイテムが手に入る。

千空は開始15分で、このゲームの本質にまで踏み込んでいたのだ。

「つつても戦力差やべえだろ。もはや帝国だな、司帝国。こっちは真逆に村レベルだ。石神村ってか？」

「なるほど良い例えだね。その帝国が村を滅ぼしにやってきたよ」

その時、司の不敵な笑みが会話に割って入ってきた。『長槍使い』が不気味に森の中から姿を現す。

「悪いがゲンを尾行させてもらったよ」

「えええ!?! ドイヒーすぎない!?!」

「いいや。どのみち戦力の半分で斥候すんのは正当な戦術だ。効率で言やあ、来んのが今か5分後かの違い程度だろ」

「どのみち、お友達に使う戦術じゃないよそれ!」

騒ぐゲンであったが、司と千空は涼しい顔で対峙した。

「千空もそう思うかい? 俺は手加減抜きの本気の戦いがしたいと思っただけだな」

「いいや、上等だぜ司あ」

そう言ってニヤリと笑った千空だが、先制速攻で『長槍使い』が『眼鏡仮面』を槍で突き刺し、HPを一気に削ると「おい、ちよつとタンマー!」と叫ばずにいられなかった。

「そうだね。10秒だけだよ」

「ククク、最強のくせにセコいな」

そうつぶやきながら、千空は『ゴリラ』と『溶岩魔人』に鉄の刀を装備させ、あらかじめそれぞれに習得させておいた自律戦闘パターンで突撃させた。

「2対1か。これは厳しいね」

そう呟く司であったが、長槍のリーチでゴリラと溶岩魔人を易々とけん制していく。

「ゴリヤマズイねえジーマーで」

「なら、やることは1つだな」

そう言うのと千空はおもむろに席を立ち、科学室のシンクに何かを垂らし、火をつけた。  
ボウ！

「うわっ！」

「ぎゃっ！」

リアルの世界の方で起こるファイアーに、部屋に居た誰もが驚き飛び上がる。

当然、司の注意もそちらに向かう。

「隙あり」

皆の目がTVモニターから離れた隙に、千空はサポートアイテムの『武器破壊のナイフ』で長槍を破壊した。

「いやいや千空ちゃん！ 火事はジーマーで駄目だよ」

「心配すんな、ただのガソリンだ。ペットボトルキャップ1個分。火災報知器すら反応しねえのは実証済みだ」

「いやいやそういう問題ではない。というハプニングの最中、司は『ゴリラ』の攻撃の直前に辛うじて長槍使いを退散させた。

「このキャラは素手だとライオンにも劣る。そうだったね、ゲン」

「いやいやそういう問題ではない。千空のやる事が危険ではないと信頼しているか

らこそ、すぐにゲームに戻れたのかもしれないが。

当然、この数秒のシーンはカットである。



## 司帝国 VS 石神村 その3

第一次ストーンウォーと大惨事を経て、司は自軍に戻り、千空は減ったHPを回復させ、両軍ともが次なる行動に移るところであった。

「マズいな。ここに勇者王足して総戦力は、どう足掻いても全滅は免れねえ」

「それに司帝国には他の戦闘キャラもゴイスーな数いるからねえ。次は戦力総動員で来るだろうから、勝つのはかなり厳しくなっちゃったねえ」

ゲンの指摘は正しいが、千空はそんな彼の顔を見返してニヤリと笑った。

「なくら、逆の手を取れるつつう話だな」

その後、千空はゲンを無理やり動員し、2人でサポートアイテム、サポートキャラを出しに出しまくり、着実に1つの武器を完成させていった。

このゲームはキャラのステータス、アイテムの効果の他に、キャラを使えば使うほど、行動に応じた熟練度が上がるようになっていた。

『職人』のクラフトスキルを使っている間に、他のサポートキャラをその作業に動員させていた。よって、本来であればクラフトスキルを持たないキャラにも、弱レベルながらクラフトの能力が備わりつつあったのだ。

よって、40のキャラで新たな武器を作ることも可能。

通常であれば1時間ペースでプレイすることで到達する高レベル武器の創造も、その約40分の1の時間で達成可能なのだ。

つまり、千空もまた短期決戦に向けた準備を。いや、それどころかコチラから司帝国に侵攻してやろうという魂胆でいたのだ。

一方の司も、正攻法とは逆に守りの準備をしていた。

『千空ならこのゲームで、銃・・いや、大砲すら出してきてもおかしくない』

千空の奇襲を警戒して陣地内に戦闘キャラを散りばめて、どの方角から攻められても全戦力を集結させて迎撃できる体制を整えつつあった。

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

「電撃速攻！」

千空の号令に、『火炎弾』を装備した溶岩魔人が特攻を仕掛けた。

ゲンのサポートスキルで暗闇だったマップに視界を確保し、司帝国の地形を把握していたのだ。

その地形から、司が待ち伏せをするならどの場所を選ぶか推理し、探しにくい死角を推測する。

そしてそれはドンピシャで正解していた。

「なるほど一撃狙いか。だけど甘いよ」

溶岩魔人の攻撃に司帝国の前線は一度崩壊するが、その奥から動員された補助の第2波が溶岩魔人を打ち破った。

「これで終わりではないのだろうか？」

「さあな。知らねえよ」

そう言つて千空とにらみ合っている間に、司は前線メンバーのHPを回復させ、第2波も整列させ直し再構築していった。

「まあ、流石の司ちゃんも、千空ちゃんが『囹』だとは思わないよね」

ゲンのキャラは千空が特攻を仕掛けた前線から離れた位置、第3・第4波に配置された司の戦闘キャラの居場所に回り込んでいた。

「眼鏡仮面のステータスにあった通り。このゲームには魅了系のステータス異常が存在する。まあ定番通り、そういうスキルは発動に時間がかかる。正面切つて発動したら、相手プレイヤーが邪魔しに来る仕様だろうな。だが、無警戒の場所なら別だろ」

千空の指示の通り、魅了系のサポートアイテムで次々と司帝国の戦力を味方につけていった。

・攻撃はできないが、全ての攻撃に1発は耐える『ビッグツリー』

・大器晩成型クラフトモンスター『服屋』

・先制攻撃を無効にするスキル持ち『頼れる兄貴』

・敵のサポートアイテムを選んで破壊できる『狩人』

次々にキャラの色がゲン側の色が変わっていく。

司の気付かぬ前線以外の場所から、戦力配分はひっくり返っていたのだ。

「そろそろだよ。千空ちゃん！」

ゲンの号令と共に、ゲンが魅了していった元・司帝国の面々が前線に総攻撃を仕掛けた。

「なっ!?!」

驚きのあまり操作がおぼつかない司。

そこに千空は本命の最強戦力、遠距離攻撃最強のクラフト限定ユニット『戦車』をぶち込んだ。

「せ、戦車……そんな物まであるのか」

「ククク。どうだ司、これが石神村の最強カードだ！」

千空の戦車が司のチームリーダーのいる方向へと爆走していく。

「だけど残念だよ千空」

そう司がつぶやいた途端、戦車は残念な効果音と共に魂が抜かれたように走行不能と

なった。

「はあ!?!」

「落とし穴だよ。キミがそう来ると思ってた用意しておいたのさ」

司はそう言うのと、戦車頼みで突っ込んできた千空の他のキャラを、その場に控えさせておいた勇者王・長槍使いの2人で次々と倒していった。

ゲンと千空のモニター画面で、キャラが倒されるたびに操作可能キャラの視点が次々と切り替わっていく。

あつという間の逆転劇であった。

あれよあれよと言う間に千空の軍団、ゲンが籠絡したキャラが倒され、残るは千空とゲンのチームリーダー。そして探検家の3人だけとなっていた。

「哀しいな。キミをこの手につけなくちゃならないのは」

「ククク。冷てえ野郎だ」

千空は最後のあがきと、サポートアイテムガチャを回した。

出てきたのは『復活の水』であった。敵味方問わず、倒れたキャラ1名を復活させる。

だが、倒れたキャラは目の前の最強2角に倒されたキャラばかりであり、誰を復活させたいところで意味は無い。

「バイヤー。糞で攻撃しできないよソレ。千空ちゃんの運の引きつて、ジーマーでド

「イヒーだよーね」

ゲンは完全に諦め、ゲームのコントローラーを机に置いた。

「いいやまだだ。探検家がイイもんを持ってきたぞ」

千空が直前に探検家のスキルを発動させ、素材アイテムをどうにか手に入れていた。

それは『ニトロ』であった。

「どういう素材だよー！」

そう言って千空が『投げる』のコマンドを入力した瞬間、凄まじい爆発がその場にした全員を襲った。

「なっー！」

次々と司の戦闘キャラたちのゲージが黒になっていき、勇者王のゲージも赤に染まる。

千空は『復活の水』で「全ての攻撃に1発は耐える」「ビッグツリー」を復活させ、その背に隠れて爆風を回避。

そして司は咄嗟に最強の勇者王を飛び退かせ、回避行動をとらせた。

「危ない所だったけど、千空。勝負はこれからだ・・・!?!」

だが、勇者王の着地点が悪かった。

そこには長槍使いの長槍があり、勇者王に刺さってしまったのだ。

「これは……」

「リーダー対決ってことかな？」

「うん。そうだね」

ゲンと千空は司のチームリーダーの元へ走り、3者が相対することに。

「でも、俺の方が1歩早いね」

司が回したガチャから出てきたのは『不良警官』。『溶岩魔人』と互角の力を持つSRキャラ。

「俺の勝ちだね」

「じゃねえよ最強高校生」

「だね。司ちゃん、忘れてない？ 戦闘キャラは一度自分で倒さないと操作できないんだよ」

最初から最強の『勇者王』を出していた司は、苦勞してこなかったため失念していた。つまり、出すならサポートアイテムな」

そう言つて千空が引いたガチャから出てきたのは『スタンガン』であった。

GAME OVER

「うん。なかなか面白かったね」

「科学原理の再現度が細けえな。楽しめたぜ」

撮影も終わり、TVクルーが撤収していく中、満足する司と千空の表情に、ゲンは「いや、2人が楽しんでくれて嬉しいよ。ジーマーで」と素直な気持ちでつぶやいた。

その言葉に初対面時の軽さはなく、本音だということが2人にも伝わる。

「じゃあねー司ちゃん。良い番組が作れたよー。もし機会があったら共演できるといいな」

「俺もそう思うよ、ゲン」

握手をして別れる司とゲン。

その後、VTR編集に少し顔を出し家に帰ったゲン。

「ひく、疲れたあ。ドイヒー作業は勘弁だよ。でも、今日は少し楽しめたね。少しね」

冷蔵庫を開け瓶コーラをプシュツと空け一気に飲み干す。

程よい炭酸が喉を癒し、疲れた目が潤いを取り戻し視界がクリアになる。

「は……ん?」

ふと目についた冷蔵庫に貼られた一枚の紙。

それは数週間前に自室に置かれた、自分では書いた覚えのないメモであった。



ゲンの筆跡で書かれた知らない人の名前と連絡先、そして『合言葉は “ドラえもん”』  
というデカイメッセージ。

ここまで意味不明な伝言を自分に対して行うのはゲン自身ありえないと思い、何かの  
ドッキリの仕掛けだと思って放置したまま忘れていたものだ。

だが、今ならそのうちの半分が知らないものではなくなっている。

「ジ〜マ〜で?」

ゲンは恐る恐る、そのメモに書かれた電話番号にダイヤルした。

RRRRRR

「はいこちら石神」

聞き覚えのある声が電話口から返ってくる。ほんの数時間前に肩を並べた相手であ  
るから、気のせいではない。

「やあ、おひさ〜。千空ちゃん」

不審すぎる電話だとゲン自身も分かっていた。千空の人間性を考えれば怪しまれて  
不思議ではない。

「えつとね〜。合言葉はドラえもん〜。つて、変な挨拶しちゃったけど、実は昼間  
の・・・」

顔を真っ赤にしてタドタドしくなるゲンであったが、電話口の千空は落ち着いた声で

こう言い返してきた。

「ククク。ようやく来やがったか。遅えんだよ、科学軍団最後のメンバー」

その後、ゲンと千空。他のメンバーが顔を合わせるのには、そう遠い未来の話ではなかった。

そして、科学王国主要メンバー全員が揃う日も、そう遠い話ではないのだ。

## 科学王国集結 マイナス2回目

「ついに、来たぞ。アメリカア。ヒューストン国際空港オー！」

大樹の大声が空港ロビーに響き渡る。迷惑極まりない行動を、杠が「静かにしなきゃダメだよ」と叱りつけた。

千空、大樹、杠、司、未来、ゲン、ニッキーの7人は、それぞれがスーツやらのフォーマルな正装を身に纏い、アメリカの地に足を踏み入れていた。

「ジョージ・ブッシュ・インターコンチネンタル・ヒューストン空港、な。で、俺らはコッチだ」

千空がスタスタと道案内し、一行は各々のバッグを手に歩き始める。

「いや、千空ちゃんって迷子知らず？ 予習してきたの？」

「クレカ目当てに2回来たことがある」

ケロツとした顔で答えた千空に、ニッキーは「クレ・・・闇が」と千空の親子金銭関係事情を察した。

「ハッハー、来たな」

指をパチンと鳴らした音が響くのは、VIPエリアの出口。そこに立つのは見慣れた

3人組であった。

どういふ手段で来米したのか、想像に易い。

「プライベートジェットだ！」

宣言がすぐに発信源から飛び出したところで、もはや誰も驚かなかった。

「貴様たちも一緒に乗ってくればよかつたではないか」

「いいや龍水。こういうイベントには自分の足で歩いて向かうのが大事なんだよ。特に、友と一緒に歩くときはね」

司の断言に、プライベートジェット便乗の羽京は立つ瀬がなく「あはは」と苦笑いする。

「自衛隊でお休みを取るのが大変なのは、私たち知ってますから気にしないでください」  
杠のフォローに、そんな事情を知らない大樹もウンウンとうなずく。

「そんなことより、今日は美女が増えたな。素晴らしいぞ」  
そう言つてパチンと指を鳴らす龍水。

その指先が向く先に立つニッキキーであったが、その真の指先が彼女の背後にいる司……の、隣に立つ女性に向いているであろうことに、『うん、分かっているから』と空を眺めた。

「ム？ タイプは様々あれど、女たちは皆美女だぜ。違うか？ それより、その美女は俺

も会ったことがある気もあるが・・・聞いていた人数をオーバーしているぞ」

龍水が指摘した女性は、手には大きなカメラを持ち、遠慮がちに7人の後ろについてきていた。

「彼女は記者さ。密着取材を頼まれてね、許可したんだ」

「霊長類最強様はマリリンモンローみてえなのがご鼻肩なんだとよ。他んとこ断つて。許可基準は顔か？」

「いや、なんとか直感でね。そういう俺たちのリーダーは、ドラえもんがご鼻肩だからね。無人島でも作っていただろ？ もぐら手袋にSOS発信機、蒸留器は〃さすと雨が降る傘〃のデザインにするように杠に頼んでいたくらいだし」

「ケケケ。司、お前も随分詳しくなったじゃねえか」

「そう言い合つて拳をガンと合わせる千空と司。そのシャツターチャンスを逃さんとする女性記者・北東西であったが、直後に手を押さえてうずくまる千空の姿しか写すことができなかった。」

「オッホー。ようこそヒューストンへ」

「みんな元気？ 飛行機大丈夫だった？」

豪華すぎるお出迎え。宇宙飛行士のヤコフ・ダリヤが、千空たちを迎えに来てくれて

いた。

「初めまして」と、頭を下げる杠や司、羽京、ニツキー。それに遅れてゲンや大樹、未来が頭を下げる。フランソワはとつくに頭を下げていた。

頭部の位置より手が出ているのは、千空と龍水。

「千空だね。百夜に聞いてた通り、つつうか思ってたよりヒョロすぎでしょ」

そういつてダリヤがバンと千空のお尻を叩くと、ヒョロガリ1名が床にダイブした。

「これは、一体どういうご関係なの？」

北東西が目を丸くしながらシャッターを押すと、司は優しく説明を始めた。

「ざっくり言えば、なんとなくの仲間さ。千空つながりで知り合って、今日のイベントのために集まった」

「自衛隊員さんが、わざわざ足を運ぶほどのイベント？」

「そうだね。僕も自分自身不思議だけど、今回は来なくちゃいけないって思ったんだ」

羽京の力強い言葉には、当人たち以外では言い表せない確信のようなものが宿っていた。

その後、13人の大所帯はジョンソン宇宙センターへと辿りついた。

今日は特別なお届け物が宇宙から落ちてくるのだ。

ISSからの宇宙飛行士の帰還。当然、中にいるのは百夜、シャミール、コニーの3人の宇宙飛行士。千空とテレビ電話で約束をした、彼の仲間を全員揃えてのお出迎えの日なのだ。

「ソユーズ着陸地点の近くに行くのは危ないから、家族や関係者はここのフライト管制室のモニターで見守ることになるぞい」

ヤコフとダリヤが引率の先生のようなのである。この遠足に参加した面々は、緊張で見学どころではないニツキーや杠、未来を除けば、他はワクワクが止まらないでいた。

ガラス越しに管制室を見学できる席に座り、12人はその時を今か今かと待ち侘びる。

1人足りない。それは大樹である。

「大丈夫だぞー！」

と、伝わらない日本語で豪語しながら、アメリカ人の小さな男の子を肩車していた。

大樹は一人トイレへ向かっていた。そこで出会ったのが迷子の子供。英語は偏差値1桁の能力しかない彼であったが、「ママ」という言葉と涙の意味は理解できる。

「この子のお母さんはいませんかー！」

伝わるわけのない大声が建物中に響き渡る。

NASA職員の誰もがその声の主に目を向けて、手を差し伸べようとするが、英語が全く通じない相手に困惑していた。

『そういうえば彼なら。たしか日本語がちよつとだけなら分かるつて言つてたわ』

女性職員がそう思い出すと、休憩ブースでくつろいでいた白衣姿の男性の手を引いて大樹と迷子の元に走つて来てくれた。

「どうしたんだ？ 日本人だね？ 日本語はつたないが、多少力になれるはずだ」

白衣の男性は値踏みをするようにジロリと大樹を見ながら、ハッキリと分かりやすい口調の日本語で話しかけてきた。

「おおー！ ありがとうございませす！ 実はこの子が迷子みたいで、お母さんを探しているんですー！」

少し目つきの悪い白衣の男性に、大樹はまくしたてるように助けを求めた。

「なら、総合案内に連れて行くといい。地図は読めるかい？ 今がこの位置で、この場所に行つて受付に引き継げばいいだろう」

「ありがとうDr. あとは私が案内してあげるわ。この少年まで、また迷子になつちゃうと困るから」

そう言ううと女性職員はウインクして大樹と男の子を案内した。



それから数分後、館内アナウンスのおかげで迷子が無事に母親と再会したことを見届けた大樹は管制室へ戻っていた。

「大樹くん、何処行つてたの？ 迷子になってないか心配してたよ」

「フランソワさんが大樹さんを探しに行っちゃったよ？」

と、未来が言つてるそばから、フランソワが戻つてきた。

「大樹様。迷子を親御様に引き合わせていらしたんですね」

アナウンスと経過時間から推測したフランソワの先読み力は、ピンポイントで正解していた。

「フランソワなら当然だ」

そう指をパチンと鳴らした龍水。いや、パチンと音を鳴らさなかつた。

何故なら、彼らのいる場所は「こつそりと」いるべき場所。

その列の中央に座るマスクと帽子姿の女性を、皆で隠さなければならぬからだ。

誰であろう、お忍びで訪れた歌姫・リリアン・ワインバーグを。

「まさかりリアンさんが来るとは思わなかつたね。ワオだよ」

「というこゝとで大樹ちゃんの席、リアンちゃんにあげちやつたんだ。ジーマーでごめんね」

「構わん！ 立ち見も悪くないからな！」

大樹の立ち見は、それこそ正解だったかもしれない。

大気圏突入まで、あと30分。長いようで短い。見ている側からしても短いこの時間。宇宙飛行士たちの命を預かる管制官たちにとっては短すぎるであろう。

そして、家族にとつても、落ち着いて座つてなんかいられないほどの時間であったのだ。

「大丈夫よ千空。ワシらだつて、こうやつて帰つてきたんだ」

最後尾の席で小さく震える千空の手に、ヤコフとダリヤが優しく手を添える。

「つつてもロスコスモスと勝手が違うんじゃないかねえか？」

「あんま変わんないつて。ロシア語か英語の違いくらいさ」

ダリヤの励ましに千空は小さく笑う。

帰還シークエンスに入り、スラスターが射出される。

エンジン区画が切り離され、あとは落下するのみ。

パラシュートカバーが分離し、ドラッグシユートが開く。

ガクンとポットに衝撃が走り、逆噴射しながら地表へと着地した。

管制室のモニターの映像には、落下地点で高く昇る土煙の中から徐々に姿を現したソユーズの姿が映し出される。

しばらくの沈黙が、自然と管制室を包んだ。

「ソユーズ、着陸成功だ！」

管制官の宣言を合図に、その場にいた全員の歓声が一気に沸き上がった。

「やった！ 帰ってきた帰ってきた！ 千空、百夜が帰ってくるよ！」

興奮するリリアンに抱き着かれながら、千空は目を見開いてモニターを凝視し、拳をギュツと握りしめて歓喜した。

「ああ・・・そうだな」

その後、地上回収スタッフに救出された百夜、シャミール、コニーの3人はヘリコプターに乗せられ、千空たちの待つ宇宙センターに戻ってきた。

メデイカルチェックにリハビリと、やることが山積みの帰還宇宙飛行士3人だったが、3人もがあるリクエストを口にして、特設テントへと運ばれていた。

テントで待つ人々が、温かい笑顔で3人を迎えた。

「おかえりなさい。シャミール、コニーちゃん、百夜」

「どうじゃい？ 久々の地球の重力は？」

頬の重さをしつかりと感じながら、3人はニコツと笑顔を見せる。

「髪の毛も重いよ〜」

「ああ。土の匂いが最高だよ」

「でもって、宇宙もいいが。やっぱお前らに会えるのが、めちやくちや楽しみだつたぜ」  
そう言つて百夜は重い腕を必死に伸ばした。

その手に軽く触れるのは、彼の息子・石神千空。

「無理すんじゃないやねえよ親父。無重力の筋力低下、舐めると肉離れ起こすぞ」

相変わらずのセンチメンタルな感情ゼロの安定千空に、何故か涙を抑えられない百夜。

「ただいま。だな」

「ああ、おかえり。だな」

こうして、ここに逆3700年ぶりの、科学王国再集結が相成つたのだ。  
そしてこの日の光景は、それぞれの立場を代えて、数年後・・・

千空の地球帰還を祝う形で再現される。

ドラえもののび太抜き  
宇宙親子

## JAXA編 その1

時は2025年

JAXA（宇宙航空研究開発機構）では新規宇宙飛行士選抜試験が開かれていた。書類選考を通過した参加者たちを1次審査、2次審査を経て15人に絞り3次審査に通す。

そんな中、今年の注目株が1人いた。

宇宙飛行士の父親を持ち、その父がかつてJAXAの面接で熱く語っていた愛息。合格すれば日本初の親子宇宙飛行士となるであろう。

それだけでなく、20歳にして博士号を取得した秀才。

順調に行けば、最年少宇宙飛行士の名も彼のモノとなる。

だが、問題点も目に付く。

身体能力面が及第点。合格ギリギリのラインなのだ。

一定の水準以上を求めるだけであるため問題は無いが、20代なのに他の参加者の50代にも劣ってしまっている。

彼いわく高1の頃からスパルタで鍛えられた成果だそうだが、本当にそうならもつと体力があつてもいい。でなければ元がミジンコすぎるといふことだ。

精神面においても不安が残る。

父親が明るいムードメーカーであつたのに対し彼は真逆で覇気がない。倦怠感丸出しなのだ。

現役の宇宙飛行士にも似たようなタイプはいるため、元気がなければ不合格というわけではないが、第一印象としてはダメなタイプだと見えてしまう。

だが、面接を進めるにつれて見えてきたのは、彼の心の強さ。決して折れない芯の強さと、科学への情熱が溢れている。十分に採用意欲を掻き立てる人間性をしていたのだ。

あと審査しておきたいものがあるとすれば、他人との協調性。それを審査するのが、この次の3次審査。

こうして試験官は、彼の履歴書を合格と書かれたプレートの前にバサツと置いた。

それから数か月後・・・JAXA筑波センター3次審査。

3次試験はこれまで以上の長丁場。2週間の泊りがけで、内容詳細は一切明かさな

い。

誰もが不安と対峙する中、彼だけはその気怠そうな表情に笑みをこぼしていた。

ネギだかダイコンだか分からない髪型。ヒョロガリがスパルタトレーニングによって細マツチヨに改造されたような体型。達観したような顔にワクワクと輝く目をもつ男。

石神千空である。

「唆るぜ、これは」

3次審査はバス移動から始まった。

窓も無く、運転席との隔離シャッターが設置された仕様の、完全に外の景色が見れない特注品である。

到着時刻も目的地も教えてもらえない。携帯や時計も出発前に回収され、情報シャットアウトのバス移動である。

『つつうことは、もう3次審査は始まってんのか』

という15人の推測の中、始まったのは『交流会』であった。

全員が自分以外の14人と順番に、1人10分話をするというもの。

全員がライバルであり、将来一緒に宇宙に行くことになるかもしれない相手。が、一癖も二癖もある人間ばかりであつた。

「溝口大和です。よろしく」

「石神千空です」

千空の最初の相手はハキハキと話す青年だつた。いかにもデキるタイプ。子供のころからリーダーシップを発揮してきたような人間であつた。

「へえ、キミはあの石神百夜さんの息子さんなんだ」

「ええ。まあ」

千空が適当に相打ちをとるだけで、終始溝口ペースで話が進んでいく。

千空は正直言つて溝口を好きにはなれなかつた。

いかにも「自分が会話をリードしているぞ」という雰囲気をもたせて、どこか相手より上に立ちたいという空気を宿らせている。

「有利だね。だつてお父さんから試験内容を教えてもらつているんだろ？ それに日本初の親子宇宙飛行士となれば、JAXAのステイタスにもなる」

「あ？ ネタバレして何が面白えんだよ？」

千空は思わず反論していた。年下からの反応に、溝口は眉をピクツと動かす。

「第一、百夜とは血の繋がりはねえ。残念だが、んな関係ねえ優位なんてハナから存在し



ちやいねえよ」

「へえ・・・そうなんだ。だけど周りはそう見てくれないかもね。まあ頑張ろうよお互いに」

ちようどその時、10分経過の合図が鳴り、2人は席を離れた。

『こりや10分、ちいとキツイな・・・』

和気あいあいと過ごす場面か、そうでないか。それは相手次第。

そんな千空の次の相手は、ひたすら貧乏ゆすり男であった。

そんなストレスと緩和の2時間半が経過した後、試験官からある用紙が配布された。

「自分を含め宇宙飛行士に向いていると感じた人の優先順位をつけてください」

最後にとんでもないアンケートが渡されたものだと思つた。

『こんなんが選考の何に役立つんだ？』

千空は少し悩みながらそれとなくアンケートに答え、配られた弁当を食べ、バス消灯と共に就寝。

何時間経過したか分からなくなってきた頃によくやく、不気味な倉庫の中に降ろされた。

細く長い通路に案内され、たどり着いたのは何もないつまらない部屋である。

『こんな場所が目的地か?』

そこで、15人にはある選択を問われた。『この試験を受けるか受けないか』である。『んなもん一択じゃねえのか? 今さらすぎんだろ?』

誰もが同じことを思ったが、その選択の前にある映像を見せられ、その意図が理解できた。

一般公開されていない『事故映像』。2023年、宇宙から帰還する際の着陸船のパラシュートが絡まり、3人の宇宙飛行士が死亡した時の内部映像。

3人の死の間際の一部始終であった。

「・・・なるほどな」

死の直前まで足掻き、〃今後の事故調査で役に立つ〃と最後までデータを取り続け、死を受け入れる3人の宇宙飛行士。

その姿に、千空は父や彼の仲間たちの帰還の瞬間を重ねた。

過去2回、立ち会った着陸の瞬間であるが、そこに不慮の事故が起こる不安が無かつたわけではない。だが、実感としてここまでの覚悟があったかと問われれば、否定はできない。

「以上です。くれぐれもこれを見たことは誰にも話さないでください。彼らのように死を受け入れ行動し続ける覚悟ができたという方は、書類にサインをしてください」

すぐにペンを持たない者も数人。すぐにサインを書いた者も数人。

千空は、すぐにサインを書いていた。

『死ぬ覚悟。んな心配、今からしたところで何の意味もねえ。地上にいたって死ぬ時や死ぬ。宇宙に行く前に死ぬよりかマシだろ』

こうして15人全員が参加の意思を示し、次の試験が始まった。

5人1班、3班に分けられる。

千空はそのうちのB班。メンバーは千空の他は

31歳のキリツとした男性、30歳の頼りない男性、30歳の活発そうな女性

そして、交流会で千空が最初に相手をした溝口であった。

これから5人は、閉鎖環境ボックスという月面居住施設を模した狭い空間に入れられる。

この中で2週間、与えられる様々な課題を5人で協力し合ってこなす

最終日・・・

全員の意見一致のもと

5人の中から2人。宇宙飛行士にふさわしい者を選べというのだ。

## JAXA編 その2

閉鎖環境ボックスで始まった試験。

平屋建ての家程度の広さしかないこの狭い空間を5人で過ごし、2週間後に自分たちで宇宙飛行士にふさわしい2人を選び出す。

一応、試験官は最後に「3チームで計6人が選ばれることになりましたが、そのほかにJAXAからも数名選ぶ可能性があります。1人か2人かもしくは0か。未定ですが」と付け加えていたが、つまりは全員が敵ということだ。

作業着に着替え、ボックスの中に足を踏み入れると、そこは申し訳程度に凝っただけの普通の生活空間となっていた。

寝台ベッドに台所、ユニットバス、外部通信用の個室、運動スペースに作業スペース。

その、作業スペースには電池の抜かれたアナログ時計が置かれていた。

ここで早速、1つめの課題である。

「さて、今何時でしょう？ 5人で話し合って時計を合わせてください」

最後に時計を確認できたのはバス移動の開会式前。そこからバスに揺られ、交流会。

就寝時間が不明であるが、その後意思決定の時間を合わせて計算すると・・・

「これを問題にするつてことはある程度、アバウトじゃない答えが出せるように、ここに来るまでに時間のヒントが出てたと思うんだ。交流会以外にも」

B班でも溝口が仕切り、4人が自分の体感の計算以外の、JAXA側からのヒントを推理しようとし始めた。

「2時58分43秒」

そんな中で唐突に飛び出した千空の答え。4人は困惑せずにはいられなかった。

「・・・石神くん、時計を持ち込んでいるのかい？」

「いいや。単純に数えてただけだ」

さも当然のようにサラツと言つてのける千空。だが当然、そんな戯言を信じる人間はいるまい。

「数えていたつてキミ・・・開会式から何時間経つたと思つているんだ？」

「秒単位でズレはねえよ。ガキンころに馬鹿みたく2か月ずつと数えたこともあるが、そんなときもミスつてねえぜ」

にわかには信じられない話である。最初は4人も信じられなかった。

「他の・・・みんなはどう思う？ 自分の感覚で、今何時だい？」

溝口に問われ、残る4人も提示はするが、誰もが4時から7時とバラバラ。その根拠

も自分の生活リズムから導いた今感じている眠気などといった体性感覚である。

だがそれも、日光から遮断されて何時間も経過した今では自信が無い。

「ここは賭けてみてもいいんじゃないかな？ 試験はまだ2週間続くわけで、この1回で多少間違えても、これからの選考に大きく響くわけじゃない」

溝口の意見に3人も賛成を示す。

だが、これは裏を返せば間違えた時の責任が千空1人に向かうという話。

それが意図的かどうかは、誰もがハッキリと察することはできなかったが・・・

「では、正解を発表します。今、午前3時8分です！ 正解したのはA班とB班。C班は2時間のズレ。しかもB班は秒単位で正解していました！」

ボックス内に流れる試験官からのアナウンスに、B班は歓喜した。

「すごい。これは本物だ」

「石神くん。ここまで来ると怖いくらいだよ」

手放して褒める声と、驚愕の色を隠せない溝口の視線。そんな中でも千空は普段通りの平静とした表情を見せていた。

この日の課題はこれで終了となり、5人はベッドに向かう。

翌朝8時、アナウンスに起こされた5人。

この日の最初の課題は、朝食を作る事であった。とまあ、課題ですらないことはアナウンスの声から判断できる。

ボックス内の台所には様々な食材が揃っており、中でも宇宙食のセットには誰もがテンションを上げた。

地球外での滞在を想定したボックス生活。最初の食事となれば、コレであろう。

「なんだか宇宙って感じだね」

「昔は水分の無いパサパサしたものばかりだと聞いたことがあるけれど、普通に美味しいな」

「ククク。そういうやあ百夜の奴がテメエの行きつけのラーメン店の味、再現して宇宙食に採用させてやがったな」

腹が満たされればストレスも軽減され、互いが敵同士だという事実も意識から薄れる。

和やかな雰囲気の中、軽い自己紹介もできるものだ。

溝口大和。小中高大学と、生徒会長や首席と、常にリーダー役だった28歳。

真壁ケンジ。2歳の娘をもつ爽やかな青年。A班の1人と試験中に意気投合。31歳。



北村絵名。5人兄弟の長女でしっかり者。面倒見の良い30歳。

手島有利。意志の弱そうな30歳。父親もJAXAの試験に3度挑戦している。と、和やかな雰囲気もここで一区切り。避けては通れぬ話題があるわけだ。

この生活での一番の目的。

この5人の中から、3次審査の合格者を自分たちで、しかも全員納得したうえで2人を選ぶ。

その方法についてだ。

「点数制で行こうよ。これから出される課題の順位を集計する。それが一番わかりやすいだろ？ 最終日に集計して高得点の2人を選出すると」

言い出したのは溝口であった。たしかに効率的ではある。5人全員の納得という点では点数ほど嘘をつかない選出方法は無い。

北村、手島もそれに納得する。

「僕は、ここまできたら点数じゃないような気もするんだけど」

そこに反対意見を述べたのはケンジであった。

「他にいい方法なんてないと思いますけど。真壁さん」

反論に対して沈黙を挟み、こう言い返した溝口。代案を出せないうちから否定するこ

とは良策とは言えない。

「石神くんは、どう思うんだい？」

溝口に意見を求められ、千空は人差し指を伸ばしてしばらく考えた後、静かに口を開いた。

「てめえが宇宙に連れて行くならどの2人を選ぶか。で、いいんじゃないか？」

千空の提案に溝口は言い返した。

「そんなの人气投票じゃないか。5人ともが2週間、媚びを売ってしまおうよ」

「試験官が言ってたろ？俺らの選んだ2人×3班の6人以外にJAXAが選ぶって。なら、課題遂行能力なんつう客観的指標で選ぶなら、俺らの意味ねえだろ」

「なるほど……それも一理ある。成績優秀というなら、ここで落選してもJAXAに後から選ばれるということか」

ケンジの解釈に千空は「そういうことだ」と笑う。

「つつうわけだ。俺らのオススメキャラつつうのに、パソコンに選ばせたほうが早えんじゃないからねえ。最終日に投票つつうのが俺の案だ」

「……たしかにキミの言う通りだが、それだと同率票が溢れないかい？そもそも、そんな高校生の休み時間の無駄話みたいな決め方はどうかと思うな」

「ククク。否定はしねえよ。まあ案つつうだけだ。点数制、大いに合理的だ」

「それに今決めなくても2週間も時間があるんだ。それまでに代案が出なかったり、投票制が良いアイディアに思えてきたら、臨機応変に対応していけばいいと思うよ」

ケンジがまとめた総意見に、千空、北村、手島も賛成する。

溝口だけは頷くだけで声にして賛成を示さなかったが、まだ不満が残っているような雰囲気漂わせていた。

その後、この日からの課題が始まった。

毎日の課題その1。『計算ランニング』。

運動スペースのランニングマシンを5分間走りながら、その間に読み上げられる計算を何問解けるか?というもの。

「はあっはあっ。良い運動になるね、これ」

40問を正解した溝口が軽く息を切らして爽やかに笑う。これは誰もが驚くほど早く優秀な成績である。

他の3人は彼に劣りはするものの、一般的に考えれば優秀な成績を叩き出していた。

では、千空はというと?

「ハチジユウサンカケルハチジユウナナh・・・」

「7221」

読み上げきる前に正答。早いという次元の話ではない千空無双であった。

「早い」

そう、早い。息が切れるのも早い。

5分走り切ったあとはゼーゼーと仰向けに倒れていた。

「キミ、本当に運動負荷試験をクリアしてきたのかい？」

「でも60問って、凄すぎですよね」

「しかも4分で……まあ、残り1分は声が出なくなってたけど。つまり、万全だったら80問はいつてたかもしれないってことかな」

「それにしても、走るフォームが綺麗だったね。誰かにコーチしてもらっていたのかい？」

凄いんだか凄くないんだかわからない千空に手を貸したケンジが尋ねると、千空は息を整えながら小さく答えた。

「しじおうづかき」

曰く、高校の時の科学部部員の1人の体表に筋電極を取り付け、効率の良い運動パターンを電気信号として解析し、同じパターンで千空自身の体に電気刺激を与えて、あらゆる運動を再現して練習した結果だそうだ。

嘘か真か、4人には知る由も無かったが。

毎日の課題その2。『打ち込み練習』

用紙に書かれた文字列をパソコンに打ち込んでいく。2時間も。

集中力と持久力の単純作業。アホほど地道で酷い作業である。

故に無言。5人ともが無言。

千空は、集中力だけであれば自信はあった。

だが、手先の器用さは別。タイピングのスピードが劣る分、この課題は5人の中では中間位ほどである。

というのが毎日。2週間、13回おこなわれるのだ。ドイヒーである。

そして日によつては別の課題も当てられる。

この日はとある反論文を考えろというもの。

あるニュース番組でキャスターが指摘した日本の宇宙開発の費用負担に関する議題。『宇宙開発にかかる莫大な費用はすべて税金からまかなわれている。

その反面で科学的成果が上がっていない

地球上に様々な問題が山積する現状で、宇宙にお金をかけていいののか?』  
という問題提起であった。

このコメントが影響すれば、国民が宇宙開発を軽視してしまうと、JAXAは危惧していた。

よって、このキャスターを納得させられるような文章を作る事。それが千空たちに課せられた今日の課題となった。

## JAXA編 その3

科学的成果の上がらない宇宙開発に多額の税金が投入されることへの不満を持つ  
ニユースキャスターを説得する文章。

それが、千空たち3次審査のメンバーに課せられた無理難題である。

「こういうのどう？ 宇宙へ行く理由。『私たちが宇宙で仕事をすることは新しい知見、  
新技術を生み出すきっかけになる。人類にとつて大事な仕事なんです』つてのは」

B班の1人、手島の意見に溝口が食ってかかった。

「手島さん、それ僕が言ったのほとんど同じですよ」

「・・・あ、そう？ ビミヨーに違うんだけどな」

溝口は考えていた。このメンバーの中で自分が合格するのに障害となるのは誰か。  
障害とならないのは誰か。

ケンジは敵同士であるこのB班の雰囲気を少しでも良くしようと、必死に仕切ろうと  
頑張っていた。この課題はそもそも、現役宇宙飛行士からの抗議文のほうの説得力が  
あるわけで、候補生の自分たちが正解を出すことが重要なのではなく、むしろ話し合い

をすることがJAXAの意図ではないのか？ と。

そして千空は、面倒くさそうに、当該キャスターがコメントしたニュース番組の映像を眺めていた。

「石神くん、キミの意見はどうだい？」

千空がいまだに筆を走らせていないことを分かりながら、溝口が問いかけた。

「まあ・・・そもそも興味ねえわ。誰が金出して誰が文句言おうと」

思考停止の課題全否定。

そんな子供のような千空の意見を、溝口は小さく鼻で笑う。

「興味ないが答えじゃ意味がないよ。出された課題に取り組まなきゃ」

「そもそも意見の不一致なんだよ。このキャスターと俺は。金や科学つつうモンに対してな」

「それはどういうことだい？」

千空の言葉にケンジが興味を持つ。

「俺も人の受け売りだから偉そうなことは言えねえが・・・金は人の意思をまとめるためのモンだ。皆の力を合わせるツールがあるからこそ、人類が最強たる所以。宇宙に行きてえ、宇宙を知りてえつつう意思が日本にどの程度あるか。税金の投入量なんつうもんは、その指標にしかすぎねえ」



千空の言葉に、普段何気なく使っている貨幣の概念を再考するケンジたち。

「それに科学つつうのは、ただ知っていてえ”つつうのが原動力だ。好奇心やら探求心つつう欲求に成果なんつうモンを問うなら、人間の三大欲求様の成果はどうだ？ つつう話だ。そこに文句つけんなら、先に日本の少子高齢化と過労死問題対策の成果とやらを見せてから言いやがれ。つてな」

千空の言葉の芯の強さに4人は圧倒される。

一見すると屁理屈のようでもあるが、考えさせられる内容ですぐには反論できそうにない。

「おもしろい意見だと思うよ」

「ただ、今のを答えとしてまとめるのは難しいね。このキャスターに伝わりそうにないよ。出された課題は彼女を納得させられる抗議文を作ることだ。それこそ正解だよ」

その後も話し合いは一向に進まず、B班の課題は終了していった。

結局、採用されたのは文章としての完成度の高い溝口の抗議文。4人ともが賛成した結果であった。

だが雰囲気だけであれば、誰が見ても良くないまま終了という形であった。

その後も千空たちの試験は続いた。

毎日の課題と日替わりの課題。単調な作業と集団生活に溜まるストレス。

特にB班はストレスの影響が顕著で、日を追うごとに活動量が低下していた。

点数制に代わる2名選出方法が無い以上、毎日の課題に集中し自分の点数を上げるこ  
とが、合格への唯一の道であるからだ。

課題に取り組む以外、他人との接触が少ない。他人と壁を作るギスギスした雰囲気か  
続いていた。

そんな中、試験開始5日目。千空にある課題が与えられた。

それは1日1回の健康チェックのため、個人問診のモニタールームに入った時のこ  
と。

「石神千空さん、あなたにグリーンカードが出ています」

「あ?」

グリーンカードとはNASAの訓練中に取り入れられている極秘指令のこと。

訓練中にわざと仲間を妨害するような行動をとる命令である。

仲間のミスによるストレスをコントロールし、不測の事態を切り抜ける力を鍛えるた  
めの訓練形態である。

そんなグリーンカードで千空が指示された内容。

## 《指令》

・本日から最終日まで、他のメンバーが眠っている頃にアラームのリモコンスイッチを押さない

・アラームは1日最低20秒以上鳴らしなさい

・自分がリモコンスイッチを持つていることは他のメンバーに知られてはいけません  
・このグリーンカードのこと、指令であることなどは、他言無用とします

「性格悪すぎんだろ、JAXA」

ただでさえギクシャクしたB班で、この指令が何をもたらすか。分からない千空ではなかった。

だが試験官が見たいのは、この事態を5人がどう乗り越えるか。その姿である。

そして夜になり、他の4人の寝息が聞こえてきた頃・・・

「そろそろだな」

拒否権の無い千空はリモコンスイッチを押した。

特に躊躇は無い。

『みんなに迷惑をかけるなあ。心苦しいなあ』という非効率的な逃げ道は余裕のガン無視だ。

ピピピピピ

「みんな、一回起きて！」

案の定、2日目にして溝口が怒りを露わに全員を起こして犯人捜しを始めた。当然、千空は犯行を否定。全員が否定する中、溝口の苛立ちは増すばかり。

「誰もやってないって言うんだから、誰かを疑うのはやめよう」

ケンジが仕切つて場を治めようとするが、溝口の怒りは収まらない。

千空は『いや、JAXAの試練つう説くらい誰か思いつかねえのかよ！』と叫びたくて仕方がなかった。だが、このアラームの件に触れることができないため、今は成り行きを見守ることしかできない。

「みんなで考えよう。解決策を」

「僕は犯人を割り出すのが解決策だと思えますけど。この中にいるんでしょう？」  
収まらない事態に、千空は内心気まずさを覚えた。

仕舞いには、ケンジが通路で寝てアラームの出所を見つけると言い出し。

そのことに「正義の味方のつもりですか？ 点数稼ぎですか？」と反発した溝口が結局、通路寝の任に就くことになってしまった。

溝口はますます苛立ちを覚えた。この屈辱は、ケンジに誘導された結果だと思い込ん

で一方的に恨みを連ねていたのだ。

『つつう思い込みの連鎖・・・確実に起きてんじゃねえか？ ええ？ JAXA様よお』  
恨みの連鎖の発端はJAXAであるが、一端を担ったのは千空。

そのことを、千空は心の隅で気にせずにはいられなかった。

そして9日目。ストレスがますます拍車をかける。

この日の課題は『白一色のジグソーパズル』であった。

全180ピース。制限時間は3時間。

「これ・・・1つずつ当てはめていくしか方法がないよね」

「だな。最悪の地道作業。ククク、しかも100億%無理ゲーだろ」

千空すら冷汗を感じる狂気の作業。制限時間が180分なら、1ピース1分で正解を見つけるのが前提という話。それを100ピース以上4方向で試していくのだから、確実に不可能である。

そして3時間後・・・

千空ですら半分も完成させないうちに時間が来てしまった。

そんなパズルを、なんとケンジは「完成させたい」と管制室に提言して、回収延期を申請していた。

「うまいですね真壁さん。自分の頑張りをアピールするのが」

溝口のキツイ一言が、口数の少ないB班のボックス内でやけに大きく響き渡る。

「君は僕より4学年下なだけだけど、もっと下に感じるよ。君はまだ若すぎる」

ついにケンジもストレスを我慢できなくなっていた。大人げない反論で溝口を黙らせる。

『こいつは・・・絶対えやべエ展開確定じゃねえか』

そんなケンジが、今日の通路寝の当番の日である。

リモコンを持つ千空の手に汗がにじみ出る。

ピピピピピ

ケンジはアラームの出所を発見できなかった。

あれだけ大きな音が鳴って、アラームを見つけれないわけがないと、溝口はケンジを犯人と断定する。

『まあ、妥当な推理だな』

そこで、別の事件が発生した。

なんと、ボックスで唯一の時計が無くなっているのだ。

全員で探すと、トイレの便器の裏で時計は発見された。

針が壊され、時間が確認できない状態で……

『ああん？ 絶対え犯人がいる。パターンじゃねえか。誰が次のグリーンカードを？』

千空が4人を観察する。すると、目に留まったのは1人だけ皆から目を逸らした手島。

『こいつか。まあグリーンカードの話をするわけにいかねえ。今は静観するしかねえか』

だが、千空の思惑は甘かった。

「石神くん、キミが犯人だね？」

「出たぜ。名探偵溝口の名推理」

溝口が千空を疑う理由は明らかである。

「この中で時計を必要としないのはキミだけだ。秒もズレない自信があるんだろ？ 今の時間も分かっているんだろ？」

「ああ。3時12分13秒。だが、俺は犯人じゃねえぜ」

溝口が険しい表情で千空を問い詰める。

涼しい表情で耳掃除すら始める千空であったが、今にも殴りかかってきそうな溝口の勢いに、その手はわずかに震えていた。

「待ちなよ。石神くんが犯人というなら、メリットが無いじゃないか」

「僕らを妨害する。ライバルのデメリットは自分にとつてもメリットじゃないのかい？」

「そうか？　こうなったら俺がタイムキーパーになんのは確実だろ。俺に余計な仕事は増えるが、そつちは正確な時間が分からなくなるわけじゃねえ。天秤ガッツリ俺不利で傾いてんぞ」

千空の言い分は正しかった。そのことに気付いた溝口は唇を噛みながら、それ以上の追及はしてこなかった。

この日から、ますますストレスが加速していく。

3つ目のトラブル。3枚目のグリーンカード案件は『課題の順位データの消失』であつた。

これで2人の合格者を選ぶ点数制が破綻。

当然、溝口の疑いの目は千空とケンジに向けられる。

最初から点数制に反対し、文句をつけてきた2人しか考えられない、と。

だがそんな中でケンジは「今まで起きたことは全て管制の指示かもしれない」と言い始めていた。



『ククク。正解、100億点』と言いたい気持ちを抑える千空。

2人の言いたいこととして、JAXAは合格者の選定を5人に一任してはいない。その説が濃厚になってきた、ということだ。

そのムードに反発する溝口は、最後にこう言い放った。

「わかりました。そう言うなら試しに真壁さん、石神くん。『2人選出』から、辞退してくださいよ」

## JAXA編 その4

グリーンカードを未だに提示されていない溝口が、JAXA犯人説と投票案に反発して出した提案。

ためしに、千空と真壁が選考から辞退してみろ、というものであった。

溝口が言ったことはあくまで提案であり強制ではない。そういう逃げ道を残したズルさもあるが、実に有効な手だと千空は感心していた。

『こういう心理戦は俺じゃ無理だな。だが、今は自分一人で戦うしかねえ』  
胃にドツと重くのしかかる嫌な感情を強引に押し込み、千空は唇を噛んだ。

『これは科学が通用する話じゃねえ。非合理的な精神論ゴリ押し of 戦場だ。なら、信じ  
て耐えるしかねえな。アイツらに宇宙、見せてやるためによ』

拳をギュツと握りしめ、千空は心に仲間を思い浮かべ、次の課題へと意識を向けた。  
一方でこの提案はケンジの心に重くのしかかっていた。

付き合ってもらえない。本当に辞退してやろうか。投げやりな発想だが、  
“ねじれ者”のケンジは思い悩んでいた。

「お前、真壁ケンジ。大丈夫か？」

千空はケンジに話しかけていた。と言っても直接顔を見合わせてはいない。

課題のない自由時間中、作業スペースのテーブルに向かつてノートに書きものをして  
いる千空に、ケンジが気付いたことがキツカケであった。

「石神くんはこの10日間、何を書いているんだい？」

「ラブレター」

千空がシレッツと言い放つと、ケンジは「意外だなあ」と目を丸くした。言つては悪いが、彼女がいるようなタイプには見えないし、いたとしたらかなりの変人だとケンジは思っていたからだ。

「ククク。相手は精神年齢12歳と5歳と3歳が相手だけだな。この試験は課題以外にやることがねえだろ？ ヒマつぶしに科学の問題とか実験のアイデアまとめてんだよ。試験終わったら見せてやろうってな」

「な、なるほど。親戚の子供とかかい？」

「妹だな。ダチんとこのと、あと『俺の』」

楽しそうにノートをまとめる千空に、ケンジは「見せてもらってもいいかい？」とノートを覗いた。

「これは・・・3歳と5歳には・・・ちょっと難しすぎるんじゃないかな？」

そこに書かれていたのは『夜空の月が自分についてくるように見える理由』の解説。保育園児では意味が分かるはずがないレベルの科学的知識に、ケンジは苦笑いする。

「ガキじゃ意味も何もわからねえ。んなもんはコッチの勝手な決めつけだろ」

その千空の言葉に、ケンジはあることを思い出していた。

それは彼の2歳の娘が、ケンジの試験出発前に最後に叫んでいた言葉。

「かぺー」

普段、ケンジの妻が娘のトイレ練習の時に掛け声で「頑張れ」と言っていると、それにつられて娘が口に出している言葉。

それを、この3次審査に“頑張れ”に行くケンジに向けて娘が言っていたことに、彼はこの時初めて気付いたのだ。

「ちゃんと意味もわかっていたのか……」

ケンジは『この試験が早く終わってくれないか』と頑張る気力が尽きかけていた。

だが、娘の言葉に励まされ再奮起したのだ。

「しゃーない、かぺる、しかないな」

「……何語だ？」

そして13日目。

ケンジは手島や北村を誘って互いの趣味の話を始めていた。

手島は子供のころから妄想していた架空の異星生物の生態研究について。

北村は読んでいるSF小説について語ってくれた。

その顔は、この2週間で見たことのないイキイキとした表情であった。

「石神くんはどうだい？」

「まあ、御我慢つつうのは趣味じゃねえが……」

てつきり千空は自分の妹たちの話でもするのかと思っていたケンジであったが、その考えはアホほど見当違いであった。

ロケット。宇宙飛行士なら誰もが知っている。

いや、知っているが、ここまで詳しいか？　ここまでを求めるか？　という次元の……というより、次元が違いすぎた。

「……つつうわけでチャンバーが焼けねえようにするアブレータだが、この調整がマイク口単位でクソ面倒くせえ。だから計算機も……」

ケンジが止めなければあと5時間はぶっ通しで語り続けていても不思議ではなかった。

という楽しいハプニングもあつたが、真にケンジを救ったのは……いや、ケンジだけではなく溝口をも救ったのはグリーンカードであった。

試験官は2人に期待していた。リーダーとして、どういふ雰囲気を作り出せるかを。だからこそ今まで、あえてグリーンカードを出さなかったのだ。

そして今、2人に出された指令は「救い」のグリーンカード。『米をばらまけ』、『トイレを溢れさせろ』という指令に、2人は疑心暗鬼の苦しみから解放されたのだ。

「ほく、ようやくイタズラ小僧が揃ったつうわけだな」

全員で掃除をする中でつぶやかれた千空の言葉に、4人は思わず笑った。

「多分だけど、石神くんが最初だったのかな。いや、何のということとは言わないけど」

「ククク。さあな」

「そうなると、意地悪い順番だったんだね。僕もだいぶ責めてしまった。謝るよ」

心から言っているのかはわからないが、溝口の謝罪に千空は「気にすんな」とニヤリと笑った。

「そう思うと、石神くんって怒らないのね」

「いや怒るわ。聖人様じゃねえわ。ヒマがねえだけだ」

そして最終日

2週間、様々なストレスにギクシャクした人間関係。それもついに終わる。

5人の中から2人、合格者を決める。それも全員が納得した形で。

点数制が破綻した今、千空の提案した投票制を採用することとなった。

「僕は、最後まで完全に納得はできませんでしたが・・・それで構いません」  
意外にも溝口は投票制に賛成した。

「どういう風の吹き回しだ？」

「自分だけで納得しようとして失敗をした、その経験からかな。答えていうのは意外な場所にあると思いき知らされた。意固地になる無意味さもね」

逆に意固地な考え方にも思えるが、溝口なりの歩み寄りであった。

「それに、少し分かってはいるんです。誰が選ばれるかは・・・」

そう言い、溝口は千空とケンジを見た。

その後、2人の選出を終えたB班は、閉鎖環境ボックスの出入り口に立った。

重い扉が開き、職員たちからの拍手に迎えられる。

2週間ぶりに、5人以外の人間の顔を生で見ると、それだけのことだが、心が少し軽く感じられた。

3次審査はこれにて終了。帰りのバスは、またあのシャットアウトバス・・・ではなかった。

ここでネタバラシ。この建物は極秘施設でも何でもなく、スタート地点のJAXAの

倉庫を張りぼてで作った特設会場だったのだ。

だから何というわけでもないが、帰りの手段が少し気楽なのはありがたい話であった。

「じゃあね、石神くん……いや、千空くん」

「じゃあな、ケンジ。次はヒューストンだな」

ケンジと千空はここで分かれた。3次審査、B班からの合格者2名は、2か月後の最終選考へとコマを進める。

舞台はヒューストン。現役日本人宇宙飛行士から、直接選んでもらうのだ。

「つつことで、俺はヒューストンに行く」

「うおおおおお!!!」

「お店は静かにしないと駄目だよ」

この反応から分かる通り、千空の3次審査合格を彼の友人たちは大いに喜んだ。

ここはレストランのテラス席。

テーブルを囲む4人の男女が、それぞれ手にグラスを持ち乾杯する。

「おめでとう千空くん。こんな早く行っちゃうなんてワオだよ」



最初の乾杯は、千空と中学からの付き合いのある杠だ。優しい口調で千空のヒューストン行きを祝った。

「いや、ゴイスーだねえ千空ちゃん」

乾杯と共にコーラが揺れる。友人のメンタリスト、ゲンは言葉では大袈裟に驚いてみせるが、その実は千空なら何を出してきても全く驚かないと信頼していた。

「おめでとう、千空！」

「弁償もんは却下だ！」

千空とは誰よりも付き合いの長い親友、大樹。加減知らずの馬鹿力は健在で、千空は乾杯のグラスを必死で回避した。

「いやあ。それにしても千空ちゃん、試験つてやつば余裕だったあ？」

「体力テスト系は散々だったがなあ。あとテメエのメンタリスト技術も奪っとくべきだったと絶賛後悔中だ。したら多少はマトモな2weekバカンス洒落こめたんだが」

千空なら今からでも習得できるよと、ゲンは笑って答える。

「それで、ヒューストンにはいつ行くんだ？」

「明日」

相変わらずの急な宣言に、いまさら驚く友はここにはいない。

『寂しくなるなあ』の言葉がすぐに出てきてこそ普通なのだ。

「最終審査って2か月後なんだよね？　ならそれまで『あの家』に行くんだあ。いいなあ」

「まあ自分家に行くだけだがな。とりま楽しみっちゃあ楽しみだな」

その“家”に待つ人たちの事を知る杠は、千空の楽しそうな表情を見て笑顔になった。

そんな楽しい祝勝会から一夜明け、飛行機に乗り込んで一夜を逆走し、ついに千空はヒューストンへと到着した。

空港のロビーに『うえるかむ』という大きなプラカードが馬鹿馬鹿しく掲げられる。

こんなことをする人間は1人しかない。

「来たな、千空う！」

大声が空港に響き、当該の男性が両手を広げて千空に近づいてきた。

父の抱擁を千空はサツと回避して、父の背後に立つ2人の子供の元に向かう。

「おかえりなさい、お兄様！」

「おかえりなさい、あにうえ！」

小さな2人の妹を、千空は優しく抱き上げる。

「ああ、ただいまだ。元気にしてたか？  
瑠璃、琥珀」

## JAXA編 その5

ヒューストン在住の宇宙飛行士、石神百夜。

その娘、石神瑠璃5歳と石神琥珀3歳。

妻の石神リリアン。旧姓ワインバーグ。

そして、4人と血の繋がりのない石神千空。

「石神一家、全員集合〜♪」

百夜のテンションの高い声がりビングルームに響き渡る。

ヒューストン郊外、宇宙飛行士が多く住む住宅地に、石神家の一軒家は建っていた。

「ちったあ落ち着きを覚えろよ。3児の父親だろ」

「お父様はいつもこんな感じですよ」

「百夜も千空も変わらないね〜」

リリアンは長女の瑠璃を抱き上げながらにこやかに笑う。

千空はいまだに不思議に思っていた。何がどういう経緯でこうなった？ リリアン

と百夜の結婚報告を5年前に聞いた時、千空は手に持っていた液体窒素を盛大にばらま

いてしまっていた。

片方いわく、男の魅力。片方いわく、何か分からないけど運命的なものを感じた。

5年経った今でも、千空は1ミリたりとも理解できなかった。

「あにうえは、ずっといるの?」

「ああ、2か月滞在予定だ」

次女・琥珀は千空にとてもよく懐いていた。日本の大学に通う千空が、彼女に会えるのは数か月に1度ではあるが、会うたびに抱っこ抱っここの嵐である。

長女・瑠璃も千空には懐いているが、遠慮がちで我慢しがちな性格のためか、特に妹の琥珀の前では千空に素直に甘えることはなかった。

「瑠璃ちゃんは男の子たちからモテモテなの。琥珀ちゃんはワンパクすぎてね、この間もシャミールのところの兄弟の下の子、泣かせちゃってね」

「ああ、あの金髪のほうの」

姉妹の成長の報告は、千空にとって科学の研究の次に楽しみであった。

(次点である。父親? TOP10のランク落ちだ)

「じゃあな、行ってくるぜ千空」

「行ってくるね」

千空滞在中毎朝の光景。

百夜はNASAへ訓練に。リリアンはスタジオへ打ち合わせに行きました。

残された千空は姉妹に『桃太郎』を読み聞かせ、その流れで桃の川の淡水に対してどんぶらこっこ可能な大きさとお婆さんの推定筋力の算出方法を、3歳児にも分かるように解説です。

「あにうえへ、抱っこ〜」

からの、抱っこランニング。

『アルキメデスの滑車の法則』を琥珀が理解できるまで。

「お兄様、抱っこお願いします」

からの、抱っこランニング。

『抗生物質サルファ剤の作り方の過程』を瑠璃が理解できるまで。

百夜から言い渡されたトレーニングメニューがこれであった。

ちなみにではあるが、琥珀は少しでも抱っこ時間が長引いてほしいと考え、理解できなかったという申告が遅く。

瑠璃は少しでも負担を軽くしたいと早く申告するが、答え合わせをするとボロが出るため結局は2人とも同じくらいの時間ランニングに至る傾向にあった。

「お前の最大の課題は体力だ。計算ランニング程度でバテるとは、俺の息子ながら情け

ないぞー！」

「いや、初日んは宇宙食ん中に入ってたマンゴーのせいだ。ウルシ科の植物にやウルシオールが入ってんだろ？ アレルギイーで喉がアンパンマン状態になっちゃってた。まあ体力モヤシゴ健在はミリほど弁明できねえがな」

夜、ヘトヘトになった千空を、帰宅した百夜・リリアンが温かい食事で癒す。

「ところで最終審査って日本人宇宙飛行士が面接するんでしょ？ アナタも面接官なの？」

「いや、流石に親子はダメつつつて断られた。出るのは、ミヤッチと紫と木崎と、吾妻さん、若田さん、星手さん、野淵さん・・・」

いや、立候補してたのかよ。というツツコミを入れる体力のない千空はソファーに寝転がる。

その上に琥珀がダイブして、彼の意識は光と闇の中に消えていった。

それから数週間後、千空の姿は最終試験会場にあった。

早く来すぎたため、他の参加者は1人しか到着していない。

「おつ、キミが石神千空くんか」

「南波六太だな。宇宙飛行士・南波日々人の兄貴の」

3次審査で別の班だった南波六太。

千空と同じく現役宇宙飛行士を家族に持ち、日本初の兄弟宇宙飛行士となる可能性を持つ男。

ヒューストンの弟の家に滞在していたため、千空と同じく会場に直行していた。

そんな2人が互いに顔を合わせて最初に思ったことは

『ブロッコリーみてえな髪型だな』

『ダイコンみたいな髪型だな』

であった。

六太は3次審査で2人選出に選ばれていない。

つまり「JAXAから選ばれた」人材。JAXAが欲した期待の星。

にはとても見えない、なんとも頼りない31歳という見た目であった。

「ちなみにだけど・・・お父さんから最終審査の事、何か聞いてる？」

「あ、？　んなチート行為するわきやねえだろ」

「だよね・・・」

緊張と筋肉痛で顔を強張らせる六太。それに反していつも通りに気怠そうにする千空。

そんなテンションで迎える最終審査。



は、結局のところあまりにもあつけなく、2次審査の面接とあまり変わらなかつた。何のための面接だったのか・・・そんな疑問だけが頭に残る面接が終われば、お疲れ様会である。

「それでは、今日はパーッとやろう。カンパイ！」

面接官の宇宙飛行士を交え、合格組の7人と関係者みんなで飲み交わすパーティー。というのは建前。

実はこのパーティーこそが最終審査の会場なのだ。

面接を経て全てが終わったと、肩の荷が下りて油断しきって「素」に近い受験者たちを細かくチェックする舞台。

ここで、宇宙飛行士たちは受験者たちを見極める。

目の前の奴と宇宙で生活を送っていけそうか。

自分の命を、こいつに預けることができるか、を。

「よくケンジ、千空。面接どうだった？」

「やあムツ君。順調だったよ」

「やる意味あんのか？ つつう感じだったな」

千空は六太と、同じB班のケンジと一緒に楽しんでいた。

そこに宇宙飛行士の紫がイタズラでコーラ瓶にコーヒーを入れたロシアンルーレットを仕掛けに来たりと、終始和やかな飲み会が続く。

3人とも、すっかり油断して「素」の状態となっていた。

ふと、千空はパーティー会場に、強面の男性の姿を見かけ近寄った。

「吾妻宇宙飛行士、どうもです」

「・・・石神百夜の息子か」

吾妻滝生。ISSの長期滞在を3回経験し、月調査兼月物資運搬ミッションに参加した有名宇宙飛行士。その性格は百夜と正反対でクールすぎる男であった。

「何か用か？」

初対面の候補生にこの対応。他の宇宙飛行士も、吾妻とは仲良くなるのは無理だと諦めるほどの冷淡な男。それが彼であった。

「ISSにアサインされる最短ルートが知りてえ」

冷淡にも物怖じしない男。それが千空であった。

この程度の冷淡な感じは、千空は親友の1人で幾度となく経験済み。今さら吾妻の冷淡さは慣れた者なのだ。

「そんなもの、あるわけがないだろう」

「だよな」

会話が續かない。続けるつもりもないであろう。

千空はあと一言くらい挨拶でもして去ろうとした。その時、吾妻が静かに口を開く。「一つだけ答えてくれ。死ぬ覚悟はあるか?」

唐突な問いに、彼らを見守っていたJAXAの職員が目を光らせる。

「んなもんクソほども考えたことがねえ。助かるルールを一から探す。死ぬ覚悟とか考えるだけ非効率的だ」

「・・・そうか。ビール、飲むか?」

千空の答えに、吾妻は小さく笑い、千空のコップにビールを注いだ。

吾妻には尊敬する宇宙飛行士がいた。今は亡きその飛行士から、かつて問われた命題。

死ぬ覚悟を、問われた時にたいがいは薄っぺらいYESを答える。

だが必要なのは生きる覚悟。NOと言える奴がいたら、そいつは信じていい。

この問いに、吾妻に対してNOと答えたのは、この夜までに3人だけ。

南波日々人と、石神千空。そして、南波六太だけであった。

「まあ、つってもいざ死ぬのが確定したら、てめえが死んでもOKプラン作ってから大人

しく死ぬけどな」

## JAXA編 その6

知らないうちにJAXA宇宙飛行士最終審査を終えていた千空。

彼の姿はフロリダ、オーランドケネディ宇宙センターにあった。

ここから今日、有人ロケット・アレスIに搭乗した南波日々人が月へと飛び立つ。

最終審査の最後のイベント。この大舞台にJAXA受験者と共に立ち会う・・・ハズだった。

「千空！　ここだここだ！」

用意された特等席というのが、打ち上げ現場から離れた宇宙センター内の管制室を、見るための客席の最前列の席であった。

百夜の粋な計らいという名のスタンドプレイ。当然、JAXAに許可を取ってはいるが、受験者の1人としてこの行動はどうなんだ？　と千空としては疑問を残していた。

「ここなら色んなデータがリアルタイムで見れるだろう？」

「リアルタイムのロケット発射、シーンじゃなく生で見せろよ」

そう不平を言う千空であったが、むしろ生の方の会場はお祭り騒ぎムード。千空向きではない。

こちらの現場のムードの方が、千空の感性には唆るものが揃っている。そのことを当の本人もしつかりと自覚しているのだ。

「打ち上げ2分前」

慌ただしく動く管制室。その光景は、6年前に見た百夜帰還の時とはまた雰囲気異なります、その生の臨場感が千空の好奇心をウズウズとさせた。

「打ち上げ10秒前・・・3・2・1・イグニッション。リフトオフ！」

弾丸よりも早く、あつげなく、周囲に衝撃波をまき散らしながら、ロケットははるか彼方へと発射された。

この日のためにかかった準備期間は、5年かかっただろう。

だが、いざ本番となればたったの8分。

着陸船にドッキングし、月軌道へ。その過程の全てを、千空はその目に焼き付けた。「どうだ千空。やっぱコッチのほうが正解だったろ」

「ああ。最高の土産じゃねえか」

千空はこの夜、興奮の中で一睡もできなかつたという。

その後、千空は日本へと帰国することとなった。

1週間後に、この最終審査の可否通知が自宅・職場に電話で伝えられる為だ。

「やだー！ー！ー！ あにうえといっしょににほんにいくー！ー！ー！！」

空港への見送りで、最後の最後まで粘ってゴネたのは琥珀であった。

下手すれば千空以上の力だがみつき、千空の力では微塵も引きはがせない。

「心配すんな。JAXAに入れりや、そのうちNASAに来ることになる。そんな時や嫌つつほど顔合わせんだ」

「ハハハ。まあ千空が合格すればの話だな」

高笑いする百夜。千空が不合格という図を微塵も想像していないのだろう。

「琥珀。貴女がイイ子にしていれば、きっとお兄様が合格するわ」

瑠璃のナイスフォローによく涙を拭った琥珀。

「じゃあ千空。いつてらっしやい。またね」

そう言ってマスク&目深帽子の一見不審者のリリアンが千空を抱きしめた。

そんな名残惜しい妹と義母たちと分かれ、実父の熱く抱擁をスルーして、千空は日本へと戻っていった。

それから1週間後。

千空の姿は広末大学の研究室にあった。

絶対にヤバイであろう薬に絶対にヤバイであろう薬を混ぜ、絶対にヤバイであろう機械にスイッチを入れていく。

そんな素人立ち入り禁止どころか一目散に裸足で逃げ出すような研究を、その隣で目をキラキラと輝かせているのは、彼の友人の妹、獅子王未来であった。

彼女は実年齢18歳ではあるがそのうち6年も意識不明の状態にあった境遇の少女。小学校6年間で丸ツと抜かして中学校へ就学。というのは不憫であるため、特別カリキュラムを受けて育ち、ようやく今、高校3年生相当の学力にまでたどり着いた頑張り屋であった。

中でも得意科目は科学。それは6年間、放課後に足繁く千空の元に通い詰めて、科学部や科学実験室のあらゆる実験を生で体験してきた成果からである。

「今日、合格発表があるんですね？ 千空さん。落ちちゃったらどうしようとか、ドキドキしてます？」

「まあ・・・お前が兄貴の敗北報告の心配するくれえにはな」

それなら心配ゼロミリだと、霊長類最強を兄に持つ未来はホッと胸をなでおろした。

T L L L L L L

突然鳴り響いた電話のコール音に、ビックリして椅子から転げ落ちる未来。

千空はそんな中でも、手にしたヤバイ液体の入った試験管を落とすことなく試験官立



てに置き、受話器を手に取った。

「あくもしもし」

「石神千空さんですね？ JAXAの星加です」

千空の反応を、未来はジツと机に隠れながら見守る。

「石神千空さん。おめでとうございます。我々JAXAはキミを宇宙飛行士として迎えます」

千空は、その手をグツと力を込めて握り、未来は顔をパアツと明るくし、気付いた時には携帯を手を取っていた。

「兄さん。兄さん！ やったよ、千空さんが！」

その夜、千空はJAXA宇宙飛行士新メンバーの1員として、記者会見の場に立っていた。

今回の合格者は5名。

新田零次、伊東せりか、南波六太、真壁ケンジ。そして石神千空。

色々な質問が記者から飛び、それに答えていく5人。

「じゃあまずはみなさんの今の心境を自己紹介を含めておねがいします」

記者たちの注目は当然、日本初の兄弟・親子宇宙飛行士となる六太と千空に向けられ

る。

『南波兄だ』

『百夜ジュニア』

『モジャモジャだ』

『ネギだ』

そんな中、千空に向けたのはマリリンモンローのような色気のある女性記者だった。

「石神千空さん。貴方を宇宙飛行士に導いてくれたものは何ですか？」

千空は彼女と顔を合わせ、互いにニヤリと笑い合うと、マイクを手に爽やかな表情で口を開いた。

「どうも、石神千空です……」

目を輝かせた爽やかフェイス。記者会見向けのお手本のような、千空らしくないその表情で一言呟いたが、彼はふと頭をボリボリとかいて、表情をいつも通りに戻した。

「つつうのは俺のキャラじゃねえわ。俺を導いてくれたモンに失礼だわな。だからこつからは、いつもソイツらに見せてる風にしゃべらせてもらう」

事前に会見なんだからお行儀よく！ と釘を刺していたJAXAの職員たちの顔が凍り付く。記者たちも何事かとザワザワする中、会場で唯一、その女性記者だけがアハと苦笑いして千空にカメラを向け続けた。

「話すとかソ長えが、一番最初はドラえもんだな。そこから今の俺が始まった」

記者たちが期待していた『初の親子宇宙飛行士なんだから、百夜の名前が出てくるはずだろ』という当たり前は、早々に消滅していた。

想定外すぎる千空のコメントに戸惑いが広がる。

そんなものに構うことなく、千空は話を続けた。

「そこから仲間が増えた。体力やら何やら、俺に無いモンを持った色んな奴ら。それつらとの絆全部が俺をここまで支えてくれた。ああ、親父の百夜もその1人だ。なら、今度は俺がそれに応える番だろ。絶対に宇宙飛行士になる。俺があいつらに返せてやれるのは、それだけだ」

千空の熱い思いに、カメラのフラッシュユがこれでもかと光る。

まあ、これはこれで良い記事が書けそうだと。

こうして、JAXA宇宙飛行士、石神千空が誕生した。

いや、誕生はしていない。

それはJAXAの新入社員の入社式で、説明された事実。

正式には、千空たちは『宇宙飛行士候補者』と呼ばれる段階なのだ。

JAXAでのオリエンテーションを経て、NASAでの基礎訓練がひたすら続く。

その期間、一年半から2年間。

それが終わってようやく、彼らは正式に宇宙飛行士に認定される。

とはいえ、実感が無いわけでもない。そりや“コスチューム”を配布されれば、実感してしまふのは間違いない。

ある日、千空たち候補生5人はJAXAの大会議室に集められていた。普段の講習のある小会議室ではなく、わざわざ5人を呼び出した理由。思い当たる節といえば、その直前に起きた月面の大事件。南波日々人が月面で事故に遭い、仲間を助けたことで勲章を授与されていたこと。

ではなく、5人へのコスチューム授与式だ。

「いやあ、キミたちを見ていると戦隊ヒーローを思い出すよね。五人五色とでも言うべきか。真壁君はレッドだね、リーダー的だし。新田君はクールだからブルーに決定。石神君はイエロー、一番若いし。伊東さんはもちろんピンク。で、南波君は・・ミドリ」  
無意味な話は友達とするから楽しいのだが・・理事長からされてどう反応すればいいのか。と、千空は退屈そうに欠伸をかみ殺した。

「とまあイメージカラーが決まったところで残念なお知らせです。みなさんにプレゼントを渡しますが、一色しかありません。昔から基本はこの色と決まっていんだってさ」  
こうして大きな紙袋を渡された5人は中身を見て喜んだ。

「おっ」「やった」「カッコいい」「本物だ」

それは青一色のジャンプスーツ。宇宙飛行士のコスチュームだ。

「さてみんな、気分が高まってきたところだろう。その意気のまま我々は明日の朝、出発する。わかってんね。いよいよヒューストンでの合同基礎訓練が始まるよ」

合同基礎訓練とは、各国の新人宇宙飛行士候補生がNASAに集まり同メニューの訓練を行うもの。

低コストで短期間に一流の宇宙飛行士を育てるためのプラン。

そこで出会う各国の強者共は千空たちと全くの同期生。

一番の仲間となり、一番のライバルとなる奴ら。

そんな新たな出会いに、千空はこれから挑むこととなる。

## NASA合同基礎訓練編 その1

世界中の新人宇宙飛行士候補生が集まる合同基礎訓練。

約2年間の戦いに今、千空は旅立とうとしていた。

渡米前夜。千空への送別会がレストラン貸し切りで開かれていた。

「ハッハー、俺たちの千空の無事を祈って、乾杯だ！」

主催者である七海龍水。本当なら船上パーティーにするつもりだったが、彼は千空たちを乗せた船を沈没させ遭難に追い込んだ前科があったため却下されていた。

乾杯の音頭と共に、8つのグラスが掲げられる。

「千空様、祝杯が遅れてしまったことお詫び申し上げます。そしておめでとうございませう！」

龍水の執事・フランソワが90度キチツとお辞儀すると、千空は「いいや構わねえよ」とニヤリと笑った。

「うん。2年も訓練をするのは心配だが、千空ならやり通せると信じているよ」

「アタシらのスパルタ特訓の成果。他の国の奴らに負けんじやないよ！」

「その通りだ！」

ゴリラ3人が豪語すると、千空は軽く手を挙げてハイタッチを求めた。

ゴリラ1号。未来の兄にして霊長類最強の男、獅子王司。高校生の時から霊長類最強だが、今でも霊長類最強・いや、下手をすると動物界最強のシロクマすら素手で倒しかねない。

ゴリラ2号。花田仁姫。通称ニツキー。元・女子柔道家で、引退した今はタレントとしてマルチに活躍している。見た目のゴツさとは裏腹のピュアな乙女な中身が人気である。千空の義母のリリアンが歌手をしていた頃からの大ファンで、今でも健在だ。

ゴリラ3号は、お馴染み大樹。説明不要。

そんなゴリラの手と衝突した千空の手からバチンと大きな音が3つ鳴り、痛みにはうずくまった頃に未来が周りを見回して気付いた。

「そういうえば1人足りないよ?」

「あくそれね。自衛隊って簡単に休めないのよ。だけど大丈夫、ちゃんと電報くれちゃってるから」

そう言ってゲンが取り出したのは1枚の手紙。

それはこの場に居ない千空の友人の最後の1人からの手紙であった。

(故人ではない。単純に職業上の都合で不在だけである)

『おひさしく千空ちゃん。ジーマーで驚きだけど、やっぱさすが千空ちゃんだよね。と

りま夜間訓練とかで夜空見る機会あったら、いつでも見上げちゃうよ。あと、ドイヒーな落下して海に落ちちゃっても、すぐに助けにいつちやうから安心してね〜』って  
「さ」

「そんな文章を彼が？」

「翻訳だろ」

こうして笑い合う千空たち。だがこれもあと2年は・・・下手をすれば・・・いや、上手くいけば、もっと・・・

「千空くん。これをどうぞ！」

そう言つて杠の手から渡されたのは、小さなお守りであった。

「みんなで一針ずつ入れたんだよ。訓練頑張れますように、つて」

「御心配痛みうるぜ。ありがとな」

そう言つてお守りをしっかりと握りしめる千空。普段であれば迷信や信仰やらを一気にしない彼であったが、仲間の想いは別・・・

というのも別の話、お守りにでもすがりたい気持ち一杯であった。

何故なら合同基礎訓練といえば、宇宙飛行士に必須のスキルと言えば・・・

そう、サバイバル能力。

自衛隊・軍隊のしごきレベルのハードな超・遠足が待ち構えているのだ。



次の日。

千空たち5人の宇宙飛行士は引率の職員と共にヒューストンへと飛び立った。訓練開始までの10日間は各々が物件探し。

千空の元には、当然と言えば当然の、少女2人の抱擁と1人の大人の抱擁スルー、1人の女性不審者の抱擁が出迎えてくれる。

「千空がついにアスキャンか・・・大丈夫か？ おめえ」

「あにうえ、アスキャンってなあに？」

「宇宙飛行士候補生のことだ。俺と同じな。今回は30人が参加するってよ」

「百夜、それって大変なの？」

「ああ。毎回必ず数人は脱落者が出る。諦めちまうパターンだけどな、自分は宇宙飛行士に向いてない、って」

「お兄様なら、大丈夫そうですね」

そんな家族との時間も、あと10日ほどで一時おさらば。

ハードでドイヒーな日々が、これから始まる。

いよいよ始まる訓練。

厳しそうな訓練教官は最初に宣言した。アスキャンの訓練内容はムダが多い。よって彼は本来2年かかる訓練内容を1年半以内に終わらせる、と。

やる気はものすごく感じられる。が、つまりは通常の1・3倍はキツイ内容になる、ということだ。

そんな1・3倍訓練の最初の課題は、千空を殺しにかかるレベルの内容であった。

簡単に言えば、6日間で70キロの荒野を歩き切る、というもの。

・重さ約12キロの荷物を背負い、40度超えの熱射の下、ひたすら歩く。

・6人組5チームに分かれ、毎日リーダーを替える

・リーダーはタイムテーブル、道順、歩行距離、食事など一日の行動の全てを決める

・全班には指導員として2名の先輩宇宙飛行士が同行する

ルールはこの程度だ。

千空はEチーム。メンバーはJAXAの5人にインド人女性候補生を加えた6人である。

いざスタート。

他のチームは、やはり外国の血があるためか体格に優れたメンバーが揃い、Eチームの移動速度は5チーム内で最悪であった。

女性2人というハンデもあるが、それ以上に千空が足を引つ張った。

「ゼーゼー」

一切しゃべらない。しゃべる余裕が無い。

「石神くん、無理しないでいいからね」

「ジュニア、根性見せろよ」

リーダー・ケンジが千空のペースを気遣いながら進むこと、14時01分。昼食休憩と指導員合流のポイントに到着する。

そこで指導員から告げられたのは圧倒的最下位の実事。

さらに遅れた罰として腕立て伏せ33回を命じられた。

当然、体力残量わずかの千空は一発で成功させられるはずもなく、何度か土と接吻を交わすこととなった。

まだ全行程の5%にも満たないうちからこの仕打ち。

再出発後、リーダーのケンジは歩行スピードを上げていた。順位が気になるのもあるが、日が暮れる前に次のポイントにたどり着かなければならない。そこに夕食用の食糧があるからだ。

このサバイバル訓練には大きな意味がある。

宇宙から帰還した際にソユーズやオリオンが着地地点を大きくずれてしまい遭難し

た際に対応できるようにするためだ。

「あつたよー、こつちこつち」

日が暮れ始めた頃、ようやくポイントにたどり着いた千空たち。草むらに隠された食料を発見したのは、こと食べ物に関して鋭い嗅覚とカンを持つ伊東せりかであった。

今日はここでキャンプとなる。

ケンジの指示のもと、テントを張り、薪を集め、食事を準備する。

ようやく一息つくことができた。6人の足は棒のように感じられていた。いや、千空に至ってはそれ以前というか、何というか。

「おいお前ら、順位が出たぞ。お前らEチームは歩行距離11.2キロぼっち。最下位だ」

指導員の叱咤が走る。他のチームは食料を手に入れてからさらに前に進んでいたのだ。

「ペナルティだ。リーダー以外の1人だけに罰を受けてもらう。ジャスト1時間『気を付け』の姿勢でつつ立ってろ」

最下位の罰。この最下位の原因は誰が見ても明らか。

「ククク、俺つつうことだ」 「俺がやるよ」

戦犯千空が罰を受けようとした時、六太が拳手をして割って入った。

「心配ないって。石神君に負担を負わせないよ。フツ」  
なかなか男らしい姿であるが、その魂胆は『どうせ罰が回ってくるなら、まだ体力のあるうちにやっておこう』というものであった。

それからEチームは最下位ロードを爆走。

3日目は千空がリーダーを務めてはいたが、こうも単純な体力勝負では得意の思考力の活きる機会はゼロ。

4日目に一時、4位に浮上することができたが、結局は最終日には最下位に戻っていた。

『情けねえ。ここらまでミジンコが足を引っ張って、あからさまじゃねえか、おい』

千空は歯噛みしていた。この最下位の原因は自分にあるのだと。

仮に千空の体力面が人並み以上だったとして、結果が変わっていたかは誰にも分からないが、この6日間で千空が役に立った場面は一つも無かったのは紛れもない事実だ。

ゴール後、休む暇も無くジャンプスーツに着替えさせられ、次の課題の担当指導官、技術者と引き合わせられる。

次の課題は『カムバックコンペティション'26』への参加。  
キャンセツトを打ち上げ、パラシュートで着地させ、ローバーを起動させ、フラッグ  
を目指し距離とタイムを競う。

その打ち上げの方法は、ロケットだ。

## NASA合同基礎訓練編 その2

合同訓練第2の課題は、2週間後のカムバックコンペティションへの参加である。

配布されたロケットを打ち上げ、パラシュートを展開させ、着陸したローバーでゴールを目指す。

各チームは順位に応じて、その製作指導の技術員を選ぶことができ、製作費用も高順位ほど多く与えられる。

となれば最下位の千空たちの境遇は最悪のものしか残らない。

資金面はまだしも、担当技術者が最悪であった。

「おめでとう、ある意味おめでとう。全5班の中で君らが一番自由だぜ。自由気ままにやってくれ。俺のスイッチは今オフなんだ。口も出さねえし手も出すつもりはねえよ」

サポート役のピコという飲んだくれ技術者が、まったくサポートする気が無いときた。

彼の言い分としては、このコンペのためにNASA候補生以外の参加者は半年以上前から準備をしている。そこに初心者が2週間で勝てるワケがなくテンションが上から

ない、というのだ。

「とりあえず訓練手順書のルールをよく読んで考えよう」

ケンジがリーダーとなり、手探りで解決策を探り出す6人。

主に作るモノは空中でロケットから放出され自動制御で目的地に向かう『キャンサット』。ローバー+パラシュートである。

設計図は、去年の大会に参加した人がネットにあげていたため対応可能。

自動制御のプログラミングは、Eチームメンバーのインド人女性が小学校の頃から経験していたため担当。

ローバーは自動車設計の仕事をしていた六太がメインで担当することに。

残るケンジ・せりか・新田がパラシュートを担当したりサポートに回ることに。

「ん？ 石神くんは手伝ってくれないのかい？」

ケンジがそれぞれの役割を明確にしていく中、千空だけはローバーにも自動制御にもパラシュートにも携わらないと宣言していた。

「俺が担当するのは、ロケットだ」

「ロケット？ ちゃんとした物が支給されるから手を加えなくてもいいんだよ」

「手を加えんな、とは書かれてねえ。アホほどスゲエ改造を施してやるぜ」

自信満々な千空であったが、ピコを含めたメンバーの視線は少し冷ややかであった。



「作ったことがあるってのかわ？」

「ああ。第1号は中1ん時な」

「ペットボトルとは勝手が違うんだけどな」

「あ？ 工作の授業じゃねえよ。自作の本物だ。たしかにそんな時やギリでカーマンラインにや届かなかったが・・・」

千空の言葉に誰もが耳を疑った。唯一、ケンジだけは3次審査の時に話では聞いていたが、自作に至っていたとは夢にも思っていなかった。

カーマンラインといえば高度100km。宇宙空間との境目の概念。とてもではないがペットボトルロケットで届くような次元ではない。

「嘘つけ。そんな事、絶対に不可能だ」

そう言つてピコは声を荒げた。ピコ自身、15歳の頃に同じように仲間と共にロケットを自作したことがあった。故に千空の話が全く信じられないのだ。

「不可能？ 技術者様の御意見じゃねえだろ。姿勢制御と誘導のプログラムさえあさりゃ・・・（云々）・・・2段エンジン構造次第で、高校生の小遣いレベルのブツと燃料費でいけんだろ」

半分ほど単語レベルで理解できない候補生一同。

全てを理解できたピコだが、彼が思っていた以上に千空の知は深く正しいものであつ

た。

とどめに、千空が取り出したスマホには、彼を模したぬいぐるみが地球をバックに低重力空間を漂っている写真が映し出されていた。ファイルの保存日時も、たしかにそれを裏付けている。

「まさか・・・本当に?」

「ロケットも斜めに飛ばしやミサイルつつうのは強引だが、実は多少のノウハウは習つてある。多少イジつて2段階エンジンにガソリンでもぶち込んで、2週間もあれば、目標はゴールの誤差200m程度へご案内だ」

千空の自信満々の宣言に、5人は思わず歓喜の声を上げていた。

「なるほどそれは頼もしいね」

「これって、ひよつとすると1位とか狙えるんじゃないですか?」

「いや、ローバーにパラシュート。ロケットも試したわけじゃねえ。問題山積みだろ」

浮足立つEチーム。だが、まだ現状は絵に描いた餅。何一つ現物にたどり着いてはいないのだ。

実際に手を出すと、意外にも全てが高難度。

パラシュートは絡まって上手く開かない。

ローバーは障害物に当たると一切前に進まない。

そしてロケットは強風に左右され、キャンサットを射出ポイントが安定しなかった。さらに言えば、会場周囲の上空はこの時期、強い風が吹くことで有名であった。

「まあ、当日の強風は現地データを取るしかねえ。前のチームの飛ばしたロケットの軌道を見てその場で修正する話だ。発射順を決めるくじ引きさえ一番目を引き当ててしまわなきゃ大丈夫だ」

千空のぶつつけ本番計算への自信がどこから来るのか5人には理解できなかつた。

とはいえ、他の2つに関しては初心者では手を出せない問題。千空にとっても専門外の領域。

そこに良案を出したのは、六太であった。

「ローバーはプログラムをいじるだけで回避できねーかな？ 5秒以上進まなかつたら少しバックするって命令を加えて、角度を軽くずらしてまた走り出す」

「タイヤの直径を大きくすればスピードも出るし障害を越えやすい。だけどシャトルの構造で限界もある。拡張型のタイヤにしたいけど、重量が気になる。なら、タイヤをスポンジで作ろう」

技術者の考え方ができる六太のアイディアは、どれもが最適な方法であった。

その活気に引つ張られ、飲んだくれピコも重い腰を上げる。

「パラシュートの『パ』ぐらいは教えてやってもいいかな」

ピコの指導員としての実力は本物であった。

パラシュートのたたみ方もそうだが、その考え方からしつかりしている。

帰還ロケットにも使われるパラシュートを意識して、仲間の命を預かっていると考える、ということだ。夫や恋人に無事に帰ってきてほしいと願う。その気持ちで作業をしろ、と。

そういうこともあり、女性メンバーのせりかがパラシュートの担当となった。

「隣の男の命を預かったつもりでやってみろ」

と指示され、彼女は六太に目を向ける。

「あ・・・お・・・お願いします」

頬を赤らめ、胸をどきどきさせる六太。だが不安をぬぐえないせりかは「落ちたら・・・ごめんなさい」と声小さく答えた。

それからEチームの作業は順調そのものであった。

ロケットは無風であれば目標50mの地点に射出できるようになり、パラシュートもほぼ完璧に開き、ローバーも無事に走行するように。

この過程の中でEチームは宇宙飛行士の仕事ではないが、飛行士にとって大切なものを経験していた。

期日までに日程を決め、経費を予算内に収め、プログラミングをし、ロケットを打ち上げ、ローバーを無事に着地させ、目的地に誘導する。この一連の流れはまんまNASAの仕事。

地形や天候を熟知し、その環境に適したローバーを作り出す。パラシュートをたため、確実に開くようセッティングする。これは技術者たちの仕事。

そう、千空たちが体験しているのは、宇宙開発の縮小版。宇宙飛行士を無事に送るため、支える側の人たちがやってきた仕事なのだ。

当日。想定外は尽きないものだ。

減多に降らないこの砂漠地帯でまさかの局地雨。地面が濡れて水たまりができていたのだ。

Eチームのローバーのタイヤはスポンジ。このままでは泥水を吸ってすぐに動かなくなってしまうのだ。

このピンチに、6人中一番くじ運の良さそうなインド人女性、前チーム観察用の千空以外の4人が手分けして代案を探し求めた。

そして見つけたのはシリコンボンド。ゴムのようなコーティングができる代物であった。

全て解決。

あとは本番が上手くいけば・・・

「今さらだけど、コイツに名前つけときやよかつたな」

発射前のローバーを見ながら、六太はふとつぶやいた。

「何がいいかな?」「ピコさんと僕たちE班のローバー」

せりかとケンジが口に出す中、六太はボソツと「ピエコ(PIECCO)」とつぶやく。

「ピエコ・・・女だったのかこいつ」

こうして、ピエコは打ち上げられ、ゴールに向かって疾走した。

落下ポイントはゴールから150mの地点。そこから一気に駆け抜けて無事にゴール到着。

ル到着。

コンペ全参加者の中でゴール到着は2チームだけ。優勝は日本の社会人チームであった。

千空たちの敗因としてはローバーの性能。疾走と呼べるレベルに達していなかったことで、2秒のタイム差で敗北していた。

が、この成果で千空たちは、アスキャンにおいて一気に1位に浮上したのだった。

(ちなみに1位の社会人チームは、3次審査で六太、せりか、新田と同じA班にいた福田という人が務める『スイングバイ』という会社であった)

こうして、千空たちの約1か月の泊りがけ訓練はひとまず終了した。

ようやく家路につくことができ、玄関を開けると、千空とは正反対に元気溢れる足音が聞こえてくる。

「あにうえ〜」

「おかえりなさい〜い」

が、最愛の妹たちの到着を待たずして、千空の『疲労感なんざ無視が合理的』スイツチが限界を迎え、バタンと泡を吹いて倒れたのだった。

## NASA合同基礎訓練編 その3

合同訓練も幾多の月日が過ぎていた。

そんなある日、NASAエーリントン飛行場に千空たちの姿はあった。

宇宙飛行士に認定されるにはジェット機T-38の操縦資格が必要になってくる。

航空力学に始まり、エンジンシステムなどのメカニクス、基本的な航法、各種飛行ルール。

体力ブツパと実習ブツパの日々が嘘のように、今は座学ブツパの積み込みとなった。

なんせ空軍の学生が3週間かけて習う内容を、3日間で覚える。覚える量の多さにパンク寸前になるほどだ。

それを5日後に筆記テスト。その結果によって、ジェット機の訓練の優先順位も決まってくるという。つまり、ここで気を抜く人間はどんどん取り残されていくということだ。

という厳しい日々の中でも、しっかりと行われるのがパーティー。

この日は宇宙から帰還した六太の弟、南波日々人。日本人初のムーンウォーカーの祝賀会。



さらに特別ゲストとして、南波兄弟が幼い頃から親交のあるシャロン博士という天文学者が来てくれていた。

「ほお、峻るじゃねえか」

天文学者の登場に千空も興味惹かれる。

宇宙の神秘、地球から離れた星や空間の姿を見る術に長けた、人類最強の職業。それが天文学者だからだ。

だがこの時、千空は知らなかった。シャロン博士自身も知らなかった。

気付いたのは、元女医のせりか。シャロン博士のわずかな異常。緩徐な筋力低下、筋繊維束収縮の反応。

それはALS。筋萎縮性側索硬化症であった。運動を司る神経が蝕まれ、徐々に全身の筋肉が動かなくなり、やがて死に至る難病。

せりかの父が発症後、2年10か月で亡くなったこの難病に、博士は罹患していたのだ。

その後、筆記テストはおこなわれた。

シャロン博士の病気にショックをうけた六太は最低点を取ってしまい追試を言い渡される。

その事情を聞かされた千空は、それでも最高点を叩き出し、好成績の候補生を担当する教官に割り当てられた。

『ブロッコリーみてえだな』

担当官は六太並みのアフロヘアー。

名前はアレクサンダー・ニコラス・フィリップス・メディナカロス。

『いろいろと込み入りすぎだろ。渋滞してんじゃねえか!』

そんな千空のツツコミであるが、いざフライトが始まると、その余裕は秒で消え失せていた。

飛行機の操縦訓練は、とにかくやることが多い。

管制との交信をしながら、風向や風速、高度、レーザーといった様々な計器に気を配らなくてはならない。

宇宙飛行士に求められるマルチタスクの技量。時間内に多くの仕事を正確にこなす瞬発力が求められる。

だけに留まればいいのだが、一番は体にかかるGである。

地上の何倍もの重力が体にかかり、負荷に耐えきれなかった千空は何度も吐いていた。

「おい、大丈夫か？ 千空」「大丈夫、千空？」「お兄様……」「あにうえく」  
家に帰ってしばらく口にするのはお粥という日々。

心配する家族の声が、辛うじて千空の気力を保つのに役立っていた。

「あ、あ。なん……とか」

きつと、ヒューストンにこの家が無かったら耐えられなかった。1人暮らしだったらタイアしていたかもしれない。

「そーいやあ、瑠璃、琥珀。お前ら背え伸びたんじゃねえか？」

このころには、千空のアスキャンも1年を経過していた。

瑠璃は6歳、琥珀は4歳である。

「瑠璃ちゃんはね、もうモテモテなのよ」

「おつ、お母様。そんなことは」

頬を赤らめる瑠璃。千空はその頭を優しく撫でた。

「兄さま！ 私も私も！」

「琥珀は、まあ相変わらずのお転婆だな。同じ保育園じゃ、間違いなく最強だ」

琥珀の頭を撫でる千空。指に返ってくる力強さが、妹のパワーを感じ取る。

おそらくだが、彼女ならジェット機のGに耐えられるだろう。

「まあ、単純に筋力だな。Gで血液が足に移動して脳に酸素供給ができなくなる、そいつ

が原因だ。つつうことは、筋肉で強引に血流を押し戻してキープする。俺に必要なのはソイツつつうことだ」

千空の行動は早かった。迷っている時間は非効率的。

国際電話で友人に教授を乞う。

「重力に負けねえ下肢筋力の鍛え方を教えろ」

「うん。耐G訓練というやつだね」

電話の相手、獅子王司は備えていた。

彼は宇宙飛行士の訓練について予習していた。

いつ千空から相談されてもいいようにと。

「俺は約束した。千空、キミを宇宙飛行士にするかね」

「ああ、おありがてえ」

指示されたトレーニングは2つ。

1つは、臀部から足の先までの下半身に力を入れる筋力訓練。

もう1つは、胸の大血管の血圧を直接上昇させる呼吸法の取得である。

理屈は分かっても、それ体現するのは体力音痴の千空にとって過酷な話である。

「と、思っ筋電データを作っておいた。力の入れ方と呼吸法の、俺が実際にやってみた筋運動パターンさ。いつもみたいに使ってくれ」

それは、2次審査・3次審査の筋負荷・ランニング課題に発揮された千空の運動方法。言ってしまえば、体の使い方の上手な人の体の使い方を、無理矢理電気力で再現するという、科学的コピー&ペースト筋力訓練なのだ。

「いつもすまねえな。そういやあお前、タイトルマッチの直前だろ？」

「あと10分後だね。気にしなくていい、すぐに終わらせてくる」

その後、千空は電話の相手がタイトル防衛戦で対戦相手を3秒でKOしたというニュースを目にした。

そこからは訓練に次ぐ訓練。

ジェット機に乗っては、家に帰って体に電極を付けて筋トレ。

耐G訓練機器、グルングルンマシンに乗り、否応なしの回転速度に回されては、家に帰って呼吸法を鍛える。

「吸血鬼や鬼とでも戦うってか？」

「柱の男もいるぞ〜」

ふざけてからかう百夜の頭に、「邪魔しないの！」とリリアンがアメリカンクラッカーをぶつけた。

このトレーニングにより、千空は無事にT-38の操縦資格を獲得。

人生最大の難所を乗り越えたのだった。

飛行訓練を終え、次の訓練は世界最大のバカデカ屋内プールで無重力訓練（正確には月面ほどの低重力を再現した訓練ではあるが）。

これは楽しい時間であった。

動きづらく、閉塞感のある、薄暗い水中ではあるが、全ての宇宙飛行士を目指す人間の憧れ。オーソドックスな寸胴体型の、宇宙服を着ることができからだ。

「ククク。ここまで何年かかった？ ええ？」

最初は1人で着替えるのにも一苦労なこの宇宙服に1人で着替えられるようになった時、千空は自分がようやく宇宙に行くステップに立っているのだと実感できたのだ。

ちなみに、六太はハンガーでプールにゆっくりと漬けられる際に、親指を立てて「アイルビーバツク」とターミネーターごっこをしていた。（が、ターミネーター2のラストシーンはその台詞ではなかった）

その後も訓練は続く。増える。増える。

知識量も増える。筋力も増える。

そして時は流れ2027年

ついに千空は、認定書と記念バッジを手に入れた。

これを以って正式にアスキャンではなくアストロノートと。

あとはアサイン、任命を待つだけで宇宙へと旅立つことができる存在・・・

宇宙飛行士を名乗ることになったのだ。

日本初の親子宇宙飛行士の誕生。

その瞬間に立ち会っていた百夜が千空に手を差し出した。

「1つの宇宙史が動く。そんな瞬間に、その場にいたJAXA仲間の六太、ケンジ、せりか、新田も祝福の拍手を送る。

「おめでとう、千空。これで俺たちは・・・一緒に行こうぜ、宇宙に」

「ククク。同時アサインのミッションが来るのに何年かかるか知らねえが。ああ、1ミリ程度は期待しといてやるよ」

ガシツと握り合う親子の手。

3700年の時が流れたとしても、実現しなかったはずのこの握手。

それを知る由もない誰もが、この光景に何とも言えない感動を覚えたのだった。



## NASA宇宙飛行士編 その1

ついに念願の宇宙飛行士、アストロノートになった千空。

「おめでどう！ 千空ッ！」

「おめでどう千空くん！」

ヒューストンまで飛んできた大樹と杠を、千空が空港で出迎える。

「つつうかどのみち取材やらでJAXAに戻る予定だつつつて教えたよな？ 再来週にや日本に行くんだ」

そう悪態をつきつつも、千空の顔はニヤリと笑い嬉しさを隠しきれずにいた。

「いやあ、だがすぐにでも祝いたくてな」

「居ても立っても居られなくて来ちゃった」

ニヤけ顔が止まらない千空。親友2人の前だからできる顔だ。

「つたく、どいつもこいつもおありがてえ。祝電で十分なんだがなあ暇人ども」

「へっ？」

千空の言葉の意味に引つ掛かる杠。雑な頭の大樹は一切、そのことには気付かなかつた。

「やあ、遅かったじゃないか」

「つ、司あ!？」

石神家に招かれた大樹と杠の目の前には、玄関先で瑠璃と琥珀を両肩に乗せて立つ獅子王司の姿があつた。

「な、アホほどツツコミどころあんだろこの光景」

「ああ。司！ その抱つこの仕方は危ないから止めるんだ！」

大樹の叫びに、高い所を全く怖がる様子のない姉妹の姿を指さした千空が「そこじゃねえよ！」とツツコミを入れる。

それを見て笑いながら、司は2人をゆっくりと下ろした。

「あの、司くんつてたしかもうすぐ防衛戦があるんじゃないやなかつたっけ？」

「うん。今夜だよ。だからあと少ししたら行かなきゃならない」

爽やかに言つてのける司であるが、総合格闘技世界王者の座を守る戦いの数時間前にウォームアップもせずに何をしているんだか、と杠は苦笑いしかできなかつた。

「せっかく広末高校のメンツが揃つてんのに忙しねえ話だな」

「司おじちゃん、もう行つちゃうの?」

まだ25歳なのだが、上目遣いの琥珀に言われてしまつては訂正できないと、司は彼

女の頭を優しく撫でた。

「ああ。今度来る時はお土産に金のトロフィーを持ってきてあげるよ」

「やったあ！」

司が手でトロフィーのシルエットを作ると、瑠璃と琥珀は手を握り合って喜んだ。

「おお、なんだそんなに嬉しいのか。女の子って、トロフィーとかが好きなんだな」

「なのかな？ 私はそうじゃなかったかも」

大樹の天然発言に、杠は姉妹の様子に何か引つ掛かった感じを残して呟く。

「金だよ、金」

「溶かして金の糸にすれば、スターリング冷凍庫の材料になるわね」

目を輝かせる琥珀と瑠璃の口から出てきた初耳の単語に、目を丸くする3人。

「ポンプ2本でシユポシユポやって、金の糸をブチ込んだとこ通して空気を行ったり来

たりさせりゃ熱が移動して、冷凍庫になんだろ？ あれだよ」

さも当然のように説明してのける千空だが、3人の目は丸から元に戻らなかつた。

「だがな瑠璃、琥珀。純金じゃなきゃ意味ねえぞ。残念だがトロフィーは鍍金だ」

「うん。トロフィー溶かす前提をどうにかしようか」

というつかの間の間の休息を経て、ついに千空の宇宙飛行士としての日々が始まる。

宇宙飛行士千空の仕事、その1。基礎訓練。

宇宙飛行士全般に必須のステータスは体力。これに尽きる。

よって、候補生だったところと何ら変わらない体力訓練がこれからも引き続き続くのだ。

さすがに千空もこう毎日鍛えていけば体も慣れてくるもの。

相変わらずの体力最下位ではあるが、ぶつ倒れることは無くなっていった。

仕事その2。NASAの各部署に配属され、そこで研修。

宇宙飛行士たちの普段の仕事は様々な分野での研究・開発・雑務などの普通の会社のような業務だ。

実際に宇宙に行く任務にアサイン（任命）されれば、任務のための訓練だけにはなるが、その指示が届くまでは仕事をして待つしかない。

期限はない。数か月なのか数年なのか。いつアサインが来るのかは誰にも分からないのだ。

多くの宇宙飛行士にとって辛い時間でもある。

が、千空の場合は科学部署に配属されていた。

「ようこそ、千空石神」

白衣を着た職員たちに出迎えられ、千空は研究室へと足を踏み入れた。

「キミの噂はかねがね。歴代の候補生の中でもトップの成績だそうじゃないか。座学の」

「体力は歴代ワースト1だけど」

「それでもただの科学者の我々よりはマシだろう」

そう笑って盛り上がる研究所の職員たち。雰囲気としては明るく楽しい職場といった様子だ。

だが、部屋の奥でこの明るい雰囲気と交わるつもりが無さそうな、鋭い眼光の男が座っていた。

男はおもむろに立ち上がると、カツカツと千空の元へ歩み寄った。全くの新人に自ら接触するタイプではない男の普段の様子を知る職員たちは首をかしげる。

「やあ、待っていたよ。Dr千空」

「待たせたな、Drゼノ」

ゼノが手を差し伸べると、千空はニヤリと笑って握手に応じた。

「さっそくだが、僕を宇宙に連れて行ってほしい。それがキミの配属先をここにした理由さ」

職員たちは頭にクエスチョンマークを並べた。

さっそくというか、さっそく過ぎるというか、意味が分からない。

だが千空は「なるほど」と言って理解してみせた。

「いやいや、何がどういうこと!？」

「分からないかい？ Dr千空には僕になってもらうのさ」

「脳みそ切り開いて交換するってよ」

ケロツと言つてのけるゼノと千空のトンデモ発言に、職員たちは「マッドサイエントティスト!」と叫んだ。

「まあ冗談はさておき。僕は宇宙飛行士じゃないから、宇宙で実験ができないんだよ。いつもみたたく宇宙飛行士に代理で実験をやらせるのにも限界があるのが不満なんだ。そこで彼の登場さ。Dr千空には、僕と同じレベルの科学力を手に入れてもらおう」

「Drゼノと・・・同じレベル!？」

ゼノの頭脳の化物っぷりを間近で見ている職員たちは「無理無理」と手を横に振る。

「それよか問題があんだろ。俺が宇宙に行けるかどうかだ。下手すりゃDrゼノ、お前が死ぬまでアサインされねえ可能性だつてあんだぞ」

何様のつもりだ! と職員たちのツツコミが千空に向きそうになる。だが、その様子からしてゼノと同程度の科学の知識を身につけることを現実的に考えていることがうかがえた。

「キミはISSのバックアップクルーに選ばれる。極秘情報だけだね。それが確かだから言っているんだよ」

「ほお」

ゼノの口から飛び出したトンデモないトップシークレットの情報に、職員たちは卒倒しそうになる。

バックアップクルーとは“控え”の宇宙飛行士のことである。

ある任務に対して、アサインを受けた宇宙飛行士が任務に対して長期間訓練を行う際に、バックアップクルーは同時に全く同じ訓練を受ける。

万が一、本来の宇宙飛行士に何かしらの支障が生じ、任務に参加できなくなった場合に、バックアップクルーが代わりにその任務に就くのだ。

よほどのことが無ければ支障が生じることは無く、控えの出番が来ることは無い。

だが通常、そのバックアップクルーは、その次の任務の際に正式なメンバーとしてアサインを受けるのだ。

「まあ、現時点でバックアップ4名枠のうち、正式に決まっているのは1人だけなんだが・・・この時点でキミも確定だろう」

「ククク。あの親父、今頃サプライズで発表する気マンマンだぜ」

その光景を想像して笑うゼノと千空。

そう。ISSのバックアップクルーに、百夜が選ばれているのだ。

「順調に行けば2年後に親子で同じ任務に就きISSに行く。これはNASA史上初の快挙。宣伝効果抜群のイベント。ゲイツが食いつく話だろ？」

「ゲイツ？」

「NASAのマネージャーさ。言つてしまえば宇宙開発の全ての決定権を持つ男。合理主義の塊。Dr千空、キミも宇宙飛行士なら覚えておけ。ゲイツを敵に回すな」

このゼノの話を、千空は半ば本気には受け止めていなかった。

こうして、千空の宇宙飛行士としての進路は、ISSのクルーを目指す方向に舵を切ることとなった。

なお余談ではあるが、千空と同じJAXAメンバーの1人、南波六太もまたISSのバックアップクルーの声がかかっていた。

しかし、彼は月面活動を志望していたこともありこの話を断り、代わりに同期でISSへの熱意を持ち（ついでに意中の相手でもある）伊東せりかを推薦していたのだ。

その後、伊東せりかと石神千空が共にISSに向かうことを知った六太は、非常に複雑な想いに悩みまくったという。



## NASA宇宙飛行士編 その2

「みんな、聞いてくれ。今日は重大なお知らせがある。何かわかるか？」

石神家の夕食の席で、百夜がスプーンをマイク代わりにして演説を始める。

「なあに？ 父上」

「ひよつとしてお父様！」

「百夜に次のアサインが出たの？」

「ああそうさ。俺はISSに行く。コマンダーとしてな。すげえだろ！」

コマンダーとは船長のことである。経験と統率力を評価されたパイロット宇宙飛行士だけに任せられる名誉中の名誉だ。

「まあ、まだバックアップの段階だから、行けるのは先のミッションになるんだが・・・しかかも。しかもだ。それだけじゃない」

百夜のもつたいぶつた言い方に、千空の悪戯心がうずく。が、ここは家族で盛り上げる展開に持つて行ったほうが得策と、静かに百夜の発表に耳を傾けることにした。

「しかも？ 何ですかお父様？」

「??？」

「ひよつとして。まさかだけど・・・」

「ああ。室長から聞いて、俺の口から伝えてやりたいと頼んできた。千空、お前も一緒だ。ISSのバックアップクルーに、お前も選ばれたんだよ！」

割れんばかりの喝采が石神家から溢れた。

「あああああ!! 兄上も、兄上も!」「お兄様!」「千空ツ!」

姉妹と義母が抱き着く中、千空はいつもの表情で座っていた。

「これほどの衝撃発表にもクールを貫くとは、さすがは千空」

と感動する百夜であったが、実は上司から半分ネタバレしていたとは夢にも思っていなかった。

JAXA5人衆のうち。千空、せりかのISS行きが決まり、他の3人もうかうかしてられない状況。

月ミッションを希望する六太は、自身の熱意を室長に伝えるため行動を起こしていた。

バーティカルクライムロール。ジェット機で垂直に、ロケットの打ち上げのように飛行する高等技術。宇宙飛行士には不要な技術ではあるが、彼の決意の現れとして、六太はこの技を室長に見せようとしていた。

そのついでに、ではあるが。六太はもう1つ挑戦していた。

それは難易度としてはバーティカル以下ではあるが、インパクトは時としてバーティカル以上の大技。

ジェット機の飛行機雲でハートの形を作るのだ。一流の飛行士が意中の相手をイチコロにする技。

「あんだ？ その意味不明なメールは」

せりかと共にISSに向けた訓練に取り組んでいた千空は、彼女が六太から貰ったというメールを見て首をかしげていた。

「うん。そうなんだけど、何なんだろうね？」

恋愛経験に乏しい千空とせりかは、六太の意図を察することができなかった。

結論から言おう。六太は欲張りすぎた。運が悪かった。

彼はエーリントン飛行場に、室長とせりかの2人に時間差で、覚悟と告白の2つの飛行機雲を見せようとしていたのだ。

室長には「18時30分に上空を見上げてください」と。

せりかには「18時33分に空を見て」とメールしていた。

誤算の1つは、せりかの乗るバスが少々遅れてしまったこと。

2つめの誤算は、パーティカルを目撃した室長が、その場に留まってしばらく空を見上げてしまっていたこと。

よって……

「うわあくスゴイ！ 南波さん。でも、何だろあれ？ よくわかんないけど、すごいアクロバットだね」

せりかのバスの位置から、ハートマークは斜め横から見えていた。ハートではなく、カニのハサミのような形に。

「バルタン星人だー」

せりかはそう結論付けてしまっていた。

その場に居合わせた千空は一応、立体的にその正体を把握することはできたが、下手に恋愛脳に触れるべきではないと沈黙を決めた。

そして……室長は空を見上げ赤面していた。

「これは……ど、どーいうことだねミスタームツタ」

空に浮かぶガッツリのハートマーク。

「……まさかこれだったのか？ 私に見せたいものって……それは、マズイでしょ」  
その後、室長はしばらく六太を避けていたという。

そんなこんなもありつつ、六太・ケンジ・新田は月ミッションのNEEMO訓練に参加していた頃。

千空は訓練と業務、科学研究室の往復の日々を送っていた。  
というのが本当に忙しい。

ロボットアームや実験装置の操作方法などの訓練で7日間。その足で雪上サバイバル訓練のためロシアに7日間というのはザワな話。

稀に日本に帰国してもそれは業務の時間。5日間の滞在で取材や会議に参加して、仲間と会う暇も確保できない。

「大丈夫かい？ Dr千空。見るからにくたばる寸前のようだが」

「ククク。おありがてえ言葉だが、とりま何とか大丈夫だ」

科学室の椅子にグツタリと座り込む千空。ゼノから砂糖たっぷりコーヒーを貰いグイッと飲み干した。

「つつうか、本当に俺がISSに乗れんのかつつう不安はあるな。バックアップクルーが次のアサインつつうのは慣例だけの話で。俺の選抜理由は親子の話題性だけだろ？」

「そこは心配しなくていい。他に話題にできそうなモノが無いからね」

ゼノの言葉に引つ掛かる千空。

話題性で言えば、兄弟宇宙飛行士の日々人と六太がいるからだ。キャラクター性で言えば、この2人の方がテレビ映りのにも栄えるはず。

「キミは聞いていないだろうが。今、日々人を取り巻く状況が悪いんだ」

「状況が悪い？ 兄弟で宇宙に行けねえつつうのか？」

日々人は初の月面探査の際に遭遇した事故によってパニック障害になってしまった。いた。

死の恐怖を思い出してしまい、宇宙服のような閉鎖環境でパニックを引き起こすため、宇宙飛行士としては再起不能と上層部から判断されていたのだ。

「なるほどな。兄弟の方がダメなら、親子の方は確実に話題にもっていききたい、つつう魂胆か」

「そういうことだ。キミは偶像的なものは気に食わないかもしれないが、宇宙飛行士になって5年も10年も話を貰えない者もいる中、これだけ早く話が来たんだから感謝するべきだろう」

「ああ。俺自身、初の親子宇宙飛行士なんつつう肩書にやあーミリも興味ねえが。手早く行けるつつうなら、ありがたく頂戴するぜ」

「合理的だな。利用できるものは利用するべきだと、僕も思うよ。かく言う僕もキミを利用させてもらっているからね」

ゼノの魂胆としては千空を利用してのI S Sの“再生”があった。

かつてI S Sは貴重な無重力下での科学実験の場であった。

しかし今では老朽化に伴い維持費が負担となり、今では医学分野の研究施設として辛うじて存在意義を残すだけ。いつ廃止になってもおかしくない施設であった。

そこでゼノは千空をI S Sに送り、“普通の”宇宙飛行士では再現できない高度な科学実験を代わりに行わせ、I S Sでの科学実験の意義をN A S Aにアピールするつもりでいるのだ。

そして千空は、その意図を十分に理解していた。理解した上で、ゼノの科学力を吸収するために協力していた。いわば互いを利用し合うW I N W I Nの関係性。それが今の千空とゼノであった。

という殺伐とした関係性ばかりがN A S Aではない。

フレンドリーもまた必要な人間関係である。

この日、石神家に4人の宇宙飛行士が集まっていた。

百夜がコマンダーを務める（予定）のチームメンバー、せりかとダグ。そして千空である。

「それでは我々の今後ますますの発展を祈念いたしまして、乾杯！」

百夜の音頭に、4人と3人が手にしたコップを高く上げて「乾杯」と叫んだ。  
「そりゃ一本締め挨拶だろが」

千空の言葉に思わずせりかも頷いた。

「それにしても百夜つてば羨ましいわね。美女を〃5人〃もはべらせちゃつてえ」

少し猿顔の素敵なおじさまダグ・ホワイトが、百夜の肩を小突いた。

人数の計算が狂った人のために説明しよう。そう、彼の心は乙女である。

「そうなんだよ。俺の自慢の妻と娘たち。3か月も離れて美女2人と宇宙で過ごすつうのは色々辛いもんがあるんだよ。なつ、千空」

瑠璃と琥珀を抱きしめながらバカのように嘆く百夜に、千空の呆れた視線が向かう。

「お前は色々と自覚しろ百夜。ISSに日本人が3人も同時に乗り込むのは初なんだぜ」

「そうよ。私だけちよつとアウエイなんだから」

「ダグさん。私たち、足を引つ張らないように頑張ります！」

「えいえいおー」と拳を突き上げるせりか。それを真似て瑠璃も琥珀も拳を突き上げた。

「にしても、ほんとカワイイ娘たちね。リリアンちゃんに似て」

「ふふ。でも百夜に似てるどころもあるのよ」

リリアンはそう言って瑠璃と琥珀の顔を百夜と見比べる。が、勢いで言ってしまった



だけで、似ているパーツがあるかどうかは1ミリも考えたこともなかった。そしてやはり似ていなかった。

「えっとお・・・そう、千空のことが大好きっていうところが似てるわ!」

「苦しすぎんだろ」

千空の的確なツツコミに苦笑いするリリアン。だが、娘2人が千空ラブなのは事実であり。

「兄上!」「お兄様!」と抱っこを求めて2人仲良く千空の腕の中に入っていった。

「仲のいい姉妹なんですね。ケンカとかするんですか?」

「うゝん、ほとんどしないわね。強いて言えば、どっちが千空のお嫁さんになるか? つてケンカしたくらいかな」

「可愛い!」

ダグとせりかが声を合わせると、千空は頭を掻きながら「何年前の話だ」とつぶやいた。

「その時は瑠璃が勝って、3分だけ結婚したのよね。でも今じゃ恥ずかしがっちゃって。琥珀は、今でも将来は千空のお嫁さんになるのが夢なのよね」

リリアンが琥珀に頬ずりすると、琥珀は満面の笑みを浮かべる。

「ん? そういやあ一応できてるぞ」

「えっ?」

百夜の言葉に目を丸くするせりか。

「血の繋がりはねえからな」

「そういえば噂で聞いたことあるような。百夜と千空ちゃんって実の親子じゃないって」

ダグはそう呟くと、2人の顔を見て「マズイこと言っちゃった!？」とハツとなつて口  
に手を当てた。

「いいや気にすんな。んなこと関係ねえよ」

「そうさ。血の繋がりなんて関係ない・・・親子だからな、俺たちは」

互いを信頼しあう実の親子以上の関係をもつ百夜と千空の姿に、せりかは感動すら覚  
えた。

「でも、その割に娘との結婚はOKしちゃうんですね」

「まあ、それはそれ。これはこれだからな」

ケロツと大前提を笑ってひっくり返す百夜に、6人は(娘2人だけ意味も分からずに)  
笑いあつた。

しかし、この血縁関係の有無が後に一悶着を起こすことを、この時はまだ誰も気づい

てはいなかった。

## NASA宇宙飛行士編 その3

千空がバックアップクルーに選ばれてから約1年が経とうとしていたある日。

宇宙飛行士の長、室長は彼の席に心を躍らせながら腰を掛けた。

彼の仕事の中で最も喜ばしいもの。それは、アサイン（任命）の電話をかける瞬間である。

「もしもし、室長のバトラーだ。石神千空だね?」

胃を痛める職務の中、彼にとつての楽しみは日頃頑張つて訓練に励む宇宙飛行士たちの苦勞をねぎらつてあげられるこの言葉かける瞬間だ。

「君のISS搭乗が決まった。おめでとう。君をCTV-28クルーにアサインする」  
「ああ。おありがたく頂戴するぜ」

何か、期待していたのと違つていた。

最年少日本人宇宙飛行士、石神千空。25歳。

ベテラン宇宙飛行士のシャミール・ヴォルコフやコスモノートのヤコフ・ニキーチン、ダリヤ・ニキーチナ、NASA科学部のDrゼノからも推薦される期待の星。というコネ入社というものではなく、地道に成果を上げて努力の元に今の地位に就いた男。

であるならば、アサインの連絡に飛び上がった喜んで不思議ではないものだが、当の本人から返って来たのはいつものような淡々としたノーリアクションであり、室長は『通知しがいのない男だ』とテンションを落とすのだった。

「では、石神さんと伊東さんのISS搭乗の決定を祝して、カンパイ」

その夜、JAXA同期の5人が集まり、千空とせりかのアサインを祝っていた。

「ついに俺たちの中から宇宙に行くメンバーが出るなんてな」

「しかも日本人が3人も同じ宇宙船で宇宙に行くなんてのも史上初だよ」

新田とケンジは自分の事のように喜び、2人を祝福した。

「なあ千空・・・ちよつとイイか？」

そんな中、六太にチヨイチヨイと呼ばれ、千空は2人で物陰に隠れる。

「あのさ・・・キミのお父さんとお母さんって一緒にISSに行っただよね？」

「だな」

「それと一緒にの時期にシャミールさんとコニーさんもそこに居て、2人が結婚したんだ

よね？」

「だな」

「で、さらにその場にいたのがヤコフ・ダリヤ夫妻なんだよね？」

六太のコソコソとする様子と会話内容から、その意図を掴んだ千空はようやく例のハートマークの飛行機雲の意味を理解した。

そう六太は『一緒にISSに行く」と結婚に至る法則』を心配しているのだ。

「なるほどな。ククク、安心しやがれ。俺あミジンコほども恋愛脳ゼロだわ」

面倒くさそうに頭を掻く千空。

その態度に六太は少し安心しながらも、であるなら千空にとって「彼女」の存在はそれほど魅力が無いものなのか!? と少し怒りを覚えていた。

「それよか、お前のほうはどうなんだ? シャロン月面天文台」

「ああ・・・」

この話題に六太は口を濁した。

シャロン月面天文台の発案者、六太の知人の天文学者・シャロン博士の病状はこのころ非常に深刻化していた。

せりかの父の死因にもなった難病・ALS。

天文台の計画はNASAの協力の元で進行していたが、その完成の瞬間に立ち会うことができるかどうか・・・

「大丈夫さ。ALSの治療法は、せりかさんと千空が何とかしてくれるんだろ?」

せりかはJAXA入社前からISS勤務を志望していた。それは、ALSの治療法確

立の最後の希望が無重力化での実験にあったからだ。

「まあ俺らの研究だけじゃ意味ねえよな。天文台、お前が作ってくるんだろ？」

「ああ。いや、まだアサインも来ていないが……そのつもりだ。絶対に作ってきてやる！」

六太は拳に力を込めて答えた。

「つまりだ。ALSは俺らに任せろ。天文台はお前に任せろ」

そう言つて千空がハイタッチを求めると、六太はバチンと乾いた良い音で応えた。

「でもつてだ。俺らがALSをブチ殺した日にゃ、天文台のデータを俺に横流ししやがれ。優先的にな。ケケケ」

まるで悪者の笑い方をする千空に、六太はそのモジャモジャ頭にも冷汗を流して苦笑いするしかなかった。

だが、この3人の夢と希望が崩れる音が、それぞれの足元に着実に迫っていた。

1つは、せりかがALS治療研究データを大手製薬会社から貰いに日本に向かった時の話。

研究書類を受け取ることを、他の製薬会社の社員に見られてしまっていたのだ。

その会社はJAXAやせりか個人と新薬開発の交渉を依頼していたが、規則として特定の企業に利益の出る取引は禁じられている。

そこにきて書類の受け渡しを目撃してしまったのだから気分の良い話ではない、と彼らは思ったのだ。

そしてこの一方的な思い込みが、後に大きな影響を与えることとなる。

2つめは千空の身に。ISSの身に降りかかろうとしていた。

何処から漏れたとかいう話ではなく、今さらの話ではあるが・・・

『初の親子宇宙飛行士同乗で話題の石神親子が、実の親子ではない』という事実がここにきてマネージャーの耳に届いてしまったのだ。

ISSは廃止の話が首元まで届き、千空と百夜の話題のおかげもありギリギリ首の皮一枚で繋がっている状態であった。

その話題性が根本から崩れたことで、ISSは再び廃止案が議論されるようになってしまったのだ。

さらにはタイミング悪く、ISSの設備の故障が相次ぎ、千空たちの番にはISSを修理するだけのミッションになる可能性すら大きくなってしまった。

「Dr千空。僕は言ったよね？ ゲイツには気を付ける、と・・・いや、これはキミばかりを責めても仕方ないな」



ゼノは深くため息をつきながら、電話口で千空にISSの窮地を伝えた。

「僕はこの通り国際会議で忙しいが、下手をすることもう会えないかもしれないな」

失望の色を明白には出してこなかったものの、ISSの廃止ないし修理となれば千空がISSで科学実験を行うチャンスが無くなる。つまり、ゼノが科学知識を伝授する必要性が無くなるということ。

事実上のクビ宣告であった。

「ああ。詰みなら詰みで凹んでるほどヒマ人じゃねえ。とりま修理が任務つつうなら俺はそれに従うだけ・・・じゃあな、世話になった」

そう言つて千空は電話を切った。

だがISS廃止の話が決定したわけではない。

次のミッションが修理だけになるとも、決定したわけではない・・・

希望は残されているはず・・・だが・・・

そして3つめ。それは六太の月面探査チームに降りかかっていた。

次の月面探査の候補チームは2つ。通称「ボルツ」と呼ばれるベテランチームと、六太たちの通称「ジョーカーズ」と呼ばれる新人チーム。

月面天文台ミッションが組み込まれる今回、六太の熱意は計り知れないほどであった

が、マネージャーは失敗リスクの少ないベテランチームにアサインを出していた。

六太はそこに待ったをかけ、再任命をするようにマネージャーへ直談判に乗り込んでいたのだが・・・その過程でトンデモナイ条件を出されていた。

『ISS廃止の署名を多く集めた方を、正規クルーとして再任命しよう』

こうして、3人が3人に目に見える不安と目に見えない崩壊を抱えたまま迎えたある日の朝・・・

「石神くん！ た、大変だよー」

千空の元に届いた急報。それはせりかの元にもすぐに届き、彼女は愕然とした。

「うそ・・・なんで」

ISS反対の署名活動が始まってしまった。しかもISS関係者にも気づかれるような露骨な形で、である。

「こりやNASSAは本気でISS（俺ら）を潰しにかかってきてやがるな」

「しかも噂だとジョーカーズでも同じように集めているって・・・ボルツと競い合って、より多くの票を集めたほうが先に月に行けるって・・・」

「ククク。アホほど効率的な話だ。足で稼いで宇宙に行けるなら誰だってそうするわな」

この話にせりかは愕然とし、千空は呆れ果てていた。

「私、直接南波さんに会って確かめてくる」

せりかは居ても立っても居られず、六太の居場所を職員に聞き出して飛び出した。

このままの状態の彼女を放置するわけにいかないと、千空もそれに続く。

2人はNASA職員御用達のレストランで、ジョーカーズの仲間と一緒にいる六太の姿を発見した。

千空たちはサンングラスと帽子で変装し、六太たちに見つからないように後ろの席に座って様子をうかがう。

「署名だけど、俺も次はJAXAに頼んでみる。ボルツより多く署名を集めるんだ。絶対に負けられない」

どうやら六太が署名活動をしている噂は本当であった。しかも署名は順調に集まっているという様子。

その話に唇を噛むせりか。千空も擁護不能な状況に拳を握りしめる。  
が・・・六太はこう続けた。

「これを発表したら俺らのアサインは帳消しにされるかもしれないけど、それでもあれだ。ISSは俺らで守ろう」

そう、六太が集めていたのはISS賛成派の署名であった。

ISSに全てを賭けているせりかを、いつも見てきた六太だからこそ、この行動に出ていたのだ。

この事実を目頭を熱くするせりか。感謝のあまり今すぐにも泣き出してしまいうだ。こんな姿を六太に見られるのは恥ずかしいと、彼女は静かに店を出ようとした……が。

「おい南波兄。ISSを守る策を教えやがれ」

せりかも、六太も、ジョーカーズの仲間も目玉が飛び出すほどに驚く千空の強襲。??!!

「せせせ、千空!?! そ、それにせりかさんまで……まさか、今の話聞いてた!?!」

「ええええ……え、あ、はい。石神くん! 何してるのよ」

「あく、そういう気合と気持ちの問題的なモンはいいから、現実的なプランの話だ。お前、南波六太。何の勝算も無しにISSを守るとかいうワケねえよな?」  
 「署名以外」のプランがあんだろ? そいつを教えやがれ」

空気を読め。人の都合を少しは配慮しろ。という正論は千空に通用しなかった。

「あのさ、俺らの立場分かかってる? 一応は利益相反の立場だよ?」

「ククク。なぐら共同戦線だ。さあ、さつさと教えろ。あんだろ? 奥の手つつう奴が」

こうして当初の目的から外れ、千空が六太から情報を聞き出してから約1週間後。ISSの危機を救うため、ある男が高笑いと共にヒューストンの地に足を踏み入れた。

「はっはー。ついに俺の出番というわけだな、違うか？」

## NASA宇宙飛行士編 その4

千空、せりか、百夜、ダグの4人のCTV―28クルーの訓練が行われる演習場に、この日1人の男とその付き人の姿があった。

その雰囲気はNASA職員のものとも、宇宙飛行士のものとも大きく異なる異質なものの。

自信と欲望を決して隠さない尊大な性格が立ち姿から溢れている。

そんな彼を紹介する立場にあるコマンダー百夜が酷く狼狽しながら口を開いた。

「え〜つと、俺たちCTV―28『クローバーズ』に民間人旅行客1名が同乗することが決定しましたあ・・・ああ、そういう前例があるのは俺もよく知ってる。だからまあ皆、理解してくれ。というこで紹介します。日本からお越しの七海龍水くんです」

「貴様らは幸運だ。この俺が宇宙の大海原に手を出す瞬間に立ち会えたのだからな！」  
指をパチンと鳴らし高らかに笑う流水のインパクトに、百夜を始め多くのスタッフの目は点になったまま戻らなかった。

七海龍水。

海運業の王様・グループ総資産300兆円の七海財閥の御曹司にして、自身も2つの

会社を運営する社長。

そんな宇宙飛行士ともISSとも縁の無さそうな男が今、何の道楽か分からないが、絶賛廃止の危機に瀕しているこのISSの訓練の場にいるのだから、困惑せずにはいられない。

「何このイケメン。日本人なら、せりかちゃん知ってる？」

「いいえ、財閥の名前くらいなら聞いたことがありますけど。すごい性格してますね……ちゃんと馴染めるか心配ですね」

せりかの心配する先に立つのは、普段から気怠そうにしている石神千空。

科学知識ブツパの宇宙飛行士であり、とてもではないが金持ちの道楽に付き合う度量なんて無さそうであり、5人で宇宙に行くとなれば雰囲気は乱れに乱れまくるのは目に見えていた。

が、そんなスタッフ一同の不安な目を他所に、龍水は全員の元にツカツカと歩み寄り挨拶を交わしていく。

「よろしく」「はっはい、こちらこそよろしくお願いします！」

社長が自分から行動するとは、性格的には良さそうであった。笑顔も気さくで話しやすい。

が

その番が千空に回ってきた時、龍水の歩調が急にスピードアップしたことに、一同は一触即発の不安を覚える。

だが、意外にも両者の表情は明るい。

「ククク、来やがったな世界一の欲しがりや。足引つ張んなよ」

「はっはー。誰に向かつて言っている。この俺が来てやったんだぞ、千空」

そう言葉をかけ合いハイタッチを交わす千空と龍水であった。

その両者のように啞然とする父・百夜。

「おおい千空。ちよつといいか？ お前、いつの間に社長と友達になってんの？」

「ああ？ 息子の交友関係把握は義務教育の期間に卒業しとけよ」

「何がどうなったんだ？」

国際会議から戻ったDrゼノは、ISSを取り巻く状況の変化に啞然としていた。

結論から言えば、ISS廃止の動きは解決の方向へと進んでいたのだ。

「何がどうなったんだ？」

科学屋では理解できない事態が起きているのは明らか。とはいえある程度「政治」というものにも理解のあるゼノであっても、全容を推測するには材料が足りない。

「ケケケ。まあ細かく話すと長えが、端的に言やあ利害の一致と人脈の仕業だ」



ゼノの珍しい姿を見て笑うのは、彼とコーヒーを交わす千空であった。

ISSの問題は修理コストであった。修理に割く時間と費用が拡大し、運営が継続できない状態にあること。

その削減案として名乗りを上げたのは、六太が紹介した日本の民間会社「スイングバ イ」という、“修理専門”の民間宇宙飛行士を派遣することを目指したベンチャー企業であった。

既に有人ロケットの開発にも成功しており、あとはスペシャリストを育て、ISSの修理ポイントを探り、現場で活躍させるだけ。

その提案と熱意が、NASAのマネージャー・ゲイツを動かし、ISS存続の方向に流れが大きく変わっていたのだ。

「なるほど、だけどもまだ不十分じゃないか。実現は2年後というなら、それまで企業が存続できるか、スポンサーの問題がある。それに現状の修理はどうする？ Dr千空たちのミッションが“修理だけ”になっていないじゃないか」

ゼノの的確な指摘に、千空は声を殺して笑った。

「そこに出資して、修理にも顔を出して、金まで出すつう馬鹿が現れたんだよ」

「はっはー、それが俺だ！」

研究室に馬鹿みたいな笑い声が響き渡る。

スイングバイの主出資者であり、スイングバイ新人技術者、ISSへの宇宙旅行客である龍水である。

龍水の行動は全てが高速であった。

資金繰りに不安を残すスイングバイに出資を提案し、自らを最初の宇宙作業員とすることを条件に出していた。

ISSへの渡航費を自らのポケットマネーから捻出することで、スイングバイへの負担はゼロ。龍水自身は世界最長の民間人のISS滞在記録を手に入れることとなる。

一見すると誰もが御曹司の道楽にも見える行動だがその実、龍水が一番に豪語していたのはISSの医療研究施設としての価値であった。

「病気に苦しむ世界中の美女たちを救うために、ISSの維持が欲しい」

条件に難色を示していたスイングバイの上層部も、この言葉に重い腰を上げてたのだった。

「つまりコイツは、わざわざ金払ってISSに行つて、わざわざ仕事をしてくれんだと」  
「修理ミッションを素人の旅行客が!? そんな馬鹿な」

ゼノの指摘通り無茶苦茶な道理であるが、龍水はいたって真面目であった。

世界一の欲しがり龍水をもってすれば、専門知識と専門訓練を必須とするISSへの旅までに寝る間を惜しんで技術と知識を吸収することなど、決して到達不可能な次元の

話ではないのだ。

「だが、限度というものが・・・」

「いいえ、そのような心配は必要ありません」

ゼノの心配に割って入ったのは、彼の執事であるフランソワ。手にしたポットからゼノのカップにコーヒーを補充しながら豪語した。

「龍水様は自分を欺かない。欲しいものに欲しいと叫び進み続けます。龍水様がISSの存続を望まれたのであれば、それは必ず実現されることでしよう」

「その通りだ。つまり千空。ALSの治療は貴様に任せた。美女を救え！ ISSは俺に任せろ」

龍水の自信満々な姿に、ゼノはフウと息を吐いて椅子に深く腰掛けた。

「なるほど。ならキミらの情熱に応えよう。千空の科学力アップは僕に任せてくれ」

こうして、千空たちのISSの準備は加速度的に前に進むこととなった。

そんな千空の前に次に訪れたミッション。それは『ミッションポスター』であった。

打ち上げ秒読み段階に入ったクルーの紹介のためのポスター。映画やCDのジャケット風に演出する写真撮影である。

「ん、もつとキメた感じに笑ってくれるかな？」

にこやか笑顔に最も無縁な千空の撮影が酷く難航していた。

千空たち「クローバーズ」のポスターのテーマはヒーロー風。

アメコミヒーローの『ファンタスティック・フォー』をモチーフにしたものに決定していた。

ピチピチのボディースーツを身に纏い、ドヤ顔で並び立つ4人の宇宙飛行士の構図。

なのに1人だけ笑顔が引きつっているのだから困ったものである。

「千空・最高笑顔ってやつはな、愛する人を思い出せば自然と出てくるもんさ」

そう言って励ます百夜がホワイトボードに『笑顔の伝道師』と書いて自らを指さす。その姿を見て鼻で笑う千空の笑顔が、何気に一番サマになっていて採用となった。

そしていよいよ、その段階に入った。

打ち上げまで残り20日。

この日から2日間が、クルーが打ち上げまでに家族と過ごすことができる最後の時間となる。

「お兄様〜!」「兄上〜!」

瑠璃9歳、琥珀7歳の2人は相変わらずの千空べったり姉妹であった。

それは、クルーと家族、関係者を交えたパーティーの席でもお構いなしだ。

「兄上はもうすぐ宇宙に行くんでしょ？ 大丈夫？ 落っこちたりしない？」

「まあ落ち続けるわな。完全落下しねえように燃料燃やしてくるぞ」

「ISSが上に来た時は、必ず空を見ますね」

「おう。肉眼でも見えっから楽しみにしてな」

瑠璃と琥珀の質問攻めにも、千空は根気強く付き合った。

この調子でいざ分かれの時が来たらどうなってしまうのかという不安すらあるくらいだ。

その様子を見て、この時のためにヒューストンに来てくれたいた大樹、杠、司、未来も、3人の時間を見守ることに決めた。

「3か月、長えぞ。大丈夫か？」

「大丈夫……じゃないかも」

「私も……だって、映画のアルマゲドンみたいなことになったら……」

そう言つてギユツと千空に抱き着く2人。その頭を優しく撫でながら、千空はしばらく3人で過ごすのだった。

「つつうか……お父さんここにはどっちも来ないのね」

打ち上げまで17日目。

この日からNASAのクルークオーターに入り隔離生活開始。

できるだけ人との接触を避け、ウイルス感染などのリスクに備えるためだ。

「この間に、俺はインタビューを受ける準備だ。千空、どうせ貴様は世界初の親子宇宙滞在という大舞台に求められるコメントに、気の利いたセリフなんぞ用意しておらんのだろう？」

「ああ。そういうのは龍水、お前に任せた」

「はっはー。この打ち上げの全ての脚光を俺が独り占めしておいてやる。だから貴様は安心して実験に集中すればいい！」

そして、いよいよその日が訪れる。

「さあ、時間だ。行こう！」

「はいー！」

宇宙服に身を包み、拍手に迎えられ、千空たちクローバースと龍水は、ISSへと飛び立つため、アレスIへと乗り込むのだった。

## NASA宇宙飛行士編 その5

2029年2月7日。この日、石神千空25歳は宇宙へと飛び立つ。

フロリダ州ケープカナベラル、ケネディ宇宙センター、打ち上げロケット・アレスIへの搭乗。

隔離施設クルークオーターを出ると、そこには千空たちの出発を見守りに来た報道陣と人々が、大地が震えんばかりの歓声を挙げて待ち構えていた。

「千空うー……！」

嫌がおうにも目に付く一団から、嫌でも目立つデカブツが手を振っているのが見える。

「震度2の震源地がいやがったな。ククク」

打ち上げのために駆け付けてくれた仲間達。その隣で涙と笑顔とが入り混じった少女たちとその母親。

1人1人の姿を目に焼き付ける千空。

「千空、龍水。いってらっしやい」

「ああ。いってくるぜ。宇宙に」

ウイルス感染等のリスクを避けるため、宇宙飛行士たちは彼らと接触することはできない。

名残惜しい想いを胸に別れを告げることしか・・・

否

別れではない。出発なのだ。必要なのは再会の約束。それを胸に、千空は拳を高くつき上げて、発射台行きバスへと乗り込んだ。

「いよいよだな」

「皆、心の準備はいいかしらん？」

バスの中、百夜とダグが声をかける。

「は、はい。大丈夫です」

緊張を残した面持ちのせりか。そんな彼女の肩を百夜はポンと叩き、千空と龍水を指さした。

「はっはー。出航だ。この世界の外洋へ。宇宙へ！」

「ククク。つつうか社長様が3か月不在で経営大丈夫なのかよ」

「誰にモノを言っている？ 10年不在でも万全盤石な布陣を残してきた」

「じゃあお前はもうお払い箱でALL OKじゃねえか」



余裕の駄話をはべらせる2人の姿に、せりかはリラックスを通り越して苦笑いに達することができた。

そしてバスはついにシャトルの足元にたどり着く。

ここで5人は輪になって立ち向かい合った。

「ついにこの時が来たな。俺たち世にも珍しい5枚葉のクローバーズ。四つ葉なんか目じゃねえ幸運に守られてる。心配無用だ。さあみんな。一緒に行こう、宇宙に」

「クローバーズ！」

百夜の掛け声に、5人は手を合わせて叫んだ。

「だが、五つ葉のクローバーはそんな珍しくねえぞ。100万に1の割合だ。1万に1の四つ葉と比べたところで、球場1個探しゃ見つかる」

「四つ葉は幸運の象徴。五つ葉は財運の象徴だったな。俺を祝っているのか、いいじゃないか」

「うくん水差すねえ若者たち」

リーダーとして引つ張るべき百夜がこの扱い。せりかとダグはこの和やかさに何度も救われてきた。

それが彼ら5人なのだ。

5人は鉄檻のエレベーターに乗り、シャトル頂上へと上げられていった。ガシャンガシャンと鉄網の通路を渡り、最後の部屋へ。

「行つてらっしゃい。よい旅を」

宇宙服の動作確認は念入りに。

ヘルメットを被せられ。

シャトルに乗り込み、ベルトでギチギチに絞められる。

そこから打ち上げまであと2時間の放置プレイだが、千空たちは胸に溢れる想いと向き合っているうちにあつという間に時は過ぎていく。

残り20分。

もう後戻りはできない。

燃料ポンプの音が聞こえてくる。いよいよだ。

ブースター、燃料、誘導、環境、航法、遠隔、制御。全ての計器がチェックOK。秒読みに入る。

振動が千空たちを揺らしていく。

10, 9, 8, 7。

点火開始。

いよいよだ。

6, 5, 4, 3, 2, 1

点火

0

リフトオフ!

振動がこれでもかと千空たちを揺らした。

痺れと感動が心と体を揺らす。

『うおおおおおおおおお』

興奮が千空の脳内でスパークした。思っているだけなのか口から出てしまっているのか、自分でも分からない。

「船内気圧5.5で安定。第一段ロケット切り離し」

百夜が切り離しスイッチを押し、無事にシャトルが分離される。

体を圧迫していたGが解かれ、ジェットコースターの“ヒュン”ってなる感じが何倍にもなった感覚が体を襲う。

全身の血が頭に上り、耳と鼻がツーンと詰まった感覚を味わう。

その頃には窓から見える景色の色が美しい漆黒に塗り替わり始めていた。

「あん?」

気が付けば腕の重みを感じられない。手荷物にしていた“仲間との集合写真”がフワツと浮き上がっていく。

「ククク。これが宇宙か」

微笑みを漏らす千空。その実、ちよつと宇宙酔いを起こしていた。

無重力になって上半身の血流量が増え、顔がパンパンのムーンフェイスになる。

だがそれでも、興奮と緊張が入り混じり、心臓がバクバクと鳴りやまない。

「来たな千空。俺たちついに」

「ああ。つっても地球からせいぜい400km。東京と大阪程度しか距離ねえよ」

「はっはー。近いな」

そう言い合いながら地球を眺める龍水と千空。

ここからもISSからも、地球を真ん丸に見ることはできない。

だが、目の前に広がる地球の美しさは見る事ができる。

つい昨日まで見上げていた青の空から見た青の海と黄色の大地、それが混ざりあつてきたような緑、糸のような白雲。

そればかりは何をどう話し合っても、言葉では現わせなかつた。

その後、千空たちの乗ったCTV―28オリオンはISSとのドッキングシークエン

スに入った。

ISSとオリオンが繋がり、それぞれの圧の均衡を調節していく。

宇宙服を脱ぎ、ジャンプスーツになった千空たちは隔壁の前に集まった。

いよいよハッチを開ければISSだ。

「千空。せりか。この扉を開けるのはお前らの役目だ」

百夜はそう言つて2人を招いた。

2人は静かに頷き、ハンドルに手をかける。

ギギイと音を立て、開いた先に広がる狭い通路。出迎えるISSの前任者たち。

「ようこそ国際宇宙ステーションへ！」

## 番外編 ドラえもん のび太と千空の夢幻三剣士

現実世界では学校で叱られママに叱られ、ジャイアン、スネ夫、ドラえもんにも呆れられる生活。

そんな野比のび太は夢の世界で思う存分楽しむため、ドラえもん「気ままに夢見る機」をねだり、「夢幻三剣士」のソフトで遊ぶことに。

プレイ開始直後に妖霊軍団に襲われ川に落ち、スネ夫そっくりの騎士『スネミス』、ジャイアンそっくりの騎士『ジャイトス』と出会う。

白金の剣を手に入れたのび太は『ノビタニヤン』を名乗り、3人で夢幻三剣士を結成。竜の血を浴び不死身の体を手に入れ、妖霊大帝オドロームと戦うため、彼らは旅立った。

そんなところで目が覚めて、ひとまず旅は中断。

のび太は、今度はスネ夫やジャイアン、しずかちゃんも夢の世界に招くことに決め、3人に夢アンテナをセットし、再び夢幻三剣士の世界へ。

【が、この時。夢の世界と現実世界の狭間で、なんとも絶妙な時空乱流が発生。ジャイア

ンとスネ夫に飛ぶはずであった夢の電波が、別の次元・時間軸に飛んでしまうこととなる」

そんなことなど露知らず。ノビタニヤンは白金の剣を手に森で他の仲間を待っていた。

「ノビタニヤン」

すると現れたのは青い狸のような魔法使い『ドラモン』

「あれ？ あとの2人は？」

「そのうち電波に呼ばれてくるよ。ほら、飛んできた」

ノビタニヤンとドラモンに引き寄せられるように、森の奥から浮遊して現れた2人の剣士。

「・・・あれ？」

2人の剣士の姿にノビタニヤンとドラモンは首をかしげる。

昨日、一緒に剣を誓い合った2人の剣士。

1人は変なツンツン髪。

1人はゴリラ風。

その共通点だけは合っていた。

「あ、？ 何だココは？ 森林サバイバル訓練・・・じゃねえようだが」

ツンツン髪その男は、気怠そうに首をゴキゴキ鳴らす。

「ドラえもん。じゃなかった、ドラモン。ジヤイアンとスネ夫を呼んだんじゃないの？」

「うん。どうやら電波の調子が悪いみたい。神様シートの中から来ちやっただね」

ノビタニヤンとドラモンは、かつて自分たちが作り出した地球を石化させてしまい、生き残った人類と出会っていた。

その人類のリーダーが彼、石神千空であった。

彼は知らない。

その石化人類の歴史は、一度ノビタニヤンとドラモンの手によって修正され、2人と千空が出会った歴史は無かったことになり、その記憶はノビタニヤンとドラモンの中に残っているだけなのだ。

「ここは何処なのだ？」

ゴリラのようなパワーの持ち主、金髪の少女もまたキョロキョロと森を見回している。

その少女とも、ノビタニヤンとドラモンは石化した地球の人類の集団で出会っていた。

だがそれは修正される前の時代の話。彼女と千空は同じ時間軸に存在しないのだ。



時間軸の突破まで発生している現状に、ドラモンは「調子悪いなあ、この道具」と口を3にして不満を吐いた。

「見たことのない森だな千空」

少女に話しかけられ、千空は怪訝な顔を見せる。

「誰だ？ お前は」

「ん？ 場を和ませるつもりだろうが、こんな時につまらん冗談だな。ゲンにでも習ったらどうだ？」

「あ？」

「ん？」

やけに馴れ馴れしい少女の態度に、千空はますます首をかしげる。

首をかしげる千空を見て、少女も首をかしげる。

この険悪というわけではないが微妙な雰囲気、ノビタニヤンとドラモンは静かに割って入った。

「あのお・・・ちよつといいですか？」

「む？ キミらは・・・何処かで会ったことがあるような」

「お前ら・・・どつかで見た事があるような」

千空と少女はノビタニヤンとドラモンの姿を見て、脳の奥に引つ掛かるような感覚を

覚えた。

思い出せるように思い出せない。まるで夢の中で既知の情報が思い出せなかったり、未知の存在を知っているような感覚に襲われているように、千空はドラモンの姿に違和感と既視感を覚えつつ、その正体を思い出せずにいた。

「えつとお、何から説明したらいいか」

ノビタニヤンとドラモンは、ここが夢の中の世界であり、2人を誤って呼び出してしまったことを説明した。

「はあん。夢の中の世界ねえ」

フアンタジーすぎて1ミリも興味を示さない千空は白けた顔で2人を見る。

「そうなんです。それで、僕は白金の剣士ノビタニヤン」

「魔法使いドラモンです」

「石神千空。宇宙飛行士だ」

「科学王国石神村のコハクだ……ん？」

千空とゴリラ少女コハクは、互いの自己紹介の直後に顔を見合わせた。

「宇宙飛行士とは、千空。それはキミの父上の話ではないか？」

「コハク？ 石神？ 琥珀かお前。そうかどっかで見たと思っただ。夢の世界……デカ

くなっちゃったのか。なら瑠璃はどうした？」

「デカく……の件はよく分かんが。ルリ姉？　そう言えばおらん。クロムやスイカもないぞ」

そう言つて周囲を見回すコハクに、千空は「なんで元素と野菜探してやがんだ？」とつぶやいた。

「あのお……それでこの世界のことなんですけど」

「僕たち夢幻三剣士はオドロームと戦わなきゃならないんです」

状況が少し整理され始めた頃、恐る恐る2人に話しかけるノビタニヤンとドラモン。

「ああ、その話な。ファンタジーすぎて1ミリ程度しか唆らねえがな」

「ここは夢なのだろう？　どうせ起きるまでの辛抱だ。協力してやろうではないか」

そう言つて腰に刺した剣を引き抜くコハク。千空は面倒くさそうにしながらも、渋々協力を申し出た。

こうして、夢幻三剣士と魔法使いドラモンは旅立った。

途中、人語を話すクマの親子と出会い、竜の洞窟まで案内してもらい。

野営の最中、ドラモンがレディースバッグから食べ物やら飲み物を取り出し。

それに対して何故か怒ったノビタニヤンがバッグを天高く投げ捨て、何故かバッグは彗星に引つ掛かり空の彼方へ。

バッグを追いかけてドラモンの箒も空へと消えていく。

「すごいな千空。これも科学なのか」

「いや、こりや妖術だろ」

そう言う千空であったが、しばらくしてドラモンが取り出した『タケコプター』という飛行道具に目を丸くした。

竹とんぼのような形状の物体を、頭に乗せるだけで空を飛ぶことができるのだ。

「千空。これは科学なのか？ それとも妖術か？」

「いや・・・普通に考えりやこの構造だと主翼の回転力に負けて体もアホほど回るはずだし、首の骨が折れんだろ・・・妖術・・・だろうな・・・」

取り乱す千空であったが、次にドラモンが竜退治用の武器として『必ず当たる手投げミサイル』を渡してきた時には『もう夢つつうことでもいいな。その方が合理的だ』と、考えるのをやめた。

ちなみにはあるが、ミサイルは怒ったノビタニヤンにより没収されてしまった。

そんなこんなもあり、一行は竜の住む谷へたどり着く。

「竜の吐く炎を浴びると石になるそうです。くれぐれもお気をつけなすってください」

「石化効果つきブレス持ちか。こりや本格的にゲームの世界だな」

熊と別れ、竜の谷に足を踏み入れる4人。

すると早速、ノビタニヤンが間欠泉に突き上げられてしまった。

「うわあ！ 危ない！ ノビタニヤンがどっかに吹き飛ばされたらしい」

「だろうな。そうなると何処に落下するのだが」

千空は指を立て計算を始めた。

ノビタニヤンの装備と体重の合計を50kgと推定。足元が崩れた時の人間の投射反応から姿勢を予測し重心の位置を算出する。周囲の気温から間欠泉の温度と噴出の威力を導き、到達高度から自由落下時間を割り出し・・・

「向こうだ」

千空が指さした先の岩の裏へドラモンが向かい、無事にノビタニヤンを発見する。

「千空！ これを見てくれ」

一方でコハクは谷の合間に不気味な石像を発見していた。

「これはまさか石化した人間なのでは？」

「だろうな。そういう設定の」

「助けてやれないのか？ 石化を解除する・・・たしかナイタール液とかいうもので」

「なんでそこで工業用の腐食液が出てくんのだ？・・・いや待て」

そう言うのと千空はコハクの体に手を回し、2人で壁の裏に飛び込んだ。

突然のボディタッチに困惑するコハク。

「千空!? 何をして」

「シッ。黙ってる」

千空が口に指を当て、もう一方の手でコハクの口を塞ぐ。

すると2人の背後から、不気味な叫び声とともに轟音が鳴り響き、巨大な影が通り過ぎていった。

「あれが竜って奴だな。アホみてえなデカさじゃねえか」

「マズイぞ千空。あの怪物の向かった先には2人が!」

コハクの言葉にハツとなった千空が振り返ると、竜の向かった先から暴れるような音とノビタニヤンたちの悲鳴が聞こえてきた。

「チッ、見つかつちまったか」

「音も声も聞こえなくなった。まさか、やられたのではないか?」

「だろうな。ひとまず退却だ。武器と作戦が足りねえ。このままじゃ全滅すつぞ」

こうして、竜の谷を密かに脱出した千空とコハク。

「それで、これからどうするのだ?」

「ああ、武器を作る。人類史上最大の発明品、銃。つまり、火薬を作る」

千空の頼もしい断言にコハクは「おお！」と歓喜する。

「それはどうやって作るのだ？」

「おありがてえことに間欠泉があるつつうことは、硫黄が取り放題のバーゲンセールだ。そこに木い燃やして作る木炭をぶちこんで、硝酸カリ・・・が無えな。そういや入手手段がねえわ。何でこの重要アイテムありきで話進めてんだ俺は？」

自分で言っておいて自分でツツコミを入れる千空。

「ならば正面突破しかないということだな」

「いや琥珀。お前いつから危ねえ橋渡るタイプになつてんだ？ いや、デカくなった琥珀か。つてことはいつか俺も呼び捨てされんのか・・・」

幼く可愛らしい妹の姿を頭に思い浮かべ、落ち込む千空。その様子をコハクは頭にクエスチョンマークを並べる。

この調子で何も打開策を見つけないことができなかった千空とコハクであったが、意外にも無事に外に脱出していたノビタニヤンとドラモンと再会。新たな仲間・剣士シズカールが加入していた。

ドラモンの箒も戻り、箒は土汚れを5人に吹き付けて石像のような見た目に変身させた。

「なるほど『だるまさんが転んだ』作戦か。いかにもRPGじゃねえか」  
「だるまさん？」

首をかき上げるコハクとシズカール。

最善の有効策とは言い難いが、どうせ夢なのだから問題あるまいと千空はこの作戦に賛成する。

そして結局。竜との対峙時にノビタニヤンが再び間欠泉に巻き込まれ、無様な恰好からは想像できない華麗な剣捌きで竜の弱点である髭を切断。あつという間に竜を倒してみせた。

「やるじゃねえか。ならさっさと血を浴びて次行こうぜ」

千空やドラモンが促すが、ノビタニヤンはその優しい性根が災いし、竜にトドメを刺すことを躊躇ってしまう。ちんたらしている間に竜が復活してしまう。

だが、竜はそのノビタニヤンの慈愛の心に感謝し、不死身の効果のある“血”の代わりに、一度だけ復活できる“汗”を5人に贈ると約束した。

「私の汗を温泉に流し込んだ。服を脱いで浸かりなさい」

「なるほど、了解したぞ」

そう言つて真つ先に服をがばちよと脱ぎ始めたコハクに、4人が大焦りしたのは言うまでもない。



「ん？ 子供たちと千空だろ？ 別に微塵も気にしなからう」

「少しは女の嗜みつつもんをよお！ 外身と中身は別なのかよ」

真つ赤になった顔を手で覆うノビタニヤンたち3人をその場に残し、千空はコハクの背を押して岩の向こうの別エリアを用意して強引に湯に放り込んだ。

その後、時間差はありながらも5人全員が湯に浸かり、1度だけ復活する体を手に入れる。

「でも、1回しか生き返られないのは、少し心許ないなあ」

「不死身つつうチートステータスよりか、リレイズの方が面白れえからな。これで十分だ」

不安を覚えるドラモンだったが、千空が自信ありげに話すのを見て勇気を覚える。

竜と別れた5人は妖霊軍団が待ち受けるアンデルシへと向かうことにした。

そのためには激流の川を下る必要がある。

ノビタニヤンが大木を切り倒し、白金の剣をチェインソーのようにして操り、あつと  
いう間に船を作り上げる。

「で、誰がこの船を操舵するのだ？」

コハクの言葉に全員が言葉を失う。

するとコハクは胸を張って言い放った。

「だろうと思っただぞ。安心しろ、私は水の民・石神村のコハクだ。小さい船だがこの程度の激流であれば父上直伝の操舵術で皆を町まで連れて行ってやる」

「おおー」と感心する3人。

千空だけは「百夜の野郎。んなこと教えてやがったのか？」とひとり呟いた。

こうしてアンデルシにたどり着いた5人。

妖霊軍団の攻撃を受けて、町には数えられる程の兵しか残っていないかった。

どうやら敵は土の体を持つ魔物の軍団で、一切の攻撃が通用しないらしい。

生き残れたのは、突如降り出した雨によって敵が撤退したおかげだそうだし。

「つまり水が弱点つつうわけか。分かりやすくいいじゃねえか」

「何か策があるようだな千空？」

「ああ。町ん中におびき寄せて水攻めにする。一網打尽作戦だ」

千空の知将っぷりにノビタニヤンたちだけでなく兵たちも期待の色を見せる。

「問題は2つ。1つはこの作戦に必要な囚役だ。敵全員を引き付ける役は100億%一番死ぬリスクが高え」

「ならば私以外にいるまい。身軽さ私にかなう者が他にいるか？」

名乗り出たコハクに、ノビタニヤンたちは反論できない。

千空としては彼女を危険に晒すリスクは避けたいところ。だが、それ以外に合理的な策はない。

「無理だけはすんな」

「はんっ。死ぬ気なんぞ毛頭ないぞ」

そう言つて拳をゴツと叩き合う2人。その間に漂う信頼感に、ノビタニヤンたちは「カッコいい」と思わず漏らしていた。

「まあもう1つの問題解決できなきや意味ねえ心配だな。2つ目は水攻め用の水の確保だ」

「そうだよ。そんな大量のお水なんて何処にあるの？」

ノビタニヤンの指摘に、千空はニヤリと笑う。

「あんじゃねえか、町の周りに。川の水を汲み上げる。作つてやるぜ原始的なポンプをよおー！」

千空が指さしたのはアンデルシを囲う川。その川から水を汲み上げるポンプを作るというのだ。

「こいつが、ポンプ作成のロードマップだ。時間がねえ。急いで作るぞー！」

そう言つて千空はポンプの設計図を描き上げる。が・・・

彼の計画は破綻した。

作戦は破綻していない。

何故なら『とりよせバッグ』があつたからだ。

それはノビタニヤンが投げ捨てたドラモンの秘密道具。彗星と共に彼方へ消え、シズカールが回収していたものだ。

とりよせバッグで取り寄せた『ラジカセ』を囮にして、『川の水』を取り寄せて大量放水。

これにより土の魔物は全滅した。

軍団のリーダー・スパイダル將軍が生き残つたが、白金の剣の猛攻を前に撤退。

ノビタニヤンたちは完全勝利を果たしたのだつた。千空の策抜きで。

その後、ノビタニヤンたちは妖霊軍の大軍が押し寄せせるシャルペロ城に援軍に向かうこととなつた。

「うわあ大軍だ。今度はものすごい道具を取り寄せないと」

氷や鉄の怪物の大軍の前に、危機感を募らせるノビタニヤンたち。

ドラモンはとりよせバッグで『すごいポケット』を取り寄せ、自身の腹に取り付ける。

「なんかしつくりくるね、ソレ」

皆がフィット感に満足している間に、敵は攻め込み始めた。

最初に飛び出すのは投石器。炎を纏った岩が次々に城に向かって投擲される。

「無重力ネット」

するとドラモンはバズーカのような道具をポケットから取り出し、網を射出し岩を捕えて敵の攻撃を防いだ。

「やるじゃねえか。原理はアホみたくシンプルだが」

褒める千空は、ポケットから道具を探すドラモンに負けじと『とりよせバッグ』から自分の戦力になりそうなものを探した。

そうしているうちに、次に敵が送り込んだのは水の精大隊。

矢も効かない物理耐性MAXの化物である。

「ククク。今度は水の化物か。なら科学の出番じゃねえか。この生石灰と・・・」

「寒波発射扇風機！」

千空が解説している間に、ドラモンはポケットから巨大な扇風機を取り出し、そこから放出される冷気を水の怪物に当て、氷漬けにして倒してのけた。

「・・・・」

次に攻めてきたのは鉄の精大隊。こちらは物理防御ブツパの化物といった見た目だ。

「鉄なら錆やら熱やら弱点だらけ・・・」

「ミニカミニナリ雲！」

そう言つてドラモンは雷雲を発生させ、鉄の精を一撃で粉碎して見せた。

「……」

その後、しびれを切らした敵は大将のジャンボス自ら一騎討ちの勝負を挑んできた。が、ノビタニヤンの見事な剣技を前に瞬く間に敗北。

こうして、ノビタニヤンとドラモンの活躍により、人類は妖霊軍団の大隊に勝利した。千空の策抜きで。

その夜、シャルペロ城は勝利の宴が開かれる。

が、ここで思わぬ事態が発生する。

妖霊大帝オドローム自ら、夜襲を仕掛けてきたのだ。

城で唯一、催眠術にかからなかったノビタニヤンが迎え撃つも、オドロームの圧倒的な力の差を前に成すすべ無く、戦意を失つてしまう。

「これでお前はただの人間。白金の剣士よ、死ぬ前に仲間の最期を見物するとよい」

そう言うとおドロームは眠つたままの千空、コハク、ドラモン、シズカールを操り、ノビタニヤンの前に並ばせた。

「やめろ、やめてくれえ」

ノビタニヤンの懇願を嘲笑うように、オドロームは怪しい光を千空たちに向ける。

「ワシに齒向かう者は皆こうなるのだ」

光の帯が千空たちを包み、4人の体は一瞬にして灰と化した。

「そ．．．そんな」

だが、竜の汗を浴び、1度は生き返る体となった千空たちは、灰の中から再び元の姿を取り戻す。

「あ？ 何だ．．．ここは」

「千空、私たちは一体．．．」

「あつ！ あれは」

「妖霊大帝オドローム！」

目を覚ましてすぐの超展開に、驚き慌てふためくドラモンたち。

「みんな、駄目だ。逃げて！」

ノビタニヤンの必死の叫びを、オドロームは嘲笑う。

「こやつらに何ができる？ 白金の剣士よ」

「ククク。ああ。何ができるか知っていてえ。そういう好奇心つつうのは立派だぜ」

この状況でニヤリと笑う千空を、オドロームは睨みつけた。

「この状況で、貴様なんぞに何ができる？」

「あ？ お前をブチ殺すことができる」

千空の不敵な勝利宣言に、オドロームは高笑いした。

「面白い。このワシを倒せる唯一の武器が、その腑抜けが持つ白金の剣だと知らんよ  
うだな」

「白金・・つまりはプラチナだな。そいつを俺が『取り寄せ』てねえとでも思ったか？」  
そう言うとき空は自分の剣を引き抜いてコハクに渡した。

その剣は鉄とは異なる、白い光沢を放っていた。

「アホほど贅沢なプラチナ加工だ。琥珀、遠慮なく投げろ」

千空の言葉に「ああ」と、返事と同時に剣をオドローム目がけて投げつけるコハク。

「馬鹿め」

オドロームはそう言うとき、持っていた杖を巨大な大木に変化させ、プラチナの剣を弾  
き返さんと伸ばした。

「残念。ビッグライト！」

千空はとりよせバッグから四角い懐中電灯を取り出すとき、プラチナの剣に照射した。

その途端。巨大化したプラチナの剣がオドロームを一刀両断する。

「なっ!？」

「ククク。残念ながらお前が殺してくれたおかげで、夢ボケが覚めちゃったぜ。今の俺



は「ドラえもん」マニア歴20年以上の秘密道具マスターだ」

ドラえもんの事も、のび太の事も、秘密道具のことも全てを思い出した千空がニヤリと笑う。

が・・・

「馬鹿め」

オドロームもまた割れた体を復元させ、千空に笑い返した。

「あ?」

「ワシの弱点は白金の剣に宿る魔力のみ。模造品ごときが、夢の世界でワシに勝てるとても思ったか!」

そう言うとおドロームは再び怪しい光を杖に宿らせる。

今度こそ万事休すか・・・そうドラモンたちが覚悟する。

「まあ、だろうな。夢の世界ほど最強なモンはねえよ。夢、ならな」

そう言うとお空はニヤリと笑い、とりよせバッグの中から人間の右手を取り出した。

「む?」

「これで終わりだ。オドローム」

そう言うと千空はオドローム目がけて、その右手を投げつける。

オドロームは怪しい光の帯を千空に向けて放った。

その右手は、光の帯を切り裂いて、一直線にオドロームの元へと飛び込んだ。

「ば、馬鹿な！」

右手の拳がオドロームの体を貫く。そして、オドロームの体中を走り回り、あらゆる部位を摘まみ上げていく。

「ぐ、お、お、お、お、お」

右手に摘まみ上げられ、徐々に体が朽ちていくオドローム。

「こいつはな、夢特攻ゴリゴリのアホな道具。その名も、『夢確かめ機』様だ」

ついに、オドロームは倒れた。

その魔力とリンクした妖霊軍団も消滅し、世界に平和が訪れ。  
ゲームクリアとなった。

## 千空宇宙滞在編 その1

ついに念願の宇宙へ。

ISSへ到達した宇宙飛行士・石神千空。

石神百夜、七海龍水、伊東せりか、ダグ・ホワイトの5人で過ごすここでの日々は、夢と希望と忍耐とが入り混じったものであった。

・日課その1・筋力トレーニング。

無重力空間で3か月も滞在するのだから、地上で自然に得られる重力に抵抗する筋運動が無く、当然と筋力は落ちていくばかりだ。

何の対策もしなければ、地上に降りた瞬間にミジンコほども動けなくなってしまう。

そのためISSには筋力トレーニング専用のエリアが存在する。

ランニングマシン、サイクリングマシン、ダンベル上げ風の筋トレマシンなどを、計2時間。

これを毎日だ。

・日課その2. 実験(易)

宇宙飛行士の大事な仕事、それは一般の人たちに宇宙を伝えるプロモーション活動だ。

カメラ越しに世界中の人たちに伝えるメッセージ。宇宙はこんなに不思議で楽しいぞ、と。

「つつうかんじで、宇宙食は大昔は流動食のクソマズイもんばっかだったが、今じゃ飛び散らなきや何でもOKだ。ちよつとの刺激で水分全部バラけっから、こうやって粘性マックスでいきやあらーメンがイける。食いたきやJAXA関連の通販で買いな」

千空のチャンネル『SENKU's LABO』はズバズバとした物言いで人気の番組であった。

・日課その3. 各種メンテナンス

老朽化したISSにおいて、メンテナンスは必須業務であった。

ISS修理担当は龍水。船外活動は百夜がサポートにつく。

この日のために寝る間を惜しんで修理マニュアルを読み漁り、ロボットアームを熟達した龍水を、NASAは正式に採用したいくらいだと評価していた。

一方で千空は、ISSに到着してから「ある物」をイジリまくっていた。(物という

べきか者というべきか・・・」

「おっ？ 千空、完成したのか？」

「ああ。百夜、お前が10年前にISSに持ち込んだ無重力駆動ロボット・レイ。その2号だ。その名も・・・」

「そう俺がヤベーほどデキる支援AIロボット、クロム様だ！」

球体の鉄の塊が胸を張って名乗った。

それは宇宙飛行士をバックアップする目的で作られたAIロボット。

管制との連絡やスケジュール管理、地上のニュースの読み上げを担当するサポートの専門機である。（なお、月面基地にも似たような機体が存在する）

千空はそこに手を加え、子供向け科学教室用の教材になるように改造していた。

「なあ千空、そりゃ何だ？」 「どういう仕組みだ？」

と、このようにISS内の実験に付き添い宇宙飛行士たちに子供のように遠慮なく質問を投げかけ、その答えをまとめる機能を備えている。

（ちなみにクロムの人格と名前は瑠璃のお気に入りアニメのキャラクターから採用している）

・日課その4. 実験（難）

これが千空の主な目的である。無重力環境を活かした科学実験・医学実験を、これでもかと実験しまくる。

各種薬品・薬液と細胞との科学反応。専門知識が無ければ頭がパンクするような濃厚なトライ&エラーも、千空にとってはテレビゲーム以上の快感刺激であった。

せりかは特にALSの治療薬の実験に大忙しであった。

地上で待つシャロン博士だけでなく、世界中のALS患者の希望となるため。幼くして亡くした父のため。彼女は奮闘していた。

千空もまた、ゼノから言いつけられていた実験をクロムの協力の元で速攻で終わらせ、彼女の手伝いをしていた。

だが、実験は思っていた以上にうまくいかず、狙った反応が確認できない日々が続く。

そんな中、せりかを中心に波乱が訪れようとしていた。

それはある日のJAXAからの一報から始まった。

『伊東せりか裏取引疑惑』

日本のネットで、せりかが製薬会社から個人献金を受けたという話題で大炎上してい

た。

証拠写真も上がっているが、それは以前、彼女が大学の先輩からALS研究データを受け取った際のもの。

それが裏金の取引の証拠写真として批判的になってしまっていたのだ。もちろん、全くの事実無根である。

それは規定を無視して彼女と個人契約をしようとしていた製薬会社が腹いせにネットに流した“でっちあげ”の内容から始まったものであった。

だが、世間の声は悪意を拾い集めどんどんと膨れ上がっていき、今では收拾がつかない状態にまで広がってしまったっていた。

『処分がないなんておかしい』

『今すぐ研究を止めろ』

『宇宙飛行士のイメージが悪くなった』

『日本の恥』

罵詈雑言。書いた本人たちに怒りと呼べるほどの怒りは無い。悪意のない悪意がネットに溢れていた。

そんなニュースをせりかに見せないようにと、JAXAは動いてくれていたが、どうしても気になってしまった彼女は、見なくていいものを見てしまった。

「中止つて、何ですか！ ネットが荒れていることが原因ですか!? それだけのことで、この大事な実験をやめろつて言うんですか!？」

せりかに通告されたのは、ALS実験の中止命令。

文科省からの通達であった。

無視して実験を強行した場合、今後の宇宙飛行士生命全てが断たれる可能性もある、と。

道は、残されていなかった。

せりかが休憩している間、残る4人は密かに相談しあった。

「なるほど。今は耐えて何年待たされるか分からないが次のチャンスに賭けろ」ということか。実に合理的だ」

龍水は感心しながらも、この不条理に齒噛みした。

「無視すりゃいいだろ。カメラ隠して結果だけ報告すんだよ。そのほうが合理的だ」

「いや駄目だ千空。それでは成功しても発表ができない。せりかちゃんの将来が終わつてしまう」

百夜の指摘に、千空は「分かっている」と言いながら、打開策の無い状況に苦悩し首を



横に振った。

「つつうか俺らの今回の成果すら、下手すりゃ悪評で評価ダダ下がりになるわな」

「今、ワタシたちにできるのは、せりかちゃんを休ませてあげることだけね」

千空たちにできることは、せめて彼女の気が紛れるようALS実験以外にやることを用意することだけ。

だが解決策は見つからず、苛立ちがストレス値を高め、ISSに陰鬱な雰囲気の流れ始める。

何をしていてもALSの実験が頭をよぎる。

休んでも、休む前よりストレスが溜まっていく。

そんな中、龍水が指をパチンと鳴らした。

「千空。この状況を打破する方法だが、貴様は何か忘れていないか？」

「あ、？俺らに打てる手の話だろ？今こうして、俺がアホみたく研究しまくって他の研究を全部潰す。そうすりゃALS実験以外何もやる事なくなつて、帰還までの時間に「仕方がねえから」ALSの実験やるしかねえな、つつう言い分ができる。だろ？」

そう言つて千空はAIロボット・クロムにロボットアームを装着し、強引に実験の手

伝いをさせていた。

一般向け教材計画ガン無視のプランである。

「それはそれで正解かもしれないが……」

と龍水は苦笑いするが、すぐに真顔に戻って話をつづけた。

「いや、そもそも俺たちにはいるだろ？ 頼れる仲間が。当たるぜ、船乗りのカンは。奴ら〃はすでに行動を始めている、確実にな！」

〃

## 千空宇宙滞在編 その2

伊東せりか闇献金疑惑に端を発したISSの暗雲。

宇宙にいるせりかや千空たちに手を出せる話ではない。

そんな中、せりかの元に月面基地にいる南波六太から応援メッセージが届いていた。

せりかのことを知らない人が好き勝手に色々言っているが、言うだけだったら誰でもできる。だけど、せりかの代わりは誰にもできない、と。

彼女のか細い心に、このエールは大いに励ましになった。

依頼された他の実験を凄まじい集中力で次々に終わらせていく。

残すところはALSの実験だけ。

それを彼女は強行実施しようとしていたのだ。

この先、誰が何を言おうと。何を言ってくれなくても。この唯一のチャンスに賭けてみるために。

一方、日本では相変わらず、せりか批判一色であった。

「ご覧ください。伊東飛行士の様子を。今回の騒動に我関せずといった様子なのです」

ニュース番組で、せりかに関する特集が紹介されていた。

「収賄疑惑が未だ不透明なままの伊東飛行士ですが、『ALSタンパク実験を中止する』という声明が文科省のHPに掲載されました」

「恥ずかしいと、思わないんでしょうか？ ALS患者の皆さんが、こんな汚い金で研究されると知ったら何と思うでしょうね」

NASAのサイトから確認できるISSの内部映像をモニターに流し、彼女の様子をキャスターたちが好き勝手にコメントしていく。

そんな中、ゲストの1人が静かに手を上げマイクを手にとった。

メディアアへの露出を嫌う彼であったが、この問題に特に関心を持ち、自ら番組に出演希望を出してきた。

それは、霊長類最強の男、総合格闘技不動のチャンピオン、獅子王司である。

「獅子王さん。10年来、ファイトマネーの大半を難病治療や患者家族支援に寄付されてきた貴方の御意見は？ この伊東飛行士の汚いお金が難病研究に使われている問題に関しては、獅子王さんの今までの功績に対しても無礼だと私は思うのですが」

「うん。俺としては興味深い話だね。まず言わせてもらおうと、疑惑なんだよね？ これってまだ」

司がギロリと睨むと、キャスターは「えつと・・・そうですね。疑惑がもし本当だつ

たらで、御意見を頂きたくて・・・」と焦りながら訂正した。

「僕は当事者じゃないから患者さんの気持ちを代弁できるとは思えないけど、正直に言えば「関係ない」かな」

司の言葉に他の出演者たちは「えっ?」とつぶやく。

「何処から出たお金であろうと、今苦しんでいる人たちを救うための研究には変わりないんだよな? だから俺としては、成功して欲しいという気持ちはあるけれど、中止してほしいという気持ちは微塵も無いんだ。難病に苦しんでいる人たちも、そりゃ気持ち良く病気を治したいのかもしれないけど、俺としてはどんな手段でもいいから救われるべきだと思うんだ」

司の正論に静まりかえるスタジオ。「ですが・・・」と反論しようとするキャストもいたが、当事者意識に欠けた自らの発言を思い返し、言葉が続かない。

「じゃあさく俺からもコメントいいかな?」 司ちゃん

司に続いたのは、その正面の席に座るゲストであった。

数年前に一世を風靡したメンタリストであるが、最近はやメデイア露出も減り『懐かしのあの人』といったイメージが強い。

飄々とした雰囲気や常に周囲に媚びながら、決して敵を作らないタイプだった男。

浅霧ゲンである。

そんな男がこの司の正論に何を言って返すのか、皆の注目が集まった。

「いや、俺ってあんま興味ないのよ。そもそもこの伊東ちゃんが何してるとか」

それは期待外れの発言であった。

キャスターからも『何、映りたいだけ?』と冷たい視線が向けられる。

「俺としてはね。このスキヤンダルの出所とかが気になっちゃってるのよ。これだけ連日騒がれてる話題だから、どこの週刊誌がスクープしたのかなあ? って」

ゲンの発言に、ADたちが動く。

ニュースの情報源について即興で調べ、カンペに出してみせた。

「えっと、一般の方からのネット投稿から始まったみたいですね。特定の週刊誌がスクープしたとかではなく」

キャスターがたどたどしく答えると、ゲンは間髪入れずに口を挟んだ。

「ええ? それってちよつとおかしくない? こんなに大きなスキヤンダルだよ。売るところに売ればゴイスーな情報料もらえちゃうかもしれないのに?」

「そう・・・ですね。でも、もしかしたらここまでの話題になるとは思わなかったんじゃないですか?」

キャスターが絞り出すように出した反論に、ゲンは再び間髪いれず口を出す。

「でもさー、そんな素人ちゃんだったら、どうして取引してる人のこと分かっちゃったんだらうね？ 伊東ちゃんは分かるよ。有名人だし。でも製薬会社の人のこと、知ってるってどういうこと？」

「それは・・・同じ会社か・・・別の製薬会社の人だったから・・・とか？」

「同じ会社は無いよね。だってこの話題で大変になっちゃってるじゃん。メリットがゼロでしょ。なら、他の会社の人かな、ライバル会社とか。それって、相手が困っちゃうって想像できちゃうんじゃない？ どうよ？」

「えつとお・・・それは・・・」

「まあ、こんな程度のこと誰だってすぐに気付くから今さらだけどね。あれ？ そうじゃないのかな？」

「そう言っただや顔を全国ネットに晒したゲンの顔を最後に、番組はCMへと入っていった。」

この日から、日本の論調は少しずつ変化していった。

司に賛同し、ALS実験中止は行き過ぎた処分だと指摘する声が3割ほど。

せりかへの批判は1割ほどに減少。

そして、ゲンの発言が炎上しまくって、彼に反発する声が5割ほどに膨れ上がっていた。

『最近見ないと思つたら。話題作りでもしたいのかコイツは』

『獅子王司の正論に乗じて、調子に乗つた推理で出しやばるな』

『無関心なのはアウト。ALS患者に謝れ』

『結局、お前の意見は無いのか。蝙蝠野郎』

『上から目線で不愉快。全国民に謝れ』

せりかへの風当たりがほとんどそのままゲンに向かい、次なる「贄」として日本中の暇人の標的になつたのだ。

「いや、俺つてば今やジーマーで悪者だね」

「大丈夫だ。俺たちはお前が悪い奴じゃないと知っている！」

居酒屋街の1軒の飲み屋でコーラを片手にヘラヘラと笑うゲン。

それに付き合うのはワインをゴクゴクと飲む大樹であった。

「しかし、俺はネットというものをやったことは無いが、そんなに千空たちが嫌われていたのか」



「いやいや。嫌われ者になっちゃってたのは千空ちゃんと一緒に引っ越してて子ね。千空ちゃんなんかは気にしないタイプかもしれないけど、このままじゃISSのお仕事そのものが印象最悪になっちゃうでしょ」

「そういうものなのか・・・。それで今はゲンが嫌われ者になっていないか?」

「まあね。結局さ、世間の皆って悪者が欲しいのよ。自分以外のね」

そう、ここまではゲンの狙い通りであった。

世間を挑発し、妬みや怒り、ストレスの発散先を自分に向け、ISSへの話題を逸らす。それが彼の魂胆であった。

「にしても、日本人ってお馬鹿さんが多いよね。いや、分かるでしょ。誰が得して誰が損するとか、ちよつと考えればさあ」

これ見よがしに大声で笑うゲン。騒がしい居酒屋で、その声が嫌に響き渡る。

「おい、テメエ浅霧ゲンだな。随分調子に乗ってんじやねえのか? 芸能人だか何だか知らねえが、俺らみたいな馬鹿を見下してんじやねえよ」

その時、ゲンの存在に気付いた酔っ払いが、いかにもイライラしながら絡んできた。

「あらら〜?」

酔っ払いはゲンの胸ぐらを掴み、強引に立ち上がらせた。

「調子に乗ってんだろ。な?」

「あく。手を出した方が負けつて、普通は言うよう。大丈夫？　ちよつと考えればわかるよね」

ジトツとした目で睨み返すゲンを、酔つ払いは苛立ち露わに店の入り口に向かつて突き飛ばした。

椅子を蹴散らして道路に転がってしまふゲン。

「止めろ！　人を殴ることは良くないことだ！」

「何だテメエはよお！」

大樹が酔つ払いの前に割つて入るが、酔つ払いは構わずに大樹にまで掴みかかった。一切反撃に出ず「良くないことだ！」の一点張りの大樹に、更に苛立つ酔つ払い。

「馬鹿にしてんだろ？　そうだろ？　ああ！」

防御する大樹の腕に殴りかかり、遂には腹に向けて足蹴まで飛び出す。

周囲の人々もこの騒動に気付くが、関わり合いになりたくないと見て見ぬふりで通り過ぎていく。

「大樹ちゃん……逃げたほうがいいよ。こういう輩つて、何するかわかんないから倒れたまま冷たい視線を送るゲンの言葉に、酔つ払いの怒りは更に逆撫でされる。

そして、パイプ椅子を振り回し始めた。

このままでは大樹やゲン以外の誰かに当たつて怪我をしてしまうかもしれない。

「ちよつと、これをお借りしますよ」

その時、居合わせた通行人の1人が店の宣伝旗を掲げたポールを引き抜いて酔っ払いに近づいていった。

「ああん!?! テメエ何d・・・」

瞬間。酔っ払いが手にしていたパイプ椅子は、ポールに弾かれて床に叩きつけられていた。

その衝撃でコンクリートに弾かれ飛ぶ椅子を、通行人に付き添っていた女性が軽やかに華麗にキヤツチする。

「凡夫は怒りのコントロールもままならない。全然ダメじゃないですか」

酔っ払いは呆気にとられ、酔いが一気に冷めてしまった。

ポールの先を鼻先に突き付けられると尻尾を巻いて逃げ出した。

残されたポール使いはゲンに歩み寄って手を貸す。

「いや、助かつちやつたよ。ありがとね」

「浅霧ゲンくん：ですね? テレビ拝見しましたよ。いや、貴方は実にちゃんとしてる。僕も貴方と同意見です。それに今の貴方の挑発も、すぐくちゃんとしてる。脳の溶けた

凡人の発想とは大違いです」

「あらら？ バレちゃった？」

「ええ。応援していますよ」

そういう残し、ポール使いの男は付き添いの女性と共に去っていった。

「だ、大丈夫だったかゲン？」

男の勢いに圧倒され、話しかけるタイミングを見失っていた大樹は、ゲンの元に駆け付けた。

「そうね。大丈夫だけど、〃大丈夫じゃないってこと〃にしようかなって思ってる  
とこ」

そう言うとゲンはスマホを取り出し119を押した。

次の日のニュースは大きく手のひらを返していた。

『伊東飛行士裏金疑惑の真犯人説提唱の浅霧ゲン。暴漢に襲われ負傷』

『日本人に不寛容さが蔓延していかないか？』

『贈賄疑惑そのものにも猜疑的な意見が噴出』

人間、怪我をした側を自然と被害者として捉えるもの。

被害者というネームバリューは強烈であり、同情から擁護の声が一気に増えるものだ。

そんな被害者ゲンの発言にも、支持する声広がっていき、『投稿者の追跡調査をするべき』という声上がり始めた。

この投稿が【真】であれば、ゲンの努力は無に帰していただろう。

だが、ゲンは千空の仲間を信じていた。この件がでっちあげであると、最初から賭けていた。

でっちあげ犯は自ら名乗り出ることができない。

つまり、この仕掛けに何者も名乗り出て来ない以上、ゲンの勝利なのだ。

とはいえ、ゲンの態度が気に食わないという意見は相変わらずであり、結局は痛みわけなのかもしれないが……

「ということで、伊東ちゃんの疑惑のお話だったのを、推理合戦にすり替えてみちやったわけなのよ。ちなみに大樹ちゃんがボディガードしてくれるって分かってたから、俺も体張って頑張れたんだけどね」

大袈裟な特大絆創膏を顔に貼って入院するゲンの元に、大樹が見舞いに来ていた。

「まあ、こうやって一躍時の人になったわけだから、あとは俺のプチブレイクにでも繋

がつてくれればジーマーの完全勝利なんだけどね」

「うーん、難しい話は俺には分らんが、とにかくこれで千空たちへの悪口が減るといことなのか？」

「まあ千空ちゃんはそのいうのに無関心だろうけど、隣にいる子が泣いてちや実験もやりにくいだろうね」

そう言つてゲンは、この暴行事件の記事をいち早く報道・・・というより、事前予告してタレコミをしていたからこそ速報で出してくれた知り合いの記者・北東西に「ありがと」のメールを送った。

こうして、依然としてせりかへの否定意見がゼロになっていないとはいえ、世間の主な声は『疑惑』から『冤罪説』に移っていった。

ALS実験中止の命令もまた一転して許可されることとなり、ISSのせりかたちの元に雑音が届くことは無くなったのだ。

## 千空宇宙滞在編 その3

伊東せりか収賄疑惑が冤罪疑惑へ。

そして冤罪確定となる事件が起きていた。

池内製薬という製薬会社に勤める黒川という男が伊東せりかへの名誉棄損の疑いで逮捕されたのだ。

警察の調べによると、黒川は様々な年齢・性別になりすまし、彼女に対する誹謗中傷の書き込みをネットに上げていた。

当該の書き込みを最初に上げたアカウントが、彼の自宅のPCであることが特定され、逮捕に至ったのだ。

警察によると、上井巡査の元にタレコミが入ったことが捜査のキツカケであったとのこと。

なお、そのタレコミが何処から入ったのかは明かされていない。

「というニュースが流れたそうだよスタンリー。まったく、日本というのは甘い国だね」「ゼノ、キミのお気に入り ISS の実験を邪魔するからこうなるんだよ」

NASAの科学部署の研究室で、Drゼノは椅子でくつろぎながら、彼が依頼したハッキングの件の電話をかけていた。

「キーワードを絞り込んで最終書き込み時間から逆算してスタート地点を割り出す。セキユリティが甘すぎるおかげで、こんな子供にもできる遊びで一人の人生を狂わせることができるとはね」

「それほどに鼻屑するなんて、面白い弟子がきたんだね」

「ああ。Dr千空・・・に任せた実験は、1億人と天秤にかけても失うのが惜しい」

「1億人ならどうだい？」

「ハハハ。それなら残念だが、彼には諦めて大人しく死んでもらうべきだね」

そう言いながら笑うゼノの声に、『彼がここまで肩入れする人間がいるとは、面白いね』とスタンリーは小さく笑った。

一方その頃、ヒューストン石神家では週一回許可されているISSとの家族通信のために、この家にいる全員がモニター前に集まっていた。

無重力下で髪をなびかせる百夜と千空に、エプロン姿のリリアンが微笑みかける。

「どう千空？ そっちは元気でやってる？」

「おうよ。千空も俺もお元気イッパイだ」



「まあおありがてえことにな」

2人の返事の具合に、『実験．．．うまくいってないんだ』とリリアンは察した。顔を見れば分かる。2人に余裕が無いことが、彼女には分かるのだ。

だが、そんな事がまだ分からないのが2人の娘。

「兄上〜!」「お兄様〜! クロム! お父様!」

「う〜ん、申し訳程度にサンキューな瑠璃」

元氣いっぱい琥珀と瑠璃の表情に、百夜は涙しながらつぶやいた。

クロムがロボットアームを伸ばし「泣くなよ大人だろ」と頬を撫でると、百夜はクロムの球体ボディに泣きついた。

「で、そっちのほうはどうだ?」

「瑠璃が肺炎になってた」

リリアンがケロツと言つてのける重大事案に、百夜と千空が「はあああ!?!」と卒倒しかける。

「すぐに治ったから大丈夫だよ」

「で、そのことで話があるの。千空くん! 妹にどういう教育してるの!」

そう叫びながら画面に飛び込んできたのは、杠であった。

千空たちが旅立つてすぐ、リリアン1人で娘2人を世話するのが大変だろうと駆け付

けていたのだ。

「琥珀ちゃんが『サルファ剤を作らなきゃ!』って大騒ぎだったんだよ! 私やリリアンさんに『作って作って』って。未来ちゃんに聞いてようやく抗生物質のことだって分かったからよかったものの」

画面から飛び出てくるんじゃないかというほどドアップで映る杠。

その未来からも「スルファルニルアミドですよ」と当然のように言われて頭がパンクしていたそう。

「あ、んなもんどうせ無水酢酸にアニリン垂らす工程のことだろ? 爆発すつから危険だつて教えておいたからな」

頭を搔く千空に、杠はますます怒り心頭となった。

「ね、頼もしくなったでしょ杠ちゃん。これならいつ『お母さん』になっても大丈夫」  
そうリリアンにサムズアップされ、杠は顔を真っ赤にして笑った。

「で、どうだ? 家族の顔を見て少しは気が休まったか?」

ロボットアームを操作し、ダグと共にISSの外壁の修理に勤しむ龍水が千空に話しかけた。

「まあ多少はな」

その返事にわずかに活気を感じ、龍水はニヤリと笑う。

「司にゲン、大樹が体を張ったようだな。俺には分かるぜ、奴らが何をやってくれたのか」

「ああ。俺も分かるぜ」

「俺もな！」

NASAの業務関係以外で外部とのやり取りを一切取ってこなかった千空と龍水にとって、ゲンや司の独断行動についてはAIクロム経由のネット記事程度しか知ることができない。

しかし、仲間なら言葉などなくても心で通じる。彼らの意図は寸分違わず2人に届いていた。

「なら俺たちのやることは1つだけだな千空」

「ああ。ALS治療実験、成功させっぞ。あいつらに顔向けすんためにもな！」

そこからの千空の集中力はすさまじいものであった。

実験の全てをズババと腕が分身するほどのスピードで、なおかつAIロボット・クロムを酷使しまくり、ゼノから依頼されていた通常の飛行士であれば半年かかる量の実

験を1週間で終わらせていた。

後処理とレポートの整理をクロムに任せ、千空はせりかの隣に立った。

「石神くん？」

「暇になっちまったんでな。アホほどやんぞ、実験」

「・・・うん」

せりかは涙を押し殺し、千空と共に実験を始めた。

だが、2人がかりであろうが、それだけで運勢が変わるといわけではない。

これは不治の病とされてきた難病への挑戦。

「人類が200万年かけて倒せない相手だ。そもそも攻略法の存在しない負けイベントかもしれないねえ。だがな、今俺らにできるのは試すことだけだ。なんでも試せ。とにかく試せ。試して試して試しまくれ」

自分を無理やり鼓舞する空元気にも見えるこの言葉を、千空は呪文のように言い続けた。

が・・・やはり実験は一向に成功しなかった。

温度も様々に試し、保管期間も色々変えてみても。

もう、これから先何を試したらいいのか・・・

「おいおい千空。せりかちゃんに気の利いたこと言っただけあげねえのか？ いや、お前のキャラじゃねえな」

「千空ちゃんも少しはカッコいい顔してるんだから、女の子に優しくしてあげられるようになれば、モテモテになると思うわよん」

笑いながら実験エリアに入ってきたのは百夜とダグであった。

2人とも千空と同様に自身の任務を急ピッチで片付け、せりかに加戦しにきたのだ。

「まあ試しまくるつつうのは大正解だ。できるまで無限に試しまくろうぜ」

「時間は有限よ。だけど、試しまくるのは嫌いじゃないわ。むしろ大好き」

こうして4人体制で実験は続行された。だがやはり、解決の糸口は見えてこない。

求めているのは特定のタンパク質の分離反応。ALS患者であるシャロン博士から「打ち抜いた皮膚」から採取した貴重な物。

それが1つまた1つと、何の変化も見せない現状に歯噛みする4人。

そんな中、龍水はAIクロムに探索プログラムを入力して遊んでいるうちに、あるモ

ノを見つけていた。

「おい貴様ら、そろそろ就寝時間だ。カメラも音声も切ってきた。ということで・・・コイツを一服どうだ？」

そう言つて龍水が出したのはフランス生まれのブランデー、コニヤックであつた。

「お前、そんな物何処から・・・」

「クロムに別プログラムがあるだろ？ そいつが見つけてきてくれたのだ」

そう言つて龍水がクロムをポンポンと叩くと、いつもの少年声ではなく幼い少女の聲が飛び出してきた。

「スイカが見つけたんだよ！」

それは百夜考案の隠しプログラム。クロムのような科学的興味よりも探索的興味に特化した別人格・スイカであつた。ネーミングセンスは、その時ちようと琥珀が食べていたものが由来である。

「スイカもお役に立ちたいから狭い所に探しに行つて見つけたんだよ。コニヤックつてなに？」

「ズヴェズダにあつたそうだよ」

「面白いやロシアのモジュールにや酒が隠してあるつて、ヤコフから聞いたことあるな」  
そう言つてコニヤック入りの袋にストローを刺し一吸いする龍水と百夜。一気にほ

ろ酔い顔になり、袋を千空に向けて投げて寄越した。

「お前ら度数40%舐めんな」

「あん？ 千空つてばお子ちやま舌だったか？」

「ストレス緩和だ。気にするな」

ヘラヘラ笑う龍水を尻目に、アルコールで脳細胞が破壊されてはかなわないと、千空は実験用スポイトで吸い取り、コニヤックを水滴状にして飲むことにした。

「まったく、何やってるのよ石神くんも……」

するとせりかは何かを思いつき、千空からスポイトとコニヤックを受け取ると、今まで実験していたタンパク質の沈殿剤の入った試験管にコニヤックを垂らし始めた。

「お前こそ何やってんだ？」

「昔、お父さんもこんなことしてたのを思い出したの。どうせ『この子』たちもダメだろうから」

「ヤケクソというわけか。だがそれも時には良いだろう」

そう言つて龍水はホンワカした気分のまま、就寝用の寝袋へと入つていった。

「おい、歯磨きと寝袋の固定忘れんな」

母親のような事を言うためにスイカから切り替わったクロム。あまりの豹変に、百夜と龍水はビクツとなった。

それを見てせりかは久しぶりに屈託のない笑顔を見せた。

その翌日。

お酒の力を借り、久々にぐっすりと眠りにつくことのできたせりかと千空。

やや惰性的になってきた実験結果の検証。前日に保管したタンパク質を顕微鏡で確認する。

「失敗。これも失敗」

駄目だと分かっているにも、心のどこかで期待していた。それでも叶わない結果に項垂れる2人。

「あれ？ ここんとこ見て」

せりかが映し出されたタンパク質のわずかな変化に気付き、画面を拡大する。

すると昨日、コニヤックを入れた試験管のタンパク質にわずかな結晶化が見られた。

「こいつは・・・」

「やっぱり、今までのと違う」

失望から一転。一分の希望が見えはじめ、2人は興奮を抑えられない。

再びコニヤック入りで、温度と保管時間を変えて試そう。そう言葉にするよりも早く2人の手は動いていた。



「マジかよ。100億倍パワーのスーパー青カビ見つけたつう超ラッキーの運ゲーの比じゃねえかコイツは」

「ペニシリン・・・偶然でも、治せるなら成功・・・」

2人は自然とつぶやき、コニヤックの反応を確認し始めた。

「駄目だ。これも完全じゃない」

「さつきよりかマシだが・・・理想とは違えな」

1つ、また1つと失敗の結果に絶望感が増していく。

が、ついに6番目。

ALSの原因となる変異TDP-43の活性を阻害させるために必要な、タンパク質の結晶化が、完全な形で発見されたのだ。

「できてる・・・結晶化、できてる」

「・・・だな。マジでスゲエぜ。こいつあ」

千空が漏らした言葉に、せりかも声を震わせて報告用のマイクを手を取った。

「ALSタンパク質結晶化。原因は未解明の段階ではありますが・・・」

## 実験成功です」

その時、千空はISS内に漂う水の粒を目にした。

それはせりかの目から溢れる大粒の涙の塊たち。

父親の死を目の当たりにした日、一生分の涙を使い果たしたように泣かなくなってしまう彼女が、堪えることができなくなつた。堪えるべきでなくなつた。堪えなくてもいいと、心から思えるようになったのが、この瞬間であつた。

ISS内を管理する管制カメラの前で、声にならない声を上げ、何一つ恥じることなく子供のように泣き始めたせりかに、千空は静かに肩を貸し、なだめ、褒め、ねぎらうように、その頭を優しく撫でたのだった。

## 千空宇宙滞在編 その4

その日、ニュースストップに飾られた『ISS伊東せりか飛行士実験成功』の記事。

難病であるALSのタンパク質結晶化実験に成功し、これによりALSに効く新薬開発が大きく前進するであろうと、世界中から称賛の声が上がった。

かつては取崩疑惑により最悪の状態にまであつた彼女を、多くの人々が祝福し賞賛している。否定派の声は残るものの、そのほとんどが医学や宇宙開発に無関心なだけの話。

そんな彼らもいつか気付く。この実験成功によりどれだけの人が喜び、どれだけの人が『明日も生きよう』と思うか、を。

「せりかちゃん。本当におめでどう！」

ISSに百夜の喜ぶ声が響き渡る。

「ありがとうございます。皆さんのおかげです」

ダグと百夜にハグされ、満面の笑みを浮かべるせりか。

「で、千空よ。流れでこの疑惑についてコメントを貰えないか？」

そう意地悪そうに言つて龍水がAIクロムを操作して画面に表示させたのは、ISSのカメラが捉えていた実験成功・・・の後の映像であつた。涙の粒が舞う中で、せりかの頭を優しく撫でる千空の姿。

画面を切り替えると、今日日本で『ナデナデ王子』と千空が話題になっている記事が映し出される。

『わたしも頭ナデナデされたい』だと。千空、お前もプレイボーイになったもんだな！

百夜が茶化すと、AIクロムはスイカに置き換わり「スイカもナデナデしてほしいんだよ」と流れに乗った。

それに対してリアクションするのも面倒くさいという態度満々の千空が白けた目で父親を睨む。

「瑠璃や琥珀にいつもしてやんのと同じだろ」

「ところが、世間はそうは思わない。なんてつたつてこの映像、すでに100万回再生されているそうだからな！」

ゲスい笑みを浮かべる龍水と百夜であつた。

ちなみに、その映像を何とも複雑な思いで見ている男が月面にいた。

休憩時間、プライベート通信で千空に直接電話をかけてきたのは、南波六太であった。

「まあ、まずは実験成功おめでとう。千空、せりかさんをよく助けてくれた」

喜びと、ほんの1%ほどの妬みを込めた笑顔で実験成功を称賛する六太。

「あ、あ、大体言いたいことは分かっている。んなつまんねえ不平ブツクサ言う暇があるなら、さっさと告つちまえ。4年も何も言わねえとか、どんだけ非合理的だ」

「なっ・・・何を言っているのだね千空くんは!？」

せりかへの想いについて千空から急に飛び出した話題に、六太は酷く動揺する。

「2年前だったか？ あのバルタン星人ハートマーク雲。アイツ、アホみたく空間認識能力が欠如してやがんのかミリほど理解してなかったが、普通にハートマークになってたぞ」

そう言って千空は指でハート型に空をなぞってみせた。

「つつうわけで、ALSの分の礼をしてえつつうなら、地上戻ってすぐ言え。でもってシャロン天文台完成させて、そのデータを俺に横流ししろ。そいつが100億%効率のしろ」

そう一方的に告げ、千空は通信を切った。

その後、六太の想いは意外な形でせりかに伝わることとなる。

それは日本のテレビ番組の企画から始まった。

人気タレントのニツキーが司会となり、子供たちを集めてISSとテレビ通信越しにインタビュするという番組である。

番組冒頭、ニツキーがALS実験成功の件を祝福した。

「伊東飛行士、実験成功おめでとうございます。貴女は世界でALSと戦う人たちの希望です」

「そんな……でも、私も本当に嬉しいです」

照れるせりかに会場から拍手が送られる。そんな中、ニツキーはせりかの隣に立つ千空にも話を向けた。

「それに石神飛行士。私は思うんです。貴方や他のISSの仲間方々が伊東飛行士を側で支えていたからこそ、この成功はあつたんじやないかな？　って。ありがとうございます  
ます」

「ククク。大したことはしてねえよ。チームつつう強みが活きただけだ」

そう言つて耳掃除する千空であつたが、それがただの照れ隠しだろうと、会場中から拍手と笑いが巻き起こる。

それからしばらく番組は淡々と、子供ならではの質問が飛び交いながら進行していった。

「じゃあ次の子、何か質問ある?」

ニッキーに指名された子供が質問したのは「地球に帰ってきたらまず一番何を食べたんですか?」であつた。

千空は特に悩む様子もなく「ラーメン。こつちのは味は悪かねえ。が、スープがどうしても粘つくくて仕方ねえ」と即答する。

一方で隣に立ち質問に答えるせりかは「え〜とどうしようかな・・・ラーメンもいけど焼き肉もいいですよ。たこ焼きにしようかな・・・お寿司・・・」と散々迷つた挙句、地元の知り合いのお店が出している『ハートコロツケ』というハートマークの形をしたコロツケを答えた。

インタビュも終わり、千空たちは食事タイムに入っていた。

せりかはAイクロムの液晶画面に例のハートコロツケを映して「これこれ。食べたいな」と、ポテトサラダを頬張っていた。

「ポテト食いながらポテト欲しがんのかよ」

「はっはー、せりからしいではないか」

そう言つて千空はラーメンをすすり、龍水は黒トリユフの松坂牛リエット（真空パックver）を口に運んだ。

「あくハートコロッケにマヨネーズつけて食べたい」

せりかはそう眩き、マイペースにもマヨネーズを空中に出してハートの形を作った。無重力に放出されたマヨネーズは慣性のままその形状を保つため、上手に出せば3Dアートとなるのだ。

そうして容易く無重力ハートマークを作り出すせりか。

ハートマークが徐々に横に回転し、それこそカニのハサミのような形に見える位置まで動く。

それを見て、千空は例の六太の飛行機雲を思い出した。

「これ、どつかで……あれ？ 何だっけ。今一瞬『ヒュッ』て通っただけど記憶が」  
せりかの脳裏にも、その時の光景が一瞬蘇るが、鈍感なのかスルーしてしまった。

そのじれったい空気に、千空は下手くそな誘導を仕掛ける。

「……飛行機雲みてえだな、こいつは」

そう言つて千空が助け舟を出すと、せりかもようやく思い出した。

「ああそうだ。南波さんのバルタン星人だ！」

違う！ いい加減自分で気付け！ と、千空は苦笑いしてツツコミを我慢する。

「え……はあ~~~~~!!」

せりかはようやく自分の力で気付いたのだ。



あの時、六太がせりかに見せたかったものの意味を・・・

そして、せりかは月面への連絡を決めた。

ちようど月面では六太が未知の洞窟を発見し、シャロン天文台のコンピュータを起動させたりと、話しかける話題として困らないタイミング。

「あの、六太さん・・・」

普段、せりかは六太の事を『南波さん』と呼ぶ。この変化は事情を知る者から見れば大きい。

「私、カン違いしてたかもしれないんです。あの時、六太さんがその、空にスモークで描いてくれたの私、バルタン星人だと思つてそう言っちゃったんですけど、本当はもしかして・・・あれ？ え？」

そこで2人の通信はタイミング悪く途切れ、画面は砂嵐に包まれてしまった。

それはISSでも月面基地でも、NASAでも起きた異変。

「百夜。大変よ。ヒューストンと通信が途絶えてんのよ」

ダグの知らせに、ISSの5人は急遽集まり緊急ミーティングを始めた。

太陽フレアによる太陽嵐。電波障害であつた。

せりかと六太の恋路を邪魔した通信障害は一時的な物で、ISSの千空たちにとって大したピンチでもピンチに入るものでも無い。

より危機感を持つ必要があるもの。それは12時間後に届く強い放射線だ。

地球は磁場によつて守られているため、この放射線が害となることは無い。

ISSも地球の磁場圏内にあるため安全であるが、一応スヴェズダの防護エリアに避難する必要がある。

「宇宙というのは恐ろしいものだな」

「まあ、こいつに関しては狼狽える必要なんざ一ミリもねえよ。オーロラ発生器とでも思つときゃいい」

「ああ。千空の言う通り、まだ焦る時間じゃない。むしろ問題はその後が届く磁気嵐だ」  
百夜の言葉に、4人はジトツとした汗を額に感じたのだった。

## 千空宇宙滞在編 その5

ISSでの任務に一区切りがついた頃、突如として発生した大規模な太陽フレア。

その影響が今、千空たちの目の前に現れていた。

「なんだ、あの光・・・」

地球を包むほど巨大で、壮大でありながらどこか不気味さすら覚える光の帯を前に、龍水は悪寒を覚えていた。

あの光に当たってしまったら・・・自分は一体どうなってしまうのだろうか、と。

「ただのオーロラだ」

「オーロラか！」

平然とした千空の声に、龍水は恐怖していたことを恥ずかしく思い顔を真っ赤にする。

そこにスイカモードから戻れなくなったAIクロムが近寄り、「オーロラって何？」と龍水の腕の中に入った。

「オーロラつつのは太陽から届いたプラズマの悪戯だ。完璧に解明されちゃいねえが、酸素と窒素をお元気にして発光させた現象だ」

「さすが分かりやすい解説だ。ところで千空、そのカメラは？」

「そりやお前、今からオーロラン中に突っ込むんだぞ？ 100億%ウルトラレア体験だろうか」

そう言つて千空はキューボラというISS内の展望室に向かった。

その隣でせりかが仰々しい一眼レフカメラを手にしている。

「ダグさんが、NASAヒストリーの表紙を飾るくらいの写真を撮つてね、つて」  
「ククク。責任重大だな」

オーロラが目の前に近づく中、千空はカメラを連写しまくつた。

「綺麗なんだよ」

怖いくらいに綺麗な光の中に溶けていくISS。AIスイカも、この感動的な光景に目を輝かせる表示に切り替えた。

が、同時に耳に届いた百夜の交信が龍水を焦らせた。

「こちらISS。大気摩擦の影響で高度が10kmほど下降した」

百夜の管制とのやりとりに、龍水は「だ、大丈夫なのか!？」と戦々恐々とする。

「んなもん想定内の範囲だ。いちいちビビんな」

「そ、そうなのか・・・」

「まあ、10kmも落ちりやデブリ帯が怖えけどな」

デブリとは、宇宙に漂うゴミのことである。衝突すれば1g分の大きさでも手榴弾並みの威力。ISSの壁に穴が開く。

「それは怖いんだよ」

「ククク。もつとヤベえことがこれから起こっぞ。お子様はとりあえずスリープしとけ」

そう言うと千空はA Iスイカの電源を落とした。

「何をしているんだ千空？」

「今回は過去最大のプラズマだ。電子機器に電源入れっぱだとショートすんだよ。でもって龍水、お前が一番ワーワー騒ぎそうな事が起こる」

「・・・という事は・・・停電か」

「正解。100億点だ」

「なるほど、俺たち5人は地上から隔絶されてしまうということか」

宇宙空間での停電は地上で遭遇するものと比較にならない重大アクシデント。

だが、龍水は怯えていなかった。たとえISSと地上との通信が遮断されてしまったとしても、ここにいる仲間たちがいれば、何も不安に思うことなど無いからだ。

・・・ということをカッコいい言葉で千空に伝えようとしているところに、千空がい

つものような気怠い顔で口を挟む。

「つつても、停電はせいぜい1時間だかな。当面一番の問題は、俺らの引継ぎのクルーが来るのが遅れるつつうとこだな。1週間くらい滞在期間が延びる」

「つて、そつちか!」

その後、千空たちCTV―28の後任であるCTV―29のクルーたちは、予定より4日遅れでISSに到着した。

いよいよ、千空たちの旅も終盤を迎える。

日本製の補給船FUJIに、今までの実験成果、努力の結晶を積み込んでいく。

勿論、ALS実験の貴重なタンパク質結晶も、である。

「ついでにお前<sup>ら</sup>も同乗だな。クロム、スイカ」

「じゃあな千空」「行ってくるんだよ」

AIロボット用の格納エリアにクロム・スイカを積み込み、これでしばらくの別れとなる。

「無事に地球に届きますように」

祈りを込めて、FUJIの分離を見届けるせりかたち。

約4時間後、日本の種子島近海に着水予定だ。

「はっはー、心配は無用だ。『日本初』の帰還型補給船のFUJIにはコウノトリの制御技術が使われている。姿勢制御のバックアップは取りこぼし無く完璧だ。何があっても必ず、無事に地球には届く！」

そう豪語するのはFUJI開発会社スイングバイの出資者兼新入社員の龍水。

「お前が金出して作ったわけでもじゃねえけどな。出資前から開発されてんだろ」  
「その通りだ！」

そう言いながらも胸を張る龍水と共に、FUJIの帰還を見守る千空たち。

高度落下、再突入と、無事にシークエンスを経過していく。

が、そこでハプニングが発生した。1基のスラスタに異常が発生したのだ。

「ふん。1基程度の故障ならば問題ない。茶でも飲んで落ち着いて待てばよいのだ」  
鼻を鳴らす龍水。

だが、大気圏を越える頃にさらに1基。別のスラスタまで故障してしまう。

「ん？ んんん！」

顔色の変わる龍水に、ISS内でも不安の色が広がる。

「ヤベえんじやねえか？」

「いや、パラシュートとパラフォイルの展開さえ無事であれば、ブツは必ず無事に地球に

届く。届きはする……のだが」

「着陸ポイントが大幅にズレやがる……ってことか」

千空の心配は当たってしまった。

本来であれば海上保安庁の回収船が目視で確認できるほどのピンポイントで地球にたどり着くはずのFUJIカプセルが、予定を大きくズレてしまったのだ。

着水地点は種子島から北東に100kmと推測される。

カプセルが海の中に沈んでしまうことはないが、一刻も早く無事な姿が確認できなければ開発会社スイングバイの評判に影響してしまう。

「こりやマズインじゃねえか？ お前の会社、大損すんぞ」

「ああ……これはピンチに入る。世間の体裁を考えて、信頼を損ねずいられるのもせいぜい1時間。それまでに『誰かが』発見してくれなければ……」

戦慄する龍水の祈りが届いたわけではないが、それはFUJIの内部から起動していた。

「ヤベーこことが起こってやがんな。こっちは俺の出番だろー」

FUJIの情報を解析し、自らの判断で起動したのはAIクロムであった。



とはいえ、カプセルには自動操舵システムも無く、設定されていない周波数の救難信号を発信するシステムも搭載されていない。

「だがな、当たるゼヤベー科学使いのカンは。いるな、俺たちの仲間がな！」

クロムは内在プログラムの中でそう叫ぶと、周波数を調節し、ある場所へ救難信号を発した。

そしてついに、海上保安庁がFUJIの捜索に難航する中……

「見つけた！ FUJIだ！」

海上に突き出た潜望鏡がFUJIの姿を捉える。

発見したのは海上自衛隊の潜水艦。クロムの発信した周波数を捉えたソナーマンが、現場急行を上層部に進言してくれていたのだ。

「あはは……一企業のメリットのために潜水艦動かすなんて、普通は自主退職ものだけどね。でもこの中には世界中の患者さんの夢が詰まっているんだよね？ 千空、龍水！」

こうして、本人のたつての希望でFUJI発見の一報はソナーマン・西園寺羽京によつて種子島に伝えられた。

こうして、世界中が待ち侘びたALS治療実験の成果。そして数年分の実験成果が詰まったISSからの荷物が地球に届き・・・  
残すところはその立役者たちの帰還。

CTV | 28、クローバーズ。

石神百夜

ダグ・ホワイト

伊東せりか

石神千空

七海龍水

5名の帰還を残すだけである。

## 千空宇宙滞在編 【最終回】

長くも短い3か月であった。

宇宙飛行士・石神千空の初フライトも、この日で終わる。

「忘れもんはねーな？ 取りに来たくたって、しばらく来れねーぞ」

「修学旅行じゃねえぞ」

宇宙服に着替えながら、百夜がヘラヘラと笑い、千空は呆れたように言いながらもニヤリと笑いヘルメットを被った。

こうして呑気な話を「無重力の自由空間」でできるのもこれで最後。

その1秒1秒も名残惜しくも、5人は楽しんでいた。

「それじゃあくローバーズ。無事を祈る。次会うのは、地球だな」

交代クルーたちに見送られ、帰還船オリオンに乗り込む5人。

ISSとの間に空気漏れが無い事を確認し、座席に座る。

「さあ、帰るぞみんな」

百夜の呼びかけに4人は胸をバクバクさせ、「はい」と答えた。

帰還シークエンスに入り、ゆっくり時間をかけてISSから離れていくオリオン。

ISSの窓からクルーたちが5人を見送ってくれているのが見える。

「ありがと、ISS……またね」

特に名残惜しそうにISSを見つめるせりか。

今回の贈賄疑惑で、一時は宇宙飛行士人生すら再起不能になっていたかもしれない彼女。

今でも、この騒動の收拾をつけることができなければ、2度とISSに戻ってくることはできないかもしれないと、心の隅に不安を残している。

そんな彼女の様子に気付いた龍水が優しく肩を叩く。

「心配するな。貴様の功績は俺たちが、世界中が知っている。ならばいざれ向こうから『またISSに行ってくれ』と言ってくるだろう。ドンと構えておればいい!」

「……ですね」

せりかの笑顔に、龍水は「その意気だ」と励ましの言葉を贈る。

ISSとの距離がある程度離れ、いよいよ2回目のスラスター射出。

ガタガタと衝撃が5人を包み始める。

ますます帰還の雰囲気が高まっていく。

「予定通りオリオン高度上昇。順調だ。次の噴射まで待機してくれ」

管制からのアナウンスに耳を傾ける。

次の噴射は地球に向かうための噴射。ついに無重力と、宇宙とお別れの時間ということだ。

「色々、ありやがったな」

千空はこのISSでの日々、今までの宇宙飛行士としての訓練の日々、宇宙飛行士になるまでの日々に想いを馳せていた。

10年。

ドラえもんをきっかけに仲間が集まり、ISSから帰って来た白夜たちを迎え、宇宙飛行士を志してから10年が経っていた。

それが今、自分が宇宙から地球に帰還する番である。

「オリオン、軌道離脱噴射まで残り20秒」

いよいよだ。

5. 4. 3. 2. 1. メインエンジン点火

秒速128 m分減速を確認。

もう後戻りできない域に入った。あとは落ちていくだけである。

エンジン区画が切り離され、バンという強い衝撃が走る。  
大気圏へ突入だ。

「見ろよ千空、窓の外を」

大気圏を突破する時に発生する火花のようなプラズマが、窓を鮮やかに彩る。

「これは宇宙旅行の終わりを告げるもんだが、こいつを見た宇宙飛行士はまた次も宇宙に上れる。祝福の火花って呼ばれてんだよ」

「ククク。そういうゲン担ぎにやーミリも唆らねえが、悪くねえじゃねえか」

千空が笑う中、振動はますます激しくなる。

「パラシユートカバー分離確認。ドラッグシユート出ます」

2段階のパラシユートのうち1段階目が開き、5人にガクンと強い衝撃が走る。

千空は、かつてアスキャンでコンペに参加した日々を思い出していた。

あの時は自分たちの手でキャンセットを飛ばし、パラシユートを開かせるために自分たちで畳んだ。

それに今、自分たち自身の命を預ける。

ガクン！

続いて2段階が無事に開き、いよいよ地表への着陸となる。

窓の外に見えるのは、3か月ぶりの地球の青い空。

ゴツ！

強い衝撃と共に土煙が舞い上がった。

さつきまでガタガタいつていた振動が止み、不気味な静寂がオリオンを包む。

今見ているのが、果たしてリアルなのか・・・それとも失敗して死んで幻覚の世界にいるのか、一瞬判別がつかなかった。

だが、体に残る痺れは。ジェットコースター100億回ほどの痺れは、生きている証。

「うわああ、すっごい」

「ははははっはー！」

せりかと龍水の笑い声がオリオンに響き渡る。

「ヒューストン、CTV-28オリオン、着陸成功だ！」

百夜の報告に、オリオン船内に届く管制の歓声が響き渡った。

ついに、千空たちは地球に帰って来たのだ。

「おかえりだな、千空」

「ああ百夜。ただいまだな」

そう言つて握手しようと手を伸ばしあう百夜と千空。

その手は鉛が入っているのかと思うくらいに重く感じられた。

口を開けば舌まで重い。

髪の毛も重い。

それでも2人は手を伸ばし……したが、その仲睦まじい親子の絆的なものを和やかに見守る他3人の視線を感じ、千空は気恥ずかしそうに手を引つ込めてしまった。

しばらく待っていると、救助スタッフが現れ千空たちを抱えてオリオンから出してくれた。

3か月ぶりの地球の大气。

拍手で出迎えるスタッフ。

外の空気、土の匂い、風の心地よさ。これが地球。

スタッフに両脇を抱えられ、千空は専用のヘリに乗せられた。

目指すはジョンソン宇宙センター。そこで彼らの帰還を待つ人々に元気な姿を見せに向かう。

「ついに、ISSからクローバーズが帰ってきました！」



へりから降り立った5人に、観客から割れんばかりの拍手が贈られる。

5人は片手を挙げ拍手に応える。

その実、立っているだけでやっと。3か月毎日欠かさなかった筋トレの成果があつて、立って笑顔を絶やさずにいるだけでやっとであった。

「ふははは。偉いぜ千空、さすが宇宙飛行士だ」

「ククク。まだくたばるわけにいかねえからな。ウォームアップに丁度いい」

報道陣にある程度挨拶を交わし、5人はメデイカルチェックに向かう。

そして、健康状態を判断したうえで、百夜・千空・龍水は特設テントへの移動を許可された。

そこに待つ人々と、再会を喜び合うために。

「千空うーうー!!!」

「だー、鼓膜がバグるわ」

大樹の大声に耳を塞ぐ千空。いつもの面倒くさそうな表情でありながら、しつかりとリアクションする姿は、いつもの千空のままであった。

体が重く、起きていられずにベッドに横になっっている以外は、元気そうな姿に誰もが安心する。

「お兄様あ!」「兄上!」

その声に一瞬怯んだ2人の少女、瑠璃と琥珀が千空の胸に飛び込もうとするが、寸でのところでもリリアンが2人をキャッチする。

「駄目って言ったでしょ。抱っこしたら肉離れ起こしちゃうって。リハビリが終わったら、ハグでも何でもさせてくれるわよ」

リリアンが「ねっ」とウインクすると、千空はニカッと笑い「ああ」と答えた。「そのくんだり、パパには一切無いのね。やっぱり」

そう言っつて枕を涙で濡らす百夜の元に、彼の仲間4人が集結している。

「やあオジサン。墜落させちゃうんじゃないかって心配してたよ」

「もうシャミールったら。百夜さん、本当にご無事でよかった」

シャミールとコニーがそれぞれ息子2人、黒髪と金髪の兄弟を抱きかかえ、百夜を労う。

「オホー。元氣そうじゃん百夜。親子3か月水いらすの旅はどうじゃった? 宇宙空間は水は何でもリサイクルするから文字通りなのよ」

「何ウマいこと言っつてんのよヤコフ。おかえり百夜、イベント一杯で楽しかったんじゃない?」

ヤコフとダリヤもまた、子供を抱え百夜に微笑みかける。

「まあな。またそのうち行ききたいぜ」

ニヤリと笑う百夜は、4人としばらく笑いあった。

一方で千空の方にも、瑠璃・琥珀が席を譲ると多くの人が集まっていた。

「千空くん……ほんと、無事に帰ってきてくれてよかった」

「ああ。家心事、迷惑かけたな」

目に涙を浮かべる杠に、千空は優しく微笑みかけた。

「いや、今の流れジーマーの夫婦のやり取りじゃない？ や、お久々千空ちゃん」

「ゲン、お前もずいぶん好き勝手やってくれたな。おかげでALS治療を守れたぜ」

「何言っちゃってんの？ 俺は自分の売名のためにやっただけだよ。失敗したらおじやんの賭けだったけど。だって分かってたから。千空ちゃんたちなら実験成功させるって」

作り笑顔で本音を語る。そんないつも通りのゲンの姿に、千空はニヤリと笑って返した。

「千空。実験成功と帰還、おめでどう」

「千空さん、おかえりなさい」

そう言っただけでシンプルに出迎えるのは獅子王司・未来の兄妹。

「おお、難病チャリティーマン。肩身狭くなかったか？」

「その点は大丈夫さ。あの程度のこと日本人のモラルは低下『させない』」

「兄さんが呼びかけたから、今すつごくチャリティー運動が流行ってるんですよ！」

心配ご無用といった獅子王兄妹に、千空は逆に心配して損した気分になっていた。

「やあ石神千空飛行士。ひさしぶりだね。ここなら堅苦しくなくてありがたいわ」

ISSで唯一、テレビ番組越しに顔を合わせていたニツキーもまた、この日のために休みを取って駆け付けていた。

「ああ。人気タレント様も辛いな。また今度、酒でも飲もうぜ。リリアンとか連れてな」

「!!! や、約束だよっ！」

そう言つてニツキーは思わず肩をバンと叩きそうになり、必死に自分を抑えた。

その後ろから元・最後のドラえもん仲間の自衛隊員、羽京もロボットを手にして顔を出す。

「やあ千空。おかえりだね」

「よお千空！ 先に帰ってきたぜ」「スイカもだよ！」

無重力用ロボットAIクロムが元気よく声だけスピーカーから響かせる。

「ああ羽京。てめえの最強のアナログ耳が、スイングバイを守ったな」

「ハハハ。それがバレたらマズイけどね。とりあえず、みんな無事で良かったよ」

そう言つて笑う羽京が視線を向けた先では、龍水の側に立つフランソワの姿が。

「フランソワ。杠に養育手当と、大樹に傷病手当は？」

「既に支給済みでございます」

「さすがだ。他に変わりは無かったな？ であるなら明日から早速、リモート会議だ」

「いや仕事しすぎだろ社長」

「元氣すぎる龍水と、それを当然のように受け入れるフランソワに呆れる千空。

「大木夫妻！ 俺は決めたぞ。日本初の民間宇宙旅行会社を、俺は作る！ 貴様らは明日からその立ち上げ部署に異動だ！」

「おう、任せろ龍水！」

「大樹くん、社長だから。でも今はいいよね。かしこまりました、龍水くん」

そう言っって頭を下げる杠と、下がっているのかよく分からない大樹。

そんなガヤガヤとした雰囲気、心地よさを覚える千空。

「ククク。ようやく帰って来たな。地球様によお」

そうつぶやくと千空は百夜のほうに寝返りを打ち、手を伸ばした。

「百夜。やっと帰ってこれたな」

「そうだな、千空」

そう言っって2人は手をしっかりと握り合った。

||  
終  
||

ドラえもののび太と千空の銀河超特急

ドラえもののび太と千空の銀河超特急 その1

22世紀で大人気の銀河ミステリー列車『銀河超特急』のチケットを苦勞して手に入れたドラえもん。

のび太經由でいつものメンバーを誘い列車旅行を計画していたが、タイミング悪くスネ夫もまた『地上ミステリー列車』のチケットを手に入れ、のび太を除け者にして自慢している最中であつた。

スケールで言えばスネ夫の完全敗北ではあるが、彼が負け惜しみに宇宙の怖さを指摘したため、危険を恐れた3人をのび太は誘うことができなかった。

ドラえもんは落胆していた。入手困難なチケットで個室を5つも取つていたので。

のび太と2人で貸し切りにするのもいいが、誰かを誘わないと勿体ない。

「じゃあさ、『あの人たち』を誘おうよ」

のび太の提案に首をかしげるドラえもん。そんな彼のポケットに無理やり手を突っ込んで、のび太は少し小さいカーペットのようなものを取り出した。

「グフツ、何するののび太くん、くすぐつたいよ。つて、なんだ神さまシートじゃないか」

それはドラえもんがのび太の夏休みの自由研究用に「地球」を作り出した時に使った道具であった。

「このあいだ、1日未来のボクたちが言ってたじゃないか。うっかりこの中の地球の人類を絶滅させちゃったって」

「そうだね。リセットはしたみたいだけど、生き残った人たちが150人くらいしかないなかったって」

「だからそのお詫びに、このツアーに呼んであげられないかな？ って」

「うーん、できなくはないよ。ボクもこの前、説明書を読んだんだけど、《バックアップデータ》のボタンを押すと、リセットした時に生まれたパラレルワールドに行けるみたいなんだ。だから、その150人しか人のいない世界に行って、事情を話して、何人かをコッチに連れてくることはできる」

ドラえもんはそう言っただけで神さまステッキをポチポチと操作し、神さまシートの中から見える宇宙空間をワープ空間のような虹色に変えて見せた。

「はい、これで出来上がり。じゃあのび太くん、早速」

「やり直す前の世界へ、レッツゴー！」

こうして、バックアップされた側からしてみれば倫理観の崩壊しまくった機能を使い、ドラえもんとのび太は人類石化から3700年以上経過した自家製の地球へと降り



立った。

大気圏を越えてすぐ、2人は自らの呑気さと罪の深さを思い知った。

山の峰に降り立ち周りを見回すドラえもんとのび太であったが、広がるのは鬱蒼としたジャングルと化した日本。2人が最後に見た時に栄えていた人類の文明の全てが失われ、人類の全てが朽ちた石像と化していた。

「これが・・・地球・・・未来のボクたちが絶滅させちゃった・・・」

「こんなところで生き残っている人たちが、本当にいるのかな？」

そう言つて腕を組むドラえもんであったが、遠くに白い煙が昇っているのを発見した。

それは火山や山火事ではない、紛れもない人の痕跡である。

「行こう、のび太くん！」

タケコプターで煙の方角へと急ぐ2人。

そこには小さな集落があった。

湖の小島に橋を渡し、その上に木や藁で作った小さな家が並ぶ。

その近くで仕事をする人たちは植物や動物の皮で作ったような服を着て、仲良く楽しそうにしている。

「よかったあ。平和な村があつて」「そうだねドラえもん」

2人が微笑ましく村の人たちを見下ろしていると、その中の1人がドラえもんたちの姿を見つけたようで空を見上げて唾然としていた。

この原始時代には少し奇妙な“ハンチング帽”みたいな被り物を頭に乘せた若い男だ。

ドラえもんの経験上、“気球や飛行機の無い時代”に空を飛ぶ人間を見つけた人がどういうリアクションをするのか分かつていた。

「ドラえもんだ〜！」

そうそう、こつこつやつて叫んで人を化け物呼ばわりして驚く・・・

「ん？」

ドラえもんとのはび太は顔を見合わせた。

すると男性の叫びに気付いた村の人たちも次々にドラえもんとのはび太の姿を見上げ、手を振って挨拶をしてくるではないか。

「お〜い。こつこつこつこつ」 「久しぶり〜」 「う〜む、あれも科学か。凄まじいな」

賑やかに歓迎ムードを漂わせる村人たちに招かれ、ドラえもんとのはび太は村の中央あたりに降り立った。

「えっと、あの」「お久しぶりです、なのかな？」

自信なさげに腰を低くするドラえもんとのび太に対し、村人たちは誰もが笑顔で2人を迎える。

訂正しよう。先ほどのハンチング帽の男性だけは依然として目を見開いて驚いた表情のままだ。

「せ……千空う〜！」

走り去る男性を見てドラえもんは「あの人どうしたんですか？」とつぶやくが、村人たちも「さあ」と首を傾げる。

「よく来てくれた2人とも。前に千空が『この世界が消えるから二度と会えん』とか妙なことを言っておったが思い過ごしだったな」

「あれは怖かったんだよ〜」

髭をたくわえた長老っぽい人が足元に転がるスイカを踏まないように前に出て、ドラえもんととのび太に握手を求めらる。

その言葉の意味を半分理解した2人であったが、「えっ？　アハハ、いや〜」と笑って誤魔化した。

すると3人の女性がサササと歩み寄り、ドラえもんととのび太を囲んだ。

「ね〜、また前みたいなすっごく美味しいご飯作って〜」「ラーメンより美味しかったっすばげってい〜ってやつ〜」「お〜ってお〜って〜」

人生稀に見る美女からモテモテ具合に、鼻の下を伸ばしまくる2人。

こうして賑やかに村人たちにチャホヤされる2人の元に、村にかかる橋の向こうから、これまた必死の形相で数名の男女が走って現れた。

「また来てくれたのかあ！ 千空よりヤベエ科学使いが！」

「羽京ちゃんそれジーマーで？ エイプリルフルとかウソ800とかじゃなく？」

「はっはー！ 息抜きにランニングもよかろう。自衛隊式の緊急訓練の一環だな。違つか？」

「おそろく違うかと」

「ん？ あれはいつぞやの狸と眼鏡の少年ではないか？」

「ぜえつぜえつぜえ」

1人死にそうになってはいたが、ドラえもんとおび太の姿を確認するや、うち2人が目を白くさせて驚き卒倒した。

「つまり、ぬか喜びのお詫びに来たってか？ ほおそりやずいぶん峻る話じゃねえか」

全員が落ち着いた頃、ドラえもんとおび太から事情を聞いたリーダー格の少年が、これまた話が早くて助かるスピードで状況を理解してくれた。

若干その顔は悪だくみでもしていそうな悪人面ではあったが、絶滅した人類を救済す

る策があるからと、その元凶たるドラえもんとのび太の罪を問わないことを約束してくれた。

「はあ、よかった。一時は袋叩きにされるんじゃないかって心配したんだ」

「ククク。んなものに興味はねえよ。それよか興味があんのは……」

千空はそう言うのと交渉スタイルのように手を合わせ、同時にその隣に立つゲンという男がズイと前に出た。

この2人は算段していた。ドラえもんから如何に多くの恐喝……ではなく強要……ではなく、協力を引き出そうか、と。

が、そんなこととは微塵も思っていないのび太は、サラッと本来の目的を口に出した。「これで安心してミステリーツアーに誘えるね」

この言葉に「現代人組」と名乗る5人がピクツと動きを止めた。

「銀河超特急ってツアーなんですけど、個室を5つも予約したのに、誘う相手がいなくて困ってたんです。それで……」

ドラえもんの説明を待つ前に、5人は全てを察していた。

彼らの住んでいた21世紀の科学技術ですら未知の領域である22世紀の旅行に、5世紀の原始時代から参加できる夢のような話。

定員は5人

下手をしたら

戦争が起こる

「ちよつとく、ドラちゃんとのびちゃんは待つててね〜」

そう言つてゲンは2人を村人たちに任せ、千空ら数名と共に離れて作戦会議に入つた。

以下は彼らの話し合いである。

「俺が行くぞ!」

「僕だつて行きたい!」

「おお、なんか知らねえがヤバそうだな。俺も行きたい!」

「雰囲気だけが、私も行ってみたいぞ!」

「スイカもなんだよ!」

5人の手が我先にと千空の顔を突くくらいに出る。

この旅行に同行するメンバーを科学王国国民の、特に現代人組全員から募集してしまえば、選ぶ過程でもそうだが、いざ選ばれなかつた者との間で今後の関係性に支障をきたすのは間違いない。

密かに話を進めてしまい、リーダーである千空に選定してもらつたほうが後腐れが残

らないのだ。

であるならば、その限られた中で自分の主張を推さない手はない。

アピール合戦。そう、これは戦争にならないようにするための合戦なのだ。

「だく待て待て！ ガキじゃねえだろオメーらは」

「そうだよ。第一みんな知らないでしょ？ 宇宙つて真つ暗で空気もないし、狂暴な工

イリアンやブラックホールだってあるし。流れ星にぶつかったらゾーマーで即死よ」

ゲンがネガティブキャンペーンで牽制するが、5人の熱意は留まるところを知らない。

そこに口を挟んだのは冷静な執事・フランソワであった。

「一つよろしいでしょうか？ 我々の今置かれている状況、この旅に参加される方々は各々が『より大きな成果』を持ち帰っていただけの方を選出するのが良いかと思われまます。ただのご旅行感覚で行かれて何も得られず帰ってきたのであれば、皆様からの責め苦が待っていることでしょうか」

フランソワの指摘により、合戦場に秩序が生まれました。

後で文句を言われなかと自身のアピールを見つめ直し、主張に慎重さが生まれたのだ。

「じゃあまずは枠の確認からいっちゃおうか。まずは千空ちゃん固定メンバーでしょ

？ 残る4枠もよく考えなきゃいけないよ」

ゲンが仕切るとロクなことにならないと皆が経験しているが、それでもこの話し合いに司会を設けるとすれば彼をおいて他に務まらないだろう。

「まずは反映枠ね。旅行で見えてきたものを科学王国の発展のために活かせるよ。つて子がこれに当たるよ」

「はっはー。ならば俺において他あるまい？ 造船技術の吸収力を舐めるな！」

高らかに笑う龍水。選出間違いなしの実力を自負し、勝利宣言していた。

他のメンバーもそれには納得の表情を見せる。

が、そこに待ったをかけたのは誰であろう中立であるべき立場・司会のゲンであった。

「でもね。現代人の視点から学ぶつて、千空ちゃんて済む話なんだよね」

「がっ……たっ……」

ゲンの意見にぐうの音も出ない龍水。

「ならゲン、なんでわざわざ反映枠なんて言い出すんだい？ 千空に勝てる人間なんていないじゃないか」

「まあ現代人の視点でつて話ならね。でもどう？ 現代人以外の視点で22世紀の技術を見て学んでもらうのに打つてつけの人つてなつたら？」

ゲンのニコツと（ニヤァと）した笑顔に、その場にいた誰も彼もの目が1人の少年



に注がれる。

「お、オレ?」

「たしかにな。クロムの吸収力は折り紙付きだ。科学王国発足時から見てきた私が言うんだから間違いない」

金髪の少女・コハクに太鼓判を押される鉢巻きの少年・クロム。

この提案に異を唱える者はいなかった。

「じゃあ次は交渉枠ね。当然、21世紀の常識の通じない22世紀の旅だから、どう動いたらいいかわけわかんないよね。未来のツアーガイドさんとの交渉術を持った子じゃないと」

ネチツこく言う必要も無い話に、誰もが「はいはい」と適当に相槌を打った。

「お次はボディーガード枠。宇宙人とバトったりしないだろうけど、地球とは勝手が違う宇宙に行くんだから、運動音痴の千空ちゃんとかが怪我しないように守ってくれる子が欲しいとこなのよ」

「なるほど。それならば私が適役であろう?」

「うゝんたしかに。他の候補に僕とかマグマとか陽とかニツキーとかいるけど、千空とクロムと慣れ親しんだ人がいいよね。大樹もいいけど、すばしっこいほうが無重力空間で強そうだ」

こうして5人中4人の枠が埋まり、半ば諦めを見せる羽京と違い、徐々に焦りを見せるのは龍水。

「じゃあ最後の枠は……成長枠。この旅行を通して成長できる子。誰かいるかな？」

ゲンの流し目にフンと鼻を鳴らす龍水。

「俺を置いて他にいるまい？ 探求心はイコール成長率のステータスだ」

金の力もあるとはいえ、幼い頃から人並外れたスピードでスキルを身につけまくった男に、誰も文句を言えない。そう誰もが思った。

「たしかに龍水ちゃんはチートレベルアップしそうだね。でもね、俺的にはスイカちゃんがオススメなのよ」

ゲンの一言に凍り付く龍水の顔。そして急に話題に上ったスイカは、一瞬何の話をされているか理解が追いつかなかった。

「えっ？ え〜！ スイカなんか龍水に勝てるってなんて何一つ無いんだよ！」

謙遜するスイカに、ゲンが優しく笑いかける（ように見えた）。

「まあゲームに例えちゃうとだけど。レベル上げの旅に連れてくキャラって、レベル20よりレベル1の子の方が、同じ時間でも“戦力になるまで上り詰めてくれた”感が違うのよ。そりゃ龍水ちゃんだってレベル爆上がりしそうだけど。スイカちゃんへの期待値って皆どう？」

ゲンに促され目を閉じる龍水。

無論、子供から旅行の機会を奪うのは大人げないという面もあるが、そこにスイカの成長に期待したいという「言い分」を並べられれば、応じざるを得ない状況だ。

こうして、5人の旅行メンバーが選出完了となった。

千空、クロム、ゲン、コハク、スイカの5人がドラえもんの前に並ぶ。

「つて、お馴染みのメンツが残っただけじゃねえか。科学王国立ち上げ時の」

「あらジーマーで？ 驚きだね〜」

「そういうのいいから。とりあえず千空に皆。土産話を待つてるよ」

「おうよ！ 山ほどの科学の土産を持って帰ってやるよ！」

「じゃあドラえもんとやら、お願いするぞ」

「こちらこそよろしくお願いします。ハイ、どこでもドア〜！」

ドラえもんがポケットに手をつっ込み、そのサイズから物質量的にありえないサイズの桃色の扉を取り出し、地面の上に突き建てる。

「では科学王国御一行様。どうぞ中へ」

ドラえもんに促され、扉をくぐる5人とのび太。

扉の先はまるでホテルのような広い空間であった。

「ここはどこなのだ？」

「僕らの客車ですよ。列車の中です」

「ジーマーで？ 未来の列車って横幅広すぎでしょ・・・」

「うおお！ これが22世紀の科学ってやつか！ スゲー平らだ！ 壁も床も磨いたみ

たくツルツルじゃねえか！」

「こんなに広い建物は初めてなんだよー！」

「この程度で驚いてんじゃねえよ。体力持たねーぞ」

興奮する石神村民3人に現代人1名。千空は驚きを口には出していないが、あえてポーカーフェイスを装っているくせに心がウキウキしているオーラをバンバンに出していた。

「じゃあ皆さん、まずは部屋に荷物を置いてきてね。僕らは1号室から5号室まで使えます」

「・・・・・・・・・・」

ドラえもんの一言にその場にいた6人は気付いた。

「いつけね。5+2は7だった」

ドラえもんとおび太がうっかりしていることを良いことに、しれっと5人も杵を入れ

たことをトボける千空に、そうとは気づかなかったクロム・コハク・スイカ、そしてドラえもんとのび太はズゴーとひっくり返るのだった。

「なあ千空。部屋が足りないつつうなら、俺とお前はいつもみたく一緒に部屋でいいんじゃないか？」

「ま、ハナツからそのつもりだ」

「なら私とスイカも一緒にいいぞ」

「皆さんがそれでいいならありがたいです。じゃあ僕は予約の部屋以上に人数が入っていいか、車掌さんに確認してきますね。たぶん大丈夫だと思っんですけど」

そう言って先頭車両に去っていくドラえもん。

こうして、紆余曲折あったものの無事にミステリートレインツアーに参加したドラえもんも千空たち。

彼らを待つのはどんなミステリー、ロマンス、サスペンス、アドベンチャーだろうか。

## 銀河超特急その2

ドラえもんとのび太に22世紀のミステリーツアーに招待された千空たち。

「それでのびちゃん。ツアーっていつ頃から始まるの？ 遅れちゃうのは嫌だよ」

「それが、僕にもよく分からないんです」

ゲンの問いにのび太は肩をすくめる。

「そりゃミステリーツアーだからな。だが部屋で休むだけつつうのも味気ねえだろ」

千空のフォローにゲンも「だよね」とニヤニヤと笑う。

実の所この2人の魂胆としては、誘ってくれたドラえもんとのび太に『ツアーのココが不満だった』と後になって駄々をこねて、帰ったあとで『お詫びにひみつ道具をいくつか置いていってよ』と強請るつもりでいた。

そして今、列車で待たされるという落ち度を見つけ、それを印象付けようとしているのだ。

そんな魂胆に気付かないのび太であったが、ちゃんと千空たちをもてなす手札を持っていた。

「じゃあ展望車に行きませんか？ 景色がすごいですよ」

「てんぼうしや？ スイカは初めて聞いた言葉だよ。でも楽しそうなんだよー！」

のび太の声のトーンから、スイカもテンションを上げ、千空も目をキラキラとさせる。数々の宇宙の大冒険を潜り抜けてきたのび太。目の肥えた彼が「すごい」と言うのだから凄いのだろう。

「でも俺は先にお部屋の探検をしたいな。22世紀の客室ってどんなのかジーマーで楽しみで仕方ないんだけど〜」

「たしかに。部屋というものが一体、どのように発展しているのか、めっぼう興味あるぞー！」

「そうだな。軽くジャブでも挟まねえと体力が持たねえな」

ワクワクを100倍にして客室の扉を開く千空。あとに続く4人もソワソワする気持ちを抑えられない。

「うおおおおお！ これが22世紀・・・なのか？」

クロムの期待とは裏腹に、客室はサツパリとした何も無い部屋であった。たしかに広くて綺麗ではあるが、正直に言えば期待外れの空間である。

ことクロムたち石神村の常識で言えば、家を建てる際に支柱をしつかりと作らなければいけない以上、狭い場所にモノがごっちゃごちゃに置くのが普通の部屋であって、逆に何も置かれていない広いだけの空間は新鮮でもあるが、寂しさのほうが強く印象に残

るものだった。

強いて褒める点があるとすれば、部屋に入つてすぐに「宇宙ドリンク」という飲み物が石鹸の泡に包まれた状態で5人の元に5本も配られたことくらい。

「これは何とも拍子抜けではないか……ん？」

ドリンクを飲みながら部屋を見回したコハクは何かに気付き、突然部屋から通路に出た。

「どうした？」

「千空……おかしいぞコレは。距離的に……隣の部屋とこの部屋、繋がっていないければおかしいのではないか？ 扉のあるべき距離に壁しかないぞ？」

コハクの指摘にクロムとスイカが通路と部屋を出入りする。

「えっ？ んなわけねえだろ……ん？」

「ほ、本当なんだよ！」

「ククク。気付きやがったかコハク。こいつはおそらく圧縮空間つてやつだ」

「ああ、圧縮空間ね。こういうのを見るとドラえもんの世界に来ちゃったなってジーマーで思うよね」

圧縮空間とは広い空間を狭い入れ物に押し込める技術。つまり外から見るとより中は広い状態である。



原始時代には絶対にありえない概念のこの現象に、視覚的な違和感からすぐさま気付いたコハクに、千空は心から感心した。

「さつそく科学土産ができたな。ルリ姉に見せてやるのが楽しみだ！」

「いやいやいや。22世紀の科学だ。俺にもサツパリだし、科学王国にや無理な芸当だ」  
ウキウキとした様子を見せるコハクであったが、千空が秒で白旗を上げるとシヨックを受ける。

「まあまあそろそろ展望車に行こつかく。あんま、のびちゃんを待たせちゃつても悪いでしょ？」

「たしかにな。圧縮空間つつうの以外、そう面白そうなモンもねえからな」

ゲンに促され、部屋を出ていくクロムたち。

千空としてはまだ22世紀の客室を発掘し足りない確信はあったが、これ以上は石神村の3人を落胆させすぎってしまうため、いつそ展望車のデカイスケールを見せてハードルを下げるべきと判断した。

「じゃあコレをどうぞ。ハイ、タケコプター」

展望車は58号車。120両編成のこの列車内の移動はそれだけで遠足並みであるため、千空やのび太のような運動神経ゼロ人間には楽な移動手段が必須なのだ。

「出たぜタケコプター。こいつをどれほど待ち侘びたことか！」

待望のタケコプターを前に、珍しく千空の鼻息が荒くなる。

「それ、千空がこのあいだスイカたちにくれた玩具なんだよ！」

「ククク。こいつは、んな竹細工とはワケが違い。脳波感知式反重力場発生装置だ」

「よく嘯まずに言えるね」

ゲンが苦笑いする目の前で、千空は震える手でタケコプターを頭に装着させる。

するとタケコプターのプロペラが回転を始め、千空の体は静かに浮かび上がった。

「おお！ 千空が浮いているぞ！」「スゲー！」「ちっちゃいのに気球みたいなんだよ！」

コハクたち3人は興奮し、自分たちのタケコプターを頭の上に乗せようとする。

「ちよつと待つてね。のびちゃん、これって仕組み理解してないと上手く飛べなくてバイヤーなことにならない？ あらぬ方向に飛んでっちゃって壁に衝突しちゃったりとか」

「あつ、そうか。ごめんさい、そこまで考えていませんでした」

のび太も失念していた通り、タケコプターで空を飛ぶイメージを十分に持つていない人間、例えば原始人が使用すると、飛行を制御できずにタケコプターに振り回され、下手をすれば大怪我をする危険があった。

そのことを確認し、ゲンは3人からタケコプターを回収する。

「まあツアーで広いところに出たら、時間がある時に練習させてあげるから」

「ちえっ……まあ科学は危ねえもんを危ねえって理解するのが大切だから」

日頃、科学に関して千空から口を酸っぱくして聞かされているクロムたちは渋々ながら理解を示した。

結局、のび太と千空とゲンがタケコプターで。スイカを抱いたコハクがクロムと共に走って展望車に向かうことに。

そして扉を開けた先に広がる……

「どう？　この素晴らしい眺め！」

「眺め？」

展望車があるはずの空間には、宇宙空間のような真つ暗闇が広がっていた。

どうなっているのか理解できずパニックになるのび太。

その直後、空間は突如として閃光と爆発に包まれ、驚いたのび太は目がくらんで気絶してしまった。

「なっ!?　何が起きているんだ、千空！」

「大丈夫だ。ちいっと待ってろ」

千空の落ち着いた声に、コハクたちはどうにか冷静を保ち待機していると、展望車は淡い光に包まれ内観が徐々に見えてきた。

どうやら光と爆発の正体はヴァーチャル映像のようだ。

「千空！ のび太が目覚まさないんだよ！」

「どうしたんだね？ 診てあげよう・・・心配ない。軽い脳震盪だ」

「気絶したのび太を見て騒ぐスイカであったが、偶然居合わせた他の乗客が手当てをしてくれた。」

ヴァーチャル映像の正体は列車がワープ中に流される宇宙創世の歴史であった。

「なるほど、大銀河の誕生か」

「何それ？ 聞いたことがあるような無いような」

「ビッグバンつつつたほうが早えか？」

「あゝ、ベジータの技ね」

星々が生まれていく映像はロマンティックでミステリアス。

普段見る夜空の景色をリアルに100億倍もスケールアップした映像に、クロムやコハク、スイカは目をトロけさせて見入っていた。

「いやゝ、たしかに凄いいけど・・・うん、そりやすごいけど」

「うゝん、難しすぎてわかんない」

映像に感心するゲンであったが、正直に言えば理解に追いつかない領域の話に退屈を感じていた。

目を覚ましたのび太も同意見ではあったが、かといって2人して抜け出してよい雰囲気

気でもないため、どうにか我慢して千空たちに付き合うしかなかった。

フオフィフオーーーーーー

突然、列車中に汽笛が鳴り響いた。

「どつどつしたの!?!」「何事だ?」

困惑するのび太。コハクはスイカを背に守りながら、周囲を警戒した。

すると血相を変えたドラえもんが車掌と共に走って現れた。

5人とのび太はドラえもんに指示され自分たちの客車に戻る。

緊急事態が発生していた。

無人の小惑星を根城に海賊船で暴れまわっている「ダークブラックシャドウ団」という強盗団が迫っているというのだ。

「それってジーマーで? 俺ら運悪すぎでしょ。まだココ来て1時間も経ってないよ!」

嘆くゲンに、このツアーに誘った側のドラえもんとのび太が申し訳なさそうに項垂れる。

その後すぐに列車がワープを抜け、小惑星群の近くにワープアウトすると、列車は右

に左に大きく傾き始めた。

急旋回の度に部屋ごと転がされる7人。

「千空、これってヤバくねえのか!？」

「だろ。強盗団に列車ごと捕まっちゃえば、殺されて宇宙のチリに消えるか。あるいはどつかの星に奴隷として売られる運命か」

千空の推理にガクガクと震えはじめのスイカ。

そんな中、ドラえもんとのび太は立ち上がった。

「皆さん。ここはボクたちに任せてください」

「僕たちはこういうピンチを何度も乗り越えてきました。だから今回も、悪者たちを戦ってきます!」

子供とは思えない勇敢な言葉に感心する千空とゲン。

「任せていいんだな?」

「もちろんです。ねっ? ドラえもん」

「うん! まずはボクとのび太くんを外に出て様子を見てきます。皆さんはここで待っていてください」

そう言うドラえもんは「通り抜けフープ」を天井に取り付け、2人で列車の外へと戦いに向かった。

「行つたか?」「行つたね」

ドラえもん達の出陣を見送つた千空とゲンは、2人が出払つたことを確認するとソファアにドカッと座り込んだ。

「おいおい千空もゲンも、何を悠長に座っているのだ!」

「そうだぜ。あんな子供が戦いに行つてんだ。そりゃ科学力じゃ俺らは絶対勝てねえが、それでも科学使いの端くれ。悪党どもと戦う準備をしねえと!」

呑気にしている千空とゲンの姿に怒るクロムとコハクであつたが、当の2人は耳に指を突っ込んで耳掃除を始めた。

「ククク、安心しな。こりやドツキリだ」

余裕の笑みを浮かべる千空に、コハクもクロムも頭に「?」を浮かべる。

「どういふことなんだよ?」

「これはね、皆にドキドキハラハラしてもらうためのショータイムなの」

そう言つて手の中からトランプを出現させるゲン。それを見たコハクは「つまり、嘘?」と問いかける。

「まあ100億%な」

「そうなのか? なんでお前ら、嘘だつて分かんたよ?」

「どこの世界に『ダーク・ブラック・シャドウ』なんて黒い三連星のクソダセエ名前を名乗る強盗団がいんだよ？」

名前を口にしながら鼻で笑う千空に、コハクも苦笑いして「いや、ネーミングセンスは人それぞれではないか？」と言いつつも半分納得した。

「それにね。ワープ中に強盗団襲撃の情報を得るって、どうやって？ って話。危ない場所にワープアウトしなきゃいいだけの話でしょ？」

「まあ、仮にワープ先を指定できねえつつうなら、そもそも強盗団はどうやってこの列車の運行予定を調べたんだ？ っつうとこだ。まあそういう秘密情報を手に入れられる組織力があんなら、逆にこの列車側に襲撃情報が漏れてるのは不自然。セキュリティの攻守がチグハグなんだよ」

千空とゲンの言う「ワープ」というものを全然理解できないクロムたちであったが、これまでの経験から2人の余裕っぷりが本物だということは理解できた。

「でも、それならどうしてドラえもんとのび太にもそのことを教えてあげなかったんだよ。」

首を傾げるスイカであったが、クロムとコハクにはおおよそその理由に見当がついた。

そしてその見当の通りに、千空とゲンはニヤリと悪い顔をして口を開いた。



「『こんな怖い目に遭わせてくれちゃって、どう責任とるの?』って、ドラちゃんたちと、この列車を脅す・・・じゃなかった。お詫びをしてもらうためだよ。だから俺らはドツキリに気付いてないってことにしてるの」

「慰謝料目当てつつうことだ」

こうして、ミーティングルームに千空とゲンの（悪者みたいな）高笑いが響く中、列車は強盗団の手によって『無事に』撃ち落とされ、惑星へと『安全に』不時着するのであった。

## 銀河超特急その3

とある霧の惑星に不時着したミステリートレイン。

周囲の無事を確認した千空たち5人は、ドラえもんとのび太の無事を（一応）確認しに、列車の屋根伝いに走っていた。

「おう、2人とも無事だったか？」

「千空さん？ そちらも大丈夫でしたか？」

駆け付けた千空たちの無事な姿に、ドラえもんとのび太、そして彼らと一緒にいた車掌や、展望車で知り合った乗客・ボームは安心した顔を見せた。

「まっくろくろすけシャドウ団は？」

「分からない。まだこの近くにいるかもしれないよ」

「そんなら、ジーマーで？」

ボームの言葉に不安な顔を見せる（作る）ゲン。

ヒュ~~~~~パァンツ

突然、遠くから爆発音が聞こえた。

一瞬、敵襲を疑い恐れおののくドラえもんとのび太。

だがその音は花火の音であり、楽しい音楽が聞こえ始め、徐々に霧が晴れはじめた。「皆さま、皆さまようこそいらつしやいました。宇宙最大・最新・最高の夢の楽園、ドリーマーズランドでございます！」

霧が晴れ、ドラえもんたちの目の前に現れたのは巨大なテーマパークのゲートであった。

ドリーマーズランドとは銀河の果て『ハテノハテ星群』に作られたと噂の遊園地である。

「最初のアトラクション、列車強盗ショーはお楽しみいただけましたか？」

「じゃあ、あれはショーだったの？」「気が付かなかったな」

驚くのび太に合わせ、（白々しきマックスで）驚きを見せるゲン。

『つつうか命の危機系ドツキリを持つてくるか普通？ 下手すりゃパニック起こして怪我人出るレベルだったろ？』

そんな千空の真つ当な心配をヨソに、列車の中から続々と乗客が飛び出してきた。

誰もがショーのドツキリに安心し、ランドへの興味に目を輝かせている。

時代が変われば倫理観も変わるのだろうか。

「うむ、22世紀の人間というのは皆、心が広いではないか」

「鈍感なだけかも知れねえがな」

人々の笑顔を微笑ましく眺めるコハクであったが、千空はそれを皮肉っぽく笑った。そんな中、乗客の子供たち3人組が列車の上に乗る千空たちに気付き興味を示した。「ちよつと見てあの子たち、面白い恰好してるわ」

「大昔の恰好だぜ」

「昔モンじゃねえの?」

嘲笑にも似た雰囲気のある3人組であったが、そうとは気づかないのび太が挨拶に降りる。

「やあ、僕たち20世紀から来たんだ」

「20世紀?!」

のび太の自己紹介を3人組は笑い始めた。

古臭い恰好だの、歴史テレビで見たことあるだの、と言いたい放題。

「なんか俺ら、馬鹿にされてねえか?」

「まあ彼らからすれば古い恰好は間違いいではないが、気分の良いものではないな」

「スイカたちの恰好ってそんなにおかしいんだよ?」

憤慨するコハクたち3人であったが、子供たち3人はそんなことに一切気付かず。

洞窟で暮らしているのだの、石斧を使ってるのだの、鉄とか銅とかは使えるレベルだの、笑い続ける。

ポームもまた子供たちの言動に眉をひそめるが、言われている当人である千空とゲンはニヤニヤしながらそれを見ていた。

「まあ、半分当たってんだがな」

「だね」

「半分？ それは本当なのかい？」

子供たちの暴言を相手にしていないというわけではない2人の様子を怪訝がるポーム。

「ああ。さすがに洞窟じゃなく木と藁の家だが。実際、去年までメインウエポンが石槍だったからな、石神村も司帝国も」

ヘラヘラと笑う千空に、ポームは「えっ？ 20世紀だよな？」と自分の知識と千空の冗談を疑う。

「ちなみに俺らは58世紀人だ」

「58世紀?!」

「21世紀に人類ほぼ全滅しちゃって、3700年くらい経っちゃった世界ね。でもって鉄と銅。ジーマーで懐かしいねえ」

「ああ、作つたな鉄と銅で。発電所」

サラツとトンデモナイことを言う千空とゲンに絶句するポーム。

58世紀人という割に原始人のような恰好なのは説明がつく。パラレルワールドの話なのであれば辻褄が合うとボームは推測した。

だが、科学技術発展の歴史を考えると石器からの製鉄、発電技術は不条理が過ぎる。『なるほど、からかわれているのか』

そうボームが納得していると、車掌が『入場のために一旦列車にお戻りください』と誘導を始めた。

こうしてミステリーツアーの目的地である遊園地にたどり着いた千空たち。

客車そのままロッジ代わりとなり、乗客はそれぞれ好きなように遊園地や各種アトラクションのある小惑星に遊びに行くことができる。

「ゲン、遊園地って何なんだよ?」

「子供向けのテーマパークだね。いろいろ楽しいアトラクションやらパレードやらで、一日中遊べる場所のことだよ」

両手から花びらを舞わせゲンが説明すると、その楽しそうな雰囲気にはスイカは目を輝かせた。

「だけだよお、俺らただ遊びに来たわけじゃねえんだろ? そんな遊んでばっかで科学の土産はいいのか?」

「何言ってやがるクロム。エンタメは科学の進歩の結晶みてえなもんだ。たっぷり遊んでたっぷり学んで、アホほど意味のある旅行にすりゃあいだけだ」

そう言ってアトラクションの説明の載ったガイドカードに目を通す千空。

ドリーマーズランドは本星の遊園地の他に、周辺の小惑星に星を丸ごと改装したアトラクションが用意されているらしい。

レンタ・ロケットという小型ロケットに乗り、それぞれの星を自由に見て回る事ができるようだ。

#### ・西部の星

19世紀の西部開拓時代のアメリカを舞台に、乗馬をしたり拳銃を撃つたりと、西部劇風のアトラクションで遊ぶことができる。

#### ・恐竜の星

中生代の恐竜型が息するエリアで、自由に探検をしたり、恐竜と仲良くなったり、レースをしたりできる。

#### ・忍者の星

忍術を習い、試練を乗り越えることで上級の忍者を目指すことができるアトラクション。

#### ・メルヘンの星

童話の世界を壮大に再現したエリアで、童話の主人公を演じることができるとアトラクション。童話の種類は10001種類も用意されている。

・怪奇と伝説の星

古今東西のあらゆる怪物や妖怪、モンスターがいるアトラクション。

「うゝむ、たくさんあるな。それで、私たちは何処で遊ぶのだ？」

「ちなみにコハクちゃんたち、リクエストとかご希望とかある？」

「いや。どれもさっぱりだ」

「スイカもチンプンカンブンなんだよ」

「んなもん、今日1日じゃねえんだから全部行きやいだろ」

「だよね。でもさあ最初は何処にしようかは悩みどころだよね」

「まあテメーも俺も22世紀の勝手がわからねえからな。そこはその道の“プロ”を頼るのがベストだろ」

そう言つて千空は、最初はドラえもんとおび太と共にアトラクションを回ろうと提案した。

「もちろんいいですよ！」

「一緒に行きましょう！」

2人は千空たちの同行を快く承諾し、7人で『西部の星』に向かうことに決めた。



ロτζジを出て、レンタ・ロケットの貸出エリアに向かう千空たち。

道案内のロボットによると、ロケットのエリアは真つ直ぐ2km進めば到着するのだという。

地道に走るしかない、と滅入る千空とのび太。

「あつれ〜？ ジーマーで2キロ走るつもり？ 千空ちゃん、忘れてない？ クロムちゃんたちに使い方、教えてあげるんでしょ？」

ゲンのニヤニヤした顔に、千空はハツとした表情を見せ、その真意に気付いたクロムとコハク、スイカが歓喜する。

「ああ、そうだったな。ドラえもん、こいつらにタケコプターのレクチャーをしてやってくれ」

「あつ、そんな約束しましたね。いいですよ。ハイ、タケコプター！」

ドラえもんの取り出した竹とんぼ型22世紀科学に飛び上がるクロムたち。

「タケコプターを頭についたら、空を飛ぶイメージをしてください。コンピューターが脳波を読み取って、反重力場を発生させてくれるので、イメージの通りに空を飛ばます」

ドラえもんの説明の1割も理解できないコハクとスイカ。クロムもせいぜい2割の理解といったところだ。

「ようは電車ん時の俺らみたく宙に浮いてる自分を思い浮かべてみりゃいい」  
「それ説明雑すぎじゃない？」

簡単に言つてのける千空に苦笑いするゲン。

だが、そんな彼の心配とは裏腹に・・・

「おお！ これは、これはだぞー！」

「うおおおお！ 科学つてヤベえー！」

コハクとクロムはたちまち宙に浮かび、自由に空を飛び始めた。

「ジーマーで!? 俺も初体験の時、そこそこガクガクした飛び方だったよー！」

「まあ小難しく考えると抵抗感あるだろうが、ようは自転車に乗るコツみてえなもんだ。

元の運動センスと力学の理解の土台がありや、一発で使いこなせる代物つつうわけだ」

感覚的には自転車に乗るのと同じだとはいえ、空を飛ぶという概念すらなかった原始

時代を生きてきた2人が一発で巧みに飛行する姿に感心する千空とゲン。

「コハクちゃんとクロムはすごいんだよ。スイカは怖いんだよ」

スイカだけは超低空飛行でフワフワと漂うので精一杯の様子であった。

「まあ子供は補助輪から始めるからね。最初のうちは両手を握ってもらいながら飛ぶ

のがいいと思うよ。多分」

「そうですね。慣れないうちはそういう飛び方がいいですよ」

ゲンの口からテキトー発言にドラえもんの太鼓判が押される。

こうして優雅なタケコプター飛行のまま（コハクだけは既に残像すら出現させる高速移動で）ロケット貸し出しエリアに到着した千空たち。

「さて、いよいよお待ちかねの22世紀のロケットだ」

目をウキウキさせる千空を、微笑ましく見守るコハクたち。

ガイドのロボットに案内され、レンタ・ロケットの展示されたエリアに入ると、目に飛び込んできたのは数多の流線形・・・ではなく。

「あ？？」

飛行機や車が並んでいた。年代的にはやや古め、19世紀後半から20世紀前半のアンティークなプロペラ機や車。

期待を打ち砕かれた千空が一瞬凍り付く。

「ほお、これがロケットというものか」

「いや、俺らのイメージのロケットとちよつと・・・というかだいぶ違うんだけど」

「ククク。さすが22世紀のロケット。空気抵抗や推進力なんざガン無視。見た目なんてただの飾りつつうことか」

千空の知るロケット工学が根本から全否定されている現状にも、彼は苦笑いしながら

もロケットをレンタルして「操縦」できるならば、それを楽しもうと気持ち切り替えた。

が、この重力波推進ロケットは「音声入力自動操縦」であり、無免許の子供でも安心して搭乗することができるのだ。

「……………」

「千空ちゃん、ドンマイ」

そんな千空をさておき、ドラえもんとのび太はオープン座席のプロペラ機を選択していた。

科学の常識に照らせば大気圏突破の風圧や大気圏突入の摩擦、宇宙空間の真空を前に防御力ゼロという無謀な選択であるが、それすらも大丈夫ということなのだろう。

「千空、俺らはどれにするんだ？」

「あく、んなもんテキトーでいいぞ。どうせ同じ目的地に自動的に着くんだ」

21世紀の科学の無常を嘆いているわけではない。千空としては自分にはチョイスセンスが無いからと、ロケット選びはクロムたちに丸投げ宣言した。

「クロムちゃん。俺のオススメはこの大型車だよ。中もバイヤーな豪華さだし、みんなで乗って楽しむなら雰囲気ジーマーで最高だから」

それはバイヤーな人たち御用達の車であった。21世紀の公道を走っているのを見

かければ、誰もが避けて走るほどの存在感と危険性を兼ね揃えた車である。

「おい。これ『ヤ』のつく奴らが乗る車じゃねえか？」

「そうだね。でもさ、こういう時じゃないと乗れないんじゃない？」

「おう！ カッコいいんだよ」

「座り心地の良い椅子だ。さすがはゲンだな」

普通の社会人であれば警戒と緊張間違いなしの車内でしつかりくつろぐコハクとスイカ。

苦笑いする千空の背を押し、ゲンは操縦席へと座り込んだ。

「それでは千空さんたちも、西部の星へレッツゴー！」

## 銀河超特急その4

ドリーマーズランドを満喫するべく、レンタ・ロケットで西部の星へと飛び立つドラえもんと千空たち。

7人がそれぞれ搭乗したプロペラ機とヤのつく人の乗りそうな黒塗り車は、本星の大気圏を突破し宇宙空間へと飛び込んだ。

「おおおおお！ ヤベえぞこれ！ 気球なんか目じゃねえ！」

「見ろ！ 地面がもうあんなにも小さく。科学とはすこぶる素晴らしいな！」

「もうお空が真つ暗なんだよ！」

ガラスの向こうはもう宇宙空間。3700年を余裕で飛び越えた科学の景色に興奮を抑えられないクロムたち。

そんな中、千空は何とも切なげな顔で宇宙の暗闇を眺めていた。

「あれ？ 千空ちゃん待望のロケットで宇宙旅行じゃないの？」

「ああ。呆気なさすぎてドン引きしてんだよ。百夜の野郎がISSに行くのに5年。リアルが発射に5、6時間。そいつが22世紀にや秒だぜ？」

科学技術の発展で21世紀人類の夢がコンビニ感覚に変貌したことを察したゲンは

「あははくだね〜」と千空に合わせて苦笑いするしかなかった。

その後、西部の星へとたどり着いたドラえもんたち7人。

ロケット降り場で車から外に出ると、そこはもう異星というよりも、ただの荒野の町の光景であった。

「ここが西部の星なんだよ・・・西部って何?」

「だいたい俺らの時代より150年くらい前の、アメリカって大陸を開拓してた頃のことだよ。未開の地で原住民やらライバルの開拓民と競って、科学技術を発展させながら住める地域をドンドン広げていった時代のこと」

「ほお、まるで千空や私たちがじゃないか!」

「だな」

西部の星は星全体が19世紀のアメリカを再現し、射撃や乗馬、西部劇風のアトラクションを楽しめる星である。衣装も貸し出され、保安官やカウボーイ、貴婦人やインディアンなどの19世紀人になりきって楽しめる。

千空たちが到着して早々、この星のメインイベント『射撃大会』が開催されるところであった。

「よし。まずはコイツに参加すつか」

千空のノリノリの提案に、クロムたちは快諾する。

「おうっ！ 千空が率先して奨めてくるつつうことは、科学イベントか!？」

「ククク。科学要素っちゃあ科学要素だが、それよかスゲエもんが見られるからな」

そう言つて笑う千空は、そつとのび太の肩に手を回した。

その後、7人はイベント参加のためにホテルで衣装チェンジ。

『着せ替えカメラ』でテンガロンハットにダスターコート、ウエスタンシャツにジーンズ、ブーツと、保安官衣装に変身した。

「なるほど、これはめっぼう動きやすいぞ」

おしとやかさの欠片もないコハクのサマーソルトが炸裂し、動きやすさを確認した7人は射撃大会の会場へ。

大会のルールは早打ち的当て。銃弾6発で6個の空きビン・空き缶を撃ち、2発以上命中すれば合格だ。

「ねえねえ千空、拳銃つてなあに？」

「司帝国に攻め込んだ時の戦車あつただろ？ あれの小さい版だ」

スイカの無邪気な質問にスケールやら色々の間違つていながらも的確な説明をする千空。



「引き金つつうココを引きやあ、銃口つつうココからまつすぐ銃弾が飛ぶ。正確に銃口が目標に向かつてりや当たる。まあ実際やってみりやわかるが、手の小さな震えや反動で合わせた標準の通りに弾が飛んでくれるわけじゃねえぞ」

「うくん、難しいんだよ」

「撃ってみりや意外と簡単だつてわかるさ。だがなこの銃つて奴は本来、司が俺を殺したり、氷月が初見で撤退を決めたヤベエ殺人兵器だ。危ねえから気いつけるよ」

千空の脅しにアワアワと震えるスイカ。

「そんな銃で遊んじやうつて……ちよつと不謹慎だよねく俺ら」

そんな中で始まる射撃大会。

22世紀の大人や子供が挑戦していくのをジッと観察して銃の使い方を学ぶ58世紀のクロムたち。

「次の方！」

審査員と呼ばれ、まずは千空の挑戦である。

カンカンカンパンカンカンカン

命中1発失格

「ウソだろ千空！ 科学の武器じゃねえのか!？」

「知識と実技は別だからな。しかもコイツ安全銃のくせに反動が本物並みつつうのは盲

点だったな。エイムがブレまくって仕方ねえ」

失格しながらも悔しそうな様子を見せない千空。

続くコハクは命中1発。クロム、スイカは命中ゼロで失格。スイカに至っては1発目の反動に驚いて尻餅をついて、観客から笑いが起こっていた。

「銃というものは、めっぽう難しいな」

「くく悔しいぜ。なんか、あとちよつと慣れてくれば当てれそうな気もするんだけどよお」

「こんなの手が震えちゃうんだよ」

「まあ、筒状のモンの先をまつすぐ向けるなんて、科学王国じゃまだまだ非合理的な動きだからな」

残念な結果ながらもそれなりに楽しむことのできた3人。

次なる挑戦者はゲンであった。

ズキュン　ズキュン　バリン　バン　コン　バリン　ズキュン

命中4発合格

「おー！　すげえなゲン！」

ドヤアと笑うゲンを、まるで自分の事のように喜んで祝福するクロム。

「いや、これでも手先の器用さには自信があるからね。ゲーセンでガンシューティ

ングとかもやってたし」

そうやって銃を手の中でクルクルと回し、かつこよくホルダーに収納するゲン。

「だがまあ、このゲンの天下もすぐ終わるがな」

そう言つてニヤリと笑う千空に、ゲンもまた「真打登場だからね」と笑い、後ろに控える眼鏡の少年に視線を向けた。

ゲンの次はドラえもんで3発命中合格。

そしてついに、のび太の順番となる。

列車でのび太たちを昔モンと言つて馬鹿にしていた子供たちがヤジを飛ばす中、のび太は早打ち7発で・・・

バンバンバンバンバンバンバン カランカラン

のび太の射撃後にカランと転がる空き缶。「命中1発失格」との判定が下り、子供たちが嘲り笑う。

「せ、千空。こんなことが本当にできるのか?」

この光景に目をカツと見開いて驚くコハクに、「気付きやがったか?」と千空はニヤリと笑つた。

命中は1発ではなかった。

のび太の放つた銃弾は全弾、たった1つの空き缶に命中していたのだ。

しかも、最初に放った銃弾に弾かれ宙を舞う缶に、続けざまに残りの銃弾を撃ち込んでいた。

2弾目3弾目の衝撃で宙の同じ場所に漂っているわけではなかった缶を撃ち抜き続けるというという離れ業。

当然、文句なしの合格である。

「チートすぎんだろ。重力も空気抵抗も地球と同じじゃねえ環境で、初見でこれをやるか普通?」

その後、保安官助手に任命されたドラえもん、のび太、ゲンは、町に現れた銀行強盗を追ってデスバレーという谷に向かった。

「3人とも行ってしまったな。私たちはこれから何をやるのだ?」

「まあとりあえずは散策だな。何も撃ち合いっこばかりが西部開拓時代じゃねえ。他のアトラクションでも見て回るもよし、建造物の建築方法を見て技術を盗むもよし」

「それよりもゲンたちは大丈夫かな? 強盗って怖い人たちを追いかけに行つて、スイカは心配なんだよ」

「どうなんだ千空? 3人とも無事に帰つてこれそうか?」

「それか他の参加者が先に手柄を立てて、3人とも何もせず帰ってくるかもしれないぞ?」

「いや……俺の予想では……」

一方

千空たち4人がゲンたちの成果予想をしていた頃、ドラえもんたちは強盗団のアジトへと辿り着いていた。

強盗団4人に他の保安官助手全員が返り討ちに遭っている。腕利きのガンマン4人を相手にゲンたちは3人。真つ向勝負は明らかに悪手だ。

「ドンブラ粉〜!」

ドラえもんがポケットから取り出した粉を地面にふりかけると、地面はたちまち泥のようになり、3人は潜って移動できるようになった。

だが、ゲンだけは地面には潜らず、正面から接近することに決めていた。

「俺が囷になるから、ドラちゃんとのびちゃんて挟み撃ち。これでどう?」

「大丈夫なんですか?」

「これでもメンタリストだからね。今回は命の危険も無いし。でも、ジーマーで一発勝負だから二人ともよろしくね」

ヘラヘラと笑いながら本心を隠し、死地へと赴くゲンの姿を、のび太とドラえもんは『カッコいい』と憧れた。

ドラえもんとおび太はアジトの建物の両脇に潜むため先行した。

あとは頃合いを見て、アジトの門に隠れたゲンが囿になるだけ……そういう計画であつた。

が、そこに思わぬ事態が。

強盗団の一人が不意に外に出てきてしまったのだ。

それに驚いたおび太は地面に潜りこむが、残されたテンガロンハットだけが不自然に地面に残される形に。

「ジ……ジマーで!」

不測の事態に焦るゲンは急いで帽子やコートを脱ぎ、保安官バッジを外して強盗団の前に姿を現した。

「あの〜。ちよつといいかな〜? 西部の星の職員さん? アトラクションのエリアは何処かな〜? 俺、うっかり迷子になっちゃったんだけど〜」

ゲンは迷子の客を装って強盗団に話しかけた。

「てめえ、保安官助手だな? 他に仲間がいるんだろ? 話すか撃たれるか、どっちがいい?」

明らかに不自然な流れに、強盗団は騙されてくれなかつた。

さらにその声に気付いた残りの強盗団も次々と外に飛び出してきた。

「ええええ？ そつかあ、悪役ロボットとか言ってたもんね。プログラム通りに俺らを認識してんだ、嘘が通用しないんだ。ドイヒーじゃない？」

絶望に顔を引きつらせるゲンに強盗団4人の銃口が向けられる。

「待て！ 僕が相手だ！」

その時、地面の中から颯爽と現れたのび太が、強盗団4人の背後から声を荒げた。

そして体を転がしながら瞬く間に4連撃、銃弾を強盗団に命中させ退治した。

不安定すぎる姿勢と、回転する視界、4人の男の殺気、仲間の窮地。

この不利すぎる条件で敵を秒殺するのび太の射撃センスに脱帽するゲンは、何処から褒めていいか分からずに口をパクパクさせた。

そして辛うじて、『えっ？ のびちゃん、不意打ちでしょソコは…』と心の中でツツコミ、本当に顔を引きつらせたのだった。

その後、町に戻った3人に凱旋パレードが開かれた。

ノビ・ノビータは町の正保安官に任命。ドラえもんもまたそのパートナーとしてパレードの準主役に。

そしてゲンは……

「貴方は保安官の誇りであるバッジを捨てていきますから失格です」  
ドイヒーな結果に苦笑いするしかなかった。

その後、仲間たちの元に戻ったゲンにクロムたちが労いの言葉をかける。

「いや、でもまああのびちゃんの超人っぷりを生で見れたからオーケーよ」

「ククク。案の定だったな」

「マジで千空の言った通り。3人で悪者を倒して帰ってきて、ゲンだけが失格になったな」

感心するクロムに、ゲンは「えっ？ さ、さっすが千空ちゃん」と苦笑いした。

「それで、この後はどうするのだ？」

「まあそろそろ、この22世紀の遊び方も分かってきたとこだ。ドラえもんたちとは別行動と洒落込もうじゃねえか」

そう言つて千空はドラえもんとび太の元に行き、別行動の旨を伝えた。

「で、次はどこ行くの？ 千空ちゃん」

「ああ。候補は決まってる」

そう言つて千空はニヤリと笑い、ガイドマップに次の目的地を表示させた。

「メルヘンの星だ」





## 銀河超特急その5

22世紀のミステリーツアーという未知の領域に、まずは西部の星で肩慣らしした千空たち5人。

そんな58世紀人の彼らはドラえもんとのび太と別れ、5人だけで回る次なるアトラクション、それは。

「メルヘンの星へようこそ」

レンタ・ロケットが突入したのは、星全体が少女趣味の小惑星・メルヘンの星であった。

ピンク色の空にかかる大きな虹。

白く空を覆うペガサスの群れ。

裸の子供・キューピッド。

「なんかよく分からないんだけど凄いなだよ」

「おお。ヤベー感じは分かるが、なんかよく分からねーな」

「摩訶不思議な光景だな」

58世紀の地球には存在しないファンタジーさに、どうリアクションを取っていいか

分からないスイカたち。

「うわー、ゴイスーに乙女チックな世界。場違い感がドイヒーだ〜」

21世紀の地球では女の子なら喜ぶようなファンタジーさに、ゲンもまた若干引いていた。

「それで千空ちゃん、どうしてこのメンバーでメルヘンチョイス？ もつと他に面白そうな星あったでしょ？ これ普通だったらしずかちゃんの担当のどこじゃない？」

ゲンのもつともな質問にニヤリと笑う千空。

「ククク。この星は童話の主人公を演じるアトラクションの星。つまり原作プレイだ。むしろ石神村のこいつらだからこそこの『童話』がある」

千空の言葉にますます首を傾げるゲン。石神村と童話に関係も何も、そもそも石神村に存在する昔話といえ、千空の父・石神百夜が残した百物語しか存在しない・

「ま、まさか」

「ああ。日本一有名な童話で、百物語其之一」

最後の一言に、コハクたちは目の色を変え興奮を爆発させるだろう。

そんな空気の中、千空は静かに言い放った。

「『桃太郎』だ」

むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

おばあさんが川で洗濯をしていると、川上の方からドンブラコドンブラコと、大きな桃が3つ流れてきました。

「おや、これは良いおみやげになるわ」

おばあさんは大人が入りそうなほどの大きな3つ桃を拾いあげて、家に持ち帰りました。

その怪力たるや。桃の大きさを直径80cmと仮定した場合、市場に出回る桃が直径8cmで重さ200gであるため、大きな桃の重量は約200kgと推定されます。

しかしそこは22世紀の科学。質量無視の機能が備わった桃は、おばあさんの筋力でも易々と運ぶことができました。

おじいさんとおばあさんが桃を食べようと桃を切ろうとすると・・・

「おお、桃が勝手に割れやがった。どういう仕組みなんだ!？」

「スイカ太郎なんだよ!」

「ほお、これは広くて綺麗な家ではないか」

なんと中から元気の良い少年と小さな女の子、少女が飛び出してきました。

「これはきつと、神さまがくださったにちがいない」

子どものいなかっただおじいさんとおばあさんは、大喜びです。

桃から生まれた『受付で「俺が桃太郎とやりたい!」「いいや私だ!」「スイカもだよ!」と騒ぎ、係員から「でしたら3人の桃太郎で同時進行もできますが」と提案された』少年たちを、おじいさんとおばあさんは3人も桃太郎と名付けました。

桃太郎は言いました。

「なあ、この床ってどうなってるんだ?」

畳を指さして尋ねる桃太郎に、おじいさんは『いやソコ?』と驚きながらも「畳というんじゃ。イグサという植物を編み込んで作るんじゃよ」とおしえてあげました。

別の桃太郎が言いました。

「そんなことよりもクロム。私は早くキビ団子で、熊とライオンと、ゴリラとワニをお供にしたいぞ」

おばあさんは『いや無理だよ!』と驚きました。

「クロムもコハクちゃんも、早く鬼退治に行かなきゃいけないんだよ」

まともなことを言う最後の桃太郎は、おじいさんの鎧兜と刀を、おばあさんにきび団子を作ってもらおうと、鬼ヶ島へ出かけました。

「あゝげましょおゝ」

「あげましょおゝ」

「これから鬼のおセイバツにイゝ」

「ついてゝくゝるなゝらゝ」

「あゝげましょおゝ」

一面拓けた田畑道。日本の原風景の中を容器に歌う桃太郎たち。

その途中で、桃太郎たちはイヌに出会いました。

「チヨークみたいなイヌなんだよ！」

「桃太郎さん、どこへ行くのですか？」

「鬼ヶ島へ、鬼退治に行くところだ」

「それでは、お腰に付けたきび団子を一つ下さいな。お供しますよ」

「いや、こんな犬じゃ足手まといになるだけだろ？」

そう言つてイヌを放置して先を急ごうとする一人の桃太郎。

するとそこに、今度はツルピカザルが現れました。

「おお、千空！　そうかお供の役も演じることができてるのか！」

「そうだが・・・それよりお前ら、言つただろ？　原作の桃太郎じゃ猛獣なんざ仲間にし

ねえ。犬・猿・雉の3匹だ」

そう言うのとツルピカザルはイヌにキビ団子を与え、お供にしました。

「つつうか、こんなキビ団子1つの給与体系で、よくもまあ命がけの鬼退治なんかについてくるもんだな」

すると桃太郎は、今度は雉っぽい派手な衣装を身に纏った、中身コウモリ男に出会いました。

「おひさ〜。おお、ちゃんと桃太郎の恰好してるじゃない」

「スイカに刀を持たせるのは危ないと思うのだが」

「まあ、どうせ名刀・電光丸だろ。宮本武蔵並みの戦闘力を自動ゲット。スイカでも司にすら勝てるぜ」

「いやいや千空。それはねえだろ流石に」

「ククク。まあ鬼戦になりや分かる話だ。むしろ俺とゲンみたく無防備な方が危ねえ」

こうしてイヌ、ツルピカザル、コウモリ男の仲間を手に入れた桃太郎たち。

小船を漕ぎ、荒波を越え、鬼ヶ島へと向かいます。

「ここは水の民、石神村の俺たちの出番だな！」

「とはいえクロム。キミはあまり舟仕事が得意ではなかった記憶があるが？」

「そういうコハクは素潜りばっかだったろ？」

「スイカはどっちも苦手なんだよ」

「つつうか心配すんな。22世紀はモーターボート真つ青の小舟がアホほどあんだ」  
「そりや普通、この波でこの船なんてリームーだものね〜」

桃太郎たちは賑やかに鬼ヶ島へとたどり着きました。

鬼ヶ島では、鬼たちが近くの村から盗んだ宝物やご馳走を並べて、酒盛りの真つ最中です。

そこに襲い掛かる桃太郎たち。もちろん正々堂々という言葉は彼らにはありません。敵が最も油断している時に奇襲をかける。そこに躊躇の無い者が勝つのです。

イヌは鬼のお尻に噛みつきます。

ツルピカザルは

「ちなみにだが、桃太郎の鬼の正体にや諸説ある。漂流したり侵略にきた外国人や東北の他民族。鬼に金棒つつうくらいだから、製鉄技術の栄えた国との戦争つつうのも1つの説だ」

とうんちくを語ります。

コウモリ男は

「それって科学王国と司帝国のストーンウォーみたいだね〜。でもそれじゃ俺らが鬼側。うわあバイヤーな解釈」

と、離れた安全圏から笑います。



そして桃太郎も蹴りをふり回して大あばれです。

「桃太郎さん桃太郎さん！ お腰につけた刀で戦つてよソレ」

「すまん。しかしこの刀、刃も無ければ光沢も鈍い。鉄が弱いと折れてしまうのではないか？」

「心配すんな。カセキのじいさんが作る刀の100億倍は丈夫だ」

他の桃太郎も、そのおぼつかない足取りからは想像できない殺陣で次々と鬼たちを成敗していききました。

とうとう鬼の親分が、

「まいったあ、まいったあ。降参だ、助けてくれえ」

と、手をついて謝りました。

桃太郎と桃太郎と桃太郎とイヌとツルピカザルとコウモリ男は、鬼から取り上げた宝物を荷車に積んで、元気よく家に帰りました。

おじいさんとおばあさんは、桃太郎たちの無事な姿を見て大喜びです。

そして7人は、宝物のおかげで幸せに暮ら・・・

「せるわきやねえよな」

「暮らせないのか？」

「盗品を盗品だと認識しながら自分のモノにしちゃうとね、盗品譲受の罪に問われちゃうのよ」

「つてことは、盗まれた人たちに返してあげなきゃいけないな！」

「スイカも頑張るんだよ！」

「ところがだ。奪われる過程で鬼に殺された奴もいりゃあ、その分配をどうするかで揉めることになる。奪われた量を過大報告するやつもいりゃあ尚更、計算が死ぬほど面倒くせえ」

「なるほど。だが、皆のモノは皆のモノ。共通財産にしてしまえば解決ではないのか？」  
「たしかに共産主義だとそういう面倒は無いよね。石神村や今までの科学王国もその感じだったし。でもね、龍水ちゃんがガツツリ資本主義経済を回し始めちゃったからね」

「人間の欲望に忠実な社会の方が、科学技術も発展しやすいからな。科学使いの俺らにとつちや都合のいい仕組みだ」

そんな夢の無い話をしながら、桃太郎の話は終わるのでした。

## 銀河超特急その6

メルヘンの星を堪能した千空たち、西部の星を堪能したドラえもんとこのび太。

ドリーマーズランドをしつかり一日満喫した彼らは本屋の自分たちの車両ロッジに戻り、ミーティングルームにて7人で食卓を囲んでいた。

「ヤベええええええええええええええええええええええ!!」

クロムの絶叫が迷惑承知で狭い部屋に反響する。

一口ごとにこれだから、それだけで消費カロリーは半端ないだろう。

「美味えええええええええええええええええ!!」

「だああ! うるせえぞクロム! ちったあ落ち着いて味わえ」

千空の叱咤も、涙とよだれをまき散らすクロムの耳には届かない。

そして、そんな彼にいつもなら味方してくれるコハクとスイカも料理に夢中で全然アテにならない状態だ。(ゲンはこの手のパワー案件にはいつものように傍観勢である)

「いやいや千空。これはめつぼうクロムの言う通りだぞ」

「ピザって、このモチモチがノビノビしておいしいんだよ!」

チーズをこれでもかと伸ばして口から垂らすスイカ。

その先端が床に垂れては勿体ないと、コハクが掬って自分の口に運ぶ。

「んな意地汚え食い方しなくても、まだ料理はあんだぞ」

千空の言う通り、テーブルの上には古今東西の様々な料理が揃っていた。

「ハンバーガーやべえ♪」

「カツどんだよ♪」

「ジーマーのコーラ♪」

「ねこじやらしじやねえラーメン♪」

「カレーライス♪」

いつもの大冒険よりも賑やかな食事風景に、ドラえもんとおび太も『連れてきてよかった』とご満悦だ。

酒盛りならぬ料理盛りがしばらく続き、腹が満たされたことでようやく箸休め。

この日一日、ドリーマーズランドで遊んだ感想発表の話題が自然と始まった。

「いや〜、ジーマーで最初はどなるかと思ってたけど、すっかり楽しめたね〜」

「うむ。桃太郎の原作があのような複雑なアフターフォローの要る話だとは思わなかったぞ」

「西部の星も面白かったんだよ」

「ドラえもんものび太も、そっちはあれからどうだったんだ？」

「強盗団以外の事件も起きたりして、大忙しでしたよ」

「正保安官のノビータくんが大活躍！ 楽しかったねー」

「つつうか、のび太レベルの射撃の腕前でようやく合格&活躍とか、どんだけ難易度設定ミスってんだつつう話だな」

口々にあーだこーだと、楽しかったことや不満点、面白かったことや満足したことが飛び出してくる。

「いや〜千空ちゃん。ぶつちやけて言つちやうと、俺はこのメンバーになるようにコントロールして正解だったと思うよ〜」

ゲンがヒソヒソと千空に告げると、千空も妙に納得したような表情で返した。

「だろ。復活者組の21世紀人にや、この刺激は強すぎる」

「あんま楽しい時間過ぎるとさあ、21世紀の石化前の生活が名残惜しくなっちゃって、元の科学王国の生活がブルーになっちゃうよね〜。龍水ちゃんとかならまだ耐えられるかもだけど、メンタルケアの手間が少なくて済むのって、千空ちゃんか俺くらいだと思うからさ〜」

そう言っ手て手をヒラヒラと振って、ゲンは皿に残ったハンバーガーのソースを指ですくってペロリと舐めとったのだった。

こうして7人のドリーマーズランドで過ごす最初の夜はふけていった。だが彼らは知らなかった。

宇宙の果てから寄生生物の脅威が、ドリーマーズランドだけではなく、銀河全体の危機として迫りつつあることを。

翌朝。ドリーマーズランド2日目。

ドラえもんとおび太は『恐竜の星』に遊びに行くことを所望。

「で、俺たちはどこにしちゃう？ やっぱここは……ってあれ？ コハクちゃんは何で、俺たちはどこにしちゃう？ やっぱここは……ってあれ？ コハクちゃんは何で集合予定時間、ミーティングルームに入ったゲンが部屋を見回すと、スイカが手を挙げて答えた。

「コハクちゃんはお風呂なんだよ」

「昨日の夜、入ったのが気に入ったのかもしれない。静香ちゃんポジションじゃねえくせにな」

「しずかちゃんポジション？ なんだそりや、ゴリラ粹か？」

コハクがいたらタンコブ3つはできそうなつぶやきをサラリと言うクロム。

そう。コハクは今、客車に備え付けられたお風呂に入っているのだ。

無論、22世紀の技術が詰まった風呂は、21世紀のものとも、58世紀の湯治ともレベルが段違い。

かけ湯にサウナ機能も充実。シャワーや温度管理、ドライヤーやら何やらのグレードも高い。豪華な温泉施設並みの装備が揃っている。

壁紙だってバーチャル映像で切り替えられ、銀河の中でお風呂に浸かることだってできる。

そんなお風呂でコハクの入浴シーンがどうなっているかというところ……

一言でいえば“泡”である。

「この泡風呂というのは最高だなー」

泡の化物が浴室を駆け回っていた。

22世紀の泡は目に染みない。滑って転ぶようなエグい潤滑性も無い。浴室中を泡まみれにして、コハクはその中で体の洗えるところを逃すところなく洗っていたのだ。

カラン

「ん？」

その時、部屋の入口辺りで何か落ちる音がした。

何かと思ってコハクが調べに行くと、そこには小さな円盤型の置物が落ちていた。

「千空、これは何なのだ？」

風呂から上がったコハクが、その円盤を渡して尋ねる。

「知るわきやねえが、まあこの遊園地のUFO型玩具つてところか？」

紫色を基調としたUFO型で、てっぺんに触手のような異物が生えた円盤を、千空は興味ありげにジロジロと観察した。

「コハクちゃんのお風呂を覗きにきたんだよ」

「物好きなのヤツだな」

クロムの何気ない一言にコハクの拳がいつものように炸裂する。

「ドリーマーズランドの玩具ロボットかもだね。こりやあ『正当防衛』になっちゃうね」

ゲンがニヤニヤと言うと、千空もまたニヤアと悪い笑みを浮かべる。

「おお、なんだ悪い顔をするなキミたちは」

「まあ俺らの言い分としては『コハクちゃんの裸でも録画されてちやたまらないから、分解して調べてみました。お客さんのお風呂に入ってくるほうが悪い』だね」

「だな。22世紀の機械を正式にイジつてもイイつつう正當な言い分だ」

千空はそう言うと、ドラえもんたちが出発する前に借りておいたドライバースセットを



取り出した。

「ゲン、今日はまかせたぞ。コイツら連れて遊びに行つてきてくれ。俺は……こいつが終わつてからテキトーに追いかける」

「オツケーだよ千空ちゃん」

そう言うのとゲンはクロムたち3人の背を押し、客車から追い出すように外へと出た。

「どうしたのだゲン？ 千空を置いていく気か？」

「置いてく、というより好きにさせてあげるつていうほうが正しいかもね」

ゲンはヘラヘラと笑いながらも、その顔に気遣いの様子がうかがえる。

「ぶっちゃけて言っちゃうと、この遊園地の科学つて俺らのいた21世紀の時代よりも、ちよいと古い時代の文明を再現したアトラクションが多いわけよ。言っちゃえば科学王国でも再現可能なレベルね」

「……なるほどな。俺らにとつちやどれもヤベーもんばつのだが、千空にとつちや期待してたほど目新しさが無かつたつうのか」

ゲンの説明にクロムが納得して『ふーむ』と手を顎に当てる。

「そこに来てさっきのUFO。あれつてジーマーに科学の塊っぽいし、千空ちゃんにとつてもアトラクションより面白いこと間違いなしのアイテムなの」

「たしかに千空の目、キラキラしてたんだよ」

「ということで、俺らは俺らだけでアトラクションを楽しんじゃって、千空ちゃんを引率の先生の仕事から解放してあげようってこと」

「そういうことなら仕方あるまいな。私たちだけでは右も左もわからんが、ゲンが案内してくれるのであれば問題あるまい」

コハクの合点もいき、4人組はアトラクション巡りを決行することにした。

「それで、これからどこの星に行くんだ？」

「スイカは行ったことのないところに行きたいんだよ」

クロムとスイカがワクワクを露わにする中、ゲンはニコ（ヤ）ツと笑ってガイドを操作した。

「じゃあ行っちゃおう？俺らが司帝国とたたかう時に、この技術さえ学んでれば攻略難

易度ゲキ落ちのスペシャルマーシャルアーツの文明。忍者の星に」

## 銀河超特急その7

ドリーマーズランド2日目の朝。

コハクの入浴シーンを覗かれ、千空はUFOを手に入れた。

そしてゲンが引率し、クロムとコハク、スイカを連れて忍者の星へと向かった。支離滅裂だが、何一つ偽りは無い。

「ということだ忍者の星だよ」

「忍者ってなあに？」

「戦争の時の郵便屋さんってところかな」

スイカの問いにゲンはニコニコとした顔で答えた。

この手の顔をするときのゲンは何かを企んで口から出まかせを言っているも多いが、意外と本当のことを言っていることも多い。

せつちかなコハクはその力強い拳をグツと握って突き出して、真実を述べよとゲンを脅した。

「いや、ジーマーなんだけどなあ。ほらあ、司帝国との戦いのときに実感したでしょ？」

情報戦が勝敗を大きく左右するって。千空ちゃんみたいな科学力が無い時代の、そこんところ担ってたのが「忍者」なの」

「ほお、つまり昔の携帯つつうことか！」

クロムの盛大な勘違いを、ゲンは面白いから否定しなかった。

「あとは心理戦のスペシャリストの一面もあるかな。嘘を混ぜたりして敵を攪乱させたりして、戦いを優位に進める役割ね」

「なるほど。つまり忍者の星で遊ぶだけで、私たちにもゲンや千空の悪つい戦術が身に付くというわけだな」

原始時代においては周囲との軋轢を生みそうな発想力ではあるが、こと現代においてはメンタリスト的発想力が貴重な武器となる。

21世紀の科学力を持って発展を続ける科学王国には、科学方面以外の成長、戦略的思考力というものがこれから求められていくだろう。

そう言う意味で、ゲンの選択・忍者の星はうってつけである……  
かに思われた。

4人が到着した忍者の星は、まるで水墨画がそのまま飛び出してきたような日本の原風景が広がる星であった。

メルヘンの星の『桃太郎エリア』のさらに山奥に行つたような山の中、ゲンの叫びがこだましていた。

「ジーマーでドイヒー！」

忍者の星では、参加者に忍者服が支給され、それぞれの能力に応じて修行が課せられる。

その修行のクリア状況に応じて資格が与えられ、より複雑な忍術を教えてもらえるようになるのだ。

そんな中、ゲンとスイカは入門の段階でつまづいていた。

それはもう盛大に。地味に。

「ゲン・・・スイカはもう腕が駄目なんだよ」

「スイカちゃん、ガンバだよ」

崖に垂れ下がった綱を登る修行に取り組みゲンとスイカ。これを登り切らないと、忍術を教えてもらえないため、2人は必死に頑張っていた。

「ああ・・・もう駄目だよ」

スイカの腕が限界を迎え、地面へ向かって落下していった。彼女を助けようと手を離れたゲンもまた落下する。

そんな2人を、何処からともなく現れた仙人が、杖から放った術で助けた。

「未熟者めが！　まだまだ修行が足りんぞ！」

「あの、これジーマーで俺ら以外にお客さんいる？」

説教にゲンが割って入ると、仙人はシユンとした表情になる。

「もつとこうお客さんのニーズを考えないとね、客離れに繋がっちゃうよ。忍術を使つて楽しく活躍したい子が、こんな体育の授業みたいなこととして。しかもジーマーのハードなアスレチックで。今までにクリアできた子っていた？」

ゲンの指摘にスイカも（言葉半分も理解できてはいなかったが）ウンウンとうなずいて抗議の姿勢を示した。

「ムムム……たしかに昨日からお客さんの入りは悪いが……」

おそらくその指摘は間違っていないかつたようで、仙人は分かりやすく項垂れた。

だがそれでも係員ロボットとしてのプライドはあるようで、どうにか反論を出そうと頭を捻っていた。

「じゃが、お主らの連れは順調にクリアしておるぞ？」

そう言つて仙人は杖を振ると、空間に雲でできたゲートを作り出した。

どこでもドアのようなそのゲートの先には、巻物を手にしてガッツポーズするクロムの姿があった。

「すごい科学なんだよ」

「もはや妖術だけどね．．．こういうのを教えてほしいんだよね〜俺ら」

「ブツクサと言いなながらゲンとスイカがワープゲートを覗き込むと、クロムもまた2人に気付いて声を上げた。

「おっ？ ゲンにスイカじゃねえか。俺、仮免許皆伝つつう試験をクリアしたぜ！」  
得意気に巻物を見せびらかすクロム。

「クロム、凄いなだよ」

「ほれ、お主らが軟弱なだけじゃないのか？」

「いや〜、クロムちゃんみたいなのは原始時代の標準体力と比べられても．．．」

科学王国の事情を知らない仙人は得意気になったまま続けざまに新たなワープゲートを作り出す。

そこには、今まさに高所から着地したくノ一・コハクの姿があった。

「コハク殿なんぞ、もう中忍試験を突破されておるぞ！」

「フガフガフガフガ」

口に巻物を咥え、両手の指で印を結んだコハクの足元から水柱が噴き出し、たちまち1本の巨大な水流と化した。

心なしか水の龍のようにも見える凄まじい光景が広がる。

「水遁・水龍弾の術じゃ。とはいえ水の勢いはシャワー程度。こけおどしの術じゃ」

「いやこういうの！ ジーマーでこういうので遊ばなきゃ楽しくないでしょ！」

仙人の得意気な顔にゲンがツツコミを入れると、コハクが3人に気付き術を止めた。

「ハツ誰かと思えば。この星はめっぼう楽しいではないか！ この難易度、私は気に入ったぞ」

コハクの興奮する様子に、仙人は「ほれ」とドヤ顔を見せる。

「いやいやコハクちゃん基準で難易度決めたら駄目でしょ」

「ソうじゃろうカガガガガガッガッガッ」

その時、異変は誰の目から見ても明らかに起きていた。

仙人のロボットが突然、ショートしたようにバグり始め、その場に倒れてしまったのだ。

「おじいちゃんが、どうしたんだよ！」

「急病か？」

「いやコハク、こいつは『ロボット』つつう科学の発明だつつつてたる？」

「普通に故障じゃない？ え、ジーマーでこのドリーマーズランド、管理がバイヤーすぎ」

杜撰な遊園地の管理に呆れ果てるゲンは、3人を連れて忍者の星の本部へ向かうことにした。



だが、事態は彼らが思っていた以上に混沌としていた。

ロボットの異常は忍者の星全体で発生しており、本部も大混乱をしていた。

しかも本星にあるコントロールセンターとも応答が取れない状況。

「なっ何だ!?!」

事態は見る見るうちに更に悪化した。ロボットたちが暴走を始めたのだ。

「コントロールセンター、応答してください! コントロールセンター!」

本部の人はパニックになり、ゲンたちに構っていられる余裕が無い。

「これでは遊べないではないか」

「だよな。ロボットが動かねえんじや何もできないって、そういうとこ科学って不便だな」

「いや、遊べる遊べないどころの騒ぎじゃなくなっちゃったみたい・・・とりま修理が終わるまでロτζジのトコに戻ろっか?」

係員や本部のスタッフの緊迫感がいまいち理解できないコハクたち。

ゲンは嫌な予感を覚えつつ、3人を誘導してレンタ・ロケットの元へ戻る事にした。

こうして忍者の星を出ることにした4人。

途中、侍ロボットが「曲者だ！」と遠くから追いかけてくるのが見えたが、コハクたちは「なんだアトラクションがちゃんと動いているではないか」とつぶやき、ゲンは「これに捕まったらジーマーで面倒なことになりそ」と足を早めた。

「ところで千空ちゃんとの連絡つてとれた？」

運転席に座るゲンが振り返り、後部座席でガイドカードのテレビ電話機能を試しているクロムたちに声をかける。

「いんや。千空も応答なしだ。どうなってんだ？」

「電波が悪い？ いや、22世紀にもなって圏外とかジーマーでありえる？」

不穏な予感を覚えるゲン。

本星に戻ると、その不安はゲンたちの心にジワリと迫った。

「えつとお、ドリーマーズランドってこんなに静かだっけえ？」

4人が戻った時、本星は夕方であった。

夕陽に照らされた街並みは21世紀や58世紀と同じくどこか寂しげである。

元から惑星1つをツアー客だけで貸し切りなこともあり、道路を誰も歩いていないことはあつたにはあつた。

だがそれにしては、テーマパークにしては静けさが妙に耳に来るほどに静かであつ

た。

「なんだかちよつと不気味なんだよ」

「そうか？ 俺、洞窟とか探検によく行くけどよ、こんなんだぜ？」

「それは比較対象としてどうなのだ？ しかし静かと言えば静かだが、行く時と大して変わりはないぞ」

不気味さという主観的な情報を抜きに、冷静な比較をするコハク。

するとガイドカードが鳴り、誰かからの通信を知らせた。

「ん？ なんだ、千空ではないか」

コハクがカードの画面を覗くと、そこには千空の表情が映し出されていた。

「よおお前ら、帰ってきてやがったか」

千空は何処か屋外なのだろうか。夕陽の反射のまぶしい背景の中に立つ千空はどこか不気味な笑みを浮かべているようであった。

「千空。どうやらアトラクションが故障しているようだな。ひとまず帰って来たのだ」

「こつちの星は何も壊れてねえか？ 大丈夫か？」

クロムも顔を出すと、千空はいつものようなニヤリとした顔を見せた。

「ああ、何も問題はねえ。今、ロτζジの近くにいますから早く来いよ」

いつもの千空の気怠そうな姿は妙に安心感を覚えさせてくれる。

ロツジへと急いだ4人は、何の疑問にも思わずに走っていた。  
「おっ！ いたいた。ただいまだ千空」

ロツジ前の道路のど真ん中に千空は立っていた。  
駆け寄るゲン、コハク、クロム、スイカ。その姿にニヤリと笑みを浮かべている。

「よお、皆揃っているな。よし、やっちまえ！」

千空の言っている意味を、その場にいた誰もが理解できなかった。

理解できなかったからこそ、いつもであれば反応できる強襲にも対応が遅れてしまった。  
た。

いや、分かっているでも回避はできなかっただろう。

突然、千空が手を上げ、それに応じて客車の屋根から天使が弓矢を持って姿を現した。  
その一斉掃射がゲンたちに降りかかった。

「なっ!?!」「せ、千空!?!」「何を!?!」

ゲンたちの足元は煙に包まれ、その臭いを吸い込んでしまったゲンたちの意識が急に遠のいてしまった。

何があったのか、誰にも認識できなかった。

意識が戻った時、そこは客車の個室の中であった。

「あつ、目が覚めた。ゲンさん、大丈夫ですか?」

「う、うくん……ドラちゃん? それにのびちゃん……ここは? 俺ら……千空ちゃんに……あれ?」

ゲンの顔を心配そうに覗き込んでいたのはドラえもんとのび太。

その雰囲気にも、何か嫌な気配を感じずにはいられないゲン。

「あの、ボクらも千空さんに呼ばれて、眠らされて、気が付いたらここに閉じ込められていたんです」

「……とじこめられ?」

意識が鮮明になるにつれ、その場違いなワードがゲンの危機感を急に目覚めさせた。

個室を出て客車のドアに向かう。

そこには、まるで門番のようにドアの前に立つ千空の後ろ姿が。

「せ、千空ちゃん? どしたのこれ。ドアが開かないみたいだけど……」

「うるさい。大人しくしている」

声を荒げる千空の姿に、ゲンは唾然とした。ゲンの知る限り、静かにしてほしい時に自分が静かにしないというのは千空らしくない矛盾だ。

何かの冗談かにも思われたが、千空のキャラではない。

ゲンが呆気にとられていると、ドラえもんとのび太に起こされたコハク、クロムも姿を見せる。

「ゲン、ドラえもんたちは何を言っているのだ？ 千空は？」

「閉じ込められたって？ 千空に？ どういうことだ？」

状況を理解できない2人に、千空は苛立つように口を開いた。

「千空じゃない。俺様はヤドリ0009号だ。宇宙最高の存在だぞ！ 喜べ。お前たちもいずれ、ヤドリ主様に移ってもらえるんだ」

「は、はあ!？」

言葉の意味がわからないコハクとクロムが首をかしげるが、ゲンだけはドラえもんやのび太と一緒に戦々恐々とした。

「おそらく、千空さんは寄生生物に操られているんです。体に乗っ取られて、意のままに操られて」

「それって・・・映画のエイリアンとかみたくな？ ジーマーで？」

ゾワゾワと背筋に悪寒を覚えるゲン。

千空の体に宇宙生物が寄生しているだけでも信じられないほどの絶望であるが、千空の話から察するに、ゲンたちもまたいずれその生物に寄生されてしまうというのだ。

その状況を打破しようとドラえもんは四次元ポケットに手をつ突っ込んだが、超空間を

封鎖されてしまっていたため電流が逆流して倒れてしまった。

「おい・・・それって本当なのかよ」

「千空が敵になってしまったのか」

「俺らの体もそのうち千空ちゃんみたく操られちゃう・・・これ、バイヤーすぎるよ」

ガクガクと震える3人と、状況に成す術無く落ち込むドラえもんとのび太。

この状況を好転させられる者は、この客車の中にはいなかった。

ただ1人。

寄生された千空が見落とした

植物の中に隠れていた1人を除いて・・・

## 銀河超特急その8

寄生型エイリアンに操られた千空により、ロツジに監禁された科学王国のメンバーとドラえもんたち。

コハクとクロムは、千空が敵になってしまった絶望に頭を抱えていた。

「まあ正確に言えば千空ちゃんの人格がおねんねしてる感じだね。だから余計に悔しいところあるけどさ。こんなワケ分かんないエイリアンに騙されちゃったのは」

ただ1人、ゲンだけが苦々しい顔をしながらもどうにか口を開く。

「その通りだ。さすが理解が早いじゃないか浅霧ゲン」

ロツジの外から5人を監視している千空がニヤリと笑った。

その笑みはいつもの彼の悪者笑顔でもなければ、仲間を称賛する素直な笑顔ではない。

千空であれば絶対にしない、相手を見下した笑みであった。

「もしかして千空ちゃんの知識、そのままドリちゃんも共有しちゃってる系？」

「ああその通りだ。どうやらコイツの脳は原始的な科学知識で埋め尽くされているようだな。お粗末なものだが」



そうやって自分の頭を指でトントンと突く千空。

4次元ポケットの超空間を封鎖する科学力を持つヤドリにとって、21世紀最強クラス  
の知識すら見戯に等しいのだろう。

「マジか。千空の科学が原始的扱いかよ」

「お前は・・・クロムか。ほお、違う宇宙の住人とは驚きだ。喜べ、俺たちヤドリがこの  
銀河を征服し、そのうちお前の宇宙も、お前らの家族も仲良く乗っ取ってやる」

高笑いする千空に、クロムは歯ぎしりして悔しがった。

その時、ゲンは気付いた。

千空に寄生したヤドリは、千空と同じ知識を持っているとはいえ、そこにタイムラグ  
がある。

おそらく完全な同化ではなく、一回一回必要な情報を検索しているのだろう。

事実、ヤドリはゲンたちを捕らえた時に、決定的な「ある者」を見逃している。

そこにゲンはわずかな突破口を見出した。

「ところでヤドリちゃん。ジーマーな話、寄生してもらおうヤドリって選べちゃったりす  
る？」

ゲンの人を舐めたような話し方に、千空は「あ？」と不機嫌な顔を見せた。

ヤドリは映画でよく見る狂暴なエイリアンとは違い、話を通じる相手だとゲンは把握していた。

彼の分析として、千空に寄生したヤドリはある程度のプライドのある性格であり、挑発すれば必ず反論に出てくると考えた。

「いや、正直言っちゃうとどうせなら出世できる子に寄生して欲しいわけよ」

実はこの時、ロツジから見える林の中から、千空の様子をうかがうスイカの姿が確認できていた。

ただ一人、ヤドリから人間として認識されずに「ただの西瓜」として放置されていた彼女は、助けを求めに奔走し、初日に列車で知り合った記者のボームと再会し、彼と共にゲンたちを救いに来ていたのだ。

そのことに気付いたゲンは上手くヤドリ千空の注意を引きつけようとしていた。

「ガハハ。浅霧ゲン、お前は何かを企んでいるな？」

ヤドリ千空の邪悪な笑みにギクリとなるゲン。

「お前のことは分かっている。信頼できるペラペラ男。科学王国には無くてはならない大嘘つき、か。なるほどなるほど」

腕を組み、ゲンを睨みつけるヤドリ千空。

「つまりお前は、俺たちヤドリの情報を得ようとしているのだな？ ふん、誰がその手に乗るか」

残念不正解。

ヤドリ千空の推測は外れていたが、ゲンにとつては好都合。

見当違いの方向であろうが、話を盛り上げることができればスイカたちのために隙を作ることができる。

「いや〜駄目か〜。それにしても今の、千空ちゃんの本音から拾ってきた感じかな？ いや〜、悪口半分だけど『信頼できる』とか『無くてはならない』とか言われると嬉しいね〜」

「フッフ。そんなことを知ったところで何にもならないがな」

千空らしくない笑い方に嫌悪感を抱きながらも、ゲンは『本音を教えてくれる？』と小さなイタズラ心を胸に抱いた。

「ちなみにだけど、千空ちゃんが他の子の事どう思っているとか、本音を聞けちゃったりする？ ほらさあ、ヤドリちゃんだって見張りばつかじや暇でしよく？」

ヘラヘラと笑うゲンに、ヤドリ千空はニヤリと応じる姿勢を見せた。

「ほお、面白い。試しにそのクロムとかいう奴だが、『チョロさがアホすぎるが、科学のトップを任せられる発想力クソチート』らしいぞ」

ヤドリ千空が吐き捨てるように答えると、クロムは顔を真つ赤にして「は、はあ!？」と叫んだ。

「わ、私の事はどう思っているのだ!？」

クロムへの本音が炸裂したことで、コハクが食い気味にドアに顔を寄せた。

「女、お前のことは・・・グハツ」

その時、隙をついて現れたボームがヤドリ千空の頭を殴りつけた。

「可哀想だけど、しばらく眠っていてもらおうよ」

「ゲン！ みんな、助けに来たんだよ！」

救世主2人の登場に、ドラえもんとのび太は歓喜した。

が、お預けをくらったコハクを筆頭に、ゲンとクロムは頭に手を当て「惜しい!」と仰け反っていた。

その後、ドラえもんたちはヤドリ千空を縛り上げて客室に監禁。車掌ロボと合流し、無事なメンバーで状況の整理を始めた。

本星は既にヤドリの支配下にあり、動ける人間は全てヤドリに寄生され、残された列車の客はほぼ全員が眠らされてロτζジに閉じ込められている状態であった。

警備隊のいる星に救援を求めるべきであるが、通信手段が無い。

レンタロケットや列車で移動しようにも、ヤドリたちが監視をしている可能性が高い。

「1つだけ方法があります。でも、うまくいくかどうか・・・」

車掌ロボが自信なさげに提案したのは、ありったけの発煙筒を焚いて火事を装い、煙の中を列車で突き進んで宇宙空間まで脱出しようという作戦であった。

作戦は、半分は上手くいった。

ヤドリの監視の目を潜り抜け、さらには他の客を丸ごと救助しつつ、宇宙空間へと脱出することに成功。

だが・・・列車の燃料が抜き取られていたことに、ドラえもんたちは気付いていなかった。

結果、列車は本星から遠くはない『禁断の星』という炭鉱跡の星に墜落し、脱出不能となってしまった。

地平線の向こうまで、何処までも続く荒廃した大地を前に絶望感が広がる。

「何も無い、寂しい景色なんだよ」

昨日までの22世紀の文明的な景色から、草や木も無い世界へ急転直下。

鬱蒼と生い茂った原始の地球で生活していたスイカたちですら、この光景に無力感を

覚えるしかなかった。

が、車掌ロボはロボットであるためか意外と気楽な様子。

「居住区の跡地があるので水や食料は残っていますよ」

「燃料もあると良かったんだけど……でも仕方ないね。まずは腹ごしらえして、後で作戦を考えよう」

大冒険や宇宙的危機に慣れすぎたドラえもんが呑気に提案した。

これだからロボットは……とゲンは思ったが、腹が減っては戦はできぬもの。

廃墟と化した街に向かうと、貯蔵されていた熱々のハンバーガーやスパゲッティ、デザートパフエに舌鼓を打つことができた。

「ヤベエエエエ!!!」

美味しいものを食べたゲンの絶叫（リアクション）に車掌ロボやボームが驚く。

「いや、景色と食卓のアンバランスがジーマーでリアリティ無いけど、ピンチの時でもしっかりお腹は空くんだよね」

美味しいと温かい食欲を満たし、活力を生み出すもの。

空いたお皿が重なるたび、ドラえもんたちは徐々に元気を取り戻していった。

その後、ボームが廃墟の中から炭鉱の地図を発見。当時使われていた機関車の存在に

気付いた。

燃料の切れた列車の代わりに機関車を使えば、この星から脱出できるのではないかと。

だが車掌ロボは猛反対した。

元から複雑な迷路となっていた炭鉱は、廢坑になつてから至る所で落盤が発生して危険すぎる、と。

残念がるボームは地図を捨て、車掌ロボと共に別の作戦を考えることに。

だがそのやりとりを、横でクロムが聞いていたことに2人は気付いていなかった。

『危険だから止める？ いや、逆転の手段があるなら挑戦すりゃいいんじゃないか？』

千空がいない今、このピンチを打破できる科学使いは、俺だ』

洞窟探検経験者、冒険のプロ、炭鉱主、そして科学王国最後の科学使いのクロムは、ボームの捨てた地図を手にし、キリツとした目で炭鉱山を見上げるのだった。

## 銀河超特急その9

寄生型宇宙生物ヤドリの手から逃れる中、禁断の星に漂着してしまったドラえもんたち。

「そういうえば、千空は腹を空かせていないだろうか？」

普通に御馳走レベルの保存食スバゲッティを啜りながら、コハクはふと千空を心配した。

ヤドリに寄生され操られている千空は今、客車の中に縛り付けて放置されている。

「そのあたりどうなのドラちゃん？」

「体は人間ですから、お腹は減ると思いますよ」

「ご飯を持って行ってあげたいんだよ」

スイカが口になっている途中のハンバーガーから手を離し、不安そうに未開封の非常食を指さす。

それをコハクが優しく受け取り、スイカにハンバーガーを握らせた。

「それではスイカ、食べてから一緒に千空のところに行こうではないか」

「でもそれって危険じゃないのかなあ？」



ヤドリの出方が分からないと、のび太が危惧する。

「問題あるまい。単独行動では危ないのなら、様子見の斥候を用意すればいいのだ」

そう言ったコハクから離れようとするゲンを、コハクはしっかりと捕まえてニコリと笑った。

「千空ちゃん。いやヤドリちゃんかな？ おひさ〜」

客車に戻ったゲン、コハク、スイカ。

ゲンは腰に紐を結び付けられながら、恐る恐る客室に入っていた。

客室の中は墜落の衝撃で天井と床が逆転し、部屋の中が散乱していた。

そんな中、千空は机に縛り付けられたまま、グツタリとしている。

「千空ちゃん大丈夫？ 起きてるかな〜？」

千空の体をチョンチョンと触りながら安全を確認していくゲン。

すると、千空の体がバツと起き上がり、ゲンに向かってニヤニヤとした不敵な笑みを向けた。

「へっ？ せんく・・・」

その時、千空の額から何かが発せられた。そう、ゲンが認識した時には既に遅し。

「どうかしたのかゲン？」

「千空、お怪我でもしてるの?」

心配するコハクとスイカの目の前で、ゲンはスクツと立ち上がる。

「ガハハハハハ! 油断したな。体は簡単に乗り換えられるのだ!」

高笑いするゲン。ヤドリに寄生された千空の笑い方に、コハクは一瞬いつもの彼の悪ふざけではないかと疑ったが、ただちに状況を察した。

「よもや、ゲンも操られたのか!」

「その通り。『非力な』女ども、覚悟しろ」

指をワキワキと蠢かせ、コハクとスイカに迫るヤドリゲン。

男と女であれば力の差は歴然。それが千空から得た生命体としての『人間の平均』の情報。

スコーン

その気持ち良く入ったムーンサルトキックは、ゲンの顎を起点に月弧を描くように体を回転させ、ヤドリの意識と体を脳震盪的に分離したのだという。

「ん、ああ・・・」

「気が付いたか千空。いや、千空なのか?」

頭を抱え起き上がった千空を警戒し、半歩下がった位置から声をかけるコハク。

千空はそんなコハクや周囲の状況を見回し、人差し指を立てて数秒推理してから口を開いた。

「いや、やつば意味不明だわ。コハク、スイカ。状況は？」

「いつもの千空なんだよ！」

ヤドリの演技とは思えない千空らしい様子に、スイカは涙ながらに駆け寄った。

「私たちもよく分からんが千空、キミは今まで寄生生物とやらに操られておったのだけ？」

「ゲンがおかしくなっちゃったんだよ。コハクちゃんが蹴つて気絶させたんだよ」

スイカが指さした先でノビて倒れているゲンを確認するや、千空は頭を掻いた。

「あ、く、なるほっどっ。なら話は早え。ゲンを風呂場に運ぶぞ」

千空の指示に迷いなく従うことを決めたコハクは、すぐさま気絶したままのゲンを抱え、客車の風呂場へと走った。

「チツ、湯船が逆さになってやがる。仕方ねえ、スイカ。その石鹸やら入浴剤やら、ありつたけゲンにぶっかけろ」

千空の指示に、スイカは「わかったんだよ」と洗い場に置かれた容器をゲンに投げつけた。

千空が「コイツを外してからだ」とキャップの外し方を教え、コハクがシャワーヘッドを構えた。

「俺の予想じゃ、こいつをぶっかけりゃ」

ソープまみれのゲンにシャワーが注がれ、その体がたちまち泡まみれになる。

「ブハアッ！ うわっうわ、ジーマーで何？ 何？」

正気に戻ったゲンが、水の冷たさに驚き飛び上がる。

「ゲンが正気に戻ったんだよ！」

「千空、キミはこうなると分かっていたのか？」

コハクの問いに千空が「ああ」と当然のように答えると、その様子を見たゲンが「千空ちゃん！ 戻ったの!？」と歓声を上げた。

「今朝・・・じゃねえようだが、コハクの風呂を覗いたUFOあったろ？ あん中に小さなエイリアンが入ってたんだが、多分ソイツがヤドリだ」

風呂から出たゲンの服を乾かしている間、4人は逆さの脱衣所でこれまでの状況を整理し、千空が推理を語りはじめた。

「泡に包まれて動かねえし、光やら熱にも反応がねえからな。22世紀の風呂の泡で死ぬんだっつことは予想できた。一応、テメエらが遊びに行ってから職員に確認しに行つ

「たんだが、そこから記憶がねえ」

「なるほどねえ。そこで寄生されちゃった感じだね。でもまあ、触手つぽいのが脳に入ったりして寄生したんじゃないかと、超能力つぽく触れないで憑りつくパターンみたいなのが、グロくなくてジーマーよかったね」

ゲンが冷汗だらだらで胸をなでおろすと、千空も「後遺症が無いのはおありがてえ話だ」と苦笑いした。

「でもよかつたんだよ。これで科学王国のみんなが揃ったんだよ！」

スイカがもろ手を挙げて喜ぶと、千空は「クロムは小便か？」とつぶやいた。

「……………そういえば」

一方その頃、クロムの姿は炭鉱内にあった。

暗闇の中、ヘッドライトと地図モニターの光が炭鉱内とクロムの顔を照らしている。

自分の足元も見えない闇の世界。舗装されていない岩の道。長年放置され落盤だらけの極狭空間。

常人であれば恐怖と不安で押し潰されそうになる洞窟世界を、探検のプロのクロムは鼻歌混じりで歩んでいた。

「ヤベーな22世紀。電球も明るすぎ。洞窟なのに歩きやすすぎ。地図も分かりやすすぎ

ぎ。選べる道も多すぎ。至れり尽くせりすぎんだろ」  
クロムの足取りは軽かった。

58世紀の洞窟探検の経験の中で、トップクラスに楽な探検であった『鉱山探索』よりも遙かに楽。

それどころか、自らの功績で発見した鉱山から鉄鉱石を発掘した際の経験が活きた。

禁断の星は元々、メズラシウムという鉱石を発掘するために掘りつくされた星。

掘ったものの運搬するには、どう掘り進めて、どこに運搬のためのトロツコ(機関車)を配置すれば効率が良いかを、クロムは経験から推理できた。

ヒヨイヒヨイと難所を突破し、落盤で潰れた道を迂回していく。

「おおー！ 見つけたぜ機関車！ これでこの星から脱出できるぞー！」

クロムの歓喜がターミナルエリアに響き渡った。

気持ち良く反響する声の中、立派な(古ぼけた)機関車の車体がクロムの目には輝いて見えた。

その時

「おーい助けてくれえ」「誰かいるのね!!」

どこからともなく子供の声が聞こえてきた。

「おう！ こっちだこっち」とクロムが呼ぶと、エリアに続く入り口から2人の子供が飛

び込んできた。

それはランドに来てすぐと西部の星でクロムたちを昔者と馬鹿にしてきた22世紀の子供であつた。

「あつ！ アンタは20世紀の？」

「いや、たしか58世紀だ。それよりお前らこんなところで何してんだ？」

2人はクロムに事情を語つた。2人自身もよく分からないのだが、友達に宇宙で放置され、漂流していたところを宇宙船に衝突し、気が付いたらこの星の穴の中に落ちてしまったのだという。

通常であれば宇宙空間での漂流、超重量物との衝突、大気圏突破、クレーター発生レベルの落下。これらを経験し無傷で生還した2人に驚くところであるが……  
「そうか大変だったんだな」と、クロムは1ミリも気づかなかつた。

その後、クロムは自身の目的が2人の救助ではなく、機関車の発見と星からの脱出だと説明した。

「でもさ。この機関車で宇宙に出るって、出口も無いのにどうやるんだ？」

迷子の男の子の質問に女の子も頷く。

「そこは、超ヤベエほどデキる科学使いのクロム様よ。こいつを使うのさ」

そう言つてクロムが取り出したのは、忍者の星で彼が獲得した仮免許皆伝の忍術書。口に咥えて呪文を唱えれば、『壁抜けの術』が使える代物だ。

「これで鉦山だろうが何だろうが、通り抜けて地上まで脱出できるんだぜ！」

そう言つて巻物を口に咥え、機関車の操縦室に乗り込むクロム。

だが……

「これ、どうやって動かすんだ？」

そこにあるのは22世紀の操縦席。当然、科学王国で0から必死に作り上げた車やモーターボートの操縦方法とは次元が違う。根本的に運用理念の違う操縦メカニズムがそこにはあった。

「いやこんなもん、玩具みたいなもんだろ」

そこに男の子がキョトンとした顔で割り込んできた。

パチポチと操縦席のボタンを操作すると、瞬く間に機関車が煙を上げ、警笛を鳴らしながら動き始めた。

「スゲエじゃねえか！　こんなデカイやつを動かせんのかお前！」

「あ、ああ。こんなのゲームより簡単だぜ」

こうして、廃鉦の奥深くに眠っていた機関車が地上へと姿を現す。

機関車の警笛の音に気付いたボームたち、ドラえもんたち、千空たちが炭鉦の元に集



まった。

「うわあー!」「こ、これは機関車!」「すごいです!、これで助かります!」

歓声に出迎えられ、地上の日の下に現れ出でたるクロムたち。

その中にはコハクやスイカ、ゲンと。千空の姿があった。

「千空!、お前、元に戻ったんだな!」

「ああ。でもって、やるじゃねえかクロム」

「お、おうよ!、俺らの科学を原始的だつたヤドリ野郎どもに、科学王国の底力を見せてやる時だ。そうだろ、千空!」

拳を高くつき上げるクロムに、千空はニヤリと笑って答えた。

これでこそ千空。そしてクロムなのだと、安心感を持ってコハク、ゲン、スイカも拳を握る。

「ああ。こっからが速攻、反撃逃亡の開始だ」

応うよ!、と意気込む4人。であったが千空の撤退宣言にズルツとずっこけた。

「それはそうだよ。だってボクらそもそもヤドリから逃げて警備隊に救援を求めなきゃいけないんだから」

ドラえもんのもつともな正答に、ボームや車掌ロボも頷く。

「では早速、こちらの機関車に客車を接続して、この星を脱出しましょう!」

車掌ロボが主導し、客車の連結作業が始まる。

だが、そこで千空は車掌ロボにある質問をした。

「こつちのミステリーツアー用の機関車は動かねえのか？」

「ええ。ヤドリに燃料を抜き取られていましたので」

そう車掌ロボが答えると、千空はニヤリと笑った。

「じゃあ燃料を分けりゃ、両方とも動かせるつつうことだな？ 片方を囷に使えんだろ」

千空の作戦にクロムやのび太が「それだ！」と飛びつく。

「たしかに古い機関車の燃料を少なくすればスピードは落ちますが、そのほうが囷になりますね。それなら私が運転しますよ」

「そんな！ 車掌さんを犠牲にして僕らだけ逃げるなんて……」

反対するのび太に、クロムやスイカも「可哀想なんだよ」と同調する。

が、「いや、ロボはロボだろ」と、機械は機械と割り切って考える千空、コハク、ボームはむしろ賛成した。

「つつうか最悪のパターンは警備隊にたどり着けずに銀河もろとも全滅だろ。この作戦なら上手くいきや二手とも生還コースがありうる。最悪でも、俺らだけヤドリに追いつかれ」て、車掌の機関車が警備隊にたどり着いて銀河全体救われる」

この千空の提案に、クロムたちは渋々ながら賛成した。

こうしてツアー用の列車はエネルギーを十分に充填し、千空たちを乗せ警備隊の星へと向かって飛び立った。

遅れて車掌は古い機関車に一人で乗り込み、ヤドリたちが追ってくるであろうルートに掠るように少し迂回したルートで同じ星を目指した。

だが、ゲンだけは嫌な予感がしていた。

科学王国で何度か経験した、運試しに限って千空は悪いパターンばかりに遭遇する傾向。

千空の運の引きが、ドイヒーなことが多いという事を。

## 銀河超特急【最終回】

「いや嘘だろ」

禁断の星で機関車を手に入れ、千空を復活させた一行。

ヤドリからの追跡に備え二手に分かれ、警備隊の星へと向かっていた。

そこに現れたヤドリの軍艦。囿にも引つ掛からずにドストレートにクロムたちの機関車の横に現れていた。

「いや嘘ではないか」

ヤドリの戦艦は2隻。

1台はいかにも20世紀後半の趣味で作ったような、スターでウォーズするような戦艦。

もう1台はいかにも20世紀前半以前の、58世紀の科学王国が建造を目標にした帆船タイプの戦艦。

コハクの目から見ても時代錯誤のアンバランスさが際立つ代物だ。

「いや嘘だろ」

千空は『ヤドリは寄生の宿主になる人間を殺さない』と、客車の中にいればひとまず

安全だと推測していた。

そこに艦隊砲台の一斉掃射が、客車を襲った。

「千空ちゃんの悪い予想、当たるからジーマーで！」

ゲンの悲鳴が轟いたが、22世紀の客車は無駄に頑丈であった。

だが、機関車は無駄に弱かった。

「落ちるんだよ〜！」

砲撃によって操縦不能になった列車は、一面が荒野の星に墜落してしまった。

「人間共よ諦めろ。大人しく出てくれば、悪いようにはせん」

機関車から距離を置いた台地に着陸したヤドリの戦艦。

警戒しているのか、一斉攻撃に出てくることなく、大音量の呼びかけがドラえもんたちが届いていた。

これを好機と、ドラえもんたち10人は反撃の準備に出た。

『みんな、準備はいい？』

客車中から集めた水鉄砲にヤドリ特効のある石鹼水を詰め、列車の背後に隠れる。

ヤドリに支配された人間たちやヤドリのUFOが隊を作り射程内に入った。その時

「今だー！」

ドラえもんの合図に飛び出した人間軍団の一斉掃射がヤドリたちを襲った。  
「待ち伏せか！」

不意を突かれたヤドリたちも応戦する中、石鹼の水がヤドリたちに命中・・・は、あまりしなかった。

のび太の撃つ水は百発百中。ドラえもん、ゲンが健闘するが、それ以外のメンバーはイマイチ命中しなかった。

たしかに、石鹼の帯が地面に這われていくことで、下手に歩こうとすると滑って転ぶかもしれない。だがその程度の妨害である。

「だろうね。ただでさえ水って真っ直ぐ飛ばないし、みんな射撃大会の成績イマイチだもの」

芳しくない状況を実況するゲンであったが、その笑みの奥には一切の絶望は無かった。

「射撃だけじゃ、ね」

「水遁・水龍弾の術！」

その異変はヤドリたちの足元から湧き上がっていた。

彼らの足元で、小さな「ネズミ」が口に巻物を咥え立っている。

そのネズミの周囲から水の柱があふれ出し、みるみるうちに巨大な水の龍と化した。「ただのこけおどしの術ではあるがな」

忍者の星で巻物を手に入れていた中忍ネズミが勝ち誇った笑みをこぼすと、水の龍が地面を這いながらヤドリの人間やUFOを次々と飲み込んでいった。

術はたしかにこけおどし。誰一人として水流に流されることもなければ、溺れて窒息するわけでもない。

「だがな。水は石鹼を溶かすんだぜ！ 喰らいやがれ、ゴリラソープだ！」

クロムのガッツポーズに、ネズミから元の人間に戻ったコハクがグツと握り拳を向ける中、ヤドリに取りつかれていた人間たちは倒れ、ヤドリUFOも次々と墜落していった。

これがドラえもんたちの奥の手。直接戦に追いやられた時に、のび太たちの射撃を囮にして一網打尽にヤドリたちを倒す作戦。

結果を見るに、大成功であった。

「小癩な人間共が！」

残すヤドリは、金ぴかのド派手なヤドリ大帝ただ一機。

「アイツを倒せば、きつとスイカたちの勝ちなんだよ！」

「だろうね。ヤドリたちも『様』って言葉使ってたから、上下関係がある組織体系の生き物だつて分かってたし。確実だね」

「だろうな。よっぽど奴らが奥の手でも用意してなけりやな」

千空の根拠のない危惧に、ドラえもんとのび太が「またまた」と笑う。

だがその眼前で

無様に逃げていったはずのヤドリの親玉が帆船の中に消えていき

直後に巨人の石像と共に現れた。

「嘘だよお」「や、やべえ・・・」

人間の20倍はあるであろう巨人のロボットが次なる敵。

サイズ感が58世紀の常識からかけ離れすぎた巨体に怯むスイカとクロム。

「怯むな、かかれえ！」とドラえもんが勇猛果敢に叫び、タケコプターを装備した面々が一斉に飛び掛かる。

だが、水鉄砲の石鹼はロボットの表面に弾かれて効果がなかった。

「だめだ。中にいるヤドリに届かない！」

「いや私ならー！」

諦めを見せるドラえもんであったが、コハクだけは水龍と共に特攻を仕掛けた。



「小癩な、小娘が！」

ヤドリ巨人が剣を振り回し、コハクに襲い掛かる。

ヤドリの剣技は大したことはなかった。その生態系から接近戦の必要がなかったこともあるだろう。

大振りの緩慢な動き。コハクであれば目をつぶっていたとしても容易い技量だ。

だがそれは等身大の話。

20倍のリーチから繰り出す剣の振りにはもはや大嵐。

「くっ」

わずかにコハクの足が滑った。

その隙を突かれ、コハクは巨人の腕に捕らえられてしまった。

「コハクちゃん！」

「動くな人間共。この娘を握りつぶされたくなければな」

勝ち誇ったヤドリ大帝の声が荒野に不気味に響き渡った。

「あく、お手上げだ。コイツには100億%勝ち目がねえ」

気怠そうに強がりながら、ドラえもんたちの中から足を踏み出したのは千空であった。

「降参だ。このまま物理で潰されて痛え思いをするよか、素直に体をくれちまったほう

が痛みが無くて合理的だ」

「聞き分けが良いな小僧」

千空の敗北宣言に、ドラえもんやボーム、のび太はガクツと頷垂れる。

「駄目だ千空！ 私の身など気にするな。最後まで諦めるな！」

「そうだよ千空ちゃん！ 千空ちゃんがまた敵になっちゃったら、今度こそジーマーで俺らの負けだよ！」

コハクとゲンの悲鳴にも似た叫びに、ヤドリ大帝は高笑いした。

「なるほど小僧、貴様が人間共のリーダーか。褒美だ。手始めにワシ自ら貴様の体を貰ってやろう」

巨人はコハクを捕まえていないもう一方の手で千空を摘み上げ、千空を巨人の口の前に持って行つた。

ヤドリ大帝は巨人の口の中から現れた。

狙撃や早撃ちで狙うなら今だが、のび太たちのいる地上からは離れすぎており、千空はポケットに手をつ突っ込んだままだ。

閃光が走つた。

ヤドリが寄生する時に出す光線が、千空の額を捕らえた。

「フハハハハハハ！ 容易いぞ人間」

千空らしからぬ高笑いに、クロムたちは絶望を覚えた。

ヤドリに再び千空を奪われた。この事実には逆転の手は無い、そう誰もが思った。

だがその時

千空の体から勢いよく

泡が噴き出した！

「なっ?!?!、これは!!!」

千空の体を包む泡に、ヤドリの人格が慌てふためく。

必死に泡を除こうと腕を振り回すが、泡は止まることを知らないように、ついには千空の体中を覆った。

「お、おのゝれ〜!」

断末魔の叫びと共に倒れるヤドリ千空。そして巨人ロボット。

落下の中、千空とコハクを間一髪のところまで助け出したのは、タケコプターで駆け付けたボームとドラえもんであった。

「やった! ヤドリの親玉を倒したんだ!」

喜ぶのび太たち。地上に降り立った頃には目を覚ましていた千空がニヤリと笑う。

「やつぱり、千空くんの体から出てきた泡はヤドリを倒せる石鹼の泡だったのか」  
「でもどうやって?」

ボームとのび太の問いに、千空はニヤリと笑って返した。

「自爆装置だ」

「じぼく?」「そうち?」と首を傾げるコハクとスイカ。

「クツクツク。言つてまあアホほど原始的な科学だ。アイツらが散々に馬鹿にした、な」  
「えっ? 千空さんつて何か道具を見つけていたんですか?」

ドラえもんが尋ねると、千空は首を横に振った。

「材料は石鹼と、コーラと塩……理想を言やあメントスがあると分かりやすいんだがな」  
千空の言葉に、それが流行した20世紀・21世紀の現代人、のび太とゲンは互いに顔を合わせた。

「メントスコーラ!」

「ああ。コーラに塩を入れりや泡が一気に噴き出す。その原理で石鹼の泡をスプリングラーみたく噴き出させた。ヤドリに寄生されて俺の意識が消えた時に発動するようにしてな」

「なるほど、だから自爆装置……えっ? でもどうやって?」

「意識が無くなったら、自爆装置のスイッチを押せないじゃないですか」

千空の説明に納得しかけたドラえもんたちであったが、その説明の矛盾に首を傾けた。

「あ、？ その逆だ。意識が消えるまで、スイッチを押し続ける」ようにしたんだよ。塩とコーラの境目をポケット越しに握っておいてな」

そう言うのと千空は服をまくり上げ、2日前の夕食でゲンが飲んでいたのと同じコーラの容器と、その先に繋がって千空の服に隠したチューブを見せた。

「ヤドリが体に乗っ取りや、何も知らずに手を離す。その瞬間にメントスコーラのソープスプラッシュだ。ククク、科学王国の原始科学で22世紀のバケモノエイリアンを倒してやったぜ！」

こうして、銀河の危機は避けられた。

残ったヤドリは宇宙の彼方へと逃げていき、宇宙警備隊によってドリーマーズブランドの安全は守られた。

ツアー客は誰一人傷つくことはなく、ランドの修復も被害者が協力を申し出た。

のび太たちを馬鹿にしていた子供たちも、今回の一件で考えを改め、最後にはのび太と握手を交わしていた。

最後には大トラブルに巻き込まれた千空たちであったが、銀河の平和を守ったという  
壮大すぎる誇りを胸に

彼らのいるべき場所

科学王国へと帰還する。